
WARS&WARS

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WARS&WARS

【Nコード】

N8177L

【作者名】

OGRE-A SHYURA+1

【あらすじ】

戦乱の続く不安定な世界の中心ユートピア。そんな中、一人の平和を願う少年が何気なく生活していくなかで幸せや本当の平和について気付いていく。世界は既に動きだした。彼らはどちらに進むのだろうか。覇業、平行、破滅。この三線はいついかなるときに現れ消えるかわからない。

彼等はどちらに行くのだろうか。

キャラクター紹介

キャラクター

F e n c L e i S w o r d

フエンク・レイ・スウォード

通称、レイ

16歳（登場年齢）、男

マスターカイザー（霸王）

赤い髪に真紅の瞳をした少年。身長は平均的で体格も同じ。幼いころに孤児となりスウォード家に引き取られた少年で服装は整っており家宝らしい異形の短刀を所持していた。その後心優しいスウォード家の家で二男として育てられ兄の士官に憧れ両親の許しを得て中央大陸に赴く。しかし、その後に仕官していた国が滅亡してしまう。滅亡手前の対戦で負傷したがシド・タージェという男と出会いともに旅にでて彼のギルドに入隊する。そこで生涯の師となる男、オーブ・ギア・オーガと出会い彼の人生は大きく動いた。加え謎の少女……マナに出会い『霸王』としての頭角を徐々に表していった。

B o a A r r o w L o u s

ボア・アロウ・ルース

通称、アル

17歳、女

混血種

とても濃い緑色の長い髪に緑色の瞳の大人びた容姿をしている少女。レイの幼なじみで狩り人の娘。類い希な弓の使い手で父親と共に姿を隠すまでは周辺の国家が軍人として欲しがる程の人物だった。強力な魔法が使えるが本人は使いたがらない。そして流浪しているところをレイに見つけられシドのギルドに入隊、しばらくはレイと

もに行動する。レイの姉のような存在。髪と目の色から碧独の美女と呼ばれている。彼女も名前に負けないほどの弓師で近代の名手の中でも五本の指に数えられる腕前を持つ。実はレイに好意を持っていたが姉のような彼の認識は変わらずそれ以降の進展はない。

Boa Archly Lous

ボア・アークリー・ルース

通称、アークリー

19歳、男

混血種

黄緑の髪に緑色の瞳で細身の体系。アルの弟でひ弱な体に似合わずかなりの猛者。レイとも幼い時からの顔見知り。レイに憧れ彼が中央大陸に仕官を目的に旅立つとともに家を飛び出し革命軍に所属して力を発揮、その途中に闇剛との交際を経て再び姉とレイの目の前に姿を現す。彼もアルと同様に弓の使い手で実力は劣るものの世代の上では五本の指に数えられるほどの人物。革命軍では穏健な方で過激派とは言い難く保守派ともいえない立場の部類に属し後にギルドに革命軍の部下と共に入隊。

Lean Halberd

リーン・ハルバート

通称、リーン

16歳、女

ビースト

鳶色の髪と瞳。武闘派民族の槍使い。レイが赴いた任務地の近くで部族間の争いをしていた。そのうちに負傷したリーンをレイが見つけた手当てをするうちについて来るようになった。武人としては相当な力の持ち主で狼の血種を持つ。かわいらしい顔立ちとは裏腹に人智を超えた腕力を持っている。彼女の槍は穂先に特別に幅広な加工がされていてハルバートと呼ばれる槍で打撃、斬撃、突きの全てを

円滑にこなせる大振りなオリジナリティーあふれる槍。その槍を自由自在にふるう。

Shid Targe

シド・タージエ

通称、シド

20歳、男

ログヒューマン

スキンヘッドで茶色の瞳。ごつごつしたとても厳つい男性。元西の王国の王。卑劣な臣下の策略により王位を奪われ中央の政局が不安定な紛争地帯に逃げ込んだ。そこで小国の滅亡に立ち会いレイを拾う。腕っ節は大陸一とうたわれる強力の持ち主。そして、大陸を消す程の魔法が使えるという。過去にギアと接点を持ち彼の人生の師匠である。シドのハンマーに打たれたもので生き残った者はいないという武勇伝すらありその実力は広く他国へと知られている。

Vivia Vio

ヴィヴィア・ヴィオ

通称、ヴィヴィア

16歳、女

ヒューマン

薄い紫の髪で紫の瞳をした美しい少女。顔、スタイルのとてもいい踊り子でそちらが本職だが裏の顔は怪盗という食えない少女。身軽かつ柔軟な体が特長で鞭や投げ鍵などが武器。レイとリーンに捕まえられ保護された関係からギルドに入隊。レイに好意を持つ。魔法や近距離戦闘はあまり得意ではないが合わせ技や補助に関しては天才的。美人だが性格は意地悪でとっつきにくいというえにすぐに悪態をつく。

Fit Sonic

フィット・ソニック

通称、フィット

16歳、男

ログヒューマン

白いロングの髪を縛り細身のしっかり鍛えられた体格をしている。

レイの軍人時代の仲間で軽い身のこなしが武器の格闘家。手に付けた鋼のナックルと付属のガントレットでダイアモンドをも砕く無駄のない動きと魔法と連動し音速を超えるステップを使う。それらの素早い動きで敵を翻弄するのが戦闘スタイルで性格は風のように……荒れ凪ぎ包み皆を導く才能のある若い将。アルを好いていて最終的に結婚までした。

Cross Zesi

クロス・ゼシ

通称、クロス

20歳、女

エーテリオン

真っ赤なブラッドレッドの髪と瞳に染めている。小柄だがかなり美しい女性。ヴィヴィアの師匠で西の王国の細工職人。タージェの幼馴染みで実は昔二人で旅をしていた時期もあった。任務で訪れたタージェとすれ違いにギルドへ入隊。未だ幼さの残るレイ達の母親役。武器は十字架のような短刀。この人も曰わく付きの人種で世界を閉ざす力を持っているという。数人の弟子を持ちヴィヴィアもその一人。ファンとも接点を持ち顔も広い。

Lumi UX Rif

ルミ・アクス・リフ

本名、Orox Vio

オーロクス・ヴィオ

通称、ルミ

18歳、女

ヒューマン

濃い紫の瞳と短めの髪。レイの先輩で軍の鬼教官として名を広めていたが中央大陸の小競り合いで敗戦後に行方不明になったレイの行方を探して地方を転々とする。そのうちに任務中のフィートに出会いそのまま戦闘に加わり同行、その後はギルドに身を置く事となる。かなり小柄で年齢詐称と間違われることがあるが戦の中では絶対に負けなしの最強の女騎士。武器は身の丈の倍はある両刃の鉞。魔法は苦手なめったに使わないが一応使える。

Shade

シェイド

本名、Baster Creia Sword

バステル・クレイア・スウォード

通称、シェイド

19歳、男

マスターカイザー

黒い髪と瞳。レイの実家の兄でかなり寡黙な人。スウォード家の長男でレイを可愛がっていた。名前を隠して他の軍からレイの所属する軍の隠密部隊に入隊し陰からレイを支えている。王国の滅亡時に他の任務についていてレイの行方を知らず持ち前の洞察力と情報処理で中央の紛争地を探しまわりフィートとヴィヴィアに出会う。隠密機動隊のやり手戦闘員。

Luna Comet

ルナ・コメット

通称、ルナ

14歳、女

混血種

白い髪で瞳。中央紛争地帯の魔法学校の生徒で現在二年生。紛争に巻き込まれリーンとアルの二人に助けられる。レイに一目ぼれし直後にギルドに入隊する。メンバーの中では若年者ながら魔法族の中でもかなり希少かつ扱いづらい物を使用できるらしい。マナに好感を抱きレイとの関係を複雑ながらも応援している健気な女の子。苦手なふりをしているが攻撃魔法が一番得意で母の死後は新生七人衆のメンバーとなる。

M a n n a

マナ

通称、マナ

16歳、女

???

金色の髪と瞳。レイが遺跡調査の調査任務中に遺跡内で機械の兵隊に襲われ逃げ惑う内にたどりついた部屋の中にあった封印装置を開いてしまい中から出てきた少女。記憶が一切なく覚えていた名前と異様に強力すぎる能力だけがたがかり。そして、それ以外にも不思議な力を持っている。レイと出会うことで次々に力の頭角を見せ始めレイと共に成長し結婚する。

D e l T o m a c h

デル・トマック

通称、デル

12歳、男

ドワーフ

黄緑色の髪に瞳。シェイドの同行者で天才子。機械や医療の観点に深く流通し性格の固いところがたまに傷だがいろいろなところで役に立つ。ルナに一目ぼれしたが恋人のようにには相手にされていない。魔法が下手くそで機材を使い戦闘に参加する。主に小型の炸裂系兵

器や防御シールドなどを使って補助をするのが彼のスタイル。力を付けたレイから剣術を習い母親譲りの能力を解放させレイの片腕にまで成長した。

Orb Gear Ogre

オーブ・ギア・オーガ

通称、ギア

18歳、男

オウガ

黒髪に角が三本あり光のない黒い瞳。デルが流通しない魔法工学の研究者及び学者で戦闘もギルド内ではかなりできる。黒魔術が生まれつき使え過去の一切の素性が闇の中だがシドの信頼が厚く彼からの忠義も相当な物。軽装備の剣術戦闘と強力な攻撃魔法、変身魔法で増強した格闘を得意とし剣技においてはかなりの猛者。ファンの恋人で鬼のような角が頭に三本はえている。

Sphere Fan Iris

スフィア・ファン・アイリス

通称、ファン

18歳、女

カイザー

真っ白の髪と瞳。ギアの恋人で防御魔法の達人。ルナの先輩、師匠にあたる存在になる。現在までの魔法学校卒業者で最強の魔道士であり混血の中で最も珍しいカイザーの血種をもつ。当代最強の魔術師とうたわれ魔法学校の教師もしている。カイザー種のなかでも最も珍しいエンジェル種の特長を持ち背中に翼があり容姿端麗、そして頭がよい。その影響から民衆には賢者として慕われている。

Mark 01

マーク 01

通称、マーク01
??

ゴーレム

ギアを模したモデル。ギアの錬成魔法で呼び戻された死霊の魂。心根は正しく言葉使いも丁寧で能力的にもかなり有用性の高い力を持っている。かわいらしい大きさの割に攻撃的な魔法が得意でギアとレイのいうことに従順に従う。

S t r a D a r k e n e s s

ストラ・ダークネス

通称、ダークネス

2200歳、女

ドラゴン

真っ黒く爪と牙だけ赤い。伝説の黒龍で北の国の氷塊中に封印されていた。冥王の解印により復活洗脳を受け一時は敵対したがレイとマナが冥王……プルトンを撃破すると同時に解放された。高い攻撃力と厚い鱗でどんな攻撃をも跳ね返す凄まじさをほこり龍族の中でも最強の座を欲しいままにできる実力者……だが女性。世間知らずでお嬢様のような振る舞いをすることもあるがクリードとは仲が良い。

T a r i s S i C l e a d

タリス・シ・クリード

通称、クリード

2500歳、男

ドラゴン

真っ白くて爪の青い。伝説の白龍。中央大陸で結晶の中に封印されていた結晶の力を体に取り入れた龍。ダークネスとも力の上では引けを取らないが落ち着いた性格で戦闘は好まないがいざという時には力をふるってくれる頼もしい味方。青白い体に触れる攻撃はすべ

て無力化され吸収されてしまう。レイに忠誠を誓い敵との戦闘には必ず参加すし大人な男性だが少し激しさを含むこともある。根はやさしいが一度逆鱗に触れるとレイやダークネスでも手がつけられない。

A r e n

アレン

通称、アレン

16歳、男

ビースト

茶色い髪と目のノースビーストの少年戦士。日本狼のオリジナルで顔立ちはかわいらしいが戦士としての実力はかなり高く兄弟のライムズと組んで戦うのが得意な少年。リーンに好意を抱いている。寒さには強いが暑さや極度の感想に弱い。ギルドに入隊後はレイの右腕として働き以前に身に付けた体術意外にもレイからデルと共に技術を学び新たに格付けとして青騎士になる。

L i m e s

通称、ライムズ

16歳、男

ビースト

茶色の髪と瞳をしたノースビーストの少年戦士でアレンと同じ種族。キリリとした顔立ちの結構なイケメン。レイに敬意を払っている人物の一人で雪山での出会いから兄弟のアレンと共にギルドに入隊した。リーンの恋人となる。兄のアレンとは中がよいい意味で意思の疎通に壁がない。その後はリーンと共にギルドに帰還した銀狼達と新たに狼牙騎士団を設立しリーンを団長に防衛範囲を広げている。

修羅

しゅら

通称、修羅

16歳、女

ヒューマン

銀色の髪と瞳をしている將軍家に生まれた少女。女性は官位を持っていないため戸籍を偽り男性の將軍として父親のあとを継いだ。変身魔法と肉体増強を常時使用している。その彼女には魔王の力を保持し全てを葬り去れる力があるという。ただし、人体の構造上その能力を彼女が維持できるのはたったの三分だけとなっている。魔力を使い過ぎると少女に戻ってしまう。

紅蓮

こうれん

通称、紅蓮

18歳、女

ログヒューマン

赤い髪と瞳。雅の国で初めての女性の大将。炎のような熱い性格の女性で力量はビーストにも引けを取らない。猪突猛進な性格だが戦闘は火がなめるように燃えるがごとく間合いや空気を感じる繊細な攻撃が得意。武器は十文字槍で細い装飾が細やかな彼女のオリジナル武器。ギルドに修羅や他もメンバーと入隊後は新しい生活を始め氷鎧と結婚し父親が阿蘇であることも知る。

氷鎧

ひそう

通称、氷鎧

本名

Ice Halbard

アイス・ハルバート

20歳、男

ビースト

鳶色の瞳と髪。森狼のビーストで実はリーンの叔父。動きは緩慢だが見切りは凄まじく奢り高ぶったりなめてかかると一撃で倒される。腕力はあまり強くないがかなりの業師。大将としての経験が高く計算高い人物だが少々暴走気味なところもある。紅蓮に好意を持っているが拒絶されていた。時が経過するごとにギルドになじみ紅蓮と結婚し新たな生活を始めている。

雷軌

らいき

通称、雷軌

20歳、男

ログヒューマ

緑色の髪と瞳。頭がキレる策略家的な面が強い男性。氷鎗と並ぶ計算高さだがこちらは冷静で何事にも段取りを欠かさない究極の几帳面。武器は魔力を増幅させて放つ銃での確に狙撃をこなす。彼に付いた異名が雷神。ただ、アルに押し負けてからは自身のふがいなさを悔いて度々ギルドに顔を出すようになった。月光と婚約を交わし時期を図って結婚する予定。

岩鋼

がんこう

通称、岩鋼

16歳、男

ログヒューマ

茶色の髪と瞳。シドの血縁で大柄な少年。棍棒が武器でその一薙でかなりの敵を殴りとばす。冷静な一面と激しい感情を持ち合わせ魔法もそこそこ扱える。七人集の中では中核のまとめ役的な存在。従兄弟であるタージェを尊敬して止まず停戦後もこの二人が結びつき大きな組織へと発展していく。その後はゼピュロと婚約し生活を開始。

風崖

ふうがい

通称、風崖

16歳、男

オーガ

銀の色の髪と瞳でかなりの美男子。詩作や作曲を愛する平和な世界を望む少年。過去はギア以外は誰も知らず素性は彼同様に闇の中だ。男子としては平均的な体躯をしているが体機能にかけては七人集であつても追隨を許さないほどの猛者。実はギアの遠い親戚だが風崖はそのことを知らない。ギルドの入隊後にレイとマナの結婚の数日前に結婚していた。

宙慧

ちゅうけい

通称、宙慧

35歳、女

エーテリオン

白い髪と瞳。ルナと同じ強力な攻撃的な魔法を使うがあまり争いを好まない。若いころは前の帝の下付き強力な魔法を使って敵の軍と奮戦していたらしいがそれも忌むべきと心にしまっている。敵軍だったがゼシとは旧友でかなり仲がよくギルドに入隊後もそれは変わらない。術師としてファンの存在も知っており雅の国には留まらず各地を放浪して情報を本国に送る間蝶の役目も果たせるやり手でもある。結婚し既に子供もいる。ルナは生き別れの娘。そのルナを守ろうと業病をおし戦場に出向きそこでなくなる。享年40歳。

闇剛

あごこう

通称、闇姫

14歳、女

ログヒューマ↓堕天使

黒髪に金の瞳。修羅の義妹で本当かは定かではないが戦場で両親をなくし孤児になっていたところを拾われた。その後修羅の父によりその魔法能力と素直さから修羅の進言で妹として迎えられ可愛がられている。唯一、修羅の秘密を知っている人物で夜間戦闘力ならばリーンにも劣らない。闇の魔法が使える数少ない術者の一人で戦場のある状況下においてのみ本人の持つ凶悪な力を解放し魔王を助けるという。アークリーと再び付き合い始めレイとマナが結婚したのちにかなり若い結婚する。

阿蘇

あそ

通称、阿蘇

55歳、男

ヒューマン

白髪で黒い瞳。南朝の元下級貴族でレイの所属するギルドに依頼をしてきたことが始まりでギルドに身を寄せている。おおらかな性格だが頭がキレシドの執政上で欠かせない重要な人物になっている。表立っては公表せず陰でギルド全体の執政にかかわる実は大きな役割を持つ人物。趣味は畑仕事。戦闘は苦手だが特殊な魔法が使用可能。その後、ギルドで新たな事実を徐々に公開し北朝の高官だったことや紅蓮、芳納の父親であることなども伝えた。

太助

たすけ

通称、太助

25歳、男

ヒューマン

黒髪と黒い瞳。阿蘇の従者の中ではまとめ役。ギルドに来てからも

彼の身の回りの世話やギルドのメンバーの手伝いを表だってする。戦闘や執政には不向きだが農家としての知識があるため近隣住民人からは残りの三人と共に慕われている

喜三

きぞう

通称、きぞう

20歳、男

ヒューマン

黒髪と黒い瞳。太助の弟分で従者としては最年少。力が強く前者同様に畑仕事が得意。ただ、彼の場合は弓兵としての腕がそこそこ備わっており時間の開いている時にアルの訓練に参加している。

六弥

ろくや

通称、ろく

23歳、女

ヒューマン

黒髪と黒い瞳。阿蘇の奥方付きの従者で気配りのきく女性。外にはあまり出ないがいざとなれば炊き出し、看護、防衛にも立てる仕事のできる凄人。結婚経験はあるが夫は戦で子は病で無くしている。

弥平

やへい

通称、弥平

22歳、男

ヒューマン

黒髪と黒い瞳。四人の中で腕っ節が一番強く戦闘向きな人。好んで戦いはしないが阿蘇のためなら身を捨ててのようなこともする生粋の武士道。槍に長けギルドに敵が近付くと必ず阿蘇邸の門扉や櫓に入

り警戒を怠らないという。

S h i d A l f a

シド・アルファ

通称、アルファ

5歳、男

ログヒューマ

濃紺の髪と瞳。ゼシとシドの子。一年違いの妹がいて性格は活発。レイに憧れいつか彼のようになるべく父であるシドにせがんで剣の指導を受けている。この世界では魔力の影響が強く成長が早いせいか彼も5歳とは思えないほど言語、筋力に発達が見られる。能力は母譲り。

S h i d M y s i

シド・ミシイ

通称、ミシイ

4歳、女

ログヒューマ

茶色の髪と瞳。ゼシとシドの子。兄のアルファの背中には目もくれずマナを姉のように慕い可愛がってもらっている。アルファとは異なり彼女は知識と知能の観点で飛躍的に伸びており情緒も豊か。それに対するように運動は苦手で魔法は得意。能力は父譲り。

聖刃

ひじりば

通称、聖刃

大天使

21歳（登場年齢）、男

白っぽい髪と瞳。大陸サンドウィンドウの政治的権力の上ではナンバー2の位置を持っていた人物。しかし、軍部がクーデターで国主

を殺害後は国のシステムに疑問を発し元々の職を捨て民による政治を目指し革命軍に身を置く。その後、大陸から来たという修羅と出会い婚約を結びギルドに入隊。力の上では天使の戦士長であるミカエルから貰ったという光の翼を用い空を飛び腰に付けた聖なる神器である『天の群雲の剣』を使って悪しきを立つ。聖皇の異名があり地域によっては聖王とも呼ばれる。

日光

にっこう

通称、日光

16歳、女

ログヒューマ

オレンジ色の髪と瞳。聖刃の義妹であり彼と同等の権力を持つ少女。その大陸に伝わる『三種の神器』の一つヤサカニの勾玉を用い彼女の憎いものを一定の判断の元焼き殺すという激しさを持つ。しかし、彼女自身はそこまで激烈な性格ではなく役柄にすぎない。義兄と共に大陸ユートピアに移る事を決め付き合っている赤額という有翼人と共にユートピアにわたった。

月光

がっこう

通称、月光

16歳、女

ログヒューマ

水色の髪と瞳。日光の双子の妹。姉の日光が割かし明るいのに比べ少しキツイ目つきと厳しい性格を持つ真面目で古典的な性格を持つ少女。彼女も『三種の神器』を所持しており名はヤタの鏡。こちらは水を操ることで罪を洗い流すといわれ触りは厳しいが実は優しい。修羅を追って大陸に渡って来た雷軌に好意を持ち婚約を持ちかけ彼も承諾。年齢差は……結構ある。

赤額

せきがく

通称、赤額

21歳、男

有翼人

赤い髪と瞳で翼は金色に近い色をしている。ホークマンと呼ばれる有翼人で大陸サウスウィンドウの奥地に住んでいる狩猟民族。それに有りがちな固執観念は彼にはなく社交的で人間類でもそれに近い者との交流が深く首長の父親とは対立的な考えを持っている。そして、その大陸の最高権力の一つである聖の三大聖の一人、日光と付き合っていてあるきっかけからユートピアに移り住むことになる。

Ocea

オーシャ

通称、オーシャ

21歳、女

人魚

金色の髪に青い瞳。海底にすんでいる近人種の人魚の一族。サウスウィンドウに伝わる物語から陸に上がって暮らしていた人魚の王族。風崖の助力と彼女自身の努力で大陸の革命戦争を戦い抜きユートピアに移ってギルドに入隊。人魚ということもあり水のかかわる戦闘において力を発揮し風崖の良きパートナーとなった。

Gunter Wertylood

ギウンター・ウイティールド

通称、ウイル

16歳、男

グランティログヒューマ

ログヒューマの中では珍しい体変化型のとても強力な血種を持つ人

物。流浪の旅を続ける高額懸賞金のかかっている賞金首で、ある時あることを境にギルドに身を置くことになる。母譲りで『水』を扱う魔法が使えるが人間の粋を超え特殊系統意外の全部の属性を使用可能。

芳納

ほうな

通称、芳納

16歳、女

ログヒューマ

元北朝の帝。その本当の姿はギルド、ホーリプリセクトに身を置く阿蘇の実の娘。その容姿は美しく大きな瞳をしている。本当の姉である紅蓮とは仲が良く協調できている。彼女自身は特別な力を秘めているがその優しい性格から使うことは稀。クルーエルに自分と同じ境遇を感じそこから好意を抱きマナに仲裁を求めめでたく婚姻関係になる

Zepyulo

ゼピュロ

通称、ゼピュロ

20歳、女

人魚

人間を嫌い海から上がることはなかったがある事件の結果から軍隊を率いて陸に上がる。そこで岩鋼に一目ぼれし頑固な妹にそそのかされてそのまま陸に残った。三俣の槍を扱うのに長けギルドに入隊後は一緒に入隊した人魚の部隊、“麗鱗騎士団”を編成し海戦や水中戦闘のために尽力する。

Sphere Kricce Ogre

スフィア・クライス・オーガ

通称、クライス

0歳（登場年齢）、女

新種族、未確定要素

ファンとギアの長女。髪と瞳は母に似て白く残りの翼と額にあるまだ可愛らしい角は父譲り。新種族として生を受け生まれた少女でこれまでの生物とはけた違いの成長の速さを見せる。だが、不確定要素も多々ありなかなか推察はできないが成長すれば最強を欲しいままになれると予想できる。

L y u r e S o n i c

リユール・ソニック

通称、リユール

0歳、女

混血

フィットとアルの長女で父親のフィットに似た白髪だが瞳は母譲りで碧色をしている。体色はアルに似た褐色で顔の輪郭なども母のアルに似ている。戦闘形態としては父親の鋼拳に興味を示しそちらの方面に向くとみられている。体格は出産当時から小柄でかわいらしい。

R i n e s S o n i c

ライネス・ソニック

通称、ライネス

0歳、女

混血

フィットとアルの娘で双子の妹。碧色の髪に白い瞳の色白。姉のリユールとは対照的だが武器はやはり鋼拳をとり母のもつ弓には興味すら示さなかった。成長するにつれて細身の長身であることが解りそこは父に似たと考えられる。

影斧

えいふ

通称、影斧

0歳、男

新人種、エレメントヒューマン

シェイドとルミの子。体格は小柄に成長すると思われるが赤ん坊ながら握る力が恐ろしいことから母親に似たと考えられる。彼も成長が楽しみな子供の一人。成長の過程で新たな能力が発見され属性値が恐ろしいほど高かったため新人種として認定された。

桜牙

オウガ

通称、桜牙

??歳、雌

銀狼

銀狼と呼ばれる最古の幻獣。大きな体格をし鋭い牙にとっても強い力を持っている。ビーストと協調的で頭もよく独特な方法で彼らにのみ言葉を伝えられリーンに連れられて辺境から一族が中央大陸に入った。その中で元リーダーの娘としてまとめ役をしリーンのパートナーを務めるお転婆狼。薄く赤い色をしている。

光狼

こうろう

通称、光狼

??歳、雄

銀狼

銀狼の中ではかなり若い部類になる。それでも他とは比べ物にならないほど大きな体格をし戦闘では先陣を任されるほども猛者。桜牙の幼馴染で銀狼の中でもっとも弱気な性格。リーンの恋人であるライムズのパートナーでもある。

九頭牛頭

くとうござ

通称、牛頭

??歳、男

世界最古の龍族の末裔。頭が九個あるが意思は共通。頭がよく知識が高い。パートナーである九頭馬頭とは夫婦の関係でいつも二頭で寄り添う。その後は修羅や聖刃達と海を渡り中央大陸のクリードやダークネスと出会いそこで落ち着く。

九頭馬頭

くとうめず

通称、馬頭

??歳、女

牛頭の妻で戦闘に特化した体格をしている。夫である牛頭とのコンビネーションは最高でそれ用に開発された兵器でなければ撃ち落とすことや倒すことは万が一にもあり得ない。巨獣の中でも無類の強さを誇り性格は真面目で忠誠心が厚い。かなり短気。

Pluton

プルトン

通称、プルトン閣下

年齢不詳、男

冥王

詳細は不明で性格は恐ろしく高慢で我がままだがそれなりに実力があり魔力も高い。レイとて敵対し何度も倒そうとするが大体の場合撃退される。肉体は既に失っており現在の肉体は錬成魔法で作った虚偽の物。

Orb Scer Ogre

オーブ・スケア・オーガ

通称、スケア

20歳、男

オーガ

黒髪に黒い瞳。ギアの実の兄にしてオウガの反逆者。元々戦が好きで両親からうとまれており一族を売りその見返りを夢見たりするなどの残忍な性格も持ち合わせている。プルトンに救われそちらの側に突き剣をふるうが実質的な実力は謎。

Onix Carn

オニキス・カーン

通称、オニキス

年齢不詳、女

浮遊靈魂体

プルトンの側近兼魔導師で古代の魔術が得意。禁術なども扱い命はそれでつないでいる。肉体は古の昔に消滅してしまい現在は魂のみの歪な存在である。それを強みにしどんな攻撃もすり抜けるというところがまたいやらしい相手。

Cloer Moonlight

クルーエル・ムーンライト

通称、クルーエル

10歳、男

???

金の髪と瞳。マナの腹違いの弟だがその関係から姉があまり好きではなくプルトン側についている。彼女とは違い肉体に作用する攻撃的な魔法が得意で性格は残忍。年齢的にはまだ幼い域だが戦闘力は普通のオウガ並と言われる。成長し自我が強く押し出されるようになりプルトンに反発。その後はプルトンの追手を撃退しながら一人旅を続け荒野に一人でひっそりと暮らしていた。ある事件において巻きこんだ形になった芳納を敵から救い結果的にギルド内に身を置

き最終的に……芳納と結婚し阿蘇家の婿養子となって落ち着く。

I o E n i s s i s

イオ・イニシス

通称、イオ

14歳、女

オーガ

白い髪と瞳。強力な肉体を持つ少女で戦闘においては負けなしを飾っているが覚醒後のレイには勝てなかった。プルトン側に居る理由はギアを手に入れるため本人はあまり忠義を持つことをしない。最終的にはプルトンからの任務に反発し見せしめに暗殺されそうになるがギュンター・ウィティールドに救われ命拾いし同時にプルトンの手から離れたクルーエルとも別れギアと和解しギルドに身を置くことになる。彼女は実はファンの義妹でその関係からギルドないで実力を買われた。その後、恋人となったウィル（ウィティールド）と婚前に子を宿し結婚する。

H o r n A t e

ホーン・エイテ

通称、ホーン

18歳、女

ログヒューマ

元西の国の軍人。タージェの時代から西の国に居たが彼から国を奪った男が気に入らずプルトンと組みその男を抹殺した戦士。性格は猪突猛進で残念なほどにおバカでフィトと戦いたがっていたが毎回アルに電気ショックで眠らされかなわないうても不憫な奴。

T o o r o n

トゥーロン

通称、トゥーロン

40歳、男

ログヒューマ：霸王（未覚醒）

レイの実の父。母親がレイを連れ逃げてしまってからレイを探して旅を続けている。実はレイが心配なだけのいい父親。プルトン側にいるがそれも一時の協力にすぎず彼自身はいつも一人身。

明覇

あけは

通称、蝶

??歳、女

レイの実の母。人間の力を超越した存在。それ以外は一切が不明の女性。各地で目撃例が挙げられ彼女が降り立った場所は行く末が明るくなることから一族の代々の当主の名は『明覇』と呼ばれ。彼女は同じく目撃例から彼女の背中には蝶のような羽があるらしい。

種族詳細

ヒューマン

最古の血族で純潔は珍しい。凡庸性に富戦場や内政では重役を努める者が多い。

ビースト

体機能の向上のために作り出された種族。この種族が発端となりDNA汚染が始まった。

エーテリオン

ビーストとヒューマンのハーフで高確率に生まれる血種だが最近のエーテリオンとエーテリオンの間でしか産まれない。

魔力が高いが体が弱く内政向きな種族。

ログヒューマン

エーテリオンとヒューマンのハーフがそう呼ばれる。付加魔法能力に富、戦場に駆り立てられる中で最も多い種族。肉体的にも申し分なく戦闘において最適な種族。

ドワーフ

数は少ないが頭が良く手先が器用で細工職人に多く見られる血種。戦闘や内政には向かないが開発や研究には最適。

オウガ

膨大な魔力と極めて強い体機能を持ち合わせる最強の種族。もとはホムンクルスと呼ばれ他の種族と対立したが現在は考えが柔軟な一部のオウガが人里で普通に暮らしている。

カイザー

最も現れにくい血種。全ての血種の特長を持ち人知を駆け離れた力と既知を持つ。しかし数が少ないために弾圧され最近まで保護されず現在は見ること稀。

マスター種

純潔を保っている、もしくはヒューマンの形態をしているが実はオウガ、カイザーの力を保持している存在。数億人に一人の確率でしか産まれない、そのうえに見分けがつかないため確認は戦闘を見て見ないことにはわからないなどの難点があり今まで確認は数名しかされていない。

霸王

過去の大英雄。詳細は不明。

魔王

覇王と共通な大英雄だがこちらは現世に数人確認されている。しかし、これまでの魔王はみな短命だった。

冥王

世界を滅ぼすと言われている破壊者。前回の出現は覇王によって阻止されたらしい。

本人も知らないことがある。

剣と楯の出会い

未だ魔法が存在する現代。力を有するものはのし上がり、おごれる者は食われる。そんな弱肉強食の世界は生物的观点から土地や宝など“物”としての価値観を見出しそちらに利を求めた世界に変わりつつある。人の心は完全に忘れ去られたのだった。そんな世界に嫌気がさしたこの紅の髪の少年戦士、少年フェンク・レイ・スウォードは小国の最良といわれた王に仕官した。しかし、その王は病で崩御、死後に戴冠した王に国をまとめる力はなく彼らは振り回されるばかりだった。そんな狂った状態でも彼らはまだ国を諦めてはいない。

「レイ……。本当に行くのか？ あそこに行けば帰っては来られないかもしれないんだぞ……」

「確にな……。だが前王の大好きだった土地を奪われ黙っている訳にもいかないだろう？」

「その気持はわからなくもない。だが……。絶対に生きて帰って来いよ。来なかったら地獄の果てまで追いかけてってやるからよ！」

「ははは。わかった」

彼、レイは笑っているが勝目など無いことは解りきった戦争なのだ。大臣の中には隣国と繋がるものもある。軍兵の鍛錬はもはや地に落ちた。食料もなく、税金を取れる住民達も逃げて行くしまつ……。この大陸、ユートピアは五つの大きな島が古の昔に人工的に作られたこの中央大陸によって接続された大きな島だ。東西南北の名将はこの中央大陸を欲し、また野心ある者は国を作り崩れつつある王をその椅子から引きずり落とす。そんな不安定な場所での戦闘は死に行くような物なのだ。まして彼はまだ訓練兵で実戦を経

験していない。

「フィット。後は頼んだ」

「まかせとけ。ルミ教官と帰りを待ってるぜ……」

彼はフィット・ソニック突撃隊長。レイの同期の中でただ一人部隊長格までのし上がった男だ。今回は本土の防衛のために突撃隊長という格からはなれ城に残るらしい。そして、軍の中階級を除いた上ではレイの親友だ。レイは剣兵で近距離戦闘が得意な部隊の訓練兵。先程も言っておいたがこの世界には魔法が生きていて誰でもとはいかないが安易に使用できる。戦争の武器であることは勿論のこと日常であっても使われる。話を戻し戦況は芳しくない。敵は隣接する国の全てでいくら守ったところで意味がないのだ。レイが派遣された前戦地は最も危険で勝目のない場所……普通ならだれもいきたくないところに志願して出陣していく。それに加え指揮官に経験がなく陣張りも上手く行かない。そろそろ衝突しようかという所に差し掛かったがもはや勝敗は見えたも同前の状態。敵前逃亡をする兵士も少なくはない。

「あの国も堕ちるか。ギア、あの中からよさそうなやつを選べるか？」

「ああ………。ここは様子を見ます。タージェさんは宿で待っていてください。この俺が人材を見つけて来ます。……状態が状態です。ので俺もここが一日持たない場合は西の国の友人の元に一度向かいます」

「わかった。確にお前一人のほうがここは動きやすそうだな。俺も危なくなったら見つけたよさそうなやつを連れてギルドに向かう」

武器を持った男が二人戦場の近くに現れた。一人はギアと呼ばれた細身で普通くらいの身長。もう一人のタージェという男はがっし

りした大男200ほどはあろう。どちらも黒いマントでフードを被り遠目に戦地を眺めている。

「突撃命令か……………。指揮官がどさくさに紛れて逃げる。フィートには悪いがここが俺の死に場のようだ」

戦力比は2…5でレイ達の軍が劣勢。加えて兵の質も士気もないこちら側、防衛軍は言うなれば烏合の衆なのだ。対する敵は元この土地の住民や義勇兵など士気も高く武器や訓練の度合いも違いすぎる。それでも一部の前王を慕う兵士達が立ちはだかり進撃をよしとしない。だが、負傷し次々に戦場から姿を消して行った。彼らの仲間も次々と後退しレイのまわりからもついに見えるだけで数人の味方しかいなくなってしまったようだ。

「くそ……………このままだと…………グアッ!!」

「大丈夫かレイ! お前は逃げるんじゃない! わし等老兵が時間を稼ぐ若い芽が摘まれるのは好ましくないからの。もうこの国はしまいじゃ! 急げ! 長くは保たない!」

「ぐッ。大臣……………」

「行くんじゃない! わし等老兵の屍を超えて生きるのだ……………。お前にはまだ未来が有るのだから無駄にするでない!! 前王の意思を受け継いで生きるのだ!」

「大臣……………済まない!」

レイはその周辺に少し不振感を持ちながら力の限り走った。同じ歳くらいの兵士が誰一人として見当たらない。死体すら転がっていないのだ。数名の足跡は見つけたがあとは見当たらない。そこに運悪く敵の補充部隊に遭遇してしまったようだ。彼は止まり息をひそめようと隠れる場所を探したがそんな場所はない。すぐに敵からの攻撃合図を聞き取り武器の剣の柄に手をかける

「全体止まれ！」

「チッ……新手か」

ログヒューマンの容赦ない弓矢には雷属性の付加魔法が付加されていて少しでも触れば体が痺れ動けなくなる。対するレイの属性は炎で相性は五分五分、だが盾や弾ける物は周りになくあるのは大振りな大剣が一本と細身の中剣が一本。ここで重要になるのはこの世界に存在する魔法の力だ。ここの生命体には玉、魂が存在しその魂には螺旋状の記憶糸と呼ばれるものがあるという。それに生まれながらに記された火、雷、氷、風、岩、光、闇などが強く関係しているのだ。彼は先ほど説明したとおり属性はふりではない。だが数の上で違いが大きく絶体絶命であることは言うまでも無い。その時、近くの林から黒マントの大男が現れマントの下にレイを隠した。

「ウワッ！ ……………なッ何が」

「小僧、一丁前に鎧着けてるわりには諦めが早くないか？ そんな重荷は捨ててしまえ！ 俺が守ってやる！！ 少し協力しろ」

近くの林から先ほど近くにいた黒マントの大男が現れマントの下にレイを隠したことで敵兵の動きは鈍くなった。いくら訓練されていても同様は隠せないだろう。

「あ……アンタは……何者……」

「話は後だ。半分減らしてから答えてやるからとりあえずコイツらを黙らせる。お前、剣は使えるよな？」

「ああ……………」

「俺が奴らの真っ正面から突っ込んでやる。途中までは後ろで隠れながら走れ。その後は右側から敵陣の横っ腹を崩せ……いいな？」

「……（コクッ）」

妙な覇氣のある大男の指示に圧倒され頷くしか出来ないレイは指示通りに動く。戦鬪区域から少し離れた林のエリアでまばらに生える細い幹をかわしながらその大男は猛然と敵の中隊と真っ向からぶつかる。三人程その太い腕が繰り出すラリアットで遠くのほうに投げ出されていった。敵が陣形を変えこちらに口を開くようにV字に並び三列に整列していく。そこへ特徴的な形の大剣とそれに似たデザインの中剣を持ったレイがタイミング良く踊り込み敵の陣はパニックに陥った。

「『ただのガキかと思ったが……なかなかどうして。剣のみなら使えそう。コイツを連れて行こう』」

「らあああああああつ!!!!!!」

その頃の前戦地では老兵部隊が壊滅し退却しながら敵を減らして行った。その中には先程の細身の黒マントがレイに逃げるように指示した“大臣”と呼ばれた老兵に肩を貸しながら走って行くのが見えた。この戦争の敗色は濃くもはや立て直しは不可能になった。本土に攻め込まれ雑兵は逃げるばかりで全く纏まらない。

「済まぬな。ギア殿よ……。わしはいいからお主は逃げ延びてくれ。城にいる将兵は強靱かつ頭のいい者ばかりじゃから後は期を見て上手くやろう。それより先程鎧を付けた少年兵士に会わんだか？」

「いえ看取ったのは老兵の皆さんばかり……。解りました御身が無事であることをお祈り申し上げます」

そう言い残し戦場から抜け出したギア。方向はタージエ、レイがいる方向とは反対に砂漠の広がる方向に向かって走って行く。何か思惑があるらしい。再び戦鬪をしている二人の方へ視点を戻そう。

「グアッ!!」

「雅月緋双刃!」

レイも魔法を剣に使用し斬撃を炎の弧に変え次々に放つ。美しいが切れ味や温度は相応に高く当たった者は出血せずに各部位を切り落とされる。肉が焼ける生々しい臭いと部位によっては苦しみ悶えながら死んで行く。

「ふうむ。小僧! お前は行く宛てはあるのか?」

「ありません……けど! それが?」

「俺の所に来んか?」

「アンタに仕えるのか?」

大男の方も面倒になったらしく背負っていた独特な形で木製のハンマーを握り敵の集団を蹴散らしていく。

「俺のギルドに来るかということだ! ふんぬっ!」

「……国は?」

「見ただろう。お前の仲間が身を呈してお前を守ってくれた所を。諦めろ。男は前をしろ! この俺のようにな!」

「アンタ……何者なんだよ」

「我が名はシド・タージェ……元西の平原の王だった男だ」

絶句するレイをよそに最後の一人が顔面にハンマーの柄をくらい近くにあった木の太い枝の上に乗った。綺麗に空を切るように描かれた弧を目で追ってしまうレイの目の前にフードをとって顔を明らかにしたタージェが立ち右手を差し出してくる。ゴツゴツした筋肉質の腕はたくさんの傷がありいかにも歴戦の猛将といった空気を帯びている。頭は髪の毛がないスキンヘッドだ。

「お前の名前は？」

「あ、はい。フェンク・レイ・スウォードです。出身は南の高山地帯の麓で16歳」

「では、行こうか。早く行かねば日が暮れてしまう。おっと……改めて名乗ろう俺はシド・タージェだ。よろしくな」

少し歩いたところでレイがタージェに問いかけた。

「何かまずいことでも？」

「もう少し頭を働かせろ。敵がなぜ今の状態で兵を待機させていると思う？ 夜襲と逃げた兵士を夜の闇に紛れて放った隠密機動に殺させるためだ。今頃はバカな現王が逃げるために慌てふためいているころだからな」

「現王はどうするつもりでしょうか？」

「逃げるも残るも首撃ちでそのあと曝し首だろうからどっちにしろ死ぬだろうな。今日中にこの街を出るぞ」

「は、はい。わかりました」

「着替えや荷物は後で揃えてやるから安心しろ。まずは隣の国に入らねえとな」

中央大陸は情勢が不安定でかなり危ない場所だ。非合法的な商売が横行し人拐いや人身売買、他にも薬、武器の密輸、闇不動産などが例としてあげられよう。現在はその中でも最も情勢不安が深刻な中央精霊都市区にいる。その由縁はこれも古の昔にこの大陸が出来た時に作られた帝都の城があったという過程からそこを治めた者は天を治める。つまりは世界を治める権利と義務を得るというバカげた話なのだ。それがそれから厳密な数字として表すことは出来ないし解らないが役千年前から続いているというからいよいよバカらしくなってくる。考えが柔軟な将は各地に城を築き地盤を固め治安、生産、行政の均衡を既に考えているというのに。……などとレイ

に説明してくれたタージェが再び首を振った。

「だがな、そろそろだ……その地盤が碎け再び戦乱は広がるだろうがな。最近の魔法科学ってのは凄いもんだぞ？ 俺は聞いただけだがこの土地の有用性を見つけた輩は手を出すような物がこの土地に眠っているんだ。戦乱は終わらないのさ」

「あの、タージェさんはなんでそんなことを？」

「連れが居たんだよ。ソイツがそっちの方面でやり手でな」

「その人は？」

「ギアは多分近くのこの館に行ったのだろう。おお、聞き忘れていたな………。お前の想い人は近くに住んでいるか？」

「いえ。そんな女の子はいません………」

あからさまに小指を上げてギアの相手をさすタージェが次はレイに矛先をむけレイはするりとかわし直ぐに背中を気にしはじめた。

「うッ………。タージェさん触らないで下さいよ」

「触らなくては手当は出来ん。かなり浅いが健康骨から肋まで背中をザックリか………なかなか上手く避けたな」

「ありがとうございます。ですが当たっては意味がないです」

「ふむ。後々稽古を付けてやる。それにどうやら想い人では無いようだか探したい人はいるようだな」

「なんでわかるんですか？ ……はい。正直に言えば一ヶ月前の女の子ですが昔この奥の山に隠れてしまったんです」

「おお。意外と頭の構造は素直らしいな。まずはギルドに行くぞ。その傷を縫ってからお前にはその少女を任務として探してもらう」

「は、はい。わかりました」

火がくすぶり黒や灰色の煙が立ち込め兵士やかわいそうな一般人の死体が転がる街道を歩く二人。レイは身長165くらいでタージ

エは200弱だ。遠目に見れば普通の親子が逃げているのに似た情景に見える。レイにはタージェのマントの換えを渡してもらい姿を隠している。なぜなら彼は敗残兵で見つかれば即、打ち首だ。この中央大陸のど真ん中で起きた小規模な国取り合戦は徐々に拡がりを見せるとタージェは言う、出来ればそんなことはないほうがいいが次々に侵略する暴国と中立を保つ牽制大国、侵略される哀れな国。大まかにはこの三つに別れ大乱は五大陸全土に拡がる。

「もう、誰にも止められないんだ……………この戦の波は。死を招く心の渦が見えてくるようだ」

「あの、どうしてタージェさんは国を？」

「今更だがシドでいいぞ」

直ぐに顔色が変わり嘆かわしいような悲哀を含んだ表情になった。

「レイ、覚えておけ。俺は本当に信用した人間にしかこんなことは言わない。恥ずかしい話だが俺は家臣に裏切られて王座を退いた」

「……………裏切り？」

「そうだ。この世で俺が最も嫌いな言葉のうちの一つ。ところで俺は何歳に見える？」

「30歳ですか？」

「そうか。正直でいいがそこがまず違う。俺は20歳だ。確かに老けているがあまりあからさまに言わないでくれ」

「あ、はい『気にしてるんだ』……………」

「話を続けるぞ。俺は13で一国の王になったんだ。親父の七光りと言えばそれまでだが実質国は傾いていた。尽力し試行錯誤し汚職を追求し……………挙げればきりが無いがそんな国王はまだ外界を知らない青二才でしかなかったんだよ。いつの間にか奴の支配が増大し最早手がつけれなかった。俺は退くことすら出来ない。そんな中ある本を読んだんだ。迷信なんか信じない俺だったがその時は藁

をも掴んだ。そして闇に紛れ城を抜け流浪の旅路につき今に至る訳だ」

「その本とは？」

「バイブル……………創世の書」

レイとタージェが歩きながら話しをしている。遂に危険区域を抜けて幾分か安全になった太い街道を抜け細い路地に入りクネクネと入り組んだ下町を進む。レイの大剣は目立つためタージェが独特な形のハンマーを包んでいる袋と一緒にいれ担いでいる。中剣はレイが担ぎなに不自由なく中央紛争地帯を出た二人だった。その頃のギアはというと敵の隠密機動に奇襲をかけられ数に押されていた。

「……………ふっ」

「何を笑っている」

「貴様等は30人もかかって人、一人殺せんとはな」

ギアの攻撃は手のひらからの光線で闇に紛れた敵であっても攻撃が当たっていく、その攻撃は訓練された兵士や隠密機動だったとしても見分けること、ましてや見きるなどという行為は不可能だ。だが彼も完璧ではない。大人数で攻撃を受けると流石にてこずるらしい。夜の市街地近郊の荒野でそのような死闘が繰り広げられていることを住民たちは知らない。

「ギア！ 腕が落ちたんじゃないか？」

「その声は……………ファン？」

透明の光の幕が垂直に降りギアを包んだ。次に光は何重にもドーム状の結界となり敵を包んで行く。普通はバリアや結界は防御魔法だがこの少女によって、それは攻撃魔法に変わるのだ。

「マジックドーム。スパイフォーム！」

形としてはサッカーボールのように五角形と六角形の板が綺麗に区画されている結界を構成している面が次々に中心から尖り始め釣り天井の容量で距離や面積も狭くなった。

「流石、当代最強の魔術師か……」

白髪の少女はにこりともせずギアを見つめている。敵は退路を塞がれ徐々に近づいて来る光の鋌の壁に貫かれ息絶えていく。中心の円柱上の結界の中にいたギアはすぐに近寄ってくるファンの方をじっと見つめながら負傷したらしい肩を押さえている。

「肩見せてみる……」

「あ、ああ……」

身長は165ぐらいの少女は背中に折りたたんだ翼があり天使のように美しい。細い指が切り傷のついた肩に触れると“シュー”と小さな音と白い煙を出し傷を修復していく。完全に傷を修復するとすぐに彼女の小さな拳がギアの頬を捉え“パンッ”と音が鳴りギリギリでギアが受け止めた。

「ふん！ お前は昔から女を泣かすのが特技だったな？ 今まで何をしていた？」

「西の国の暴落を看取り元西の王とともに旅をしてきた……。死んだだとも思ったか？」

先ほどは右の拳、次は左の拳が頬を狙う。馬乗りになった状態のファンが激憤しギアの腰にあった短刀をつかみ両手で握り締め喉笛ギリギリで止めた。

「お前、全然変わってないな……。人の心を察することは出来んのか？」

「変わったら俺ではないだろ？」

レイの短刀を地面に突き刺し、ファンがギアの上からどいた。その次にギアの思考が働く前にファンがギアの胸座を掴み上げ、声高らかに叫んだと同時にこちらも綺麗な音を放って平手打ちがクリーンヒットした。だが彼女の声はそれまでの威厳のある少し厳しさを含んだ声から少し幼さを含んだ叫びのような大声に変わっていた。本当の彼女はどちらなのだろうか。

「馬鹿 あああああ！！」

ノロケ話はこれくらいにしてレイとタージェの動向に再び目を向けよう。

「傷が熱を持ち始めてる。少し痛い但我慢しろよ？」

「あ、はい」

現在はレイとタージェが出会って半日が経過した夜。宿でタージェがレイが逃亡前に受けた傷を看ているがあまりいい状態ではないようだ。消毒薬代わりにアルコールの強い酒を浸したガーゼで優しく拭う。痛みは尋常じゃないだろうがレイも動かずにと座っている。この世界は魔力の影響か骨折すら二、三日で完治するがレイの体は治癒が遅い。深くない傷だから半日で治ると踏んでいたタージェの予想が外れた形になった。不振感を煽るのは良くないためあえて話題には触れないことにしたらしい。

「明日にはギルドに行けるだろうな。そしたら縫ってやる。あとは

入隊に関しての説明をしておくからよく聞け。俺のギルドはまだお前を含めてメンバーが三人だけだ」

「え！？ それって」

「大丈夫だ。資金と施設は充実してる」

「良かった」

「で、だ。お前にはまずメンバーを集めてもらうことを任務として行ってもらおう。使えそうならとりあえず連れてこい」

「はい。シドさんはその間に何を？」

「俺も俺で街へ挨拶まわりに警護任務だ。そして、お前の先輩兼師匠のギアは今一人連れに行ってる」

淡々と業務的な説明をしているタージェが立ち上がりレイに立つように促した。どうやら下の食堂で夕食を食べようということをお願いしようだ。レイが数秒間悩んだ後に“わかった！”というような顔をしてすぐにタージェに追いついた。意外ときれいな内装の宿は広く充実していた。

「もっと食べよ。レイ。まだ16歳だろ？」

「元々、少食なもので……………。それにあまり食欲が」

「食べたい物だけガツツリ食べ！ お前にはさっき言った通りだ。

悔やむなら直後だけにしろ。男なら前を向け……………確かに過去も必要だが俺たちは今は前を向くしかないんだ。いいな？」

「はい」

16歳にして死戦をくぐり抜けた彼にとっては辛いだろうが確かに現状はそうするしかないのだ。仲間は散り散りになり生きているかすらわからない。生きているなら後にでも会えるはずなのだから前を向いて進むしかない……………とレイも考え直したらしくすぐに目の前に出された料理をたிரらげていった。「お前を見ていると昔の俺を思い出す。やんちゃして国中の悪党をこのバックボーンで制

した時代を」

「どうしてですか？」

「真っ直ぐな目だよ。懐かしく羨ましくもある。明日の午前中に出発するそれまで良く休んでおけよ！」

「はい」

TO BE CONTINUE

旧友の集い

レイとタージェがギルドに到着しレイのために用意された寮のよ
うな宿舎に粗方荷物を揃えた。レイはその次の日にはそこをたち任
務のために再び戦地付近の山に向かって足を進めた。タージェが揃
えておいた軽装だが固く動きを鈍らせない作りの鎧と大剣のホルダ
ー、中剣のさやにウエストポーチなどが渡されそれらを着用、使用
をし装備は完璧である。加え新しい人生の始まりと仲間ができたこ
とから心が温かくなったのか意気揚々、ギルドを旅立って行った。

「なあ、ギア……二・三日はここにいろのだろう？」

「……………。言うのが遅くなったが今回、来た理由はお前を迎えに
来ることだ」

「い、いきなり何だよ。急にそんなこと言われても……」

「変なことを考えてるな？ 俺の所属するギルドに来て欲しい」

「そんなことなら別に構わないが……………。そうだ！ 忘れていた
がお前にプレゼントが有るんだ」

ファンは折り畳んだ翼を軽く広げ頭の上にビクリマークが飛び
出したような反応をしその後はギアの手を引いて街に出て行った。
ギアはオウガという種族でファンはカイザーという種族。二人とも
希少種で市街地で見るとは少ないようだ。カイザーは人間に近い
がオーガえあるギアはどことなく異質な雰囲気体を発している。
だが街の人々は気軽にファンにもギアにも話かけている。この村は
大きくは無いが山間のくぼ地にあり戦火が及ばなかったようだ。

「おお、賢者さん」

「長老殿……私はいつも言っているように賢者などでは……」

「あ！ 天使のお姉ちゃんだ！」

「ファン。人気者だな」

「まあな、その内お前にもよって来るぞ？」

街を歩く時に気付けば周りに人々が集まり口々にギアとファンに問いかけが集中し関係や素性をさらけだそうとしてくる。ギアはニコニコしながらその言葉に応えているがファンは気が気ではない様子で少しあわてている。

「貴方は何者なのですか？」

「ファンの古くからの友です」

「オウガですよ？」

「オウガですよ。名前もオーガですが」

「ファンさんとの関係は？」

「それはノーコメントだ!!!!!! ギアもスラスラ答えるな！」

ファンが大声で叫び聴衆が一気に盛がついたように笑いだした。太陽が真昼になったことを告げるようにてっぺんから強く照りつける。いくら仕事のない子供でも親の元に帰らなくてはならないそうした理由からいっしか聴衆は一人としていなくなり街の中心部の工芸区に着いた。

「ゼシさん！ 来ました」

「おっと。出来てるぞ二つともな」

「ありがとうございます」

独特な刃形の大鎌と魔術士用の長いロッドが工房の壁に立掛けてある。ゼシと呼ばれた女性が二人に歩みよりすぐに二つを渡した。

「彼氏か？ ファン」

「ち……！　ちがつ……！　違います！」

「貴方の名前は？　そちらの殿方？　ほう……オーガとは珍しい」
「遅れました。俺の名前はオーブ・ギア・オーガです」

バラの蔦と花の刺青が目立つまだ若々しい女性が露出の高い服を更にラフにした状態で着こなしている。色気は高いだろうがギアは見向きもせずに渡された大鎌をみて触る。その様子をゼシは面白そうにのぞいていた。

「聞いていた通りの反応だな。どれ？　合わせてみるか？」

「貴方が練強なのはわかりますが……」

「案外優しいな。ファン……いい旦那を持ったな」

顔を赤くしすぐに否定をしようとするファンをよそにゼシがギアに本名を名乗っていた。彼女の武器は刃が薄く十字架の様に細い短剣で二本がそれぞれ左右の太もものホルダーに入っている彼女の容姿からわかる様に派手な装飾だが実用性は高そうだ。

「済まない。こちらもう少しふざけすぎた。私の名はクロス・ゼシ、この工房の主だ。出身は北の地でエーテリオン」

そこにハッとした様にファンが話しにわって入った。白い髪と青い目のファンは容姿はとても美しい。性格が少し残念だがゼシやギアはそこが気に入っているようだ。

「ゼシさん。今日はもう一つお伝えしたいことがあるんです」

「わかっている……。この地を離れるのだろうか？」

「はい……。今まで有難うございました」

「ああ、達者でいろよ。これで寂しくなるなヴィヴィアも一人立ちしファンも私より先に結婚か………」

「違います！」

「冗談の通じない奴だ……。まあ、元気でやれ」

ゼシはファンが頭を下げてふたたび例を言っていると奥の工房らしきところに消えて行った。閑散とした細工・武器工房は誰もいなくなりすぐにそこから出て行った。しかし、直後にファン達を追うように再びゼシが姿を見せた。

「待て！ 待て！ 二人とも！ 渡したい物はまだ有るんだ。ペンダントだ。ギア君。君はもうこの子を放すなよ？」

「はい。もう、離す気はありませんよ」

「本当だろうな？ ギア」

二人が合流しギルドに向かう。それと反対方向へ向かったレイにも変化が始めていた。出発して半日。心当たりのある山中をさまよっている。レイが探している人はどうやら山の中にいるらしい。今更ながら説明をしておこう。今、レイが向かっているのは南の熱帯雨林の奥地で更にその奥“大南半島”に向けて歩いている。その隣の西の国は風の国、東は雅の国。反対の北は科学の国。全てに特徴的な発展様式が強くあり、各々にまとまりかたは異なるが均衡の取れた国だ。そして、今レイがいる南の国の詳細を伝えておこう。最有力人種はビースト。一番巨大な都市は南の海岸に張りだした港湾都市でそこ暑さと気候変動の大きく、感染率の高い疫病がついてまわる。それら悪条件に対して対抗出来る強い体を持ったビーストが多く住んでいるという構成だ。そして、中央大陸に隣接する巨大な熱帯雨林が防壁となり敵は侵攻を出来ない状態にある。他には数百を超える戦闘部族が巨大な熱帯奥地に構えているという。

「この辺りのはずなんだが……。何しろ10年ぶりで地理が変わり過ぎてるからなあ……」

奥地は巨大な路や開けた集落等はない。森の中でいつ戦闘部族に襲われてもいいように大剣はすぐにぬけるようにしてある。その時、警戒していたことが事実になった。レイの銀と赤のツートンの鎧に毒の吹き矢が当たり金属に石が当たったような音が林の中に消え短剣を持った戦闘部族が踊り出した。

「お前……何者？」

「俺はフェンク・レイ・スウオード！ギルドの使命からこの地を通りたい」

「信じられない。敵は皆殺す！」

この様な森の中では大剣は不利だ。すぐに大剣から手を離し中剣と短剣を使い向かって来る敵を倒していく。そこに碧色の髪の長い女性が現れ矢を放った。金属のフェイスマスクを付けているため顔が確認できない。

「君は誰だ？　ここを抜けようなどと。どれだけ命知らずなことか……」

残り五人程の敵は各々、胸に短めな矢を受け息絶えた。その女性はずぐに藪に消え姿をくらますとよく通る声でレイに忠告してくる。森のなかで反響しさらに大きな声になった。

「君がどのような生業の者かは知らないが早くこの森から出るがいい。さもなくば命を落とすだろう」

それでもレイは進み続けた。途中にいくつもの焼けた村々を見つけて調べていく。最初の村は意図的に火がつけられたしいら痕跡があり火もとから戦闘のあとらしいことがわかった。二つ目からは一方

的に襲われたような状態になっていた。明らかにおかしいのはなぜこんな広範囲でしかも均等に一区切りつけた周囲の複数の村が同じ様に焼き討ちにあっているのかということだ。他にもある。奥、つまり街に近いエリアに行けば行くほど被害が大きくしかも戦士の死者の数が放物線のグラフの増加量のように増えていく。殺され方は一様に銃殺。最近では北の科学都市の兵器がこちらにも流れているらしく武器は機械化しつつある。だが現在の武器科学では性能や威力などを比べても明らかに剣などの方が高い性能を保持している。

「酷い……………惨すぎる。これでは殺戮と同じだ……………。こんなことをして何になるんだ……………」

「その者止まれ！ 両手を上げろ！」

背後から男の声がしたがかわわずにレイは足に力を込め短剣を逆手に握り直し振り返り様の遠心力を利用して銃を持った敵を一刀両断した。先程の戦闘部族達の気性が粗いのはこれが理由らしい。何らかの組織が関与して戦闘部族を根絶やしにしていることがすぐに見てとれる。そして真相はすぐにわかった。レイに切り落とされ首がない敵の死体の胸についている紋章でピンと来たようだ。彼も一応この奥の街の出身だ。それがどんな組織かぐらいはわかっている。

「クーデター……………か。シドさんの予想通りに紛争の混乱が広がっている。何とかして止めないと」

それから丸一日、森の中を歩き続けたレイはつぎの日の明朝に彼は自分の故郷の街にたどり着いた。未だ山中に位置するが王宮が近く農業が盛んで秋には黄金色の畑が美しい土地だ。窪地は水が貯まりやすいため市街地は用水設備がしっかりした美しい街だった……………。その街は見る影もなく破壊され周辺の人が集まりはしているがスラム街のように混雑した状態だ。街は完全に執政機能を失って

しまい、人々は荒む心と戦い続けているように見える。レイがその街に入るとすぐに屋台や出店でしきりに商売をしている人やあてもなくうろつく人がよく目に付く。そして、レイは目の前にいる女性に目を止めた。碧色の髪に皮で出来たアーチャーブーツを履き若草色のアーチャーコートをきている。先程の女性に違いない。

「あの、済みません……」

「その声はさっきの男の子ね？　なんであんなと……こ……ろを……」

「あ……違ってたら……済みません。もしかして……アル？」

「レイ！」

「アル……！　久しぶりだなあ、何年ぶりだろう。その目……、どうしたんだよ」

「ちよつとね……」

碧髪の女性は実は幼なじみのアル、本名はボア・アロウ・ルースという一つ年上の少女だったようだ。親しげな二人の話題は過去の話になり場所を移し未だ綺麗な芝生の丘に歩いていった。そこで昔を振り返りながら別れてからの状況を伝えあっている。

「レイ、背が伸びたね。昔はアタシの方が大きかったのにさ」

「アルこそ大人の女の人って感じになったよ。なんつーかこう……」

「レイ、もしかしてアタシを口説いてるの？」

「ハハハ……。まさか……。アルは呼び方こそ変わったけどアル姉っていうポジションは変わらない。これからもな」

「残念！　少し期待したのに。で、さ。なんであんなところをうろろしてたの？」

レイが過去にアルと別れたあとの話をしている。レイの家はこの

辺りでは有名な富豪だったがレイはそんな家を飛び出し中央大陸に乗り出したのだ。そして士官、自国の滅亡、シドとの出会いを語り話をとめアルに話をふった。

「アルは山にこもったと家族から手紙があっただけどその後は？」

「アタシはお父さんと山で狩りとか採集をしてのんびり暮らしてたの。お父さんは元々、年がいったから多分寿命だと思うけど去年の乾期になくなったわ」

それからの独り暮らしや狩りでの経験。他にはどうして隻眼になっちゃったのかなどを細かく説明しいきなり真剣な顔になりレイにあることを頼み込んで来た。

「レイ……。本当はこんなことは頼みたくないしアタシもしたくない。だけど、今回ばかりは奴らを見逃す訳にはいかないのなよ！」
「わかってるよ。俺も奴らの行動には虫唾が走ると思ってたところだ」

まずはアルの家に行き作戦を練ることになり昼の太陽の照りつける中をレイはシドから渡されていたフード付きのマントに身を包み、アルはアーチャーコートとフード付きのジャケットを合わせて着こなしている。

「相変わらずだな。暑さも寒さも感じない混血種の特長で……。たしかビーストとエーテリオンだったな？」

「ええ、アタシは両方に強い体を持った人間。便利だけど時々自分が怖くなるわ……」

「それはお互い様。俺だって普通のヒューマンのはずだぜ？　なのが付加、攻撃魔法が両方使える。怖いのは一緒さ」

話を戻しておこう。作戦はいたってシンプルでまずはこの土地の反逆軍を根絶やしにし戦闘部族への攻撃をなくす。その後、敵の主力を叩く。二人だけだが一応のこと強い二人が組んでいるためそこそこ戦力になる。正規軍が反逆軍と交戦中のためフードをかぶり夜になるのを待つ。レイは先ほどのジャングルとは違い軍の施設での戦闘となるため大剣、中剣、短剣のすべてをフルに使える。アルの武装は長弓で軽い。

「レイ。そろそろ行くよ。存分に暴れてくれて構わないからね」
「了解」

反逆軍も出し抜いたとはいえ数の上では未だ大きな力のある正規軍の残党に手をやいているらしい。レイはフードを被っていたがアルから金属のマスクを渡されそれをつける。アルは特徴的な碧の長髪をジャケットの下に押し込み身構えた。

「作戦はさっきの通りをお願いね」

「わかってる。引き付ければいいんだろ？」

「そう、出来るだけ倒してね。情けをかける必要なんてないんだから」

二人が別々の方向に走り出した。レイは付加魔法を使用し体の代謝を上げ筋力を増強していき、それに加えて攻撃魔法をしようとして武器から炎を放出している。対するアルは雷の攻撃魔法を使い弓に帯させた。最初に敵に遭遇したのはレイ。

「敵襲！敵襲！」

「かかって来いやあ！」

レイは囧だ。アルが敵のキャンプ裏に回るまでの時間稼ぎをキャ

ンプの前方で行うのが役目。おおぶりの大剣が振り回され近くで戦闘態勢で身構える中剣や短剣などの近接武器の兵士は勿論のこと槍や弓の中、長距離武器で攻撃をしてくる敵ですらレイの怒涛の攻撃に被害が大きくなるばかりだ。特に敵の剣兵と槍兵は大剣で腰を斬られ一瞬で二つの肉塊になっていく。それに加えて付加魔法を使用して大剣を片手で振り回しはじめたレイに対して挑んだ兵士は次々に悲鳴をあげて切り落とされていく。

「凄い。あの頼りなかった男の子が嘘みたい」

アルは山の中腹の道を使い半分程を来た所だ。幼い頃より山で育った彼女は特別な体機能が備わっている。元、戦闘部族の父はビースト、母はエーテリオン。本来ならば強い血種であるビーストを受け継ぐはずの彼女は混血種と呼ばれる特異な体質を持ち産まれて来た。ビーストの身体能力とエーテリオンの魔力を合わせもっているのだ。

「そろそろね」

岩場をアーチャーブーツで飛びはねる様に抜ける。脚力は相当な物だ。加えて弓の射的力。力強く弦を引き矢を放って行く。

「ウッ！」

百発百中かつ確実な殺傷力。それが売りの狩人なのだ。周りの各所に矢を撃ち込んでいく。現在のレイはアルの指示があった地点で敵をなぶり続けていた。片手に大剣、反対の手には中剣が握られ敵はそれ以上の侵攻を食い止めたいらしく懸命に対抗するも皆同じ様に斬り殺される。

「ラァァァァァ!!!!!!」

レイが二人の敵兵を撫で斬りにしたその時アルの鋭い声が聞こえた。

「レイ!!! 屈んで!」

雷を帯た矢が地面に突き刺さり矢羽から放電している。

「サンダースパイダーネット!」

その名の通り雷が雲の巣のように走り建物は雷で起きた火花が引火して炎上。鉄の鎧を付けていて気付かなかった敵兵は姿すら無くなる程の電熱で焼き殺された。

「ふう。変わってないなあ。危ない橋を渡るのは」

「あら? いいんじゃない? 一人で銃武装してないのに周りにいた兵士を半分たおしたんだからさ」

「ははは……………。残りの半分を一瞬で焼き殺しておいてよく言うよ。さ、さっさと帰ろう」

「ええ」

その場を颯爽と去って行く二人を遠目から見ている男がいた。その男も背中にある独特な剣を背負いなおしすぐにその場を去って行った。

「ギア。そういえば聞き忘れていたが私が“カイザーエンジェル”でも大丈夫なのか?」

「俺が“キングオウガ”だという時点で大丈夫だ」

中央に向かって足を進める二人は荒野のど真ん中を突っ切っていた。背中に翼のあるファンは“カイザーエンジェル”と呼ばれる種族でその美しい容姿と明晰な頭脳から多くの種族から“賢者”と敬されている。他にも多種の亜種があるがカイザー自体が数少ない人種なため定かではない。例としては“言霊”、“イフリート”、“ウォーティ”などがある。対して、ギアは“キングオウガ”こちらはオウガとオウガが掛け合わされてできた人種。オウガ自体は多数の亜種があり人魚や魔神など想像上の生物に似た形が多い。ちなみにギアは父親がオウガ“鬼型”で母親がオウガ“ドラゴン”だ。

「確かに。角が三本ある人間なんてそういないからな」

「ああ、翼がある人間も相当珍しいがな」

身長はファンの方が少し小さいくらいだ。法衣に身を包み照りつける太陽を恨むように眺めている。対するギアは種族の特長から体がかかなり強い。歴史は過酷なものだが現在の地上では最強の人種だろう。

「懐かしいな。まだお互いの両親が生きていた頃はこうして二人で寄り添って歩いたものだ」

「6歳前後のことだな。確かに懐かしいな、これからはずっとこうなるんだぞ」

「フフッ……………。またお前が突然いなくならなければな」

「あれは恨むなら東の国のヒューマンどもを恨めと言わなかったか？」

ギアの壮絶な過去はまたの機会に説明使用。二人はタージェの待っギルドがある街がみえるエリアに到達していた。この周辺はタージェの努力のかいがあり治安がいい。そこにさらに戦力が加わるのだ。その頃、レイとアルは敵の主要キャンプの襲撃に取りかかって

いた。今回は規模が違うため正規軍の残等を募り夜に夜襲をかける算段だ。作戦は前回とは少し違う。

「レイ。炎の圧力を最大にして大剣から放って！　あの中央にみえるタワーが標的よ」

「わかった」

「皆さんは二手に別れてください。バリアシステムを破壊する少数部隊とレイを守る防衛隊。ではお願いします！」

『了解した！』

流石は正規軍。動きが機敏で統率力が高い。反逆軍はすでに銃器を構えて奪った正規軍本部を固めていたがそれはすぐに奪還されることになった。レイが大剣に貯めた魔力のエネルギーを一気に爆発させ管制塔らしきタワーに爆炎の玉をクリーンヒットさせた。管制塔が麻痺したところをアルが同じく最大に貯めていた矢を放ち基地の中心に差した。ここから正規軍兵の活躍が始まる。あらかじめ分隊として分けていた部隊A、B、C、D、E、F、G、Hが防壁に小さな機械をセットし退避していく。そして十分離れたところで発光弾を空中に打ち上げ8隊すべての光が揃ったところでアルとレイ以外の戦闘員が退避した。

「レイ！　伏せて！！」

二回目の蜘蛛の巣状の光の筋が基地全体を包み狙い通り火薬庫や兵器庫に引火した。もとより了承済みとはいえ凄まじいまでの爆風に驚きを隠せない正規軍一同。だがそのあとに来るのは勝利の喜びと失った仲間などからくる複数の激しい感情に襲われる兵士たち。我に帰り首謀者の謎の少女と“レイ”と呼ばれていた少年の姿はそこにはなく。当事者達はその顔すらわからない二人を勇者として長く祭りあげて心を心に決め一時的な平和な時を過ごしたのだった。

二人はどこに消えたのだろうか……………。

T
O

B
E

C
O
N
T
E
N
T
S
……

狼少女と師弟の出会い

南の大陸でクーデター鎮圧に助力しその後すぐに行方をくらましたレイとアルの二人。以前より平和になったジャングルの中を抜け二人はレイのギルドに向かって歩いて行く。その途中である鮮烈な光景を目にした。それは言うまでもなく戦闘部族間での抗争だった。彼らも敵対している部族があるらしくつぶし合いもままあるらしい。

「なあ、アル。あれって巻き込まれたりしないだろうな？」

「ああ……大丈夫だよ。多分ね………」

近くには切り立った崖があり木は横向きになって生えている。底までたどり着くために必要な距離はだいたい水面までで50メートルくらいある。他にもあまりいい状態ではない要素がいくつかあり危険な場所なのは確かだ。谷川の様になっているこの土地を谷沿いに進んで行けば中央大陸の入口付近に位置するタージェが運営するギルドにたどりつける。

「レイ！ 危ない！」

「うおっ！」

ビーストの筋力は並大抵ではない。10歳の子供のビーストであっても握力の平均が40程度はある。肉体的な観点から普通の人間では起こりえないことが普通に起きてくれるから恐ろしいのだ。特に戦闘部族のビーストは日々の鍛練を重ねたうえに野生環境が作った身体能力でもはや、人知を超えたパワーをもつと同じようだ。そして、その内容とは同じ位の身長の高さを持った少女が吹っ飛んで来たのだ。対岸の壁に激突し谷川に吸い込まれて行く。

「ぬうううん！」

「来んじゃねえよ！」

間一髪で少女をかわしたレイがなおも追って来ていたらしい肉付きのいい大柄なビーストの男に対して大剣を振り下ろした。流星はビーストの戦闘部族といったところだろう。反射神経は相当な物だ。だが、他と唯一違う所は……………。

「来んじゃねえってんだよ！ クソデブ！」

ビーストには魔力がない。一部の亜種を除いてそれは全大陸に共通した点だ。レイの体に宿る魔力は“炎”。彼の力はあらゆる気持の高ぶりや沈下を利用した増強。先のクーデター鎮圧の際には“闘争心”と“怒り”が重なった物だったが今回は“怒り”そのものようだ。本来は密林の掟で滅び去る一族は皆殺しが原則だが。もう、時代の流れはレイの中では違う。“共存”だ。彼の理論では恐らくこうなるのだろう。“確に対立するだけなら許せるがそこに殺戮は加わってはならず生き物が無駄に争うことは許されない”この現象や非人道的な行動が許せないのだ。途端に人が変わったように猛然と狙った相手を攻め続ける。ビーストは魔法に対する術がなくそのために森の奥地に住んでいる。レイもそれは重々知っていた。

「貴様！ 森の掟を破るきか？」

木製の巨大な棍棒に大剣の刃を食い込ませた状態で直立するビーストがレイの目を見た瞬間に身震いし武器を捨て逃げ出した。

「お前……………。まさか」

アルの驚愕を帯た言葉が終わる前にビーストの男は藪に姿を消し

たが怒り狂い姿を豹変させたレイは追おうとする。その姿はまるで悪魔だった。炎はあり得ないはずなのに固体化し背中には気味の悪い翼、耳の上には一周グルリと巻いた角。爪は赤黒くなり異形は更に進化を遂げようとしたがアルが腕を掴みその手が火傷を負おうとも身じろぎせずにただ険しい目付きで制止を促す。蒸気が上がり彼の体から炎が噴きあがり消えと繰り返すこの現象が続く。

「……………」

やがて感情の起伏が平行線のように一直線になったのかそれとも単にエネルギー切れか気を失いレイが倒れアルはその付近の安全そうな所で休むことにしようだ。アルは症状のひどい火傷を負った手を清流で洗いその場で少し座っている。

「う……………うん……………。アル？ その手は……………」

「やっと起きた？ まあ、反応からわかるけど記憶はないようね」

「済まない……………。何があったのか覚えてるのは急にムカムカしてきたとこまでなんだ」

「アタシの予想だけ……………。レイ、アンタは多分“マスターカイザー”だと思う。突飛で悪いと思うけど……………」

「おいおい。寝起きなのは俺だぜ？ そんなバカなことあるわけないって。俺が“純血種”？」

“純血種”それはある一定の基準を満たした一族を表す総称だ。未だに発見は難しいため研究が進んではない。言えることは古の昔より伝えられた血族がそれに当てはまりやすいこと。これまで見つけられた“純血種”はビーストとヒューマンのみでカイザーの“純血種”など前代未聞だということ。だいたいカイザー自体が混血種のためどこがルーツなのかは言うまでもなく解らない。しかし、アルが言いたいことはこちらの別識だ。学識上では“マスターカイ

ザー”に当てはまる部類の記述がもう一つ存在する。ヒューマンの容姿に、正負の魔法つまりは攻撃的な直に使う魔法と付加的に生物に与える対局の特徴を持つ魔法を共に使え、ビーストの様な体機能を持ち、オウガのような変異能力、カイザーの既知と清らかな心情のある特異体が稀に存在すると。

「加えて、覚醒するのは数十代に一人でその殆どが何事もないように一生を終える」

「……………」

「アタシもまだ信じられないけど。条件がここまで揃うと……」

「確に。……………だけど！ することは一つさ。無駄に暴れない。いつかはコイツを制御するってところかな？」

「フフフ……………。そうだね。『時々、レイの前向きさには驚かされるわね。何か偉大なことでもするのかな？』」

夜があけ日の出とともに出発した二人。そのころギアとファンがタージェのもとにたどり着き話をしていた。まずはファンの自己紹介から始まりタージェのギルドにおいての説明などが雑談混じりに続く。

「シド殿！ 只今帰還しました」

「おっと。お前が早かったか。で、その後ろの娘が前から言っていた秘密兵器か？」

「はい。ファン……………自己紹介してくれ」

「はじめまして、スフィア・ファン・アイリスです」

「こちらこそ。俺はシド・タージェ、ここの管理者だ。まずは寛いでくれ、堅苦しいのは嫌いだな」

「ご丁寧にありがとうございます」

ギアから借りていたマントを脱ぐとタージェが目をしばたかせた。

それもそうだ彼女はきちんと畳んでいた翼を軽く開き形を整え髪の毛をただして見るところを見たからだ。

「こりゃたまげた。『カイザーエンジェル』に生きてる間に会えるとは……」

「確に珍しいでしょうね。わかります」

「気に触ったかな？」

「いえ、慣れっことです。それに貴方も相当な力がお有りのはずですよね？」

「それならよかった。では、今からギルドで生活する上での細かい規約を説明するがよっぽどのがないかぎり大丈夫だから気にしないでいいぞ」

ギアが部屋のすみで目を閉じて壁に持たれかかり話をきいている。再びアルとレイの二人に視線を戻そう。アルは右手に火傷を負ってしまい弓を引けないため戦闘は極力避けたい。あったとしても戦闘部族が多く住んでいる森の中は危険なためになおも開けた川沿いを進む。

「そんなに申し訳無さそうな顔しないでよ」

「だけどよお……」

「レイの悪い癖の一つだよ？ 心配すぎる。この目よりは軽傷だしアタシが無理しただけだから」

幸いにして川の水は清流と呼んでいいほどに綺麗だ。タージェに渡されていたウエストポーチには消毒薬変わりの酒、手当用の道具に小さなナイフや裁縫用の小袋、財布が入っている。手のひらの化膿は避けたいため短時間で包帯を変える。やはり魔力は人体に大きな影響を及ぼしている。アルの手のひらは数時間経過しただけだが痕は残るだろうが既に水泡は消え傷も塞がりつつある。

「しかし。魔力ってのは凄いな」

「確に、これは凄いよね。あの火傷がもうこれだし」

およそ半日かけてゆつくりと川沿いを進む。ゴツゴツした岩場を注意深く歩く。滑り落ちれば助かる道は無いだろう。眼下には流れの複雑な急流がありそれは深さがしれない川を龍の様に滑り降りる。他にもアルの話では肉食魚や巨大な爬虫類、最終的には同じ人類に食われるだろう。このあたりにはビーストの魚人種がすんでいる。彼らはどちらかと言うと魚に近い種のようにで共通語が通じない。そのため意思の疎通が出来ないと彼女は言う。

「アル……。手のひら大丈夫か？」

「32回目だよ……」

「そんなに言ったか？」

「うん」

出発して二日目。渓谷もなだらかになり森が開けて川幅が広がりを見せる。ギアとファンの二人には周辺の警護任務につきタージェが言うままにレイの帰還を待っている。ファンは背中の翼に魔法を使い上空を滑空しながら警備をしている。ギアは大鎌をさやに収めて警護をする相手の近くにいます。この周辺は以前にも話した通りタージェの努力の甲斐があり最近治安が安定しつつある。

「オーガさん。有難うございます。今日はこれまでです」

「わかりました。お疲れさまです」

顔面に一本の斬り筋が入っているが顎が細く目がキリリとしているなど綺麗に整った顔の少年は少し微笑みを浮かべ銀行の運搬員に頭を下げ隣に天使のような風貌をもつ少女が着地するのを待ちギル

ドに帰って行く。

「お疲れ。ファン」

「下はどうだったのだ、ギア？ 相変わらず退屈だったか？」

「楽しみでたまらなかったよ」

「ほう……。珍しいこともある物だな」

「弟子になる少年はどんな奴なのか……」

「フフフ……そうだな。私も見てみたいものだ。運命の申し子にな」

森が完全に開け湖のような場所に出た。そこは霧が濃く進むのに注意が必要なエリアになって来ている。その中で驚くべき事実に出会った二人はすぐさま行動を起こしていた。

「レイ。あれってさ……。さっきの女の子？」

「……！！ 本当だ！」

「レイ！ この娘まだ息があるわよ！」

レイにぶつかりそうになって谷川に吸い込まれて行った少女だ。ビクリするのは彼女は槍を離していない。ずぶ濡れでぐったりしていて動く力すらない。アルが背中を叩き水を吐かせてコートを脱いで枕にしレイに指示を出して焚火を焚かせた。槍には部族の文字らしき複雑な文字が彫ってある。その少女が呻き声すら出さないことから危機を感じているが二人とも落ちて行動していた。

「酷い傷だな。アル、一応俺の着替えがあるから着替えさせて置いてくれ」

「わかった」

「さて、葉草探しに行くか」

体中に切傷や打撲傷を受けていて普通なら死んでいてもおかしく無い状態だったがビーストの戦闘部族だということで体が強い、そのため何とか命はもっている。幸い傷は深いものは少ないためすぐに縫わなくてもいいようだ。それでも冷たい急流にもまれて体には相当な負荷がかかっているに違いない。そこは配慮すべきところだろう。

「レイ！ 着替えさせたよ！」

「わかった」

木の影で石を使い草をつぶしていたレイが石を持って近寄る。即席の葉のためあまり効果があるようには見えない、それでも使わないよりはましだ軟膏のような濃い緑色のペーストを引き延ばし包帯の上から塗って行く。黒い薄手のシャツをめくりアルが軟膏を塗っていくなかレイはまわりに警戒の視線を送るがまだ戦闘部族は近隣にきていない様子らしくレイも一安心といわんばかりに腰を下ろした。結局二人は足をとめ休むことにしたらしく荷物を置きレイは鎧や防具をとり小手を重ね枕にして横になった。アルは金属を入れて防具替わりにしていたジャケットを脱いでたたみ近くに浅い水溜まりを見つけ薄手のワンピースを脱ぎ水浴びを始めた。霧が晴れ始め月明かりで姿が鮮明に見え始めたがまわりを全く気にせずに浴び続け最後に長い碧色の髪を束ねて絞り再びワンピースを着て先ほどのジャケットを枕に横になった。

「懐かしいね。レイ……何歳のころだったけ二人で森に入って野宿したの」

「まったく……。いくら幼なじみだからって無警戒はないだろう？ こちのことも考えてくれよ」

「ごめん。久し振りにあったのに覚えててくれたし、名前で呼んでくれたから……すこし調子に乗っちゃった」

「少しじゃないだろ？ とりあえず俺が起きてるから寝ておいてくれよ。そろそろ手も使えるだろ？」

「うん、わかった。お休み」

夜の内に襲われるなどの最悪の事態は避けた。レイは夜通し見張りを続け、翌朝まだ動けないであろうビーストの少女についてアルと話し合っている。このままギルドへの到着を遅らせる訳にはいかないからだ。そのあとアルが食料を収集して戻って来た数時間後にビーストの少女が目覚まし明らかにレイたちを警戒しているという低く耳障りなうなり声を上げた。

「グルルルル……………」

「警戒するのは仕方ないがあまり動くと傷に触るぞ」

目は綺麗な鳶色で髪も同じ系統の色だ。短めに切り上げられ飾り気はないが目も大きく小麦色の肌をしており意外と綺麗に整った顔立ちをしている。そして、その容姿にマッチしたアルトの住んだ声が一言つぶやいた。

「ウチの……」

「お？ どうした？」

「ウチの槍はどこや？」

「ここにあるわ。だけど、アナタはまだ傷が癒えてはいないのよ」

「うるさい！！ ウチは戦わなあかんのや！ みんなの敵を……」

「言いたいことはわかるが……もしも、もしもだ。俺がお前の父親だったら復讐なんてしてほしくない」

「お前何様や！！ 人の家のことに首を突っ込むと命落とすで！

ウチは狼のビーストなんや！ たとえ一人でも……」

「なら、この俺を倒していけ。あの森に行きたければな。だが、俺に負けたら……。俺の言うことを何でも聞くと約束しろ」

鼻を鳴らし立ち上がった少女がアルから彼女の矛槍をひったくりレイに向けて構えた。戦闘の形はできている。レイも鎧は付けていないが三本の剣をフルに使う構えを見せている。

「ふんっ!! 臨むところや! 死んでも知らへんからな! 覚悟しい!」

いきなりの槍の猛襲を軽々と避けるレイは中剣を握り応戦態勢になった。少女は突きでの猛襲が読まれていると解ると槍の石突き付近を片手で持ち彼女の頭上で振り回し始めた。軸足を右左に美しく切り替え持つ手もまるでダンスを踊っている様にリズムよく変える。中剣は近距離戦闘用の武器で中距離には向かない。そこでレイも考えた。

「はっ!」

大剣を抜き地面に突き刺し峰を抑え突っ張り、彼女の槍が激突して衝撃に耐えきれずひるんだ瞬間について少女の槍を握る手の付近を中剣の腹で叩き腕を痺れさせた。だが、流石は戦闘部族と言えよう……スタミナも半端な量ではない。加えて鍛錬のおかげなのか慣れているかのように落とされた槍を手で直接掴まずわざと蹴り上げ高くジャンプして握り直し今度は体をすべて使って雪崩のような技を打ち込んでくる。一発一発が重く回しや突きが絶妙に噛み合う相手にとっては対処が難しい技だ。

「ヤアアア!!」

とどめとどめ言わんばかりに声が響いたが一瞬遅かった。突きの組み合わせの中に喉を狙う技が含まれていたがそれを利用されたの

だ。レイが視界から消え空中には中剣のみが踊った。レイが少女の足に回し蹴りを当て倒し落ちてくる中剣を右手でつかみなおも槍の柄で押し返そうとしてくる少女の槍を左手で掴んだ短剣を押し付け相殺し倒れて仰向けになった彼女の上に乗った形から中剣を鼻先で止めて一言呟いた。

「勝負あり」

殺されるところでも思ったのか目の隅に涙を浮かべた少女の腕の力が抜け槍が河原の丸い小さな石が転がっている地面に落ちた。短剣を腰の鞘に収め同じく中剣、大剣と武器を収め鎧を再び付け直し少女に向き直った。

「行く宛は？」

「ない……」

「食い扶持は？」

「ない……」

「なら、俺たちと一緒に来い」

「ふえ？」

訳が分からんといった顔で少女がレイを見つめる。それまで黙って見ていたアルが転がった矛槍を拾って手を差し伸べ立たせた。小柄なビーストの少女は二人の行動に混乱し話が読めない状態らしい。顔は明らかに混乱していて諸手で頭を抱えている。

「俺の名前はフェンク・レイ・スウォード」

「アタシはボア・アロウ・ルース」

「レイと……アロウ？」

「アルでいいわ」

大きな目が警戒を含んだ鋭い光から安心感と信頼を含んだ優しい光に変わった。次は少女の自己紹介の番だった。少女は槍をアルから受け取り腰につけていた袋を刃先に被せ背中にあるバンドに通した。

「ウチはリーン・ハルバート。これからよろしゅうな」

「ああ、いこうか。これ以上長居は無用だ」

「確かに。他の連中に追いつかれたら厄介やしな」

新たな仲間のリーン・ハルバートが加わり賑やかになった一行は足取りを速め川沿いをさらに進む。その頃、亡国の若い将たちは散り散りになってはいたがそれぞれが確立した道を進んでいた。最初にレイを気遣っていたフィトはどうなったのだろうか。いずれ経過を追っていこう。他にもいろいろな要素が絡んでくる。アルと山中でクーデター鎮圧をしたさいの謎の男などがいい例だ。これからどう絡んでいくのか。川を下り街が見えてきた。以外と大きな街のはずれにその建物はある。古い教会を改装したもので寮、食事付きの割のいいギルドだ。

「見えてきた」

「意外と大きな街だな」

「レイ、アル。ウチはどうしとればいいんや？」

「そのままでもいいのよ……」

これだけの広さの街に来たことのないリーンは気後れと不安があるらしい。その途中に荒野を抜けていくのだがそこでレイが止まり上空を睨んだ。その数秒後に太陽の中心に黒い点が出来、すぐに見分けが付き人が降ってきているのが解る。空から降ってきている時点でただの人ではないが鎌を右手に持ちレイの前方に落ちた。アル

とリーンもそこから飛び退き各々の武器をつかみ砂煙が収まるのを待った。砂煙が収まると見えてきたのは中剣と短剣を鎌の柄に押し付けて力を相殺しているレイと片手で鎌を押し付ける謎の男だった。

「何ものだ！」

「さあて？ 当ててみな」

レイが付加魔法を使用し筋力を増強。同時に左手で大剣を抜き中剣と合わせて振り回して始めた。独特な刃形の大鎌は謎の男の流れるような体捌きとリンクしじわじわとレイを圧し始めた。程なく中剣が弾かれ大剣で必死にガードするも鎌の奇妙な動きについていけず弾かれた。そこに三本の矢が撃ち込まれレイは隙をついて地面に刺さっている大剣と中剣を回収し飛び退く。そこに入れ替わるようにリーンが突きを繰り出し今度は鎌の男が圧されている。レイも短剣と中剣に切り替えて前進しリーンの動きに出来る微妙な隙を埋めるように両手の剣を繰り出す。その間にアルが矢を撃ち込み隙を作ろうと努力しているが一向に進展しない戦闘は10分程続いた。

「ハアハア……、なんてヤツだ！」

「レイ！！ リーンを連れて一度退いて！」

アルのお馴染みサンダースパイダーネットが炸裂し一時的に起きていた砂嵐が重なって粉塵爆発が起きた。普通に食らっても死亡確定な技だが爆発が加わりさらに威力は増した。

「今度はこちらから行くぞ！」

レイに向かって大鎌を振りかざすその男の動きがさっきまでとは格段に違う。まるでバトンを回す様に柄の長さが150センチはあり異様に刃が大きな鎌を回し先ずはレイに向け攻撃を繰り出す。だ

が、その男は一頻り振り回すと鎌を使わず腰に付けていた短剣を抜きレイに突きだしていった、どうやらまだ鎌は不慣れらしく扱いにくいようだ。

「腕は強いが足が空き。あと、右側の反応は早い。左は一瞬遅れてる」

レイの右足に重い蹴りが入り怯んだ瞬間に額に重い空気の玉の様な物がぶつかり10メートル程とんだ。次はリーンが持ち前の身軽さと腕力で抑えようとするが全て短剣の刃先で流される。最後には槍を突き出した時にかわされそのまま首に素撃ちが入り意識はあるが動ける状態ではない。

「君は猪突猛進すぎる。体術や間合いは完璧だからまた教えるよ」

リーンの頭のなかでクエスチョンマークが数個連続して浮かび最後に弓を使い矢を放つアルの方へ歩いて行く男を見ていた。地面に刺さっている例の鎌を抜いた男が近くにあったさを拾い鎌を収めアルに話しかけ何やら手帳らしき物をみせている。アルは鎌を受け取り溜め息をついた。

「君は力みすぎ。あとは経験だけかな？」

レイを立たせているその男からは敵意が全く見えて来ない。どちらかというと親近感すらある。レイに肩をかしリーンを引っ張り上げ岩陰に座らせた。

「さっきは手荒な真似をして悪かったな。君達の實力に興味があった。どうしても確かめておきたかったんだ」

「もしかして貴方がシドさんが言ってた……」

「話を聞いているなら話は早い。俺の名はオーブ・ギア・オーガだ。レイ、今日から君の師をすることになった」

TO BE CONTENT

鋼拳との誓い

レイがギアの弟子になって早、一週間が経過していた。リーンも鍛錬に加わり修行は厳しさをましている。剣の修行以外にも総合的な格闘術や魔法なども教えているギア。彼の本職は魔法科学の研究者で世にもあまり知られていない魔法の力を研究しているのだ。レイはメキメキと力を上げ剣術、武術、ついでに学力もつけた。ギアは謎の多い男で弟子のレイもそこまで深くは知らないほどだ。

「レイ、そこはその公式じゃないぞ」

「あ、はい」

「リーン……。寝るな！」

「ホヘッ!？」

アル、レイ、リーンは年齢が近いこともあり学業はギアやファンのが教えることが出来る。現在はタージェが野暮用で不在のため副官のギアが管理を行う。レイは今のところは一人部屋で任務も二人居ないと困る任務にもついたことがなかったが最近知名度の関係から少しづつ大きな依頼がくるようになっていた。

「レイとリーン。二人に簡単な任務を出す」

「あの、ギアの兄さん？ そんなもったい付けてなんかヤバイ任務なんですか？ どう見てもあんまり乗り気のしない依頼に感じるんやけど」

「いや、ヤバくはないが少し面倒なだけだ。今、武道大会があちこちで開かれてるだろ？ それのうちの一つがこの街で開かれてる、そいつに空きができたから出場して欲しいとスポンサーから依頼を受けた訳だ」

「なんら難しいことではない気がしますが……なあ、リーン」

「負けるなよ？ やっと知名度が上がってきたんだからな。ここにくじける訳にはいかないだ」

中央大陸西地区に位置するこの街は比較的暖かな気候で安定した場所だ。そこは旅人の通り道になっていて宿泊産業が発展し流通が高い都市として今なお発展し続けている。武道大会では広場に座席を並べ観戦料をとって街の利益にし個人の利益としては売店、他にも出店や周りの店もこぞって売上を伸ばそうと試行錯誤を重ねる。レイ達は学業を免除されギアのより力の入った訓練を受け始めた。その教えているギアですら力が入り張り切りすぎの感が強い。

「レイ！ 踏み込みが甘い！ もっと力強く！」

「はい！」

「リーン！ 回しに若干の乱れがある。そこを直せ！」

「わかりました！」

大会までの期間はあと一週間。この三人の他のメンバーはどこに居るのかというと。まずはアル。

「遺跡か……。気味悪いわね……。一人でこんなところに来るんじゃないわかったわ」

西区の奥にある遺跡の調査に向かっていた。近くの村人の中に近付いて行方不明になった者がいるらしく依頼が来たのだ。だが、たまたまレイは他の任務へリーンは調査任務をするにはまだ経験が足りないためにいけずタージェは論外。ファンは南区の魔法学校に臨時講師として雇われていた。

「侵入者を確認……。セキュリティ稼動。目標を撃破せよ」

「えっ！？ ヤバッ！！」

遺跡付近で行方不明者が出る事件の真相はこれだろう現在はアルが搜索中だ。これはアルが帰って来た時に聞くことにしよう。続いてタージェ。彼は野暮用とは言うもののどう考えてもしょうでしかない。

「あいつはギアの話だとこの先に居るはずだ……。西の大陸か」

野暮用とは人探しらしい。かなり思い入れのある人物なのだろうあまり行きたがらない西の大陸に向かう。武器の木製のハンマーは荷物と一緒に担ぎ上げ西の国特有の乾いた風を切りながら大股に歩いて行く。西の国東区から入って行く風が強く栄養のある土があっても乾燥に強い植物しか生えない農業に関しては貧しい国だ。

「お兄さん！ 見てきなよ！ 今日取れた果物だよ！」

「もらおうか……」

「お兄さんを見てると思い出すよ。ワシらはやっぱり若がよいのお若？」

「ああ、アンタはどここの出身かは知らんがこの国はもう終いじゃ。昔の栄えた面影は無いからのお。若が今もご健在ならば我ら国民は独裁を廃しかのお方をお迎えしたいもんじゃ」

「そうか、わかった。そんなに良政をする男なら探しだそう。何年かかって……」

「ハハハ！ 気長に待つことにするよ。話を聞いてくれた礼じゃ。金是要らんからそいつをあと二つ持ってきた」

「ありがとう。大事に頂こう」

スキンヘッドで大柄な体の骨格がしっかりした大男がフードを深く被り直しうつ向いた。片手を目であろう場所に当て同じように歩いていく。手を下ろし前を向いて歩き始めた。

「済まない……皆。いつか必ず舞い戻ろう」

頬を伝う涙が顎に溜まり乾いた地面に落ちた。何も知らない幼女がタージェの鎧の内着を引っ張り無邪気に問いかけてくる。

「おじさんどうしたの？」

「何でもない。それからおじさんじゃなくてお兄さんだ」

そして、レイはけして完璧とはいかないがギアから教わった技を習得してきていた。リーンもそれなりに完成度を上げギアと一騎打ちになっても三分は体勢を保てるようになってきた。二人ともまだ未完成ではあるが目に見えてギアに圧倒されたあの日からは確実に強くなっている。

「レイ、リーン。今回の試合は力試しだと思え。最初に俺はお前等にプレッシャーをかけた。『負けるな』とな。今なら解るだろう？

俺が本当に言いたいことが」

「ウチはわかったで」

「解りました」

「よし、レイは取りあえず残れ。リーンにはペロペロキャンディーがあるから食堂の机の上を探して見つけろ。ただし！ 食べすぎるなよ！」

「ハァイ」

レイが不思議そうな顔をしてギアを見ている。ギアは左目の上の切り傷を撫でながらレイの肩に手を置いて外に出るように手を振り廃教会を改装した建物の裏手にある小川の縁に座った。レイも促されるままに座りギアに尋ねた。

「あの、師匠？」

「お前の能力についてはアルから聞いた。“マスターカイザー”歴史上存在しない血族か……」

「はい、正直不安です」

「ハハハ、お前は素直でいいな。俺とは違うよ。お前には伝えておく。今は一言だがそのうち、理解することに増やしていくつもりだ。先ずはその能力は恐れるな」

「恐れない……ですか？」

「恐れはそれ自体が危険な代物だ特にお前は感情によって動かせるタイプだろう？ だったらなおのことだ。それと今回は能力を使うなよ」

「はい、解りました」

「よし！ お前も何か食って来い！」

背中を叩かれレイも建物の正面に向かって走って行く。そんな姿を見ながらギアは微笑んでいる。あと数日で大会当日だ。ギアは出場していないためギルドにおいて執務をこなすらしい。そこにファンが現れ翼を折りたたみ横に座った。

「珍しいな。悔しいがお前はレイが気に入ったようだな」

「悔しいって何だよ。確かにレイには期待を持っているさ。素直で心配性でやるときは怒涛の如くってな」

「私と旅をしていた時のお前とそっくりじゃないか」

「どうかな？ で、そっちはどうなんだよ」

ファンが首を横にふりため息をつく。手の甲に描かれている紋章の線を撫でながら悲しそうにつぶやいている。彼女もギアに心を許しているのか彼には 何でも打ち明けているようだ。

「私の卒業した魔法学校だが悲しいな。見所のある生徒は一人だ。だが、その子も少々シャイで根暗なところがある。明るければいい術者になれるのだが」

「人のこと言えないだろ？ 俺と魔法学校に居た時にすぐに黙るからかなり苦労したんだぞ？」

「し、知らん！ そんなことは知らんぞ！！」

食堂の上の階にはリーンとアルの部屋がありリーンがレイを連れて窓から下で話をしている二人を観察していた。二人の痴話げんかは面白いらしい。リーンはそういうことに関してはかなり興味を持っている。大きな目を瞬かせて口いっぱい頬張ったぺろペンディーを一度出して例に問いかけた。

「ねえ、レイ」

「ん？」

「あの二人はどういう関係なんやろうか？」

「俺が知るわけ無いだろ？」

「弟子なのに？」

「お前……弟子なら何でも知ってる訳じゃないんだぞ」

その時には既に各地から集まった武道家たちが最終調整に入っており数はザッと100人以上。総当たり戦でぶつかるらしく相手は予想しにくい。しかし、レイは剣をリーンは槍を使っているのだからアはそこまで心配をしていなかった。

「……そろそろか、俺も出ればいいのだが」

その頃、ファンの友人のゼシがこちらに向かっていた。深紅のローブを纏い裾には体と同じ薔薇の模様が入った派手な物だ。背中には生活要具や工具などが入って大きく膨れたリュックがあり小柄

な彼女が更に小さく見える。

「フアンの話だと……。あの先か」

西の乾燥した風を受けて彼女はひたと歩く。その頃、武道大会当日。彼らより一回り大きなターゲット程の大男ややり手の弓士らしい女性。武道大会だが魔法使いまでいる。少しニュアンスがずれるが一応戦うための術を習得していれば大体の戦士、魔術師、騎士、弓師、などの人間が出場できるようだ。

「種族ってこんなにも多かったんやな」

「ああ、亜主まで入れるともっと増えるぞ」

「アシュ？」

「ゴメン。難しかった？」

「まあ、普通じゃない種類やっちゅうことは解ったで」

「そうか。なら問題ないか」

控えの広場は混沌しており出場する選手でごった返していた。レイが一回戦で当たるのは明らかにヒョロヒョロしていて弱そうな剣士。リーンはビーストのギガントと呼ばれる巨大な種族の中でもさらに大柄な戦士。あと数分で競技が開始される。観戦者も続々と増えて来ていた。そんななか今しがた一回戦第一試合が始まったようだ。

「始まったか……」

「じゃあ、ウチは行くな……」

「気をつけて来いよ」

「お、おおう」

リーンが何かを言おうと再び振り返った時にレイが笑顔で手を拳

げながら言葉をついだ。リーンは顔を赤らめながら短めの髪の毛を引っ張ったりねじったりして遊び最後に頭を人差し指でかきながらぎこちない返事をして広場へ向かって行った。明らかに挙動がおかしいが鈍いレイは気づかない様子……。

「兄ちゃんも罪だねえ」

「あ、あの何がでしょうか……」

「解らねえ内はお子様だな」

隣でストレッチをしながら二人のやり取りの一部始終を見ていた男に話しかけられたようだ。それを真に受けて考え込んでいるレイは放っておこう。リーンは第一選抜二試合目に出場する。相手は大柄な戦士で先程見た時には持っていなかったアックスを持っている。

『さあやって参りました！ 注目の二試合目！ 赤コーナーは前回のチャンピオンの巨人ダイオード！』

司会者兼解説者が抑揚の強いよく通る声で広場の赤い塗装のされたり入り口から入ってきた男をゆびさした。観客席からも同様に歓声が沸く。大きく魔法の炎を使って名前が中に現れた。

『続いて青コーナー！ 最近噂のギルドに所属する看板娘姉妹の妹リーン・ハルバート！ 初出場』

女性の観客から多くの声援を受け比較的小柄で華奢に見えるリーンが青い門をくぐって入って来るとすぐに男が話しかけてきた。こちらも魔法で青の炎がリーンの名を中に飾った。ただリーン本人は恥ずかしそうに右の頬を人差し指でぽりぽり掻いている。

「嬢ちゃん！ 怪我する前に棄権したらどうだ？」

「その言葉、そのままお返しするわ。ウチはアンタなんかには負けはせえへんで！」

「口だけは達者だな。だが大人を怒らせると危ないことだけは注意しときなよ。嬢ちゃん！」

「ふん、ゴチャゴチャと煩いなあ。すぐに結果はわかるさかい安心しておっちゃん！」

戦闘開始のゴングが鳴り響き各々が相手に向かって前進する。リーチは明らかに敵の男の方が大きい。彼の振るアックスは空を切るばかりで進展が見られない。苛々しはじめている男は技の精度を欠いてきている。リーチはギアに教わった側歩と呼ばれる反復横とびの改造版のような歩き方で見事に回避している。大きな一撃は隙が大きく彼女にとってはお茶の子さいさいなのだ。

「どうした！ 避けてばかりでは何も進まんぞ！」

リーチはだいたい言葉等で熱くなるタイプである。だが今回は冷静だった。これもギアにアドバイスされていたのだ。矛槍を見事に使いアックスの軌道をずらしてそのアックスが地面と接触した瞬間に柄に恐るべきバランス感覚で駆け上がり矛槍を下げ拳を突き出した。

「でりやあああああああ！！！！！」

突き出した拳が一回りも二回りも大きな敵の頬を妙な音を立てながら打つ。大男は観客席付近までふきとばされのびてしまった。空中で美しく二回転し立ち上がると仁王立ちで矛槍を地面に突き立て審判を見てにこりと頬笑みかける。

「しょ……勝者。リーチ・ハルバート！」

歓声がおこりリーンはレイに向けてVサインを送っている。レイは笑いながら拍手をし入れ替わりに自分の試合に入った。リーンは手傷どころかスタミナはまだまだ残っているらしくおどけているしまった。

『さあ、本日二人目の最年少です。先程、強力なパンチをかましてダイオード選手を打ち負かしたリーン・ハルバートの友人で凄腕の剣士！ フェンク・レイ・スウォードだ！』

三本の種類の違う剣を装備し闘技場に立つレイの相手はヒョロヒョロの剣士だ。だが持っている剣は特殊な物でウィップソードと呼ばれる伸び縮みする剣。本人も顎が細く舌が長い。まるで蛇のような剣士だ。

「シャシャシャ……」

「……」

ゴングが鳴り響き蛇のような剣士が飛び上がってレイに向けてウィップソードを繰り出す。だが、彼には一発も当たらない。それどころか敵は疲れるばかりのようだった。伸び縮みする剣は速度があり威力とリーチは高いが扱うには相応の筋力と持久力が必要になる。使えても持久戦に持ち込まれれば敗戦は必至にの条件になってくる。もし体力があってもあの武器は扱いが難しく大概の剣士はこれを扱えない。

「シャア！」

「やあ！」

レイが避けのステップから大剣を掴み伸びてピンと張ったウィッ

プソードを断ち切った。剣士は唸り声を出したと思ったとたんに懷から小刀を取り出してレイに向けて投げ大剣でガードしたレイに向けて半分になったウィップソードをうちおろした。

「終わりだ！」

「どうかな！」

中剣を反対の手で抜き。逆手で刃を返し軌道を変え中剣を投げ上げ短剣を抜き相手の手首に柄を打ち付け剣を落とさせた。空を切っていた中剣を短剣を鞘に納めてすぐに掴み大剣を肩にかけて相手に手を差しのべた。

「いい勝負をありがとう。剣士として多くを学ばせてもらった貴方の名前を知りたい」

「ふん……。ガキが。オレはスネークだ」

「スネーク。ありがとう」

「これからお前がどう転がるか楽しみだ。お前はスウオードといったな。剣を極めるなら『オーブ・ギア・オーガ』を訪ねな。ヤツならお前をもっと強くするだろう」

「我が師に伝えよう。スネーク彼も喜ぶだろう」

剣士との勝負を終え今日の試合を終えた。リーンはレイとともに自由時間をもたらったことに對して気持ちが高揚している。いつもの薄着で飾りの少ない民族衣装を身につけレイを急かし広場へでる。楽しい時間はすぐに過ぎて夜を迎えた。ギルドに帰り各々の部屋に入って今日、一日の疲れを無くすように深い眠りに沈んで行った。

「二回戦か。昨日よりも強そうな奴等がそろってるな」

「うう、ウチ緊張してきた」

「大丈夫だって」

今日はレイの試合が先だった難なく倒しリーンの試合が終わるまで控えて待っている。すると驚くべき名前が司会者の紹介で聞こえた。

『さあ、二日目も大詰めだあ！ 今日のおおとりは最年少対最年少の闘いとなってるぞお！ 先ずは赤コーナー！ 流浪の賞金稼ぎフイト・ソニック！』

長髪を束ね出身の和の国の民族衣装を着た精悍な顔立ちの少年が手にナックルと呼ばれる金属のグローブを付けて現れた。彼、フイトはレイの親友で元軍人。レイがタージェに拾われてから行方が解らなくなってしまった友人の一人だ。

『対する青コーナーは美しさと強さを兼ね備えた美少女戦士！ リーン・ハルバート！』

リーンが恥ずかしそうに顔を赤くしながら門をくぐり抜けフイトと向き合った。リーンは目の前の彼に興味を持ったように目を凝らしてよく見ている。するとフイトがリーンに尋ねて来た。

「君はこの街に詳しいかい？」

「微妙やな。ウチも最近レイに連れられてココまで来たさかいあんまし知らへんのや。ごめんなあ……それより」

「……！？ 今、君はレイって言わなかったかい？」

「ああ、ウチの彼氏や……っちゅうのは願望で。」

「もしかしてフェンク・レイ・スウォードじゃないか？」

「そや、どないして」

その直後にゴングがなり両者とも武器を構えた。切り替えの早い

二人は戦闘体制をとり間合いをとる。リーンもフィットもバトルスタイルは同じようなものだ身軽で速力のある重い攻撃が売りなのだ。体格はどう見てもフィットの方が上だが。

「行くよ！」

「臨むところや！」

レイはリーン側の控えに入っていてその特徴的な容姿を見つめている。懐かしい仲間に再開出来たからだ。長い髪が揺れリーンの突きや流し技を返す様などは美しいと言えよう。彼も生き延びていたことに感動を覚えているレイは勝敗のことを完全に忘れていた。

「やあ！」

「はっ！」

試合は長引き息を飲むような闘いになっている。決着は激闘の末について惜しくもリーンの判定負けだ。そして、互いの健闘ぶりを確かめ合うように握手をする。そんな清々しい姿を目にした観客達からも健闘を称える拍手が響く。

『勝者！ フィット・ソニック！』

審判の判定の後の司会者の締め言葉を聞いている途中に気が抜けたのかリーンがよろめいた。レイが抱え起こし一度外に出ることになりその横でフィットもレイに話しかけている。

「大丈夫かい？ リーンちゃん」

「大丈夫や。リーンでええよ」

「わかった。それからレイ……久しぶりだな。そして、無事で何よりだ」

「ああ、お前こそ無事でよかった」

リーンとフィット、レイは一度ギルドに向かって歩いた。その間はレイが前線地からどうやって生き残り今に至るかを話したようだ。そして、フィットも軍が取った選択を話自分達が取った経路を語っている。タージェの予想通り友を付けずに秘密裏に逃げようとした現王は討ち首になったらしい。フィットやそのほかの残党はいく組にも分かれ祖国に帰るなり他の国に寄属するなど別々に別れて行ったとフィットはいう。

「俺は前線地で敗戦し大臣の命令で国を出ようとしたんだが敵の増援に阻まれちゃったんだ。今はその時に助けてくれた人のギルドに所属してる」

「ギルド？」

「ああ、リーンもその人からの任務でボア・アロウ・ルースを探しに行った時に助けたのさ」

「ボア・アロウ・ルースだと？ ああ、碧独の美女か？」

「たぶんそれだな。行ってたのは南の大陸だった」

「なら俺の経路と被る点があるぞ。もっともクーデターの影響で少し着港が遅れたがな」

それからは入れ違いになっているらしい。レイが陸路を進んでいる時にフィットは海路を進んでいたようだ。そしてギルドにつく頃にはフィットが背負っていたリーンが寝息を立てていた。

「レイ、お帰り。リーンのことは残念だった……ってそちらは？」

「師匠。リーンが少し緊張からか貧血を起こしまして俺の親友のフィットに手伝ってもらっていたんです」

「そうか。ならいいぞ。ところで君は軍にいたようだね。行く宛は？」

「今は特にないです」

「なら家に……俺たちのギルドに入らないか？」

ギアのいきなりの勧誘に驚くもフィトはそのまま入隊を志願した。フィト自身の身の上もこれでひと安心だ。リーンは彼女の部屋に運び込まれ近くのお婆さんなどに着替えを頼みフィトとギア、レイは話している。

「へえ、確かにきれいな作りだな」

「だろ？ オレも来た時は正直驚いた」

「だが、ボア・アロウ・ルースは？」

「任務に行ってるはずだが？」

その時、パジャマのリーンが起きてきて会話に口を挟んだ。

「なあ、レイ。思うんやけども。ながすぎやないか？ アル姉さんならもうそろそろ帰って来てもええ頃やと思うんよ」

三人が食堂で食事しているとギアがその話を持ち込んで来た。頭の上に丸く悪魔のような翼とギアにある三本の角のようなトケが生えている物体がある。ギアが新しい任務について説明してる間も三人はずっとそれを見ていた。

「聞いてるか？ ……こいつも連れてけ。明日、大会が終了時にアルが帰還していなければフィトとレイが出る」

「あのギアの兄さん。ウチは？」

「他の任務についてもらう。ファンについてもらうつもりだが……」

「うう、ううう。ウチも一緒じゃダメなん？」

「別にいいぞ。別にファン一人でもできない仕事ではないしな」

「ありがとう！」

次の日の決勝はレイとフィトがぶつかり激戦の末にレイに軍配があがった。二人とも息を切らせ疲労感が見えたが爽やかな顔立ちで握手をし表彰と記念品の贈呈を受けてギルドに帰って行った。だが、嬉しくないことも同時に起きている。アルはその日の内に帰還することはなかった。ギアの指示を受けて三人が各々荷物を持ち次の日の出発に備えその日は眠りに着いた。

TO BE CONTENT

遺跡の少女

レイが隊長になり中央大陸のさらに中央よりのエリアである“聖霊森林区”に向かっていく。遺跡が点々とし中にはエーテリオンの村が点在するだけの寂しい場所だ。そのうちの一つの村が何でも依頼を引き受けるという噂のタージェが運営するギルドへ悲痛な叫びを訴えてきたのだ。彼らの依頼もかなりオカルトじみっていて怪談のような感が強かったが……成程、ここはさらにその話の信憑性を上げてくれる。なぜなら……。

「リーン。そんなにくっつかないでくれ」

「あう……。ごめんなさい」

「しかし、深い森だな。迷いそうだ。レイ、大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。アルの戦闘の跡を追えば問題ない」

聖霊森林区は昔は庭園だったエリアだ。その森には聖獣が住み、猛な魔獣と凌ぎを削っている。危険な生物が多いためアルが通ったらしい道を進んでいる。

矢が刺さり電極に飛電したらしい焦げ跡が残る道には無数の死んでいる生き物が見えた。幻獣、龍、大型の昆虫や動物、他にもこの世のものとは思えない生物がうようよいいる。

「流石は碧独の美女……ってどこか」

森と言ってもかなり鬱蒼とし暗く靄がかかった密林であちらこちらに湿地がある。いつかは定かではないがこの奥の城を本拠としていた魔法科学の王国が何らかの形でこのエリアを守っていた物の名残だ。舗装されていた道、湿地の水を水源にした堀に明らかに人工物のクリスタルに兵器の残骸。下手なお化け屋敷よりも怖いだろう。

そして、機械のような音声で鼻歌を歌い続けるギアが作り出した小型のゴーレムがレイの肩の上で羽をぱたつかせている。

「フーン、フフフーン。フフフウ」

「なあ、マーク01。よくこんな空気の重い所で鼻歌歌えるよな？」

「一応、魔界の生物な物ですいません」

「そうやったな。マーちゃんはゴーレムやったな」

「はい。荷物の格納運搬はお任せ下さい」

「お前、ここに何が居るか見当はつくか？」

レイの問いかけに対しマーク01は唸りながら答えた。何やら良くない事らしい。そんなことはとうに解っていたがかなり暗く彼がつぶやいてくる。

「レイ様……。申し上げにくいことながらこの生物はすべてこの第三階層の住民では無いんですよ」

「第三階層？」

「ご存知在りませんか？ ならば私の不徳がいたしまつ……。申し訳在りません。ご説明いたします。この世界つまり第三階層はその名の通り三階層に在ります。そして、交わってはいけない世界との扉がこの奥に在るのです」

「じゃあ、お前はどうかやってこっちに来たんだ？」

「私は魂と体が分離した言わば“死人”魔界でも同じなのです。それを貴方の師匠のギア様に錬成魔法を元に構築して頂き復活した次第にございます。そして、先ほどの続きでございますが“四界の秩序”という掟があるのです」

「四界？ あのお伽噺によう出てくる天界、宙界、地界、魔界のこ
とやろ？」

「リーン様。お察しが早い。それが実在しておりその世界との繋がりを持つ三つの扉が奥の城に……」

「それまづくないか？」

「はい。昔の人類はあまりにも横暴でした。我々を捉えては実験の道具にしていたのです。ですが、私は皆様が大好きなのです。純心でまっすぐ、優しさもあり私のような異物ですら受け入れてくれたのですから」

マーク01の角に注意しながらフィットが彼の頭なのか動体かは解らない場所をなでた。丸いソフトボール代の大きさのボディは光沢を帯びていていかにも機械という質感を持っていた。

「俺はまだ力は弱いがお前や強いギアさんやギルド長さんがいるから大丈夫だ。それに俺たちも強くなる」

今、レイ、リーン、フィットの三人はこの世界の戦乱を起こす理由の根源にぶつかっていたのだ。この聖域は確かに何かある。マーク01の話からしてまず危険なのは確かだ。湖らしきエリアまでたどり着きその美しさに一同は感嘆の声を上げた。湖面には白い雲の様に霧が流れどこからか空気の流れが感じられる。だがフィットが一同に注意を促した。そのすぐ後にレイも気がつき水面を睨みつけ始めた。

「皆……。変だぞ」

「この綺麗な湖のどこが変なんや？」

「確かに……生き物の気配が強すぎる」

レイが目凝らし湖面を見ている。その時、マーク01が声を上げた。頭を出した生物はこの世のものとは思えないものだった。

「魔界の生物が接近しています！」

湖面から姿を表したのは多様な姿の水生生物らしい。蛙の化物、八又の大蛇、魚人に他には説明が難しく気持ち悪いジェルのような生き物？ が数個体。彼らの脚元や湖の湖面に加え巨大な岩の上にひしめく。

「リーン！」

「ひいひい！ 近寄るなあ！ 気持ち悪い！」

蛙の化物が大きな弧を描いて撥ね飛ばされ“ボチャンツ”と大きな石を投げ込んだような音と共に姿を消した。幸いアルが走って回避したらしい足跡が苔の上に沢山残っておりそちらに走りながら陣形を作り応戦を開始した。

「フィット！」

「おう！」

「殿を頼む！」

「了解した」

「リーン！」

「何い！ 用が在るなら早くしてえな！」

「俺が突き開きをするから真ん中に入ってマーク01を護れ」

「うん！ わかった……。また来たあ！ 気持ち悪い！」

両生類が苦手らしいリーンは集中を乱され戦力にならない。フィットはモンスター狩りはしたことが無いためこちらも切り崩しには向かない。本来ならば俊敏な動きと風の魔法で霧を晴らしてくれるフィットが前進してくれた方が楽なのだがそうも言っていられない。リーンは右手に矛槍を持ち左手でソフトボールの三号玉ほどの大きさのマーク01を胸に押し付け泣きながらレイの真後ろを猛進する。

「レイ！ 気をつけろ！ デカイのが来るぞ！」

「わかった！」

大剣を抜き細い森と湖の境の苔むした道を走る。どうやらアルの矢が見当たらないのはこの水性生物のせいらしい。数多い敵のうちの数匹だが矢が刺さっている生き物がいる。そして、奥まで進むとサンダースパイダーネットを使ったらしい八角形の跡と彼女が木伝いに駆けていった跡が残っている。その中心には焦げた巨大な魚が横たわっている。その近くの水辺から更に巨大な魚が現れ口を開きレイに向けて突進してきた。

「イイヤアアアアアアア!!!!!!」
レイ！ 何とかしてえなあ！」

「解ってる！ 炎斬！ “三日月炎舞”！」

口を開けて突っ込んで来た巨大な魚はレイの炎の斬劇で一刀両断され焦げた香ばしい臭いを漂わせた。後ろではフィットが音速のラッシュを打ち込み八又の大蛇を打ち倒し付加魔法で速度を上げて追いついて来た。アルの足跡を追って走る。すると途中から湖から離れ蛙の化物が数ひき追ってきたが絶叫しながら矛槍をバットのようには振るった彼女に打飛ばされた。それから追いついてくるしつこい生物の対応に追われたが何とかそれも振り切り森の中に再び動いた。

「ふう、アルのやつ。よくこんな所を抜けたな」

「確かに、碧独の美女の本名は何と言うんだ？」

「ボア・アロウ・ルースだ。因みに俺の幼馴染み」

話ながら歩いていると先頭を歩いていたレイが止まり後ろの二人が玉突き事故を起こした。レイの鎧にコツンと音を立てマーク01がぶつかりその後ろのフィットもリーンにぶつかって最後尾だったため後ろに倒れた。ついでに立ちあがった瞬間に後ろにさがって来て

いたリーンの槍矛に鼻をぶつけた。

「あてっ！」

「ウオッ！」

構わずマーク01がレイが凝視している物を調べ始めた。それは透明だが不思議な光沢を持ち光の反射などに関係なく七色の筋が動く結界だった。ただ、その結界は触れようとするとは何らかの防衛措置としてだろうか紫色の電流が流れ焼き殺されてしまうようだ。じつ周りの草むらには獣の死体や骨が多く散らばっている。

「結界？　ですか」

「多分な。師匠の彼女がよくはっていたものと似ているが少し違う」

「こんな密度の高い結界は魔界でもそんなに見れません。何者かが意図的に張っています」

「解ってる。解く方法は？」

「強力な魔力で中和するしかないでしょう」

「わかった」

レイが両手の鎧から肩の鎧までを取りはらい意識を集中させ始める。魔力が腕に集中し遂に両目の瞳が赤く輝いた。結界に触れると電流のような物がレイの腕にまとわりつくが気にせず発達させた爪で巨大な結界の一部を魔力で中和どころか侵食し赤くなっている爪と同じ色に変えて行った。そのままに巨大なエネルギーが波のように結界全体に広がり大きな結界が一度赤く輝くと粉々に砕けた。

「……マジかよ」

「レイ、凄い……」

その頃、ギルドの執務室で帳簿の整理をしていたギアが巨大な魔

力を感じ取り気づいていた。遂に能力の一つをレイが制御しはじめたことに。彼の手にも共鳴の印が浮き出ており巨大な魔力を持つもの同士が感じ取れる信号を受け取っていたのだ。

「覚醒が早い……。そろそろ“アレ”を教えないとな。アイツの体もかなり不安定なはずだ」

結界が砕け散りレイが腕を戻して鎧を着け直した。フィットやリーンは“アレは何なんだよ？ 教えろ”と言いたげな顔をしている。レイは落ち着いたまま二人に一言告げ先を急ぐように告げて剣を背負い直す。

「レイ……アレは？」

「俺にも話したことないよな？」

「すまない。俺も最近知った力でよくわかってないんだ。帰ってから話す」

「わかった」

「……レイ」

結界の内部にはまた森が広がっていたが今度の森は生き物の気配がしない。アルの足跡が少し薄れてきている。この当たりで少し速度があがったらしい。理由はすぐにわかった。

「レイ！ 走れ！」

「うおっ！」

今度は昆虫だ。蜂、芋虫、ムカデ、蜘蛛に大きな蟻など形態はさまざまだ。走り走り何とか引き離しているといきなりレイが屈むように指示し三人はスライディングする格好でそこを通り抜けたが蜂は蜘蛛の巣へそして、地面で脚を進める昆虫などはとても巨大なね

とねとする液体を分泌していた草の上を通ろうとしておいしく食べられたようだ。レイがスライディングさせなければ三人も同じ運命だったろう。今回ばかりはこの食虫植物にも感謝したい。

「ふう、なんとかだな」

「ああ、見てみる遺跡だ」

「なんかお化け屋敷みたいでイヤやわあ。ウチ……」

「一人で残るか？」

「ついて行きます……」

広いエントランスがあり四方八方に伸びる大小の階段がある。こはアルの足跡が見当たらない。代わりに一人の物ではない血痕がある。量からして100人前後だろう。その中に滴るように落ちている血痕がある。まだ新しいようだ。三人はそちらの方向に武器を構えて歩き出した。その頃、流浪し人を探していたタージェが遂に西の国の中心部にたどり着き情報を頼りにその人の家の前にたっていた。

「留守か……」

隣に住んでいるらしい老夫婦がタージェに声をかけた。優しそうな老夫婦は荷台に工房で作った武器や装飾品を乗せて市場に仕出しに行くらしい。

「ああ、一足遅かったねえ。ゼシちゃんなら先日ここを出てったよ」
「何ですって！？ 行き先等は聞いていませんか？」

「中央大陸に友人がいるからそこを尋ねるとは言っていたよ」

「ありがとうございます」

「おお、ちょっと待ちなさい。忘れる所じゃったわい。これを大柄な男が来たら渡してくれと言われとった」

「重ね重ねありがとうございます」

老夫婦は丁寧なタージェに会釈をしそのまま仕出しに行ったらしい。渡されたのは手紙だった。しかもかなりの年月がたっているらしく黄ばんでいてインクが黒から変色し紫のような色になっていた。

『覚えてますか？ 私と貴方の時間があの時で止まっていることを……』

短い文章を読みズボンのポケットにいれ来た道を引き返し始めたタージェ。再びレイ達一行の動向に目を向ける。城に入ったリーンとレイ、フィット、マーク01はトラブルに巻き込まれていた。機械の兵士に追い回されていたのだ。四足歩行のこの時代の物とは思えないデザインや機動性と素材。何より動き方だ。

「嘘だろお！ レイ！ 何とか出来るか？」

「無理だ！ アレは俺の鎧と同じ魔法反射装甲だ。固いし魔法は効かないし……」

その時、リーンが一番後ろにつき、矛槍を握りしめ敵の四足歩行のロボットの首を断ち切った。両生類やオカルト、お化けなどが苦手な彼女でもここでは力をふるってくれた。両腕に力を込め次々に押し寄せてくる機械兵をなぎ倒す。

「ウチなら行けるで！ お化けはでえへんようやしな！」

「済まない！ 後ろは頼んだ！」

機械兵は一定のルートを守っているらしい。真新しい血痕はレイ達が逃げる道沿いにある。……というよりは行き止まりに追い込まれそうになっているのをよけて何とかここまでくるとち血痕と同じ

道をたどっていたのだ。どうやらアルと同じ道を通っているらしい。血の量が徐々に増えていることから傷は広がっているようだ。急がなければならない。

「クソが！ なんちゅう速さだよ」

「血痕が右に向かつてます」

「わかった。行くぞ！」

「早うしい！ 敵の数がどんどん増えてるんや！」

たどり着いたのは遺跡の中心部らしい巨大な広場だ。そこには巨大な機械のような模様が書かれた壁がありよく見るとその下に碧色の髪の毛少女が踞っていた。明らかにアルだ。だが綺麗な碧色の髪には右側の頭部を損傷したらしく血がべったりついている。

「アル！ 大丈夫か」

「大丈夫に……見える？ この状……況でさ」

「君が碧独の美女か……噂通りだな。だが、その目は？」

「アンタは……確か亡国の将。フィト……ソニックね？」

ぐったりしている彼女に応急手当を施し、レイ達は巨大な壁に目を移していた。それは美しくもあるが不気味な光沢を帯びている。強力な魔力が使われて封印されているらしくレイ以外の人間が近くと先ほどの紫色の電流が放たれ拒絶してくる。

「……っ。つこれは？ 何だろうな？」

「多分、封印器ですね。これだけ大きな物になると力が余程強かったでしょう」

「ねえ……、レイ。その丸くてギアさんに似てるやつは何？」

「申し遅れました。私はゴーレムのマーク01です。以後宜しくお願い致します」

「ご丁寧に。アタシはボア・アロウ・ルースよ。こちらこそよろしく」

するとリーンが入ってきた入口の近くで石盤を見つけたらしく取り外して持ってきた。明らかに壊してきたようだが……。

「ねえ！ これ何かのヒントじゃない？」

「どっから外して来た………リーン？」

「あそこ」

指差す入口を見ると機械兵がウヨウヨしていたが何故かこの部屋には入って来ない。四つある入り口は全てこうなっており何ともならないようだ。出たいが出られない。思案しても仕方ないが何かをしなくては出れもしない。

「レイ……これ、古代文字だ……」

「『我、眠る。』

勇ましき力と優しき心、高き既知の者を待ちて。

我が体は眠る。

魂は………。

我を救いし者には苦難の後大いなる幸せが訪れるであろう。

我が心を虜にしたくば我を見つけよ。

それ即ち勇者なり』

訳わかんねえな」

「俺の方が訳解らんは！ 何でお前が読めてんだよ！」

「解らん」

「……。まあ、確かにお前には昔から不思議な要素は結構あったが……まさか、古代文字が読めるとはな」

レイが壁を触りだした。周りのメンバーは驚きを隠せない様子だ。

だんだんと形状を理解し始め各部を触り始めた。すると壁から反応があり右手を右側の丸い場所に当てると左側が光り、左側の文字が書いてある所に左手を当てると右側の光が消える。逆の手順でやっても光の点灯の仕方が変わるのみで何も進展は見られない。

「まさか……。はぁ……」

意識を集中させ先に左側の文様を抑え次に右側に力を込めて手のひらを抑え付けた。先ほど結界を崩した時とは違い両目とも金色に光り、壁に描かれていた模様が広がって壁全体が光り出した。そして大きな文様がはがれるように天井を抜けて空に浮いていき砕け散った。

「レイ！ 何したんだよ！」

「さっきの結界と同じ容量で力を込めただけさ」

『た……す……けて……。こ………こ……から……だし……て』

「声？」

「は？ いったい何なんだよ！」

「ちよつとレイ！ ウチには何が何だか解りゃあ……！ レイ？

レイ！」

レイが壁に向けて歩き出すと壁に吸い込まれて行った。周りの仲間やマーク01が唖然として止まり。ただ、ただ壁を見つめるばかりだった。大きな壁は白いただの壁にしか見えない形になっている。

『何処だ？』

レイの声が響き中から声が聞こえて来た。自分の声だ。そこは真っ白な空間で大きな空間なのかはたまた小さいのかすらよくわからない。異質な雰囲気であるということは確かだ。

『お前の力を示してみろ』

『黙れ……。俺はお前と剣を交えるために来た訳じゃないんだ』

『ほう、ならば俺は貴様を切る。言っておくがお前と俺は一つ、切り抜けるためなら何にでも立ち向かう力を見せて見ろ』

大剣を振るう敵の攻撃が鼻先を掠め血が一筋流れ出した。どうやら虚像などではない。レイは偽りの自分の奥に扉が在るのを見つけた。だからと言って剣を交える気は彼にはないようだ。

『はぁ！』

『……』

右手の指で器用に刃先を掴み押し付けられても退かれても離さない。彼の剣技は彼が一番よく知っている。弱みも強みも……。

『お前は俺と一つと言ったな？』

『その通り』

『仮に一つだったとしても俺とお前は違う』

『何故だ？』

『礎としての心技体、全てが違う今、お前と戦う気にはなれない』

『フッフ、やはり無駄でしたか。合格です。私の体を貴方に預けます』

姿が変わり同年代の少女に変わった。リーンとは違うが短めの髪だ。そして、綺麗な顔に華奢に体型。レイに話しかけた少女が周りをヒョコヒョコ歩き回り“フーン”だの“へー”などと小さく言いながら再び目の前に立ち大きな金色の瞳を輝かせニコリと笑うとレイに再び告げた。

『名前はフエンク・レイ・スワード君ね？ 今から言うことをよく覚えて。私はマナ。訳あってここに閉じ込められてるの。だからあなたに私の体だけ預けます。その体から今の私の記憶は消去しこの遺跡の力を封印します。あなたは私の名前を覚えていてくれればいいの』

『待ってくれよ。話の流れが掴めないんだが……』

『そうね、今は知る必要はないわ。あなたはこの私を助けるだけでいいの。新しい人生が待ってる新しい私をね』

『答えになってないんだが……君は誰だ？』

『そう……今はそれでいいの。名前を知ってるだけでね。記憶がない状態で助けられたかわいそうな女の子だね。時間も無いわそれじゃ、さようなら』

『待ってくれよ！ おい！』

レイが気がつくとき、フィトの上に倒れ込んでいた。さらにその上には夢のような出来事で話していた女の子が同じく倒れ込んでいた。リーンが一步下がってよけたせいでフィトが潰されたらしい。アルも目を見開いてレイとその上に十字を作るようにうつ伏せに倒れている女の子をみている。

「う、うううん……？ ここは？」

「まずはどいてくれ……」

「あ！ ごめんなさい！」

「よっと……フィト？ 大丈夫か？」

「何とかな」

「ああ……で、お前あの子は誰だよ。あの子は」

「すみません。私の名前は……えっと……」

「マナ？」

「そう！ マナです。出身は……あれ？ 思い出せない……」

「それで何でお前がマナちゃんの名前を知ってるんだ？」

「石碑さ書いてあるんだよ」

次の瞬間に入り口にたまっていたロボットが動きを止め建物全体が揺れ始めた。アルをフィットが背負いリーンがマーク01を持ちレイがマナを背負って走る。外に出るとすぐに建物が崩壊が極限に達し崩れ落ちた。

「何だったんだよ」

「わからない。とりあえずギルドに帰ろう」

「そうだね」

次の瞬間にレイが持っている中剣とそっくりな剣が崩れてボロボロになった建物の残骸から現れた。マナが走っていき柄に手をかけたが抜けずにレイが近付いていき引き抜いた。

「ありがとうございます。レイさん」

「あれ？ 俺、名前言ったっけ？」

その頃、ギルドでは魔法学校から帰って来たファンと晩酌をしていたギアが話していた。

「久しぶりだな。二人きりで話すのは」

「そんなに話したいなら俺も魔法学校に行ってやろうか？」

「いや、止めておけ。オウガはただでさえかこのある一族だからな」

「確かにそうだな」

「変だぞ？ ギア。元気がないな」

レイ達一向は大回りにギルドに向かった。非戦闘員と怪我人を抱えてはあの数の敵には立ち向かえない。謎の少女のマナを仲間に加えてさらに賑やかになった一向はギルドに向かってひたすら歩いてい

く。まずは一直線に抜け南の街に出た。そこからは森伝いに西へ歩く。レイのマントを借りたマナは華奢で体も明らかに弱そうに見える。しかも記憶が全くないのだ。

「ハアハア……」

「休むかい？」

「いえ、もう少し」

「無理はせえへんほうがええで……マナ」

「そうよ……。アタシとリーンは森育ちだからいいけど」

「せや、マナはどう見ても華奢すぎるで。本当ならレイに背負ってもううた方がええとおもうよ？ 脚も細いし色白やし……ホンマ羨ましいわぁ」

「そうですか？」

「リーン、今はそこじゃないだろ？ 俺は別に構わないからさ。脚辛いんだろ？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

華奢で筋肉が薄い彼女は軽い。少し歩いて居ると上空から聞き覚えのある声が聞こえた。ファンである。彼女は魔法さえ使えば自由に空を滑空できる力がありとても便利だ。

「やっと見つけた！ 何してたんだ？ こんなに時間がかかるとは………って何だ……。その仕草は」

全員がファンに向かって“静かにして！”とジェスチャーしレイの背中を指差した。ファンはなっとくしたように自分も降り立ち一緒に話し始めた。森のこと。遺跡のこと。マナとレイのこと。その他諸々全てをマナを起こさないように話しているのだ。森を抜けるなら半日程でいいが周りを歩くととなると話しは別らしい。遠回りになっっているため先にファンが出来るだけ荷物を持ってギルドへ帰り

ギアに詳細を伝えギルドの前に立ってまつことにしたようだ。

「お帰り……みんな」

「師匠……遅くなりましたが只今帰還しました」

その時、後ろから女性の声がしギアとファンに声をかけた。大きなリュックが陰になり最初は皆不気味に思ったようだがよく確認すれば人である。

「出世したようだなギア。それと久しぶりだなファン」

「ゼシさん」

「……お久しぶりです」

他のメンバーは緋色のローブを着た女性に目をしばたかせ混乱している。その頃タージェもこちらに向かっていた。

TO BE CONTENT NEW

棘の辿り着く道に

新しい仲間のマナが加わり賑やかになったギルド。そして、また一人新たな仲間が加わりうとしていた。クロス・ゼシ、ファンの友人でギアとも面識がある女性だ。体躯は小柄で華奢に見えるが元西の国の王族親衛隊に所属していた時期があり戦闘力も申し分ない。そんな彼女は既にギルドの住民からの評価も高めである。そして、森林地区でレイが起こした現象と能力をコントロールさせるためギアは着々と準備を始めていた。

「レイ。明日はファンの授業は休んで俺と特訓だ。本当は早すぎるが教えるべき時が来たんだ」

「わかりました」

「あと、マナは責任持ってお前が面倒みるよ」

「はい」

フィットやリーン、病み上がりだがアルと訓練をする傍ら勉強をする彼らは多忙な毎日を過ごしている。加えてレイはギアとの壮絶な修行がまっているのだ。彼らの能力は相当危険であり簡単に解放してよいものではない。それは重々承知しているが戦闘で使えなくては意味がない。

「マナ？ 着替えてたりしないよな？ 入るぞ」

「あ……」

「……………」

レイの心の中では何で返事をしないのか？……と呟いただろう。その後細々と小さな声で「いいよ……」と返事がありすぐにレイが入って鎧を脱いだ。こういうハプニングがたまにあるからこのギルドは面白い。未だ素性のはっきりしないマナは今レイと同質で生活しているのだ。

「ごめんね……。何か返事が出来なくて」

「今度から自分の部屋で着がえような？　せつかく個々に個室があるんだし……」

「うん……」

少しぬけているマナだが今は料理婦として働いている。文字が読めないのが玉に瑕だがかなり上手で今ギルドに所属するメンバーからの評判は高い。レシピを読み上げれば何でも作れるのが強みだろう。そして腕も申し分ない。

「あの、レイ君は何で私の名前を？」

「成り行きかな？　君に記憶が無いから説明してもしようがないんだよな」

「そうかなあ……私はそこがとても大切な気がするんだけど」

次の日からレイの壮絶かつ危険極まりない地獄の特訓が幕をあけた。それ以外にも大きな動乱が幕を開けようとしているのをまだ誰も知らなかったのだった。各地でクーデターや飢饉、宗派争いや強盗などの横行と言ったことが頻繁に起こっている。

「レイ。お前にもう一つ言葉を渡しておく。この力は無闇に使うな」「はい」

「使う時は、守りたい者と自分を守るために使え。今から見せる力

はこれから起こり続けるだろう戦乱において自らを守るために使うもの。そして、仲間を守るんだ」

ギアがレイがしているのとは違う方式で体を変化させていく。彼の体の変化は生物的な変化でアルがレイの変化は炎などのどちらかという現象に近い。それにギアは心情や気分で攻撃様式の変化を為さないがレイはそれが起こるためなおのこと訓練が必要だ。

「お前は恐らくは自然主義の能力だ。俺は鬼寄主義能力、体を変化させ敵を殲滅する“鬼”の力だ。だがお前はそうではない。感情の起伏で形態の変化するものだ。そこを考えて動けよ」

ギアが促す様に力を凝縮し再び赤い悪魔を作り上げた。そして、攻撃を始めるが片腕と角しか力を使用していないギアに一度も技を当てられない。時間は過ぎ昼を回る。いつまでたっても食堂に来ない二人を心配したらしいマナが弁当を作って二人が修行をしている荒野まで持って行こうとした。

「何で当たらないんだ……」

「暴走してもいい今ならな。本気で来い！」

マナが荒野の半径二百メートル辺りに到達した時に爆発が起き砂柱がたった。その次に撥ね飛ばされて来たのがレイだ。意識がとんだ状態の彼は何をするか解らない。

「レイ……君？」

「ううううあああああああ！……！！！」

マナに向け彼の爪が伸びた瞬間に光の壁が作られマナを守った。ファンが後を追ってきたようだった。彼女の顔に険しい怒りの念が

強く表れている。それは明らかにギアにむいている。

「ギアの仕業か……」

「何だ！ こおのお！！！！！！！！！！」

「すまない！ ファン！ 助かった！」

ギアがレイを地面に叩きつけ意識を飛ばし能力を停止させた。腰がぬけたらしいマナがヘタツと座り込みファンが事情を話している。ギアも申し訳なさそうに謝罪の言葉を入れているがマナよりも問題はファンの方だ。

「ギア……。なんの真似だ？ 今更お前も使いたく無いだろうその力を……」

「それに関しては確かにそうだ。だが事情も変わって来たんだ。以前のように私情にとらわれていられないくらいの状況だ」

「何がだ！ 第二のお前を作り出す気か！」

「こいつは“マスターカイザー” なんかじゃない。もっとも恐れるべき事態だ」

「あの、済みません。私はどうすれば……」

「マナか……。さっきは済まなかった。責任は俺にある。……………弁当？、ありがとう。一緒に食べるか？」

「はい！」

ファンも加わりとりあえずレイを起こして昼食にした。レイの力は不安定で危険な力のようだ。だが、マナは終始笑顔を絶やさずにファンやギアの話に耳を傾け、レイの過去などで出てくる笑い話を聞いては笑った。先程のことが嘘の様に。

「先程の続きだがお前は何故あの少年に、レイにそんなに恐怖を抱く？」

「もしだ。レイが同じ過ちを犯せば何が起こるかは俺には見当もつかない。今の内に制御させなければ俺が居たとしても、例えお前と組んでも勝てないだろう」

「何だと？」

「今の爆発は九割九歩九厘がレイの力だ。俺はお前の結界魔法を真似して威力を拡散させたに過ぎない」

「確かに、恐ろしいな……」

「俺が恐れるのはもう一つ。仮に奴が人類の敵になればこの世は地獄と化すだろうな。それを避けたいんだ。あの子がマナがいるうちは大丈夫だ。愛の神の名を持つ女の子か何か仕組まれてなければいいが……」

「……………」

「どうした？」

「悪かったな。こんな武骨な女で」

「誰もお前が武骨なんて言っていないだろう？」

「……………」

タージェは嫌な情報を聞きつけギルドに動いていた。どこの告げ口屋かは知らないが現在の西の国の王がタージェの存在を知り討伐に大軍を送ったらしいのだ。それから一週間後にギルドに着いたタージェがギルドに居るメンバーに告げ中央大陸西区を守る戦線を張ると宣言した。その頃にはレイもある程度の力を使えるようになりギアが一安心した所だったようだ。

「皆、済まない。俺にデカイ足がついちまって敵軍を呼んじまった。このエリアを守るために皆に力を貸して欲しい」

「水臭いですよ。ギルド長」

「シドさん。俺はアンタに着いていくぜ」

「ウチも！」

「シドさん。アタシも行きます」

「私も行こう。なあ、ファン！」

「ええ、協力は惜しみません」

「助けられて数ヶ月。俺も協力します」

「私もお料理なら……」

一同が思い思いの言葉を述べ直ぐに陣張りにかかった。敵は総勢30000の大軍。それに対抗するために個人戦は避けたい所だ。そこでこういう陣になる。

「先陣をレイとギア、その防御にファンが入ってくれ」

「了解」

「わかりました」

「御意」

「次に避難や防備を促す隊だが隊長をアルに頼む。腹心にフィートでリーンを動かせ」

「はっ！」

「了解や！」

「合点！」

「最後にマナはゼシと俺の近くにいろ」

「はい」

ゼシがニヤリッと笑いタージュエの目を見た。彼女は小柄だがスレンダーな体をしており実は隠密向きだ。そして、遂に戦闘が始まり二人が動き出した。軽装な鎧だがギアはかなり気合が入っている。

「レイ、よく見ておけよ。戦争の中で重要なのは何を守るかだ。今から俺がすることは長い歴史上でたった一つだけ、闇に葬られた事実を再現することだ。奴ら人間の型に入った悪魔は何を言っても聞きはしなかったんだ。それに自らが怒りのままに動く自らの命を喰うぞ……。気をつけろこの世は食うか食われるかだ……」

「師匠！ 何をするきですか！」

「離れろ！ お前にやって欲しくないことを気は進まないがするんだ……」

街の近くの防壁に腰かけていた天使のような少女が涙を流しながら魔法の杖を振った。大きく振った後にはギアだけが結界に入り他には誰も入らない。

「可哀想なギア……。柵はきえないのか」

巨大な光のドームが作られ敵の軍隊をすっぱり覆った。ギアが体を変化させ龍の翼を持った人の姿に変わりそのギアの右手から放たれた黒い光線で一直線に薙ぎ払われた敵の軍隊は混乱の最中にある。上層部の偉い騎士も見えるが最早手遅れだ。

「アレが師匠の本当の力」

「レイ、君には知る義務がある。奴がああなった訳をな」

「訳？ ですか？」

「そうだ。奴は六歳で親と別れた、それも兄の策略によってな。ギアの兄が近くの軍に自分の村を売り代わりに見返りを求めた。その頃は奴らオウガは迫害の対象だった。ホムンクルスと呼ばれ殺戮されたんだよ。だから兄は素性を隠し家族を売ったんだ。高価な見返りを夢見てな……。だが、甘かったんだ。ギアが暴走し軍は壊滅した。そしてその兄は瀕死の怪我を受けその後の消息は知らない。ギアは暴走するままに東の国の都市を破壊した。だから奴はヒューマンや他の奴等から憎まれているし奴自信も憎くて仕方がないはずなのさ」

涙を浮かべて話すファンを見ていたレイがファンに話しかけた。

「優しいんですね。だから師匠は貴方のことばかり話すのか」

「え……………。それは……………」

「心配してましたよ。体が弱いのに無理をするって。あの、俺達は何も出来ないのでしょうか？」

「今は見ている。アイツが伝えたいことを見極めろ……………」

その頃、市街地上空で北の国の空を飛ぶ鉄の塊、つまり戦闘機が確認されアルが応戦準備にかかった。いつもは使わない長弓を取り出したアル……………。フィトは周りから金属の細いパイプを集めリーンと位置合わせをしている。タージェとゼシがそれらの総合的な指揮をとり数少ない味方は機敏に動く。

「シド……………。今更だけど、何で貴方は私を連れて行ってくれなかったの？」

「……………。お前を危険な目に合わせたくなかったんだ」

「なら、なんで貴方は私を迎えに西まで行ったのよ」

「時が来たのさ。俺がお前を迎え入れる準備が出来たから……………」とでも言おうか」

「ふーん……………。でも、ビックリしたわよ。あんなに沢山、子供が居るんだから」

「あくまでも部下だ……………」

北の国の戦闘機が爆撃を始めたが弾は地上には落ちずに空中で炸裂して消える。理由は二つだ。一つはアルの弓矢。金属の塊には刺すことは出来るが貫くことは出来ない。そこで父親の形見である“雷神の弓”を使い誘電率を上げた矢を放ち数機に差し上空でサンダーパイダーネットを使うのだ。

「冷徹な奴ら……………。思い知らせてやるわ！」

二つ目はリーンが金属のパイプを爆弾に向けて投げているからだ。強力な力に加え暇なフィットが風の付加魔法を加え位置補正をし百発百中の勢いで狙っているからだ。二つの軍を相手にしていたがまったく相手にならなかったようだった。西の国の軍隊は皆殺しにあい。北の国の戦闘機は退却して行った。

「シド……。終わったわよ」

「解ってる」

「貴方も変わらないわよねえ」

「お前は変わったよ」

「どういう風に？」

「色気付いた」

「何それ？ 口説いてるの？」

「悪いか？」

その頃に西の荒野ではレイが、市街地ではアルがくしゃみをしていた。

「風邪かなあ」

「多分誰かが貴方と同じ子と言ったのよ」

「違ういな。おそらくはシドさんがゼシさんに“色気付いた”とかいったんだらうな」

「クシュンッ！」

市街地……。

「嫌だなあ。風邪かな？」

「多分違うと思うぞ。アルさん。多分ゼシさんにシドさんが“色気付いた”とか言ったんでしょ？ 因みにアルさんにはレイ辺りですか？」

再び荒野。

「クシュンッ！」

近くの街の中には被害が出た場所があったらしい。そこにもギルドからメンバーを派遣し救済や炊き出しなどを行った。その間のタージェはギアにやらせていたとは言えギアでは決定出来ないことの書類整理やギルドの増築を考えていた。執務は意外と楽そうである。楽ではないようだ。ゼシがメガネをかけてタージェの隣に座って書類に目を通してゐる。くすんだ赤色の瞳に鮮やかな緋色の髪が印象的な彼女はタージェと何らかの接点がある過去にあるらしい。

「うううう……」

「シド。これも変わってないわね。執務は嫌いなようね」

「お前、口うるささも変わってないな」

「それでも言わないと話を聞かないでしょ？」

クスクス笑いながらメガネを外したゼシの耳には機械のような物が見えた。彼女は北の国の出身のエーテリオンだ。タージェと知り合う前にも過酷な過去があるように感じられる。

「こうしてると懐かしいわね。13歳の私とアナタが大臣が居たとはいえ二人で書類整理したもの」

「ああ、その後はだいたい大酒飲みなお前に殺されかけたがな」

「何よその言いぐさは。アナタが弱過ぎるのが逝けないんでしょう？」

思い出話をしていると炊き出しから帰って来ていたマナとレイが扉を叩き返事と共に入って来た。盆の上には暖かそうなスープが乗

っている。再びゼシが笑いマナを見た。

タージェが何でもないと付け加えて二人を部屋から出した。

「また、思い出した。みんな私たちの過去を知らないのよね？」

「知らないはずだが？」

ギアとファンが二人で西の国に向かっていた。タージェの命令で罪のない国民を退避させるのだ。幸い西区は居住区に空きがあり住民を保護するにはうってつけた。レイとマナは炊き出しでへとへとになり部屋でぐったりしていた。マナはそれでもベッドの上で座り込み起きていた。レイは昼間のファンの話を思い出していた。師であるギアが言っていた三つのキーワードがつながったようだ。

「レイ君」

「レイでいいよ。何？」

「何でそんなに悲しそうな顔してるの？」

「人が人を何で殺めるのかを考えてた……。ギア師匠は言ってた、力は恐れ、奢り、慣れ過ぎると己を滅ぼすと。人も同じなのかなってさ」

「難しいことでよくわかんないけど……レイ君はレイ君だよ。気にすることないんじゃない？」

「いや、マナは見たはずだ。俺の異形の姿をな。気にするなっていうのはちよっと無理があるよ」

「……」

「見たんだな？ 気にしないからいいよ。師匠が言っていた意味がこれでつながった。俺は……彼が進んだ道に行ってはいけならしい」

「何だかわかんないけど。私はお料理を作って待ってるね！」

「ありがとう……マナ」

その言葉のあとマナが顔を赤くして一度下を向いた。数十秒間考

えたのかハツとしたように顔を上げレイを見て先程より大きな声でレイに話かけようとしたが少し遅かった。

「あのね！ レイ……君？ 私……」

「……スウ………スウ」

彼はすでに寝息を立てて寝てしまっているらしい。マナが肩を落として再び顔を下に向けた。ベッドから立ち上がり光を反射して輝く髪を触り少し考えたあとレイの顔をつねったが反応はなくそのまま顔を近づけた。彼女は顔を前より一層赤くしベッドに潜り込んだ。

「『キス……。しちゃった……』」

晩酌モードに入ったタージェとゼシの二人はさらに懐古にふけている。タージェが城を抜け出る時の話やその前に起きた出来事など話題は様々だ。

「懐かしいと言えばレイだったか？ あとギアはお前にそっくりじゃないか」

「血の繋がりは無くても師弟だからな」

「アナタ覚えてる？ 私と喧嘩して殺し合いかけてアナタの叔父様に大目玉をくらったのよね？」

「ああ、お前が別に付き合っていた訳でもないのに浮気だの何だの言うからだぞ？ あの爺が本気にしてホントに話が持ち上がったんだからな」

「フフフ。そんな感じだったわね。でも、本気にしてたのは叔父様だけじゃなかったのに……」

「暗殺を企てた偽臣に追い立てられるように俺は城から逃げた。それからは苦勞したが今は失った仲間を救えるだけの力を付けた」

「そこも変わってないわね。だけど、私はもう待たないわよ？ フ

アンに押されたわ……」

「言葉遣いを変えていたのはそのせいかな？」

「何で知ってるのよ」

「ギアから聞いている」

「忠義が厚いわね。彼は何者なの？」

「人が幸せに暮らせる世界を創りたいと願う懇願者だ。既にアイツは動き出したから革命家とでも言おうか……。自分の愛する人を守りたいからだだよ。18のガキが言う言葉かな？」

「面白い子ね。相手はファン？」

「ああ、だが……俺たちよりも過酷な過去を持ってる。二人ともな」
「解るわよ。見てればね」

少しの間沈黙が走り互いに大振りなカップに注がれた泡立つ琥珀色に近い色の液体を口に含む。先にタージェが口を開いた。

「お前、何で棘なんだよ」

「これ？ 予防線。私にはトゲが有るのよってこと」

「ふーん。そろそろそのトゲは要らないだろう？」

「どういうこと？ 今更口説くなら、それなりの覚悟が要るわよ？」

「正直に言ってやる。本当はガキの頃からお前しか見ていないつもりだった。だから危険な目には遇わせたくなかったし俺が守ってやれる保証なんて何処にもなかったから連れて行かなかったんだ。……だが、今は違う。俺にはそれがしてやれるだけの力もついた」
「……………しょうがないわね。許してあげるわよ。その代わり幸せにしてよ？」
「約束しよう」

過去のいさかいも晴れた二人は更に勢いをまし朝まで飲み明かしたらしい。レイは昨晚にギアが任務に出たらしいことを既にタージェから聞いており少しゆっくり起床した。マナはいつもゆっくり起

きる。まだ幼さが残る顔立ちに似合わぬ顎の細さと大きな目がまじまじと覗き込んでいたレイの目の前で変化した。息づかいで気付いたのか起きてしまったのだ。

「うろううん？ フェッ！ レイ君……………」

「あ、ごめん。起こしちゃった？ あまりにも気持ち良さそうに寝てたから……………」

「ヴァアアアアアア！ 今何時！」

「9時位かな？」

「また、やっちゃったよ……………」

「体調が完全に戻ってないんだから無茶はしないほうがいいと思うよ」

「でも……………」

「下に行ってみな」

そこには白衣を着たゼシの姿があった。厨房からはなんとも言えない臭いがする。マナがゼシに近よりしきりに頭を下げている。

「ありがとうございます！」

「きにしないでいいのよ？ アナタはまだ本調子じゃないみたいだし…………。レイ君に甘えて来なさい。三日に一日のペースでいいから始めましょう」

「はい！」

マナが背筋を伸ばし再び頭を下げた。そして、パジャマ姿のままスカートをあげずに走り出し案の定突っかかりレイに突っ込んだ。まだ鎧をつけていないレイはもろにみぞへ頭突きを食らい仰向けに倒れた。

「キャアアア！」

「ぐお……」

「レイ君！ 大丈夫？」

「マナ……気をつけような……ガクッ」

「レイ君？ レイ君！ ……………」

「アハハハハハ！」

ゼシの高らかな笑いが起きマナはわけがわからんという顔でレイの頭を支えている。このように不安定な情勢だが日々の中でも愉快なことがあるのだ。そこにタージェが顔を出し通りかかったフィトとアルなどが加わり笑いの輪が広がる。だが、ここにいる面々はこの五つの大陸を巻き込む動乱が始まろうとしていることを知らなかった。中央大陸の今まで小競り合いでしかなかった戦闘が他の四大陸を巻き込んだ巨大な戦争へと発展していくのだ。

TO BE CONTINUE

泥棒猫の戯れなりて……

レイがギルドに加わり早半年が経過した。西の国の志願して逃げてきた住民の中でもさらに意欲がある者や以前に行われた武道大会に参加したままさすらわず街に留まった者たちも数名ギルドに席を置き今日に至る。そして、大きくなり活動範囲を海外の大都市にまで拡張した彼らに少し面倒な類いの依頼がきた。

「アル、レイ、リーンは東の国に行き怪盗を捕まえて来てほしい」

「あ、それって一週間前からある依頼ですよ？　なんか凍結した感じがする依頼でしたけど」

「こういう依頼は難しいんだ。相手の機嫌を取りながら捜査や確保をしなくてはいけないからな」　「でも、何で俺たちに？　ギア師匠の方が適任ですし人手も少なくてすむんじゃない？　あ、……すみません」

「そういうことだ。悪いが今回ばかりは頼んだぞ。レイ」

「わかりました。では、明日の明朝出発します」

「ああ、ヤツにもいい骨休めになるだろうな」

「そうですね」

その日の午後から準備を始めま森を迂回して中央大陸東区を抜けていく予定になっている。フィットやレイがリーダーになり任務にくることが多くなる一方多忙になった彼らにタージェも配慮はしているが特にレイはギアの修行も平行して行っているためさらに辛い日々のはずだ。

「レイ君……。また任務？」

「ああ、東の大陸に行く。その内帰って来るから心配しないで」

「うん……」

レイにそう言われても少し俯き心配そうに返事をするマナをよそに出立の準備をするレイ。彼の右の指には赤い宝石がついた指輪がある。マナにも透明な光りをそのまま通す透き通った宝石がついた指輪がある。ギアがゼシに習って最近作った物をレイに二つあげレイはマナにその内の一つをあげたらしい。

「無理はしちゃダメだよ？ 絶対だよ！」

「わかってるよ」

マナは最近ファンと共に魔法学校へ行くことが増えた。体調が安定しているときはなお外に出て体力や抵抗力をつけた方がいいとファンがタージェに話して連れて行くことが増えたのだ。

「あの、ファンさん……」

「ファンでいいぞ。どうした？」

「いつもすみません。私なんかいると迷惑でしょう？」

「気にするな。私も好きでお前を連れまわしているのだ。お前もずっと外界を知った方がいいぞ？」

「それは本当に外に出てみてわかりました。ありがとうございます」

「だろう？ 人と触れ合うことは素晴らしいことだ。お前からは強力な魔力を感じる。その内授業に参加するといい」

「わぁ！ ありがとうございます！」

マナは朝早くにギルドを出て行くレイたち三人を見送っていた。そのあとは朝食の準備に取りかかりファンと合流し中央区にある魔法学校へ向かっているのだ。

『レイ君。気をつけてね』

『おう！ 行ってきます』

ブラッドレッドのローブを纏いフードをかぶって歩いているレイの後ろを翡翠色のマントローブを着ているアルが歩く。さらにその斜め前に黄色のローブを着たリーンが足取り軽く舗装された道を進む。

「何で今回も重武装なのかしら」

「それだけ危ないヤツなんじゃないのか？」

「ウチにはわからへんが備えあれば憂いなしや」

「リーンにしてはいいこと言ったわね」

「いやあ、それほどでも」

「リーン……。褒められてないぞ？」

「ええ！ アル姉さん！」

「ごめんごめん！ からかっただけよ」

その時、いきなり前方から金属がぶつかり合う音と怒声や悲鳴が入り混じった戦闘を意味する声が聞こえる。

「リーン……無駄に争いを起こすな……」

一瞬遅かった。すでに槍を背中バンドから外し陸上競技の槍投げのようにレイの背後で助走をつけて投げる。数百メートル前にいる荷馬車らしき物が服装や武装が疎らであり柄のよくなさそうな男達に襲われているようだ。リーンが全速力でそこに走って行きレイとアルが武器を構え続く。アルの弓の弦が引かれ三本の矢が同時にレイ達に背を向けている男達の背中に浅く刺さった。ひとりは肩胛骨の上側あとの二人はわき腹のあたりに刺さった矢を抜こうと身じろぎするがリーンがいつの間にか現れフック、ストレート、アッパーの順に敵に当て残りの怯んでいる敵はレイが大剣を肩にかけて脅し文句を言うだけで退散して行った。投げた槍が近くに刺さっ

ておりリーンがすぐに引き抜いた。

「去れ！ これ以上は被害を出したくないだろう！」

「ありがとうございます！」

「いえ、我々も見過ごす気はなかったの」

「あのお三方、これからどちらへ？」

「東の国の首都へ」

「それはちょうどいい！ 申し遅れましたが私どもは阿蘇の臣下のもです。お礼と言ってはなんですが荷馬車に乗って行って頂けないでしょうか？」

「こりゃ助かったわあ。遠慮なく乗らさしてもらいますわあ」

「では、よろしくお願いします」

阿蘇、それは依頼主の名だ。名家らしいが兵士たちの甲冑などは皆粗末で手入れが薄い。そして荷物はこの地域の主食である米らしい。俵と呼ばれる藁で作った袋に詰められている粒々な食べ物だ。

「皆様。そろそろ阿蘇の館に着きます」

「わかりました。我々の依頼主は阿蘇殿なので取り次ぎをお願い出来ますか？」

「御意。阿蘇も喜びましょう」

坂を登りきると下に都らしき区画された街が現れそちらに向かっている。ただ、その都は廃れ外郭部などは酷く傷んでいた。崩れかけた門を通り神官や貴族が住んでいると説明を受けた区画に丈夫そうな門をくぐって入る。そのまま一番端の粗末な館に入って行った。

「阿蘇様……。先日ご依頼を通されたギルドの方々がおみえです」

「そうか！ すぐに行く」

中から現れたのは農着姿の痩せた男性だった。だが、彼はレイたちに頭を深々と下げて自己紹介を始めた。

「ご来訪感謝します。皆さんのことをどれだけ待ち望んだか。私が阿蘇の意守です。そして、奥座敷に我が妻の織。私の従者をしてくれている者達で右から太助、喜三、六弥、弥平です」

「丁寧なお出迎えありがとうございます。我々は中央、西のギルドより参上しました。俺からフェンク・レイ・スウォード。こちらがボア・アロウ・ルース。最後にリーン・ハルバートです」

「はじめまして」

「よろしゅうたのんますう！」

奥の部屋に通されことの概要を説明された。捕まえて欲しい盗賊の名前と人相。他に表だった特徴を教えてもらい夜を待ち行動を起こすことにした。

「レイ殿、本当に私どもは行かなくてよろしいのですか？」

「ええ、少人数の方がいいです。何よりも阿蘇殿と奥方を守っていただきたいんです」

「なんと……なんと慈悲深い」

「いえいえ、この街は阿蘇殿のような人が治めるべきだった。この荒れ方では最早再建は不可能でしょう」

「やはりそう思いますか？ 事実、現在の帝の暴政には言葉も出ません。今はこの敷地で畑を耕して我ら六人何とか繋いでおりますが……」

「困ったらいつでも呼んでください。いつでもうちの仲間が伺います」

「どうもありがとう。畑はこれくらいにしましょう。お客様に手伝っていただくなんて本当は許されないことですからね」

「でも、いい体験をさせていただきました」

「それは何より」

鍬を握り鎧をとって外にいるレイは先ほど紹介のあった太助と敷地内にある菜園の手入れをしていたらしい。阿蘇に頼みやらせてもらったらしく彼はニコやかに笑いながら二人を見ている。

「レイ、ホントにその作戦で行くの？」

「ああ、今の情報ではこれしかできない」

夜が訪れ三人は都の中央のメインストリートにいる。そこに挑戦をしてくるようにレイほどの身長の方が現れ少し低めなソプラノが響き三人に声をかけた。

「アンタたちが雇われギルドの庸平ね？」

「庸平という言い方は少し違うな。ローズマスク」

「私を捕まえに来たの？」

「当たり前だ。こそ泥の逮捕が任務だからな」

「こそ泥とは失礼ね。だけど、私を捕まえられるなら逮捕してもいいわよ」

飛び退いた女を追おうとするリーンを抑えレイが二人に呟いた。

「リーンは後ろから追尾して見失うな。アルはその側面に張ってヤツが動くのを待ってから矢を屋根に射込んで屋根の上に登ったところに最低の威力でサンダースパイダーネットを使って麻痺させろ」

「わかった……。ウチが追いついてる訳やな？」

「ああ、行け！」

リーンは狼族のビーストだ。持久力、速度、パワーを兼ね備えた最高のビーストと言っている。ただ、性格の関係で彼女は素直すぎ

る。

「ふんっ！ 子犬が追いかけてきた！」

「にゃにおお！」

「フフン！」

軽やかに屋根の上を駆け抜ける二人の隣の屋根の上にはアルが弓を構えて走っている。

「くそ！ アイツ等人のこと考えてねえな！」

狭く高い倉庫が多い川沿いのエリアに入り作戦を実行した。アルが気取られないように矢を射込み準備をし終わるとリーンがわざと大振りに矛を振り回し矢の距離が均等になるように構えた。

「今だ！」

「了解！ サンダースパイダーネット！」

また見事に引っかかり地面に落ちて空を仰ぎ見ながら何か口を開いて喋ろうとしているが高い電圧をかけられたためか声にならない。

「おとなしくお縄につけ」

「フフフ！ フハハハハ！」

レイの目に砂を当てようと起き上がり様に投げつけたが籠手で防いだレイの手が伸び女のマスクを剥ぎ取った。

「キャッ！ しまった！」

「危ねえ！」

既に彼らは予想していたが顔を見るとどう見ても同い年くらいにしか見えない。捨て台詞を吐きながら夜闇に消えた。

「今日はお開きよ！ また遊びましょう！」

「レイ！ 大丈夫？」

「大丈夫だよ。アル。今夜の収穫は二つだ。俺がヤツの顔を見たのとヤツの職業がわかった」

「やったやん！！ 明日の夜にはお縄やな」

剣を担ぎ直した彼に続き白み始めた空のなか阿蘇の館に帰る一同を路地の門に隠れてみている少女がいた。

「にゅううう……。なんかアイツ等格好良かった。どうしよう、もう顔見らちゃったし」

その頃のギルド本部ではファンとマナが魔法学校で魔法を練習している。マナはファンがふんだ通りかなりの魔力を保持し技量も高い。

「うわぁ！ お姉さん、すごおい！」

「いいぞ。マナ。制御は完璧だ」

「ありがとうございます！」

「あとは出力だな……」

その時、マナのワンピースの袖を小柄な少女が引っ張った。

「あれ？ ルナさんよね？」

「はい……。あの、ギルドに入るにはどうすれば……」

「何で私に聞くの？ ファン先生のほうがよく知ってると思うけど」

「ファン先生はちょっと怖い……です」

「こわ！？ い……のか？」

「はわわわ……………」

ルナと呼ばれた少女にわからないと答えると東の方角を遠目に見るマナ。その横にファンが立ち華奢な肩に手を乗せた。

「心配か？」

「はい。レイ君はいつも無理をします。心配してるのに聞いてくれないですけど……」

「はは、やはり師弟とは似るものだな。ギアもそうだったよ。あの頃はアイツも少し幼いところがあって可愛かったが」

そのような話にふける二人をよそに東の国で怪盗ローズマスクを捕まえるという任務についていたレイは二人とともに作戦第二弾の説明をしていた。今回はかなり力業だ。ギルドの中でも指折りの体力を持つ二人に巨体な力を保持したレイの力を駆使し夕方人が少なくなる頃から追いかけて夜に捕まえるという持久戦に持ち込むのだ。

「夕方は人が少なくなると阿蘇さんが言っていた。狙い目はそこだ。ヤツはプライドは高いらしいから今日も来るだろう。俺は様子を見て捕まえるから二人は追尾をくれぐれも頼む」

「よお解らへんが何とかするさかい心配せえへんでええよ」

「私達ならではね。レイは具体的には何をするつもりなの？」

「能力を使ってアルやリーンの位置を把握して路地や空き地に入った時点でそこに行く」

「わかったわ」

レイの予想は正しく夕方に都の中門付近でマスクをつけて現れた。すかさず二人が足並みを揃え走り出す。レイは都の中心付近に陣取りギアから教わった力の使い方の一つを利用して三人称を捉えてい

る。

「しつこいわねえ。しつこいのは嫌われるのよ!」

「あんたかてしつこく挑戦受けてるがな!」

「あら、一字一句リーンと同じって珍しいわね」

一時間程で追いかけてられている怪盗ローズマスクの方が音を上
始め細い路地を抜けて広い空き地の縁に現れた。間髪を空けずに
レイが能力を使用し筋力を増強させその付近に靴音とともにレイが着
地した。

「嘘でしょ!!」

「さあ、まだ闘うか? それとも捕まるか?」

「闘うに決まってるでしょ!」

鞭を右手に握りしめ左手は太ももにつけてあった細い針のような
ナイフを持って距離を取った。レイは大剣をつかみ相手の動きに動
じずに仁王立ちになり出方をみている。鞭が驚くべき速さでレイの
片腕を捉えたが逆に力任せに引っ張られ鞭を離してしまつて。

「やあ!」

「鞭と暗器か。オラッ!」

「キャッ!」

服に隠し持っていた細い針のようなナイフをさらに増やし投げた
り斬りつけたりするが全くレイには当たらない。

「何でよお!」

「実力差だな。隙あり!」

レイの足が彼女の足をすくい後ろに倒れ込んだ。大剣を顔の真横に突き立てすぐに声をかけた。

「お縄だからな。リーン！ アル！」

「終わった？」

「決着はついたようね」

「わかってるなら連行の準備だ」

素直に頭をうなだれて両手を縄で縛られてリーンの後ろを歩く。少女はレイの予想どおり年齢は同じくらいで素性もわからない。

「ねえ……。アンタ達のギルドに犯罪経歴の制限はあるの？」

「無いが？」

「お願い！ アタシを連れてって！」

「はあ？」

突拍子もなく言い放たれた言葉を聞いた三人はとりあえず阿蘇宅に連れて行くことにした。阿蘇宅は広く柱に縛り付けて相談すると連れて行って問題ないと言われたため連れて行くことにした。

「レイ……ホントに連れてくの？」

「ああ、戦力にはなるだろうしな。ここに置いて行っても都の本殿に連行するんだろ？ めんどくさいしな」

「それはそうだけど……」

「うちはいいと思うで？ うちもそのくちやしな」

縄を解き立たせるといきなりレイをしげしげと見回す。

「顔よし、スタイルよし、運動神経よし。……か気に入った！」

「は？ いきなりなんだよ……って、うわあ！」

「彼女になったげる！」

「抜け駆けは無しやぞローズ！」

「そういえば名前を聞いてなかったわね」

「アタシの名前はヴィヴィア・ヴィオ」

「こちらのフルネームも言っておくか……リーンとヴィヴィアは離れる暑い！俺はフエンク・レイ・スウォード」

「うちはリーン・ハルバートや」

「私はボア・アロウ・ルース」

目を見開きアルを見つめるヴィヴィア。まだアルはマスクを取っていないため顔はわからない。

「あなたが碧独の美女？」

「そう呼ばれたけど私自身は美女でも何でもないぞ？」

「でも顔立ちは綺麗だしスタイルいいって目が……」

「ああ、これね。一応は戦った跡なのよ。熊とね」

「熊！？」

新たにヴィヴィア・ヴィオという少女が仲間に加わり阿蘇宅で彼女の特技である軽業や曲芸などを披露してくれた。その夜は静かに過ぎ月が描くであろう弧の頂上に達したときアルは縁側で月を眺めていた。

「アル！どうしたの？」

「ヴィヴィアか。月を見ていたの。そっちは？」

「アタシはレイと添い寝しようとしたら追い出されたてころ……」

アルは片膝を立て反対側を横に倒し肘を立てている膝の上に乗せて話している。ヴィヴィアは胡座を少し緩め足首を握っている。二人の会話はレイのこととギルドのことが多かった。そのなか阿蘇の

従者の太助が現れ緊急の連絡を告げた。

「申し上げます。皆さん退避の準備をしてください」

「どうかしたんですか？」

「はい、話すと長いのでかいつまんで……現在は北朝と南朝に別れいがみ合う関係のこの国に二年前に飢饉が起こり南は大損害を受け今に至ります。しかし、北にはほとんど損害はなく軍を整えてこちらに向かって侵攻を始めたのです」

「わかりました。皆さんて退避を始めますので母屋に集まってください」

鎧をつけたレイがリーンと他の4人の従者を引き連れ阿蘇のところにいった。阿蘇もついに動くことを決意し必要な物を集め始め従者の1人が奥方を担ぎ屋敷を抜け出した。

「すまない……。こんな我々の国のゴタゴタに巻き込んでしまつて」

「いえ、雇い主を守るのも俺たちの仕事ですし。このくらいの人数なら早く西にぬけられるでしょうし」

馬が引く荷車に俵や他の種を積んで自分達も乗り込み走らせている。馬の御者を太助が勤め側面見張りにヴィヴィアとリーン。正面見張りにアル、後方見張りにレイが付き敵軍の兵の動きをみている。

「あと半分程で付きます。その前に敵の騎馬隊が追いついて来ましたがね」

「レイ！ そんなのんびりしていいの？」

「アタシに任せて！ これがあるから！」

ヴィヴィアが小さな玉を取り出し全員に前を向かせた。そして太助に馬の目の横を手で塞がせそれを投げた。地面に落ちた瞬間に破裂し眩いばかりの光を放った。光が収まると同時にリーン、アル、

レイが荷車から降り敵の無傷な馬を兵隊を叩き落として奪った。

「大成功！」

一同は勢いよく駆け抜ける。そして、西のギルドにも変化が出ていた。北の軍が南に侵攻をはじめ通り道の街を悉く焼き討ちこの中央大陸にまで勢いよく侵攻しついにこのエリアまで魔の手をのばして来始めたのだ。

「ギア、フィトは先陣を組んでマナとファンのいる北区に行ってくれ。その他は住民の避難を最優先にしてギア、フィトに続け」

「了解」

「御意」

ファンはいち早く異変に気付きすぐに対処を始めていた。生徒を大教室に集め自分は防御陣をチョークで足元に書き敵が来るのに備えているのだ。

「みんな！　こういう時こそ落ち着いて行動するんだ！　私の結界で最悪の事態は避けるつもりだが君達にも協力して欲しい」

「はい！」

巨大な勢力の侵攻に耐えられるのか？　またレイは間に合うのか。全員の力が試される。そんな中新たに仲間となるだろう者が同じく北から猛進してきていた。

TO BE CONTINUE

崩落の兆し……四季の詩

フィトが森を抜け海岸を超えて偵察に走る。二・三人の仲間を連れ木の間を走り抜けながら指示を出し敵の行軍状態を探り逐一本部にいるターゲットに連絡を取って防備を固めていた。敵軍の数は当初の予想以上なのだ。進軍速度は速いだけではなく、その通過してきた街や土地の変わり果てた姿は目を覆いたくなる者だった。

「フィトさん……。北北西の敵の本体がついに動きました」

「わかった。ここもじきに危ない。みんな早く退避しろ……。沼には気をつけろよ。俺はトラップを仕掛けてから本部に向かう」

「了解しました」

フィトが敵の侵攻するであろうエリアにトラップを仕掛けて部下とともに後ろに退いて行った。沼地に霧が立ち込め敵の金属製の兵器は次々に沼に沈んで行く。数台の戦車が沼に脚を取られ動きが鈍くなったとはいえ敵の侵攻にはそこまで関係ないらしい。本部近くにはギルド側の戦士がうかがえる。第一陣が既に準備をし門から出撃しようとしているのだ。その時のギアは珍しく重武装になり北の区域に選りすぐりの戦闘員を連れて猛進を決め込み今か今かと足踏みしているほどである。

「出撃許可が出た！ 行くぞ！」

「くそ！ なんでこんな時に」

「ギア！ 待ってくれ！」

「お前らは後から来い！ 体力を温存しておけ、この後は衝突し第一団を撃破する」

「わかった。では後で落ち合おう」

全員の稼働率が最高に達する中で阿蘇と荷馬車を駆り立ててギルドに向かうレイ達も北の軍団に遭遇ししげみに隠れていた。ギアは現在は速度を上げて猛進するも敵の大隊にぶつかることを避けるため迂回を始める進みを取っている。レイ達はもろに大隊にぶつかった結果であるが大きくコースを変えることは彼らにはできない。阿蘇などの非戦闘員を危険にさらすことはできないがこの大河の進軍列を超える上では危険はつきものだろう。

「畜生……なんて数の軍隊だ」

「北の国の軍が何故こんなところにいるのよ」

「北の国と言えばあの凶暴な国。それがなぜ……」

その時、敵軍の後方で爆音が鳴り響き砲火がその方向に集中する。そちらからは異様に高い声が聞こえてくる。怒声と言うよりは歌う前の発声練習のように甲高い。

「ハアアアアア!!」

白馬に乗った極小とまでいえそうな少女が身の丈に合わない両方に巨大な刃が突き出した鉞を振り回し敵の戦車を切り崩す。壊れたそれらは瞬時に爆破し炎を上げていくため敵兵が集まってしまう。レイは一発逆転の賭けに手をつけた。

「レイ! それ本気?」

「やるしかない。奴らも無敵じゃないってことはわかった。だが敵は容赦なく来るぞ。だったらここから敵を殲滅しつつギルドの本部に向かう!」

「恥ずかしながら私もそれに賛成だ。今はそれが一番よい策だろう」
「アタシもよ。これは時間の問題」

「うちに任せてえな。切り崩してならお手の物や」

敵軍の兵が混乱する中でレイは大剣を抜きリーンとともに走り抜ける。その後ろをアルの弓で抑えて時間を稼ぐのだ。戦闘が始まり魔法を付加した大剣は戦車などを一刀両断していく。リーンは矛槍で殴り切りをし金属製の装甲を曲げて大破させていく。アルの弓は周りの細い木に矢を差しサンダースパイダーネットの簡易バージョンを使って先頭の戦車や装甲車を感電させ玉突き事故を起こし次々に撃破する。ついに森を抜けて市街地に出るとギアと遭遇した。

「師匠！　なんでそんなに重武装で……………」

「レイか。お前は後続を連れてギルドに帰りその後はシドさんに指示をもらえ」

「了解しました」

ギアは足早に北区の方向に走り去り、鎌は鞘を外して右手で持った状態だ。切羽詰まった彼の顔を初めて見たレイはただ事ではないことを肌で感じとり指示どおりにギルドに向けてなおも馬を駆り立てる。

「シドさん！　これは一体！」

「レイ君！」

「マナ！　シドさんは？」

奥から声が響きタージェが現れてレイに向かって労いと次の任務についての話を始めた。

「よく帰った。すまないがすぐに出てもらおう。北の国の軍をここで止める。南に侵攻したらしいがやり方に虫唾が走る！　今から使える人員はすべて動かし防衛陣を敷くからお前はマナと組んで中層警備だ」

「え、俺も前戦へ……………」

「ギアからの提案だ。アイツらしくないことを言っていたよ。『俺が倒れば守れるのはレイだけになる……』ってな。まったくわかってないのはどっちだか」

「シドさん。俺に少しの間だけ指揮権をください」

「よし、やろう。うまくやれよ？ さっき白馬に乗った小さい女の子が来たが……」

「行ってきます！ マナ！」

「きゃっ！」

「気をつけろよ！」

先程の馬にマナを乗せて駆けだして行く。咄然と空気と時間を流すアル、リーン、ヴィヴィアと阿蘇方々は気がついたようにタージエに頭を下げ特にヴィヴィアと阿蘇の従者と本人はそのまま奥へ向かいリーンとアルはレイを追って走る。

「レイ君！ 速い！」

「ごめんよ……。でも、あんまり時間がないんだ」

「レイ君……」

後ろから蹄の音が鳴りアルとリーンが追いついた。そして、前方からはフィットが現れ一度合流し作戦をレイが伝え始める。

「レイ！ やっと追いついたで……」

「アナタが焦っては元も子もないわよ……。で？ 指揮権をもらったからには作戦があるのよね？」

「ああ、まずはフィットだ」

「おう、何でも言ってくれ」

「白馬を見つけて見つけた時点で協戦を依頼して成功し次第その場で戦闘開始だ」

リーンが馬を落ち着かせながら問いかけて来る。

「うちはどないすんの？」

「森の中はお前の最高の狩り場だ。实力を見せてやれ。ただし負傷したら回避行動をとること」

「了解や」

「アルはリーンの補佐についてくれ」

「合点」

マナが口を開けたままレイを眺めている。レイの優しいところしか見たことのない彼女にとっては新鮮だったのだろう。

「どうした？ マナ？」

「え！ いや、その……かつこいいなあと……。……。はわわわ！ 今のはなし！ 聞かなかったことにいい……。……。ううう……。……」

「マナ、落ち着いて。また後で向こうでの話をしてあげるからさ」
「う……。うん！」

マナがレイにしがみつき彼は馬をさらに走らせる。向かうのは北地区のギアがいるエリアだ。そこは敵の大隊が通過することが予想されギルド内でも名が上がったメンバーのみが派遣されるほどのエリアになっている。

「みんな……。私を信じてくれ。じきに迎えが来るはずだ。それまでは私が君たちを守る」

「先生……」

北地区の魔法学校において巨大な結界が幾重にも張られ敵の侵攻を妨げはじめた。そこにギアが殴り込み黒い波動を打ち込み前戦隊

を一瞬で撃破した。だが、敵もそこまで甘くなかった。今回のファンの落ち度はドーム状の結果にできなかったことだ航空機の爆撃が街を襲う。ギアも予想だにしない攻撃に振り向いた瞬間砲撃をくらい爆炎にのまれた。

「くそっ！　ぐ……………」

フィトが白馬の鉞使いと遭遇した。鉞使いはフィトを見ると馬から飛び降り、抱きつくように鎧を着たまま彼に飛びついた。

「フィト君！　生きててよかったあ……レイ君は？　他の連中はどうしたの？」

「ルミ教官！　お久しぶりです。申し訳ないが懐古はまたに……今は我々の街を守らなくては」

「なら、私も協力するね。生き残らなければ意味がないしさ」

「ありがとうございます」

二人が敵の本隊に向かう中でリーンとアルは森育ちの強みを生かし次々に敵の兵器を破壊して行った。リーンの無差別な怒りにまかせた攻撃に加えアルの冷静な制弓の二つの合わせ技をしレイの作戦を忠実にこなす。とうのレイは大剣を抜きマナに砲火が当たらないような動きを取りながら北地区に走る。マナは慣れない場所に急にほっぽりだされた感覚でレイにすがりついたまま動かない。

「マナ！　大丈夫か！？」

「なんとかなる……………と思う」

「もう少しで着くから我慢してくれ！」

建物が崩れファンがギリギリに張った結界でなんとか生徒を守った。一方本人は外で立ったまま瓦礫に埋もれそうになりながらなんとか力を制御していた。その上には体を極限まで変化させたギアが

翼を広げ腕で頭を抱きながら守っている。

「ギア……」

「喋るな。集中力が途切れたら下の連中が死んじゃう……。レイとマナが来るまで待て……」

小さな歌声が響き周りが小さな光の玉の粒で満たされていく。レイはすでに到着し他にも派遣されていたメンバーを守りながら波のように押し寄せる敵をはねのけていた。歌声が響く……。瓦礫が上から消えファンの境界が見えて来た。敵も味方も啞然とするなか歌い続けているのはマナだ。

『永き眠りの冬から目覚め私は上を向いた
光は見えない。』

だけど私は上を見続ける。

春に麗らかに私は芽吹く……小さな小さな芽だけ……

私は願う生命のほとばしりを。

夏に私は出会う。

運命をともにする仲間と。

沢山の仲間に囲まれた私は幸せなのだろうか？

秋に気付く、本当に大切な物は？
愛？
力？
既知？

私に問いかけるアナタは誰？

アナタは姿を見せない。

時に荒振り悲哀を帯びて優しさをこぼし喜びを見せる。

冬は再びアナタは私に問いかける。

『本当の僕はどんな姿なの？』

アナタと私は一つ、全ては一つ私もアナタも……世界とともに……
いつまでも

「これは……いったい……」

「嘘だろ……。マナにこんな力が……」

生徒たちはファンに守られた状態で気を失っていた。ギアがファンを支えた状態でレイに近寄りマナを抱き上げ、放心している兵士をよそに全員が瓦礫の影を利用しトラップの数々を仕掛け合流していないメンバー以外にも気付かせるために各所から赤い狼煙をあげて全員に退避を知らせギルドに集合した。もちろん魔法学校の生徒や地域住民を引き連れて。

「みんな！ よく帰って来た！ 今、この状況下で全員が揃ったことを嬉しく思う！ これより敵と全面でぶつかる。言っておくが我々は軍隊ではない。退いていく敵など目もくれるな！ 陣割りは後に話してやる！ 一時解散！」

タージェの演説の後、一時的な休息があり更にその後、北側にある森に友軍が集まり陣張りを決めた。ギルドの最大戦力の二人がファンの結界の前にたち戦車大隊を睨みつけている。その後ろにはリーンの率いる騎馬隊が構えギルドの本塔に登ったアルの弓隊が構え

陣張りは完成した。

「これより戦闘を開始する！！」

タージェの一声でレイとギアが能力を解放し大隊に緋と黒の波動を打ち込んだ。その直後として大剣、中剣、大鎌を構え二つの穴を戦車大隊に開けた。結界が一部開きリーンが騎馬隊を率いて白馬の鉞使いと現れた。

「レイ！ 本気で行くぞ」

「言われずとも！」

「ウチらも行きまっせえ！」

「リーンちゃん！ ガンガンいこう！」

結界が閉じフィトとゼシ、タージェがそれぞれ武器を構えてファンの警護についた。

「負けるはずのない戦にも備えは必要よ」

「ええ、そとに出なくても俺たちだって強いんですから。安心してください」

「みんな生きて切り抜けよう！」

北の機械を使った軍団は意外と呆気なく潰れた。いくら機械を使っても限界はあるらしい。街に被害が出たものの死者は出ず多少の負傷者ですんだ。

「意外と呆気ないな」

「ですが……何か嫌な予感がします」

「ああ、感じるか？ どす黒い氣を……」

戦いのあとで武器を収め佇む二人が周りをキョロキョロと見回す。

ギルドの中庭でも実力者はすでにその氣に感づきレイ達のいる森に集まり始めていた。

「レイ！ 伏せろ！」

草陰からリーンの矛槍に似た形状の槍がレイを狙い真っ直ぐにかつ瞬時に突き出され間に合わないと判断したギアが突き飛ばした。

「……？ ギア？ なんで敵をかばうの？」

「イ……オだ……と？ 何故ここに」

「師匠！ このやろおお！」

「やめ……ろ レイ！ お前じゃ……ガフツ……こいつには適わない……」

固い重装甲を貫かれ脇腹に刺さったその槍を抜きレイに視線を移したのは彼と同年代くらいの少女だ。槍を短めに持ち替え刃先についたギアの血を舐めレイを凝視する。

「おいし……。久しぶりのギアの味……。帰ろ？ 今ならプルトン様も許して……」

「何が何だかわからないが師匠は連れて行かせない！」

「威勢はいいけど……アンタはアタシには勝てない」

確かに強かった。リーンのパワーに更に上乗せされたパワーに体の柔らかさ、俊敏さなど恐ろしさにさえ感じられる。それでもレイは怯まなかった。味方が到着し流石に数がそろうと面倒なのか森の中に消えていった。

「チツ……。またね。ギア」

「師匠！ 師匠！ 大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな……」

「ギア！ 大丈夫か！？」

「ファン……大丈夫だ。早く全員を撤退させろ。嫌な予感がする」

男の声が空から聞こえ耳に残る高飛車な抑揚をつけた発音が終わったと同時に再び変化が現れた。

「フハハハハ！ よくぞ闘った愚民どもよ。我が名はプルトン。この四界をすべし帝王だ。これより貴様等の健闘を称え更なる苦しみを与えよう！」

戦車や地面で倒れ動かない兵士が動き出しこちらに襲いかかってくる。前とは違うのは明らかに瞳孔は開き致命傷を負っていても彼らは剣を振るう。味方はそれらに苦戦しながらもなんとか再び立ちふさがる危機を切り抜けようと闘い続ける。

「くそが！ 死人を操るだと！」

「リーン！ 後ろ！」

「来るぞ。退け！ 退け！」

「ハイヤアアアア！ みんな！ アタシについて来て！」

白馬の鉞使いの後ろに負傷者が続き殿をレイが勤める。味方がギルドの本塔に抜け大門をしめて全員の収容を確認した。

「アルから報告だ。敵の死人の兵隊は全部また死人に戻ったようだ」「あの、ギア師匠は？」

「医師の話では命に別状はないらしいがあと10センチ左上にズレていたら心臓を突き破っていたらしい」

「話は出来ますか？」

「まだ無理だ。お前ら前戦隊は休養をとれ、無理に体を動かしたお前は相当体に負荷がかかってるんだ。無理はするな」

「わかりました」

渋々といった表情で寄宿舎に帰るレイの後ろからマナが話しかける。

「レイ君……。ギアさんの容体はどうだった？」

「まだ、面会は出来ないって……。ごめん、俺も今日は疲れたから早く寝るな」

「あ……。うん。お休み」

二人の部屋は2LDKの部屋で意外と広めだ。リビング、ダイニング、キッチン以外は二人の個室になっていてそこが寝室になっている。その部屋に入ってしまったレイが気になるマナはリビングのソファの上で膝を抱えて座っていた。

「マナあ？ いる？ リーンやけど」

リーンに呼び出され立ち上がったマナは廊下にいたアルとリーンの後ろについて歩いていきリーンの部屋に入っていく。中ではヴィヴィアが既にクッキーをモシヤモシヤ食べていた。

「アナタがレイの彼女？」

「か！ 彼女！？ そんなわけない……。けど」

「うーん……。じゃあ、誰がレイの本命だろね？」

リーンが追加を小さな盆に乗せて歩いて来る。アルは髪を下ろしバンダナを外しているため別人に見えた。

「ヴィヴィア。そんなことは悩んだところでしょうがないやないか」
「そうよ。少なくともふられたよりましよ」

アルの声が周りの空気を重くする。三人はどうやって声をかけて
よいか解らずとりあえずはそつとしておくことで決まった。

「まあ、一番はマナやろうなあ……。悔しいけど」
「へ？」

「そうそう、あの鈍いレイの動き見てれば解るわよ」

「そうなんですか？」

「わかるで？ マナはまだそういうことに慣れとらんから少し難し
いやろうがな」

「そのうち慣れるわよ。それよりあの刺された人は大丈夫なの？」

レイの話題からギアとファンの話題に少しズレていったが主旨は
変わらず流れていく。リーンの部屋はあまり飾り気はないが落ち着
きがあり綺麗に整頓されていた。

「ファンさんがついてるので大丈夫だと思いますよ？」

「で、あの二人はどういう関係なの？」

「うちはあるまり交友無いで知らんがマナはどや？」

「二人とも優しい方です。確かに表面上のとげや特徴は大きいから
取っ付きにくいですけど」

「ふーん……。そう言えばギルド長の奥さんはどんな人」

話題をコロコロ変えるヴィヴィアに反応したアルが毛皮の中に綿
が沢山入ったクッションを抱きながら振り返った。

「ゼシさんのこと？」

「ブッ……。いつ……。今何て？」

驚いてか口に含んでいたジュースを吹いてグラスで受けた。

「ヴィヴィア……うちでもせえへんで？」 「クロス・ゼシさん。西の国の細工職人よ」

「し……師匠なんだけどさ」

マナはチビチビとクッキーをかじっていた。まだ仲間の繋がりとや過去をよく知らない彼女は一人でクッキーを食べ続けている。そこへ開いていた扉にもたれた翼が背中にある女性が中に向かって話しかけた。

「いくら武道に長けていても年頃の女の子がこれではあまりに不用心じゃないか？」

「ファンさん！」

「お、ギア先生の容体はどうしましたか？」

「意識が戻った。今はレイを呼んで向かわせたところだ。私も参加させてもらっていいか？」

「ファンさんって……賢者さんのことだったんだ」

「久しいなヴィヴィア。師匠には顔合わせをしたか？」

少し暗い顔をした彼女のことが気になり軽く問いただすと東の国でのことをリーンが洗いざらい話してしまった。だが、ファンは咎めることはせずに笑いながらクッキー以外の菓子にも手を伸ばしていた。

「ハハハハ！ しばらくいていい。だからといってここから出ていけなどとは言わないだろう。お前も女に泊がついたんだ」

「にゅううう……。なんか誉められてない……。気がする」

「ああ！ 何か楽しそうなことしてる！！」

現れたのは今回の戦闘中に仲間になったルミだ。本名はルミ・アクス・リフという元レイのいた軍の軍人で教官だった人物。

「おお、ルミ。部屋は決まったか？」

「うん。今は二人部屋を一人で使うの。アタシも混ぜてくれる？」
「大歓迎や！　そこのお兄さんは気が引けて自室に帰ってもうたがなあ」

「フィット君は昔からああだよ。アタシはレイ君とフィット君の教官してたけど二人とも変わってないねえ」

「じゃあ、ルミさんは軍人だったんですか？」
「うん」

「あの失礼かもしれませんが年齢は？」

アルが改まり聞いてみると予想だにしない返答が帰って来た。ペロペロキャンディーを頬張った姿で言われるとなおのことだ。

「アタシ？　アタシはファンちゃんと同じ18歳だよ」

「ふえ？　年上……」

「ここって特殊な人多いわね」

「そういう人間が気軽に入れる程暖かい所なのさ」

「師匠！　いつの間に！」

ゼシが加わりマナの横に胡座を崩した座り方をした。そのゼシをマナが目をしばたかせてみている。

「どうした？」

「いえ、皆さんの個性が面白くて……」

「私はマナが一番面白いがな」

「うちもそれは賛成や。天然やからな」

「アタシもわかる気がする。マナが天然なのは」

マナが意味がわからないと周りを見回すのをさらに楽しそうに周りのメンバーが見る。その頃のギアとレイはというと……。

「レイ……。済まない。危険な目に遭わせてしまった。いや、これからのことを言うべきか。済まない」

「師匠はなにも悪くないはずです。俺は逆に燃えて来ましたよ。奴らに勝つために……これから稽古をよろしくお願いします」

「俺の傷が癒え次第修行を開始する。それまでは休養しておけ」

「はい！」

TO BE CONTENT NEW

崩落の兆し……日月の詩

『目覚めの時に私はある。何もない虚空に身を任せて。

新たな場所を探し歩く。

真昼にて心高ぶり私は歩く……新たな道はいずこに？

明るき道は……偽りを含む。

夕闇が現れ未だ現れぬ我が道を祈りてついに見ゆる一筋の光。

我が道はいずこに？

三日目の月にて足を休め光を探す……見失いし光を。

我が道の真意は？

白む空……一筋の箒を見つけ追う私は思う答えはあそこに……。

かの者はなんぞ？

開けし夜は答えを導き私は息つく。

我が道の片時にて

終わり無い道を……私は歩む……命続く限りに……先を目指して』

倒壊した建物を直す間にレイが耳にした詩だった。リーンとアルが連れる少女が口ずさんだ詩。ギルドに収容され意識を取り戻した子供達は次々に親元へ帰って行った。だが、彼女は取り残されていた。瞳に光のない彼女は詩のように道と寄りどころを探しているのかもしれない。

「ギアさん！ 体を休めないと！」

「これくらいなら大丈夫だ。それより早く仕上げよう。街のみんなが早く戻るように……」

「ならお前は休んでいろ。死なれて困るのは私なのだからな」

マナとファンが野菜のスープが入った大鍋をカートに乗せて押してくる。普通は傭兵任務や討伐任務につく戦闘員も慣れない大工仕事をして空腹度が高いらしく、すぐに人だかりが出来た。マナとファンが配膳をし作業員達はすぐに昼食にありついていく。

「レイ君！ お疲れ様」

「ありがとう。マナも頑張ってるね」

「うん。美味しく出来たかわかんないけど頑張ってたから沢山たべてね！」

「ああ」

ギアはファンに耳を抓られ捕まえられており作業には戻れないだろう。彼はまだ本来ならば寝ていなくてはならない体調なのだが外から病室内に聞こえてくる作業の音にいてもたってもいられなくなったらしい。レイがそう諭してもファンは聞く耳を持つとしない。

「ファン！ それは病人にすることか？ イタタタ！」

「ああ、お前は確かに病来かもな！ だが、今お前が直すのは怪我だ！ バカ者！ 病室に行くぞ。マナ！ あとは頼んだ！」

「はあい！」

レイが近寄り配膳を手伝い始めた。マナが言葉を足して断ろうとするがレイにも思惑があったようだ。鈍いレイらしい考えだ。

「レイ君……これくらい私がやるからいいよ」

「周りを見てごらんよ。作業員や大人は食べれてるけど子供なんかは食べれてない。マナの出番さ。配ってきなよ」

「うん！」

用意と感のいいゼシが後ろから現れ盆をマナに渡しにこやかに笑う。レイの横に並び肘で小突きながらさらにニヤニヤ笑っている。

「お前も行ってこい……。あの子だけじゃちよつと不安だし。ここは私がやるから。さあ、早く」

「ありがとうございます」

マナが石に突っかかりそうになるのを腕で支えたついでに盆を受け取り一緒に配り始めるレイ。

「キャツ……。あ、ありがとう」

「持つよ。ゼシさんが代わってくれたから一緒にいくからさ」

「わかった……。あ！ ルナちゃん！ と……うにゅあぁあ！」

マナが子供用の小さめの碗を持って歩いているとルナの面倒をタージェから頼まれた二人、アルとリーンに捕まったのだ。因みにこの二人が倒壊したエリアからギルドまで連れてきたのがその理由。仕方なくレイがルナに近寄りスープを勧めることにしたらしい。

「マ……ナ……？ 抜け駆けは許さないわよ？」

「そやそや……、振られたアルは別としてうちはまだわからんのや

からな」

「はわ……。ごめんなさ……。ヒッ！」

「ウォワッ！」

大鍋をおろしそのカートに腰掛け腰の鞘にあった短剣を手で弄びながらアルとリーンに向け人差し指を立てて二人を呼んでいるゼシ。殺気が一直線に飛び既に投げられているもう片方の短剣を見つめるリーンをながめている。

「アルさん、リーンちゃん……。呼んでるよ」

「うん……。マナ。あとで命があれば会おうな」

「リーン、縁起でもないことを……。……。わからなくもない気が……。してきた」

その頃のフィトとヴィヴィアは東の国の北朝からの依頼でその任務地に向かっていた。フィトの武装は誰も見たことがない。前回マナを発見したエリアでの戦闘での武器は素手だ。堅い鱗や強酸ですら素手で対処していたらしい。

「なんでアンタなのよ。レイなら万々歳なのに」

「文句言うな……。俺だってアルさんならと思ったとこさ」

「へえ、あの型物のどこがいいの？」

「美人じゃないか」

鋼を鍛え上げたナックルを担ぎ荷物と一緒にくるくる回しながら歩くフィト。その後ろをゼシに借りたローブを着ているヴィヴィアがついてくる。ゼシが作った新しい武器を受け取り、前に持っていた物と同じ隠し方をしながら重さの違いに少々、足をよたつかせている。

「お前さ……その袖に隠してる暗器を抜けよ。重いんだろ？」

「いつから気づいていたの？」

「最初からだ。ちなみにレイも気づいていたぞ」

「ホントに？」

「おう……アイツは変なところに敏感だからなあ」

再びギルド近隣の民家にて、昼休みが終わりレイも作業に戻っていた。マナがルナを連れながら歩いている。周りは大分復興作業が終了し真新しい建物が増えてきた。ただ、大聖堂や魔法学校などは大きな建物だったためまだ手が着けられていない。

「マナさんはレイさんと相部屋なんですよね？」

「うん……。ギアさんって言うレイ君のお師匠様なんだけど、その人が私を遺跡で見つけたレイ君に押し付けた形になったのかな？」

「ほえ……。凄い、なんか結構深いですね」

「うん。凄いかどうかは別として深いのは確かかな？」

「あの、前から気になってたんですけど……。出身はどこですか？顔立ちがきれいなのにエーテリオンじゃないかんじが……」

「わからないの。だから種族や血種もわからない」

レイが赤いつなぎの袖をまくり首のボタンを緩く開きながら後ろから近づいてくる。いつもは髪の毛はそこそこにしている彼は今日ばかりは作業の邪魔になるとバンダナを巻き髪を抑えつけていた。

「おっと。二人ともお疲れ様」

「あ、レイ君。お疲れ様」

「レイさん。お帰りなさい」

マナがにこやかに頭を軽く下げる。真似をしてルナも同じ行動をとる。髪留めで短い髪をさらに結っているルナをギルドの自分の部屋に連れて行くマナを後ろでみているレイ。その更に後ろからギア

を病室に縛り付けてきたらしいファンが近寄ってきた。

「しかし、お前も手の多い奴だ。いったい何人に手を……ゴホン！
気を持たせれば気が済むのだ？」

「ファンさん。言ってることが理解できないのですが……」

「鈍いのもここまで来ると凶器になるな……。まあ、いいから前の
二人を見失うなよ？」

タージェがギルドを開いてからこの街は息を吹き返した。貿易都市として栄え現在は街の至る所に商店街や旅人目当ての直売り屋台などが所狭しと並ぶ。ギルドは人数や規模が大きくなるに従い増改築を繰り返した。現在では城のように大きくなり建物もしっかりしている。

「ギア……。お前らしくないな。気配が消しきれてないぞ？」

「こんなところで消したら逆に怪しいだろ？」

「まあな、どうやってあの結界を抜け出した？」

「ちよっと久々に使っただけさ。幼い頃にも見せた縄抜けの呪いを
ね」

街のシンボルのギルドはメンバーや名前、武器などの特徴までも近隣住民に知れ渡り鑄造した武器を模した飾りやお揃いの服、武器のレプリカなどがお土産のグッズにもなったりしている。

「レイさんって凄い有名なんですね……。ビックリです。そこら中にレイさんみたいな服を着てる人が沢山いますよ……」

「俺だけじゃないさ。他のメンバーもかなり人気があるよ。人望と既知のシドさん。それを影から支える師匠。看板娘はリーンやルミ教官で綺麗さで有名な美しいアルとゼシさん。フィットも俺と同じくらい有名だしマナも料理人の間じゃもう知らない人はいないほどさ」

「へー……。全く知らなかった。私もなんですね」

「ああ、もちろん」

「あ、あの……それでギルドに入るには……どうすれば？」

マナが向き直りそのまま開かれた正門を背にしてルナに向けて両手を広げて叫んだ。華奢な彼女からでたとは思えない大きな声にレイも少々驚き気味でルナは軽く口を開けたまま返事に困っている。

「ようこそ！ ギルドへ！」

「マナ……」

「マナさん」

「もうシドさんには通してあるよ。しばらくは私の部屋を使って慣れたらまた割り振りが変わるって」

図っていたようにシドが中から現れ三人を出迎えた。そして、東の国に向かったフィトとヴィヴィアはよくわからない二人組と戦闘をしていた。一人は独特な十手のような形の細身の中剣を持ちフィトと猛襲を打ち込みあっている。その連れのような少年は明らかに戦闘向きではないが小型の火器を的確に投げヴィヴィアを近寄らせない。

「その様子だとお前も東の国の出身らしいな！」

「ほう……。察しはいいな？ お前はこの辺りでは有名だぞフィト・ソニック」

近くで白い煙が上がりヴィヴィアがフィトと交代した。タイプを合わせた方が戦いやすいと考えたらしい。フィトは真っ向勝負が得意だ。対するヴィヴィアは隠密のような攻撃がとくいなのである。

「お前は……誰だ？」

「名乗る程の者じゃ無いわよ」

「……。軽業師か」

「そういうアンタは東の国、元南朝の機密隠密機動隊。アサシンのシェイドね？」

「何故俺を知っている！？」

「これでわかるかしら！」

バラの装飾の入ったファントムマスクをつけて腰から鞭を外した。地面に鱗のような光沢がある縄程の太さの武器が音を立てて落ちる。そしてフィットはすぐにケリをつけていたようだ。風の付加魔法をナツクルに付加し催涙ガスを吹き飛ばして白衣を着た科学者風の少年をつまみ上げた。

「離せ！」

「言っておくがアンタらが攻撃して来たから応戦したが俺達は戦闘をする気はない。まあ、逆にスカウトしたいくらいの手練れだからあの二人が収まったら話をするつもりだがな」

ヴィヴィアの鞭がシェイドと呼ばれた青年の手首に巻きつき中剣を抑え、双方が暗器を構えてにらみ合うなか白衣の少年がシェイドを止めに入った。同じようにヴィヴィアもフィットに止められ和解に入っている。再びギルドに視点を戻そう。マナの部屋でクッキーとホットミルクを出されマナと話すルナ。レイはギアに出された課題をせっせとこなそうと忙しく羽ペンを動かす。

「ルナちゃんは混血なの？」

「はい。私は母がカイザー、父はエーテリオンという偏った血を受け継ぎました」

「カイザーと言えばファンさんだな。エーテリオンはゼシさん。どいう特徴が出てる？」

すぐにレイの方向を向き明るく答えた。やはり混血はいいところばかりが特徴として出るわけではなく悪い特徴も出るらしい。

「私は母の最大魔力を受け継ぎましたがやはり体は父の持っていたエーテリオンの特徴からかあまり強くありません。レイさんはどういう特徴なんですか？」

「まあ、マナと同じかな？ “わからない” と言っておくよ。危なくて制御の難しい力さ」

「レイさんとマナさんって似てますね。力はあるけどわからない……あ、すみません。気に障りました？」

「いや正しいことだし……。確かに似てるかもしれないな」

マナが顔を赤くしてレイの机の上につまみの菓子とコーヒーを置きルナと向かい合うように座った。マナの態度が面白いらしくルナが軽く微笑む。

「マナさん可愛いです」

「ル：ルナちゃん……。それはどういう……」

「レイさんのこと好きなんですよね？」

「否定は出来ないけど……。言っちゃダメだよ？」

「わかってます。頑張ってくださいね」

「二人で何をこそこそ言ってるんだ？」

「レイ君！ 何でもないよ……」

マナが笑いながら溜め息をつきルナをファンのところに行くように勧めた。一応は師弟なのだ。魔法学校は建造が終了するまでタージェのギルドのホールを使っているようだ。生徒達は親元からここまですべて歩いて通っている。

「ファンさんのところには行った？」

「いえ、まだです」

「行っておいでよ。多分待ってるから……ファンさんは普通に接す

れば怖くないんだよ？」

ホットミルクを飲み立ち上がると小柄な少女が部屋から不安そうに歩いて出て行った。その時、タージェが扉を軽く叩きレイとマナを呼んだ。

「レイ、マナ、最近は多忙にさせて悪いが仲間を三人連れて北に行ってくれ。隊長はレイだからメンバーはお前で選べ。メンバーの一人はマナの固定が条件で決まっている。だがあとの二人はルミ、ギア、ファン、俺、ゼシ、ルナから選べ。アルとリーンは先に北に向かったから追ってくれ。軍隊の動きがおかしいらしい」

「わかりました。ではルナとルミ教官を連れていきます」

レイに話したあとゼシが入ってきた。マナとルナ用のマントローブを渡しマナの護身用ナイフと肩掛け鞆を置いて行った。

「マナにとっては初任務だ。レイは絶対に守ってやれ。ルナやルミにも気を配ってやれよ？」

「わかってます」

「それから、私も手が空き次第だが、そちらに行こう。私の古里が気になるからな」

タージェが真剣な顔でゼシの肩に手をのせた。少し思い空気が流れたがすぐにタージェが話を戻し任務内容を告げた。

「任務としてはギアとファンが適任なんだがギアは傷のこともある。ファンは最近体調が良くないとギアから聞いた。今回の任務は偵察と情報収集だ。わかったな？」

「はい。出発はいつですか？」

「それは決まっていはいない。全員の準備が整い次第出発だ」
「わかりました」

タージェは皆からシドと呼ばれ親しみを持たれている。その彼も今回は苦肉の策らしくあまりいい顔をしなかった。だがレイもマナもその日に準備を始めていた。ルナのローブを届けにファンのところにパタパタ走るマナが通りすぎるのを待ち話し始めるゼシとタージェ。

「シド……辛いのはわかるけど今は彼らに任せましょう」

「ああ、ギアがつきとめたこの中央大陸の真の姿……北の国で見つかるはずだ。その答えが……それが本当ならば。世界はレイの手に委ねられたんだ」

「私たちが知らぬ間に既に傾いた指針はもう、転機を迎えていた……。言い伝えそのままじゃない」

「恐ろしいくらいかぶつて……だが、まだ穴も多い……」

「ええ、わからないところが多すぎる」

ギアは地下の研究室で古文書を開き大きな溜め息をついた。ルナに自分の魔法書を数冊譲ったファンが後ろから現れて声をかけた。マーク01がその上をパタつきながら回っている。ファンがマーク01を捕まえ手に乗せて近くの椅子に腰掛け磨き始める。

「お前でも緊張はするのだな。ギア」

「しないほうがおかしいだろう……。この大陸を包む程の魔法陣を敷くんだぞ？」

「弱音か……久しぶりに聞くな。お前の弱音を。私も一緒に敷くんだ。心配はいらん」

「お二人とも中の一のこととでわたくし安心致しました。流石にギア様の計画を聞いた時には背筋が凍りましたよ。あの神竜を蘇らそうなんて」

「それしか今の打開策はないからな。奴が目覚めた理由もその目的

も俺とファンしか知らないはずだ」

その頃、マナとレイが荷物の整理をしていた。マナははじめての遠出となるため少し緊張気味だがレイは淡々と準備を進める。

「いつもそうだけどレイ君ってなんでそんなに静かに作業してるの？」

「いや、何でと言われても。そこまで楽しい物じゃないし」

「そうかなあ……。ちよつと緊張するけど私は楽しみだけ……」

「でも、仕事だしなあ……」

マナはだんだんと元気がつき明るくなっている。黄金色の大きな瞳はたまたま鎧をとったレイの首筋を見た。そこには綺麗に縫われた傷を中心に幾筋もの傷が見受けられた。

「レイ君……それってなんの怪我？」

「あ、見えた？ 師匠との特訓で嫌でも出来ちゃうのさ。師匠につけられた訳じゃなくて能力を使うと……マナ!？」

少し震え気味のマナがレイに抱きつき完璧に同様しているレイは対応できずに固まっている。

「あ!………ごめんなさい!」

「いや、いいよ。マナは最近元気になってきたよね」

「うん。みんなのおかげでなんか力がついた気はする」

「レイ君……ちよつと目をつぶって」

「あ、ああ……。こうか？」

小さな手が背中に回り息遣いが近くなって行く。唇が触れレイが目を開けるとマナは走って自分の個室に逃げ込んでしまった。

北の大陸の軍事国家の最中を隠密機動さながらに動くリーンとアル……。ゼシの伝達で近くにあるはずのノースビーストの村を探しているが見えて来たのは先に進めども戦車の波だ。周りには重武装の歩兵。そして、設置式の砲台。なぜそれらが設置されているのかは定かではないがこれからこの場所で何かが起こるのは確かだ。考えなくてもこの物々しい空気によって全てを把握出来る。

「アル姉さん……。こりゃなんかあるで？」

「わかってる。主砲や他の予備の砲台ですら全て一点を向いてるっていう時点でおかしいわよ」

変化が起きたのはそれから三十分後だった。戦車大隊が揃って砲手に向ける地溝から黒い巨大な生物が舞い上がった。それはどうみても……。龍……。古文書の一つバイブル……。創世の書に出てくる空想の生物のはずだった。それは戦車大隊に黒い炎の球をぶつけ一瞬にして黒い海を赤黒い炎と焼けて溶ける金属の平原に変えた。たまたまりーンの反射神経とアルの経験が重なりなんとか回避したが……。もろに食らえば命はなかっただろう。

「リーン……。急ぐわよ」

「ああ、……。あんな物に殺されてたまるかいな……」

次の日にレイ、マナ、ルナ、ルミがギルドを出発し北の平原に向かう。その頃のヴィヴィア、フィトも東の国に付き任務を遂行するために動いていく。各々の目的が重なり動き出す。

TO BE CONTINUE

冥王と覇王

北で黒い龍が動き出しアル、リーンは山頂まで駆け上がる。体力のある二人で良かったようだ。この二人でなければこうはいかなかっただろう。その頃、東に向かっていた二人はそちらで発展していた魔法科学の力により新たに同行していたシェイドとデルを加え北の首都に飛ばされていた。なんでも北の国との交易が途絶え原因を探って欲しいとのことらしい。その二組以外にもレイをリーダーにしたアル、リーン組への増援隊やタージェとゼシの追走隊が動いている。そして、アル、リーンは黒龍を止めようと果敢に挑む二人の少年達に出会っていた。

「ライムズ！ 準備いい？」

「OK！ アレン！」

『行くぜ！ 雪山絞殺事件簿テイク1！！』

明らかにおかしなネーミングセンスだが一応雪山をはうように登って来ていた例の黒龍の頭をキラキラ輝く合計20本の糸が抑えつけていた。ただ、この二人が抜かったのは岩や木などに糸を絡めずに使用したため力に耐えきれずに暴れられ近くの雪の絨毯に人型を作り埋もれた。

「今や！」

「リーン何を！」

ハルバートを振るい龍の右頬を打ちつけた。急な斜面を転がり落としたのだ。アルが細いワイヤーを取り出し同じく転がり落ちたビーストラしき少年達を引き上げている。いくらこの山で育ったとしても一度転がり落ちたら腹をくくるらしい。

「ふう……。大丈夫か？」

「ああ……。死ぬかと思っただぜ」

「同じく。姉さんはこの人だよ。こんなところになんの用だい？」

「君達の村の住民に避難をするように伝えに来た」

「悪いけど……。それは無理だよ」

「俺達は龍玉を守る使命があるんだ」

「龍玉？」

リーンがほぼ垂直な雪山を跳ね上がりながらアルに話しかけて来た。身軽で動きの俊敏な彼女に問ってはこれくらいならお茶の子さいさいらしい。二人の少年はよく見るとリーンと同じように尻尾と耳がある。

「アルうー！ 大丈夫かいな！」

「ええ！ アタシも二人も大丈夫！」

「ビースト……。しかも森オオカミ……」

「アレン……。どうしよう。可愛い」

「ああ……。ライムズ。都会のビーストってあんなに美人なのか？」

「俺に聞くな」

不思議そうに首をかしげ茶色の毛並みが整って尻尾を振っているリーンはハルバートを握りアルと二人で話し始めた。その頃のフィトとヴィヴィアは新たな仲間とともに北の国の奥地から山岳地帯より転げ落ちた巨大な龍を見ていた。目的は別とはいえ大きな障害になるのは確かだ。

「ほう……。なら俺と君達は利害が一致したわけだ。そして、君たちには伝えておこう。これは本人には言っではいけないがな」

「で、何なのよ。勿体ぶらないでよ」

「俺は何となくわかった。アンタはさつき弟を探しているって言ったな」

「まさか……ギルドの中に……」

「答えは簡単さ、俺の本名を聞けば一言でわかる」

「シェイドさん！ 焦らしすぎです！」

「悪いデル。だが、そこまで急ぐこともないだろう。俺の本名はバステル・クレア・スウォード」

「スウォード………ってまさか」

「やっぱりな。レイの兄さんか」

「義理だがな。アイツは孤児で親がそれを拾い俺は奴を可愛がった。まあ、覇者の素質は俺ではなく奴に………いや………懐古はまたの機会だ。俺たちもあそこに向かおう」

海岸線の戦車大隊はまだ生きている。だが兵士の姿は見えない。雪が降る中で四人が駆け抜ける。すると最後尾のデルがトラップにはまり敵のセンサーに触れてしまった。

「しまった！」

「走れ！ この現状は俺とフィト將軍で処理する」

敵の兵隊の銃口が四人に向けられたがヴィヴィアとデルはすぐに別の茂みに隠れ、フィトが表立って戦っている。シェイドは元々隠密機構にいたためか暗殺さながらに敵を倒していく。そして、アルとリーンの行き筋をたどる四人、レイ、ルミ、ルナ、マナもすでに交戦している。レイは中剣を構え同じく中剣を構える長身の角の生えた男と交戦している。加えマナ、ルナは深紅のドレスを着た色気の強い同じく長身の女性と攻撃魔法の撃ち合いを続けている。マナが守り、ルナが白い光の筋を幾筋も放つ構図だ。そしてルミも無骨な鋼爪を着けたオウガらしきマントをはおった男と人とは思えない戦闘をしている。

「やっ！」

「フン！」

「お前は誰だ！」

「貴様……その武術、ギアによく似ているな」

「師匠を知っているのか！」

「ほう師匠か……、消えゆく者に教えなどしないのが主義だが今回は特別だ。ふん……そいつは憎き俺の実の弟だ！」

剣と剣がぶつかるたびに火花が散り力のぶつけ合いにもつれ込む。明らかにレイの方が不利に見えるが現在の歩合は五分と五分だ。マナの防御魔法が力をふるいルナの特異な攻撃魔法は確かに敵を捕らえるが全く効かない。それどころかすり抜ける。

「近年まれに見る強き者か……我が弟子につかんか？」「お断りします！」

「私達にはファン先生がいるもの！」

戦いに進展が見られたのはルミと謎のマントだ。ルミにその男の記憶があり打ちつけ合いながら会話をしている。

「あなた……オウガナイトのトゥーロンね」

「俺を知ってるのか……ならなおさら消しておかなくてはいけくないな！」

「あたしを倒す？　あたしの斧は大地を砕くのよ………！」

アルとリーンが目指していた村……それは山頂近くに会ったのだ。集落はノースビーストが多く住む狩猟を元に生計をたてているらしい。そして、その龍玉の正体も判明した。この二人の任務はこれの搜索と死守。ライムズとアレンの双子に案内され首長に会いこちら

の事情を説明したようだ案外とフレンドリーで親しみ安い。ありがたいな固執する感はなく見られない。

「ともあれ、我らが一族の戦士を助けていただき感謝いたす。わしがここの首長で今は名もなきただの老父ということになりますじゃ」

「ご丁寧にありがとうございます。私の名前はボア・アロウ・ルーヌです」

「うちはリーン・ハルバートや。こんな北にビーストがおるとはちよつと意外やったで」

「ほう、長らく見ないがあなたは森オオカミのビーストさんですの？　もう一人のお嬢さんはヒューマンに近いが……フムフム、ハーフですな？　片方はビーストでもう片方はエーテリオン……」 「な、んでそこまで詳しく……」

「ふおおおお。この村には聖なる石がありましてな。運命はすべて教えてくれますわい。あなた方がこられることもそして、ここ、北の大地で”覇王”が目覚め再び世界の混沌が現れることも」

「覇王？　あの世界を導く指導者の？」

「その通り。聖があるなら魔も存在するのですよ。冥王が既に目覚めておる。もはや世界の動きは変えられないのじゃ」

「あの、覇王とは？」

「名は解らぬが覇の三刀を操る男こそその者じゃ」

「うち、もう何が何やか……」

「リーン……言葉が変よ」

「親父様！　下で動きました！」

その声が伝えたのは山腹で激しい砲火が起こったことだった。もちろん標的は例の黒い龍のようだが……。

「よかった……」

「よくないわよ。このドジ！」

「アデ！」

「お転婆娘！ 騒ぐな」

「うむ……あの龍のおかげで命拾いしたのは確かだ。早くこの場を離れよう」

それとほぼ同時刻、巨大な黒い魔法で作られた球体が放たれレイの上に落ちた……。それを目撃したルナやほかの敵の動きも止まった。中剣が無造作に地面に刺さり空中からはそれをあざ笑うように高らかな笑い声が聞こえてくる。ルミとトゥーロンの戦闘はそこで終わりトゥーロンは藪に消えルミはうつ伏せに横たわるレイの前に立った。

「ハハハハハハハハ！ 愉快で仕方がないぞ！ ハハハハハハハハハハハハ！ 覇の力とはこの程度か！ フハハハハハハ！」

「アンタ……その声は……なんて言ったっけ？」

「ルミさん！ プルトンですよ！ おとぎ話の冥界の王です」

「ふえ！ そんなヤバい奴なの？」

「ええ……彼を目覚めさせてはならなかったんです。……………これは私の責任でしょう。いえ、元私の責任です」

その時、ギルドの地下で術式の準備をしていたギアが立ち上がりファンにそのことを告げた。

「始まるぞ……この世が創られた最初の魔力の鼓動がな」

「早すぎるぞ！ 術式はまだ！」

「覇王が……いや……………レイが力を解き放つまでは大丈夫だ。だが急がなければならぬのは確かか……」

巨大な結晶を中心に術式を描きファンが東のギアが西の端に立ち両手を広げる。そして、その円形の魔法陣から白い蛍のような玉が

次々に湧き上がり結晶を包んで行く。

「マナさん？ あの……」

「離れないでください……。私はこの覇の力を持った少年を守らなくてはなりません。そして、アナタ達も」

ファンがハッとしたように目を開きいきなり詩の一部を口ずさみ始めた。翼を開きギアの見守る中で心を静めていく。

「私からか……」

『生と死の曲片第一章より……』

大いなる力により支配されし大空は私を抑え見えざる覆いに苦しめられた。私に破る力などなかった……。

空に私は居ない……

籠の中にて囁き……小さく羽ばたき

力を与えられても……

表すことはできない。ただ虚しく』

空からファンの声が響いた。澄んだ声が周りを包み込んで大地から魔法陣と同じ光の玉が湧き上がる。周りにいた敵味方全てが動きをとめそちらをみていた。

「先生……次は私です」

『生と死の曲片第二章より……』

籠を見つけ出し私も試みる。敷かれた見えない軸を主に回る無力な私に……力を使い……脱し……自ら宙を泳ぐことを。

力無く私は泳ぐ

与えられた道を……

私の心に問いかけた……本当はどうしたいの？

逃げていたのは私だった……』

ルナが呟きルミが周りを見回す。するとさらにたくさんの光の玉が湧き上がり二手に別れて行く。

「くっ……何故だ！ 何故、貴様は私の邪魔ばかりをするのだ！ 貴様など千年前に消しておくべきであった！」

黒い球体が今度はマナに向けて放たれた……。しかし、爆発は空しくも周りを消し飛ばすだけで全く効果がない。

『生と死の曲片最終章より』

覇を迎えし我らは抗い冥を倒すべく立ち上がる。物語の一編にすぎないものに運命を象られた私達……は。

決めるのは私達……

流されるままに生きては意味がない

前を向き立つのだ！

すべてをかけて抗え……自らの運命に』

山の上で龍と闘うリーンとアルに加えノースビーストの戦士達。巨大な相手に悪戦苦闘するもついにその時が訪れようとしていた。光の玉は山頂の龍玉に集まりもう一筋は意識がなく死体のように転がっているレイのところに集まる。すると、それをなんとしても阻止したいらしいプルトンが脇にいた長身の二人を払いのけマナに向けて邪悪な杖を振り回し闘う素振りを見せた。マナも魔法を使い防御をしているが次第に顔が厳しさを含み歯を食いしばり始めている。

「ハハハハハハハハ！ マナ！ 貴様も墜ちたな！ え？ 私の攻撃すら対処出来んのか！」

「くっ……」

「いいぞ！ いいぞ！ その表情！ 苦肉に悶えるその表情！」
「ハアッ！」

最後に力を使い果たしたのか押し返すと気絶しその場に倒れ込んでしまったマナ。そこにルミとルナが駆け寄りロッドとアックスを構え防御体勢を取っている。

「最後に最高の散り花を咲かせてやろう……闇黒龍ダークネスよ！」

山頂付近で暴れていた龍がいきなり方向転換しプルトンの頭上に現れた。そのころ村では見張りが中央大陸で起きている異変に気づき龍玉をそれに合わせて動かしていた。美しい魔法陣は大陸全土に広がりをもせる。

「おい！ 来たぞ！ 界印を解く時が！」

「界印？」

「リーンちゃん！ そっち持ってコイツから出てる光の筋をあの陣の中心に合わせて！」

「アル姉さんも！」

ギアが叫びファンと彼が声を揃えて魔力を最大限解放した。爆風に近いような巨大な風圧が中央大陸に吹き荒れ東西南北の大陸の一番高い山から伸びる光の筋が魔法陣の中心に集まりさらに大陸を包み込む。白い光の柱が何本も立ち上がり空からギアとファンの声が聞こえてくる。

『今こそ！ 界印を解き放つ時！ 天と地の誓いにより彼の者を解放する！』

同時に黒い閃光がマナやルミ、ルナを襲う……しかし、彼女達には当たらず代わりに神々しいまでに美しい光を放つ少年が剣をプルトンに向けて言葉を放った。闇の閃光は全て中和されたように消えた。憎々しげな顔をするプルトンはダークネスを駆り立て空に躍り出る。

「もう、お前の好きにはさせない。覚悟しろ！」

同時に中央大陸から白い光を帯びた龍が飛び立ち覚醒したレイを目指す。そして、山頂の村ではリーンが先導になり山から戦士達が降りていく。滑り降りるために使う木の板を使ってももの凄い速さで滑る。

「イヤッホゥー！！！！ これ楽しい！」

「リーンちゃん！ ホントに初めて！？」

「そだよ～～！！ イエイ～～！！」

ギルドに味方し平原を目指して行軍していくのだ。そこで敵を討つためにまずは情報を的確に伝えるのが一番効率がいい。二手に別れリーンと特攻する大隊と足の速いアルに付いて来れる護衛だ。リーンとは違いアルは木の枝を渡ながら走って行く。それに加えてこちらに移動してきたフィト、ヴィヴィア、デル、シェイドも参戦する腹積もりらしい。メカニックらしいデルが戦車をジャックし走っていく。運転はかなり下手くそだがシェイドだ。

「うわあああ！ シェイドさん右！ 右！」

「わかってる！」

平原でも小さいが見えて来た。

「小癪な！ 行くぞ！」

更にプルトンが飛び上がりレイに追いついた白い龍が頭を下げ乗るように話しかけてくる。空に舞い上がり対峙するのはもちろんプルトンとレイ……にらみ合いが続く。

「主よ……。我を目覚めさせたのであらば世界の平穏が目的か？」

「わからない……。だが、みんなが……。俺の仲間がみんな幸せになれる世の中にしたい」

「ふむ……。理解した。我が主として不足はないと見た」

「ありがとう。俺はアイツを倒す」

「龍の方は操られておるだけのようだ。我がなんとかしよう」

向こうの龍から飛び上がりレイも龍から飛び上がる。プルトンの放つ異質な黒い光と覚醒したレイの放つ綺麗な金色の光がぶつかり

渦を巻き離れ波動を生み出す……。下に集まったみなはそれと龍同士の戦いを見ている。壮絶な体たりや爪の応酬、ブレス攻撃……。勇んで集まったはいいが空にはいけない。レイに運が付いたのか今回の決着はレイに軍配が上がった。剣がふかふかした雪に落ちその近くにレイも落ちた。プルトン捨て台詞を残して闇の中に消えて行った。レイはその後意識を失い見つけるのに苦労してしまったが周りのメンバーが応急処置しギルドまで運んだ。

「ここは！ 俺の部屋……か」

「レイ君！」

「マナ！？ おい！ いきなり何で……」

「うわあああん！……ヒッグ！……心配したんだからあ！」

「マナ……ごめんよ」

ドアをノックする音が聞こえ「入っていいか？」と問われた瞬間にマナが飛び退き涙をふきすぐに座り直して「どうぞ」とすました声で答えた。入って来たのはギアだった。

「レイ……。お前に本当のことを伝えるのはまだ先になる……だが」

「師匠の言うことなら疑いません」

「レイ……独り立ちだ……。で、だ！ お前にやって欲しいことがある。来週に俺とファンが結婚することになった……。んで、司会を任せたい。ちなみに俺達の親の代わりはゼシさんとシドさんだ」

「おめでとうございます」

「お幸せに！」

急な話だったがこれで職場結婚をするペアは二組になった。シドさんは既にゼシさんと結婚し子供もいる。

「じゃ、お邪魔みたいだから退散するかな」

ギアさんが居なくなりマナが顔を赤くして目をそらしている。たまに視線が交差するがマナはそのたびに口を開き閉じる。

「レイ君……。今、その……。今、伝えたいことが……。そのす、す……す……」

「レイさん！」

「レイ！ あんた大丈夫かいな！」

「まあ、あの様子なら大丈夫かな？」

「レイ！ お前にはビックリさせられるぜ全くよお」
「……………」

マナが部屋を出て行き裏庭に出たようだ。そこにゼシが現れマナが腰を下ろした木陰に歩き出した。

「レイのことが気になるか？」

「はい……。本当は……」

「言わなくていい。みていればわかるからな。で、お前らにいい知らせだ。ここから少し離れた浜に細工に持って来いの珊瑚や貝殻、流木が打ちあがる海岸があるんだ。そこに二人で行っておいで」

「そ、そんな急に……」

「大丈夫だよ。レイは鈍いがそれなりに頭はいい。いつか気づくさ……お前も仕掛けてみたらどうだ？」

ゼシは以前より更に綺麗になり良き母親として……。そして、ギルドの母として周りからの信頼はそれなりに厚い。特にマナやファンのようにかなり近い存在だと感じている人も少なくないのだ。

「私からすればお前やファンは妹みたいな感じなのさ。だからできるだけ見守ってやりたいし悪い虫が付かないか心配なんだ。だが、レイなら安心できる。ここの女の子と称されるであろう奴はみなレ

イを狙ってるがな」

「それは知ってます」

「なら、行っておいで……レイの休息も兼ねてな」

「はい！」

『私にとっては……。皆愛する息子や娘たち……。私はこの子達を守る』

「ゼシ。心配は要らないよ。息子たちは負けないからな」

巨大な頭が2つ覗き込んでいる。黒い頭と白い頭は新たな住民として近くの森に住んでいる。名前は黒龍からストラ・ダークネスで白龍はタリス・シ・クリード……。彼らはレイの働きで協力してくれるらしい。

「貴様等など我らから比べれば短命なものよ。我らと提供を組む上で……」

「それでもいい……。私はお前たちやシドと共に守ればな」

白いワンピースを着た華奢な少女が自室に帰ると既にレイの周りには人はいなかった。マナが後ろから近寄り両目を隠しクスクス笑っている。レイの背中に抱きつく形になり顎を頭に乗せ目を閉じた。椅子に座っているレイは誰か心当たりを必死で探しているようだ。

「だあゝれだ？」

「マナ？」

「正解！ デートに行かない？」

「で、デート？」

「うん、何か用事あった？」

「ないよ。行こうか」

· · · · ·
T
O

B
E

C
O
N
T
E
N
T
S
· · · · ·

覇王

レイとマナがゼシに勧められて向かったのは中央大陸の西側にある海岸だった。その周辺は確かに綺麗だ。日の光が通り木漏れ日を作る森の道や肌理の細かい砂浜がある。岩場や洞窟もあり二人は感嘆の声を上げて二人で寄り添っていた。二人をここまで送って来たのはクリードだ。美しい白龍は岩場に頭を寝かせて寝ている。その隣にはダークネスが寄り添うように寝ていた。クリードは人間の年齢に相当するとまだ18程だという。ちなみにダークネスは17程でもうすぐ18になるころらしい。

「冷たくて気持ちいいなあ」

「マナも楽しそうだし……来て正解だったな」

「レイ様。少し大人になれましたね」

「マーク01？」

「以前とは少し雰囲気が違うのですよ。ですが、いくら休んでいいとはいえ武具を全て置いて来るのはあまり感心できませんね」

マーク01の説教を受けながら砂を手に取り眺めているマナに目を向ける。金色の髪がなびき短めのため髪留めなどはつけていない。そのかわり首からは金剛石の指輪がネックレスになり揺れている。レイも赤い宝石の指輪を首から下げていた。

「レイ君！」

「どうした？」

「こっちに來て遊ばーよお！」

「おう！」

その時マーク01が追いかけてようとするが明らかにクリードが翼

で止めにはいった。

「野暮はやめんか……」

「しかし」

「お主……我らが主の恋路を邪魔する気か？」

「ふむ……」

浜に並んで座り話している二人。いつもよりニコニコしているマナを見ながら寄り添っているのだ。

「どうしたの？」

「ん？」

「綺麗だなあと」

「そうだよね……。海も森も綺麗だしいいところだよね」

「いや何でもない」

「むう……気になります」

「はあ……マナのことさ」

「ふえ!？」

「あ! ごめん! 急に変なことって」

「そんなことないです……。う、嬉しい……。かも」

マナが顔を赤くして下を向いた。白い肌が赤くなり耳まで真っ赤になっている。ゆっくりレイが立ち上がりマナに手を差し出して立たせ貝殻拾いを始めた。所変わりギルド本部……。

「ねえ……フィット」

「何？」

「ホントにアタシなんかでよかったの？」

「こんな美人をほっとくアホはいないよ。綺麗な髪と肌。好きだよ……アル」

「アルとフィット？ それは真っ昼間からすることかいな」

「いいだろ？ 社恋は自由だしな」

「あ！ 馬鹿！ 変なとこ触らないでよ！」

「リーンもいつまでもレイに固執せずに新しい恋を始めたらどうだ？」

「それに関してはもう抜かりないで？ うちかて未練がましくつきまとうきはないんでな」

「そうか……マナかあ。運命ってすごいんだな」

そこにファンが現れしかめ面で任務の話を始めた。翼が小さく揺れその後ろからはギアも現れて姿を見せた。

「そこのいちやついてる二人……お前等に任務だ。服を着たら下に来い。シドさんがまっている」

「丁度いいな。リーン。アレンとライムズを連れて任務だ。南のビーストに協力を仰ぐんだ。今は大乱期で中小の部族は危ないからな。他にもノースビーストを数名連れていけ」

「わかりました」

「了解や」

再び西海岸。貝殻を拾いながら歩く。途中でマナがマーク01の存在に気づき見回すとクリードと話していた。レイはいつになく軽装で赤いシャツにすねほどの長さのズボンをはいている。かっこうは現代の少年と変わらないだろう。赤い髪と瞳は以前とは違い優しさを含んでいた。そして……覚醒した彼は能力を自由に解放できるのだ。バイブル……創世の書によれば覇王は冥王を排し全ての人の父になったという。そうするとその妻は母となるのだろう。

「……」

「あ……いいものの発見」

「何々？」

「ほら……これどうかな？」

「あ……。レイ君は変わったよね。覚醒と同時にさ」

「多分、俺の中で本来の俺が目覚めたんだよ。不安定だった俺の断片を取り込んでね。こんな俺だと嫌？」

「そ！ そんなこと！ 逆にカッコよくなって……私じゃ釣り合わないかなって。アルさんみたいに綺麗じゃないし、リーンちゃんみたいに活発でもないし、ヴィヴィアちゃんみたいにはつきりものいえないし。ホントにいいのかなって」

「これなら信じられる？」

いきなり正面から抱かれて驚いたらしい顔を真っ赤にして体側の手が震えている。一度離して昼食にしようと告げ木陰のある森側に行く。

「まったく……覇王もようやる。我らが寝ているとも思っておったのだろうか？」

「主は気づいておられたよ。ダークネス。我らが話す機会をくださったのだ」

「ふむ……そうともてれるのお。我もそなたとは話してみたいと思うておったところじゃ」

「そうかならば話ははやいな」

ギルド本部。現在はこの中央西区での貢献を買われ各国から志願者が現れるほどの大きさになった。そして、レイが覇王となってからはその人気に拍車がかかり止まらないのだ。加えてルナがシドに頼んで構内に設立した孤児院と魔法学校の影響でこのギルドはかなりの巨大な組織になっていた。

「で、シャドーさんはもうレイを追わないの？ お兄さんとして面

倒を……」

「ヴィヴィア……お前にだってわかるだろう。実の姉が近くにいるも気づかない。ましてや血のつながらない数年暮らした程度の兄などいてもしかたないのだ」

「いいじゃない。私とアナタは結ばれたんだし？」

「話が飛んだぞ……ルミ」

「はあ。お姉ちゃんもっと他に気にする点が少々あると思うけどね」

「そうかなあ。おっぱいだってヴィヴィアよりはあるよ？」

「ルミ……その発言だ。危ないのは……」

ギアがギルド本部の一番高い塔に登り実務をサボっている。今のところは小休止なのか大きな戦闘は起こっていない。そして、新たに仲間が加わり支部まで増えたこのギルドの名前をタージェが決めていた。門扉の横にはめ込んだ石に刻まれている。

創立者……シド・タージェ

組織名……ホーリ・プリセクト

「確かに聖域だけどさ。中央森林区はさ。ねえ、ルナちゃん？　僕は一応彼氏だよ？　それに雑用させるの？」

「デルは口答えしないの。私についていたいなら手伝ってよ。まだ師匠に言われて仕入れなくちゃいけない魔法書けっこうあるんだから」

「……明るくなった途端にこれかよ」

「何か言った？」

「いえ、何も……」

次々にめまぐるしく移り変わるシーンを動画と位置付けるなら俺たちはその一部だろう。世界が崩落してもその形は崩れず神とでも

言う名のとりてによって世界は動かされる。

「いたいた！ 早く降りて来い！ 執務がたまりすぎで困っているのだ」

「もう少し待ってくれ……今、取りこんでる」

「ギア、早くこい！ 執務は上官のせねばならぬことだ！」

「すぐに行くからさ」

「あああ……。わかった」

ギアの頭の中にはどのような物語があるのだろうか。はたまた……ファンには？

「この物語の神はアンタか？」

『初めましてかな？ 悠久の時の狭間より来たよ。ギア、君が聞きたいことはこの世界の行く末だね？』

「ああ、アンタが紡ぐ世界は……どうなるんだ？」

『僕にもわからない。これは君達の問題なんだ。確かに僕は君を今ここで殺すこともできるけれど……この世界には僕は存在しないのさ。だから、神なんていない。強いていえば君達全てが神なのさ。全ての糸は絡みあって紐になり綱になり一つの塊になり絡みあう。このすべての事象が重なることで世界は成り立つのさ。君達の運命は必然の重なり合いなんだ。どこに糸をのばすかで変わる。矛盾してるけど無数にある横糸に縦糸を絡めて運命をつくるなら必然が選べることになる。それならば必然はなく世界は偶然でなりたつという定理がなりたつのだ。だから君の選択で僕の運命も変わっていく。ただねギア……君の糸はまだ長いんだ。けして切ってはいけないよ？ 誰かが悲しむ。そして違う世界の君が僕だ。二度と過ちは繰り返さないでくれ』

「わかった。アンタの忠告を胸に留めておくよ」

宙に浮くギアにそっくりな学生服の少年が消えた。その後はギアも屋根から飛び降りて着地し歩いていく。何が彼に起きたのかは知らないが彼も何か考えているのだ。

「レイ君……その……あの」

「いきなりで悪いけど好きなんだ……」

「ふえ!？」

「いつもいいなって思ってた。頑張ってるマナを見ててさ。それと……なんでかは知らないけど助けた時から惹かれるんだ。君にね」

「同じ……」

「ん？」

「私も同じ……」

「マナ……」

「レイ君!」

まったく……こちらは甘い展開を迎えている。唇を重ねて横になった。

「マアマア! マナお姉ちゃんはあ?」

「ミシィ……お姉ちゃんはお仕事に行ってるわ」

「師匠はあ?」

「アルファ……レイ君もよ」

『つまんなあい!』

「我慢なさい!」

「今日はみんな出かけてしまったからな」「あなた! また執務を抜け出して!」

「いや、休憩だ」

「どうかしたんですかあ?」

「ルミちゃん! それにシェイド君! この子達の相手をしてくれない?」

「いいですよ」

「もちろん」

3日間の猶予のうちにレイとマナはその辺りにあるゼシが持つ所有地で寝泊まりしている。かなり綺麗な石造りの建物はかなりしっかりした作りになっている。既に荷物はマーク01が運び込んでいるからそこは問題ない。

「今日はありがとう……楽しめたよ」

「……うう。意地悪しないでくださいよ」

「また……こような」

「うん。また……ね」

鞆から拾った貝を出し見繕っている。綺麗な物を選びすぐ机に並べて良さそうなものを鞆に再びしまう。

「レイ君は過去の私と話したの？」

「ああ、封印されたマナは何も教えてはくれなかったけど……」

「……記憶の一部が戻ってきたの」

「あの時だな？」

「うん、私じゃない私が言ってたの再び歴史が繰り返されあなたが力を取り戻すだろうって」「そうかもしれないな。多分今はその発端にさしかかっているのかもしれない」

「でも、私には解るの……歴史は繰り返されない。あなたと私でこの世界は変わるから。私じゃない私が言ってたから……それはわかる」

椅子に座り二人で夕食にする中で話したことだった。この世界には何らかの現象が影響し変わるらしい。

「マナ……それってどうすれば」

「わからないわ。レイ君と私が結ばれることで変わるらしいけど……ただ、私の力はあなたとは対局の力を持つことは教えてもらったの。全てを受け止め吸収する力」

「俺はそれまでの体制を砕く無限の力」

「それより料理のほうは……」

「美味しいよ」

「嬉しい……」

休暇はこれから数日続く。その頃東の雅の国で大きな変動が起きていた。帝が崩御したのだ。

「うう……何故こんなことに」

「仕方なからう……これも天命なんだ。紅蓮よ」

「そうですが修羅様」

「氷鎧よ。それで？ 調査は進んだのか？」

「は、それが出所が不明で少々胡散臭い感が否めませんが南朝の者の生き残りが数名中央大陸で生き残っておりそ奴らの仕業と考えるのが……」

「ふん……公家どもはそれを知っているのか？」

「は、この情報もとは公家からでして……」

「ならば……戦か」

「そうですね」

「紅蓮と氷鎧は方々に居る七人衆を集めよ。今回は総力を持って向かう」

「は！」

「御意のままに」

次の日に七人衆と呼ばれた大柄な男たちが集まり始めた。城外はあわただしく兵が動き巨大な軍勢が終結しつつある。高台にある櫓

にいる白銀の髪の小柄な少年が指揮を執っている。その中で先ほどの紅蓮、氷鎧以外のメンバーがそろい指揮を始めている。呼ばれたなはどれも名高い名将と歌われるものばかりだった。

「雷軌！ 西側から迂回し右の西区域の偵察を開始しろ」

「は」

「風崖はその後ろにつき攻撃合図を待つ」

「……は」

「岩鋼は本隊前衛だ」

「御意」

「宙慧は俺の後ろの防備」

「……」

「最後だ。闇剛は間諜を頼む」

「解りました。お……お兄様」

実は既にその会話はシェイドに聞かれていた。彼も間諜で技量は明らかに彼の方が上でそれに誰も気づかず情報はタージェの元へ。全員は動かない。無駄な死者が出る可能性のある巨大な戦争は強大な力を持ちなおかつ年長の者や幹部クラスの者がある程度まで相手を抑えられるまで交代で相手をする。それが最良の動きだ。現在の近況上ではレイとマナな参戦は無いだろう。

「う……。朝？」

「おはよう。マナ」

「レイ君。もう朝なの？」

「そうだよ」

「寝顔見た？」

「うん」

「恥ずかしい……」

顔を真っ赤にして手でシーツをつかみ顔を半分隠した。いくらく
せのないサラサラした短い髪でも寝れば寝癖は着く。今回の寝癖は
ひどいらしく彼女はずっとシーツをかぶったままあたふたしている。

「ひゃう！ 来ちゃだめです！ まだ服着てない……」

「ほら、服」

「ありがとうございます」

「今日は森に行こう。クリードが案内してくれるってさ」

「うん、そうだね」

ギルドの部屋。地下にあるギアの研究スペースが酒造に変わり巨大な城郭の一部に新居を構えた。ファンはその外郭にある魔法学校の講師に正式に採用され弟子のルナをそばに置き指導もしている。さらにそのまわりではタージェが町からの志願者を募り軍隊とまではいかないが大きな自警団ほどの組織の訓練をしている。彼はもともと一国の王でありそういった内政や軍事など国政には強い。その妻のゼシは細工師として腕をふるい武器や装飾品、雑貨などの物を作る教室や彼女は指先が器用なのと段取りがとってもいい料理や裁縫などの家事も教えている。そして、新たなスタートを切ったルミとヴィヴィアは姉妹という事実が発覚し二人で協力して保育所を立ち上げている。

「ここはこうであるからして……魔法陣の展開はとても重要であり私も陣と魔法具の相性は気にしている。君たちも……」

「失礼するぞ。ファンは居るか？」

「こら！ ギア！ 授業中は来るなと……」

「皆、悪いが即時避難命令が出た落ち着いて荷物をまとめてギルド本部の大広間にいってくれ。親御さんも既に着ている」

「どうということだ？」

「嫌なことになった……よりによって……“魔王”が動くとは」

「何？」

「魔王……」

「それって……」

生徒からもつぶやきが漏れる。

「全体よく聞け！　今回は君たちの訓練の成果を見せる時だ。自分の家族は君たちに本部の守りを頼むぞ」

『おおおおお！！！！！！！！！！！』

訓練兵の皆が武器を置き旗や担架とリュックなどを担ぎ次々に分隊ごとに分かれて走って行く。巨大な城塞の隅々にその伝達が進む中上官や幹部クラスが任務を切り上げ門をくぐって本部に駆け込んできた。

「ファンねえさん！」

「リーンかお帰り。状況は奥に居るシドさんから聞け。私は他の者の配置を説明する」

「アレ……」

「どうした？ ライムズ」

「巨大な覇気の塊が来る」

「それはさっきから感じてる。レイの放つものと同じようなものだ」

アルとフィトも帰還し全戦力が集結し陣張りが完成していく。前戦には年長組が全員赴く。出るメンバーは一陣がファン、ギア。次にルミとシェイド。三番目にアルとこのメンバー内では若年ながら志願したフィト。最後の砦が最年長組のゼシとタージェ。現在には行軍状況をシェイドが探っているがまだ動きは無いらしい。

「綺麗……こんなところが中央大陸にあったんだ」

「うむ……空を世界に君する我らしか知らぬだろうな。しかし、こ
こは聖地なのだ。我々のな。主よ我らが仲間の意思を汲んでこ奴ら
を連れて行ってくれ」

「解った」

「そんな……」

そこはたくさんの花々が咲き乱れ木々が木漏れ日を落とす静かな
場所だった。そこには巨大な頭蓋骨やあばら骨……爪や牙などが岩
のようにごろごろ転がっている。

「マーク01よ格納を急げ。胸騒ぎがする」

「わかりました」

「主たちはこの周辺でゆっくりしてくれ。……うぬ。月の王女
も感ずいたようじゃな」

「ダークネス……行けないの？」

「うぬ……。こ奴らはな龍騎士なのじゃ。かつて冥府の王との戦に
て尽力し息絶えた者たちたとえ行けたとて我らは見届けるまでは動
けんのじゃ。それまでは主らはゆるりとして体を休めるが得策じゃ」

その場でレイが巨大で無骨な大剣を地面に突き立て何かをつぶや
き残りの三本の剣も同様に突きたてた。その後はマナと共に海岸線
に出て歩いている。

「レイ君は私との初めての会話覚えてる？」

「いろいろあってわかんないけど……」

「今の私になってからの」

「ああ、記憶がなかったところのか。正直驚いたよ。こんな華奢な女
の子が封印されてるなんて思いもよらなかったしな」

「私、これは運命だと思うの。私とレイ君が出会えたのはね。記憶
の断片にだけど貴方にそっくりな男の子の記憶があるの。でも、そ

の子は死んでしまったみたい。だけど、ギアさんやファンさんが貴方や私の運命を変えようとしてるのかも知れないわ。なら、私たちも」

「そうだね。でも、断片なら俺にもある。俺はこの世界で生きるらしい。永遠に……」

そして、ついに東の大陸。雅の国が動き出した。無知な公家衆が將軍である修羅に圧力をかけついに大軍団を中央大陸に送り込むことになったのだ。彼はそれを望んではいなかったが民主会議国家でありがちな政党独裁によって支配された国の議会決定には逆らえないのが実情というところだろう。

「修羅様……」

「紅蓮、気にするな。本来女のお前を戦場に連れだしたくはなかったのだが……」

「バカなことを……」

「お前は俺を守る」

「氷鎧……あんたなんか守られたくないのよ!」

行軍はゆっくり行うようだ。無益な戦いはしない主義らしい將軍の修羅とそのほかの武官はできる限りの死者を出さずに本国へ帰りたいらしい。今のところはその理念にかなった動きができているからいいもののそうもいかない事態になって行くのだ。なぜなら……裏で手を引く者がいたから……。

「ふん……スケアよ首尾は上々のようだな」

「は、プルトン閣下」

「ククク、これで、東と南が俺の物となるのだ。クルーエルは来たか?」

「はい、今朝がたここへ」

「ふむ、それで。オニキスよ貴様はどうなのだ？」

「フフフ……主よ。そこまで簡単に結果は出ませんか？ わしが術式をかけてから24時間は必要ですから」

「ふむ、俺もあまりいい予感させぬ。誰かがこの世界におらぬはずの人が出入りしたようだ。すこし。プランを変更せねばならぬな」

海岸線で並んで座る二人の目の前に巨大な前足が落ちて来た。黒い鱗の塊のような無骨な腕。龍族とはそういう物らしい。赤く輝く爪が三本際立つ手がマナを掬いあげた。

「キャ！」

「済まぬ。主よ。急がねば……霸王を届けねば」

マーク01がレイに鎧と四本の剣を手渡し金色のオーラを放つ。隣に舞い降り手をダークネスと同じように差し出したクリードに乗りそのまま背中に這いあがった。クリードがダークネスに合図をしマーク01はマナの手に治まった。

「行こう！ 改新の地へ！」

「うぬ、行こう！」

『我らが故郷へ！』

二頭の龍が空に舞う頃にギルドから少し離れた荒野の真ん中で第一陣の二人が構えている。そして、敵の槍兵がルミへ突き立てようと走りこんでくるが……。

「この鎌は……お前らの力を奪う！」

味方の攻撃は数が少ない割に強大で敵の兵に大きなダメージを与えるが殺しはしない。特にギアはレイから聞いて敗戦後の残兵の悲

しみと運命をよく知っているのだ。そして、それに同調したファンも結界を使って攻撃隊の進路を限定するにとどめているらしい。

「ふむふむ……。相手はかの有名なオーブ・ギア・オーガか。面倒だな」

「はい、報告によればその相方は翼がある女だそうです。光魔法の結界術にたけているようで味方の前戦隊は苦戦している模様です」

「ふふん……。なら、俺が出よう」

「は？」

「燃えないか？ 現代最強の戦略家と魔導師が組んでいるんだ。面白いができるだろうな。久々だ。こんなに燃えるのは」

「まさか！ スフィア・ファン・アイリスですか！」

「そうだろう。アイツらは仲が良かったからな。それに俺のなじみだ……。やつらがくつついていることくらい知っている」

軍配を隣に居た兵士に預けかなり大きな薙ぎ払い槍を陣所から持ち出した。4メートルと少しはアルその巨大な槍を軽々と片手でもって歩きだす。白銀の短髪が風でなびく中陣所が大騒ぎになり敵軍の兵士が負傷者や味方を担いで逃げていく。そして、放った言葉は……。

『修羅様が前に出るぞーーーーー！』

TO BE CONTINUE

魔王覚醒

『魔王と霸王が相対し世界の歪が広がりを見せる。

我らの二人の王……避けられぬ古よりの理の中

我らは皆臣下を集い大いなる戦の幕開けを見る。

魔王の力と霸王の力によりて世界を破壊し冥界に導かん神の力を滅する力を生みださん。

光と闇は二つで一つ……我らは集う彼らの元に……心を一つに全てをかけて我らは集う。

皆と集いし光と闇はすべてをかけて力を尽くさん』

巨大な爆発が上空のレイに見えた。マナも同じく気づき顔を合わせて二頭の巨竜はなおも翼を大きく開きはるか上空に飛び上がり急降下に入る。細く回転しながら巨大な槍のように落ちていく。ただ爆発は次々に場所を変え最果ての地と呼ばれる中央大陸北部の遺跡地帯でさらに激しさを増す。黒い閃光と白い結界の断片が見える。どう見てもファンとギアが戦闘をしているのだ。西の大陸では巨大な雷雲が立ち込めそれをかき回すように風の塊が渦を巻き雷と共鳴し大きなエネルギー波がまわりを囲んでいる。こちらはフィトとアルが奮戦しているらしい。

「ファン！ 右側上弦三十度と左側上弦五度に面積4平方メートルの結界を……」

「まどろっこしい！ これでどうだ！」

「そんな物で俺の攻撃をはじけるとでも思ったか！」

巨大な薙ぎ払い槍を大きく振り簡単とはいかないが結界に刃を入れた。ギアに到達する前に刃は地面に突き立てられそれは回避の時間を与えてしまう。加え既に異形へと変身しているギアの鱗は鋼よりも堅い。

「あたしの力！ なめんじゃないわよ！」

「アル！ 無理するな！」

「五月蠅い！ これが本来のあたしだ！」

「俺は修羅様に尽くすのみ」

雷の魔力同士がぶつかり巨大な爆発を生んでいる。雷の波動は大型の雷の波動を凝縮して放つ武器から放たれている。アルは雷神の弓でそれに引けを取らないどころか圧し勝っているようだ。

「それが我らの務め！」

ナックルをつけた拳を駆使し音速のラッシュを繰り返すフィートの相手はギアに似た姿を持つ風崖という少年だった。彼はオウガらしく一撃がかなり大きいが今は速度の上で勝るフィートが権勢を握った形だ。それでも巨大な風の塊が衝突し合うことで氣候をねじ曲げ始めてしまった。

「こんなに早く大将たちと当たるとはな」

「リーンか……懐かしい。可愛い姪はどれほど力をあげたかな？」

炎と氷の武器が猛威をふるう。中央大陸西部に根を張るギルド、ホーリ・プリセクトに大群を率いて進軍してきた紅蓮と氷鎧の二人だ。そこにはビーストのアレン、ライムズ兄弟とリーン。加えて元

軍の教官であつたルミがシェイドを横に侍らせ仁王立ちで並んでいる。

「やあああああ！ 貴様の顔には覚えがあるぞ！」

「そっちこそ！ 名のある名将だな！ 我が名は軍名ルミ・アクス・リフ！ 本名オールクス・ヴィオ！」

「我が名は紅蓮！ 軍名は朱雀槍」

アレンとライムズを従えてリーンがハルバートを振り回しながら氷鎗の目の前に躍り出た。ただ、次の瞬間に氷鎗は微笑みリーンは一歩後ずさった。

「うちもビーストじゃ知れた名だよ！」

「知っている。俺の姪だからな。久しぶりだなリーン」

「うえ！ アイス・ハルバート！ おっちゃんまだ、生きとったんか！？」

「俺らは北のビースト！ アレンと……」

「ライムズだ！ 以後よろしくう！」

その頃に異変が起こり始めた。それは巨大な紫色の異様な光を放ち始まったのだ。中央大陸の“聖霊森林区”にありレイの力で崩壊し力を失っていたはずの遺跡が内側から再構成され遺跡としての機能をとりもどしたのである。そこから黒いオーラの翼を広げた男とそれに続く数人の部下が各々の様式で滑空している。それに気付いたゼシとタージェが敵味方関わらず周りに声をかけてうごき出した。そして、魔王がギアの攻撃を受け流しそちらに視線を送っている。策士としての才能の高い彼らは既にその状況の悪さに気づいたらしい。ギアもファンを連れてそちらに飛んで行った。

「止める！ オーブ・ギア・オーガよ！！ 貴様も気づいているだ

ろう！ 大天使アイリスお前もだ！」

「今は昔の呼び方で問題ない。……それよりお前体は大丈夫なのか？」

「言うな。ギア、行くぞ。どうやら我らははめられたようだぞ」

「そのようだな……」

「どういふことだ！！ 私にはまだ……」

「ファン……行けばわかる。今は急ぐんだ！」

東の国の後続隊の大将である岩鋼と宙慧シェイドの伝報を得て前線に向かい、シド・タージェとクロス・ゼシの二人に合流し緊急の合同作戦に移行する事に同意した。まだ到着していないレイとマナは二人の力で陸を移動している。原因は何者かが張った強力な結界に阻まれたからだ。空に作られた巨大な結界は言うまでもなく進路や退路を断っている。二頭が通れないためマナとレイが走るはめになったのだ。二人は以前にレイが遺跡の結界を崩したのと同じ容量で彼が一部を崩して二人は入れたようだがクリードとダークネスは通れずにダークネスの角とクリードの爪で傷を広げようとしている形なのである。

「ちょっとまって！ 様子がおかしい……嫌な気が近づいてる！」

「ああ、急ごう！ この気は冥王だ！ ヤツめまた力を増してきている」

「私も力を使うから……闘おう！」

マナ一人がすっぱり入る半径一メートルほどの結界に入り空中をすべるように移動していく。レイも覇王の力を解放し波動を体から放ちおよそ人とは思えない速度で滑空していく。そして、一番戦闘をしたがらないこの人が最初に戦闘を開始している。

「ここは通せないわね。この嫌な空気の元凶は貴方でしょうから」

「ほう、貴様は？ 意外と感の働く者も居るようだ。よし、俺も名乗ろう我が名はプルトン」

「冥王ね……。私はシド・タージェが妻タージェ・ゼシ。前姓はクロスここは私の管轄なんだ。通しはしない。私の愛する夫やギルドの子供たち、兄弟には手を出させない」

「俺を倒しこの茶番を終わらせるか……。それは無理なことだ」

後ろにいる深紅の派手なドレスに長いロッドを持つ女が不適な笑みを浮かべ一言呟いた。そのすぐ後には子供まで同じように笑い出し言葉を次いでくる。

「無駄なことよのう」

「僕一人で十分だよ。確かに強そうだけどね」

ゼシの目が緋色から紺色に変化し魔力の壁が膨張していく。その近くにはタージェがいるが今は見守るようだ。他にもいろいろな面々の顔がうかがえる。魔力の壁が消え中から服装の変化したゼシが現れる。

「あれがアイツの本当の姿。北の国の最古の血筋を受け継ぐゼシにしかできない最古の魔法だ。あの魔法は強力すぎる」

「遅くなりました！ ゼ……。ゼシさん。あの姿は」

「シドさん……。彼女は？ どうして？」

「私の力はこんなものではない。来い私が倒せないことはわかっている。お前は私の妹の思い人が倒してくれよう」

空中に細い短剣が無数に浮き敵を襲う。数人の名前もしれないただのお付きと思われる敵が数多く突き倒れ血塗れの肉塊になったがさすがに上位ランクたちには刃がとおらない。

「豪雪!!」

雪と突風が吹き荒れ更に地面が氷に包まれ始めた。地面からは次々に氷柱が現れプルトンや他の敵を包むが斬り崩されたり普通に回避してきたりしている。そのまま彼女に攻撃を繰り返したのは両刃の剣を構えたオーブ・スケア・オーガだった。しかし、彼女も負けていない。

「妾として剣の腕には覚えがある。今は隠しこそしているがな……我が剣を見よ!」

大きさはそこまで大きくない。だが歪な形の長剣は切れ味鋭くスケアの剣を一刀両断した。大きな剣は見る影もなくなってしまった。

「ほう……意外とやるな。オニキス! 出番だ!」

黒い炎のようなものが次々に飛んでいく恐ろしいスピードでさすがのゼシもついて行けず爆風に吹き飛ばされ後ろで控えていたタージェにキャッチされた。そして、元西の国の王の力を暴発させた。最強の力は歯止めの止まらない躍動を生み大地をゆがませた。治まることの知らない巨大な力によってゼシへのプルトンやスケアの攻撃は阻止された。

「夫婦は二人で一つだろ?」

「シド……」

大震神の力で巨大な土塊が壁になりその他の攻撃をすべてなくしていく。大きな衝撃で地震を起こしたり地面に亀裂を入れ川の軌道を変え土地に大きな変化が出ている。その地域以外にも北の大陸にある大地溝からは溶岩が噴出し西の大陸近くの荒野は大きな大絶壁

を残し大陸と切り離される。南の海域では海底火山。東の大陸では地崩れや大地の基軸事態を変化させていくのだ。そこに少し遅れてアル、フィト、リーン、アレン、ライムズ、他の面々がそれぞれの武器を構えて集まり最後にレイとマナを残すのみとなった。

「七人衆よ俺に続け！ やつが事の発端だ！ やつの首を上げるぞ！」

『おおおおおおお！！！！！！！！！！』

「俺たちも動くぞ！」

「アレン！」

「おう、ライムズ！」

フィトとアルが飛び上がり各々の特徴を合わせスクエアに攻撃を集中させる。それを抑えるようにイオが大きな穂先の槍を振りかざしフィトの腕を落としにかかった。だがアレンとライムズの五指念糸が彼女の腕をからめ捕り吊るし上げる。

「解ってるがな！」

「ええ、レイが来るまでは何とかもたせないと」

それを力で抑えて回避したらしいイオに追撃をかけたのはギアとの訓練で力を付けたリーンだ。猛然と双方が槍を振り大きな金属音を立てながら戦って膠着状態にある。レイたちも急いで戦闘の急転地へ向かう。魔王こと修羅の攻撃は恐ろしいの一言に尽きる物だった。

「食らえ！ 我が闇の力に葬ってくれる！」

「プルトン様！ ぐあ！」

「ふん！ クズが粹がりおる！」

タージェの能力の大震神の能力と合わせり加えゼシのアイス・ク
イーン的能力もさらに加わり大規模な総力戦になりつつある。彼の
力は闇そのものであり巨大な能力を持つ。体内のエネルギーを闇の
力で増幅し大きな力に変える。彼は魔王とはいえ元はヒューマンの
原型。オリジナルのヒューマンだ。体は強くない……それにオウガ
並の筋力増強に代謝の能力増強を行う。それは大きなリスクを伴い
彼の体をむしばむのだ。

「ぐ……ここに来て……」

「ほう、普通の人間ごときでこの俺に刃向かおうしていたのか！
フハハハハハ！ 貴様は真の闇を知らない！ 混沌ではなく静寂
の闇に落としてくれる！」

巨大な魔力のぶつかり合いが起こりながらもはや止まることのないこの戦闘は大陸を揺るがすほどのものとなっている。それでも黒いオーラをまとう彼の力はどんどん……みるみるうちに落ちていく。翼のように見えたオーラは委縮し腕は徐々に細くなっていく。

「レイ君！ 急いで！」

「解ってる！」

「うぬ……。我らがこの姿をさらすことになろうとはな」

「そうだな……封印される前にもこのようなことはなかったからのう。この代償は高くつくぞ。冥王よ！」

修羅の力が加わり巨大な戦力は敵と互角にぶつかり合う程度にはなるがいくら連合を組んでいてもお互いのことをよく知らないこちらが不利なものには変わりはない。加え修羅の力がどんどん落ちてきている。周りにとりまく重鎮の七人衆は気が気でなく戦闘に集中できない。雷軌と呼ばれる男の放つ近代科学の粹を決した長銃で援護をするが全く意味がない。遂に修羅の体からオーラが消え肉体が縮

んだように見えた。落ちていく彼の体が地面に落ちる瞬間……

「くっ……残り三十秒か、もう……もたな……い」

「修羅様あああああああ！」

体が縮んで姿が変わったように感じる……。髪が伸び肩が細くなり鎧はぶかぶかになってしまい大きな槍をつかんでいられず落ちていく。ギアが全体を変貌させ鱗で包まれた体を滑り込ませて何とか修羅をキャッチし一言叫んだ。

「無理しやがって！ 女だということを忘れていたのか？」

「くっ……こんなところで……俺は倒れる訳にはいかんのだ」

「姉様あああああああ！」

冥王の波動攻撃が彼女に向けられギアがとっさに黒い壁を構え一時は抑えた。それでも圧倒的な力の前にじりじりと押されていく。そこに……。

「師匠……何とか間に合いました」

「レイ君！ 急いで！」

背中に大きな丸い輪を付けたようなマナがレイの短剣を握って魔力を解放しギアの前に張った金の壁によって守られている。レイがギアを立てたせそこから退避を勧めレイ自身が大きなオーラに身を包んだ。

「二度目だ。俺も力を付けている。来い」

プルトンの腰の剣が抜かれ周りの連中が皆退避した。もちろんこちらの味方は誰一人動かない。

「ふん！ 貴様など今の俺の力の前には無力だ！ 消えろ！」

大きな波動を受けたように見えたレイだったがその前に何かは彼の体を守っていた。それ以外の味方は何とかゼシとタージェの防御が間に合い軽傷ですんだようだ。プルトンと彼の間に居たのは……。

「俺を舐めるな……。たとえば女でも力は魔王そのものだ。“霸王”！ やつを打つのはお前だ！ 行け！ 全力で守ってやる！ 修羅征夷大將軍直々の命である！ これより前軍はギルド、ホーリプリセクトお呼び中央大陸西区の防備に入る！ 腐りかけた国など捨てよ！ 妻子のいる者は呼びよせることを義務付ける！ 我に従う者は皆“魔王”の旗の元立ち上がれ！」

これまで遠巻きに戦いから避ける行為を取り続けていた大軍団が一斉に二手に別れた。未だに少女の姿の魔王は体を変身させ白い瞳を動かしてレイの方に向き直った。その後剣と槍が触れた瞬間に全軍とギルド方面から雄たけびが上がり一気に感極まった。

『おおおおおおおおお！！！！！！！！！！』

そこからプルトン以下数名の敵が再び闇の中から姿を現し攻撃態勢を取る。オニキスの魔法はすべてマナと遅れて現れたルナによって防がれそれに加勢する宙慧が召喚魔法を駆使しオニキスの動きを止めてる。スケアはギアと風崖、フィトから滅多打ちにされその対処に追われていた。イオも同じようにルミ、リーン、アルの自称美少女三戦線に阻まれており動けない。クルーエルはというと七人衆に攻撃を集中的に打ち込まれ八方塞がりになり後方回避以外はままならない。そこに前回洗われたトゥーロンの姿はなく代わりに鎧を着た女性の槍使いがフィトに攻撃を仕掛けるも……アルの矢から誘

電し気絶。

「舐めおってええええええ！ この冥王がこのようなことで崩れる
とでも思おもったか！」

レイと修羅の息の合った連携攻撃にあい全面的に回避できないプルトンもオーラを全開にし攻撃を続けてくる。こちらの善戦だと思われた矢先にその事件は起きた。

「ゴハ……」

「魔王！ くそ！」

「フハハハハハ！ 勝機は我にあり！」

レイが修羅をかばい前に出るが……胸に剣が刺さり鮮血がしたたりおちる。修羅は人体に負荷をかけすぎたせいで吐血し体機能が崩れつつある。双方が一人づつ救出に走りレイをマナが修羅を妹の閨剛がそして静寂の広がる荒野の真ん中に一人の男が現れた。その男に数名は見覚えがある。その男とは……かつて北の大地にて名をばせた男で今回の戦線に現れなかった男。そう、トゥーロンだ。

「やっと見つけた……。俺の息子。レイ。お前はこんなところで死ぬような男じゃないだろ？」

「あ、貴方は？」

マナがレイの頭を抱きながらこわごわと聞いた。それにトゥーロンは優しく応えレイの両腕にそれぞれ手を当て彼に力を注入するようなそぶりを見せた。

「俺は父親になりきれなかった……コイツ、レイの父親さ。君は月の女神か。なら、レイを頼んだぞ」

ひとしきり言葉を継ぐと彼が手袋をはずし拳を意味ありげな言葉と共に光を放った。それと同時に修羅の手の甲にも光が現れ同様に光っている。

『世界の秩序を守りし者よ。私の紋章を我が子に託し我、覇王の退位を宣言す！ 四界秩序の名のもとにこれを行使する！』

トゥーロンの手から紋章が消えレイの額と手に紋章が徐々に浮かび上がった。そのうち修羅にも同じことが起こり戦いは一時的に止まった。そして、その一時的な静寂を破ったのはプルトンの高笑いだった。

「フハハハハハハハハ！ 貴様が何をしたところで変わらぬわ。その小僧の心の臓は我が剣で刺し貫かれとうに止まっていおる。今更……何！」

レイがマナの腕の中から起き上がり剣をかざした。痛々しい光景だが息をのみ敵ですらそちらを見たまま硬直している。そのさなかにトゥーロンの姿がその場から消えていたことは誰も知らない。後ろでは閻剛の支えの中で修羅も立ち上がりもう一度戦う意思を見せた。

「覇王、行くぞ」

「いや……俺一人でいく。お前にはもう負荷はかけられない」

「そんなこと……ウグ……」

「姉上！」

「マナ。少し離れていてくれ。なんでか知らないが。温かい感覚があるんだ。何かに守られてる感覚がな」

言われるままにマナはさがり後ろに居る闇剛に協力し修羅の退避をする。レイは足取りが定まらないほど出血しており本来ならば戦うことなどままならない。だが彼にも何かがあるのだ。

「紋章よ。俺に忠誠を尽くせ。光ある王なり我は覇王！」

逆転劇とはまさにこのことだろう。レイの傷は開いたままだったがいきなり瞬間移動をし剣を使ってプルトンの右腕を切り落としたのだ。速度はまだ上がる。プルトンが魔法で防御を図ろうとするが無意味だった。レイの斬撃はその結界ですら切り刻み彼の体に傷を付けていくが最終的に勝敗は有耶無耶に終わってしまい双方の痛み分けという形に落ち着いたのだろう。レイも多量の出血で体は動かずそのままギアがキャッチしなければ死んでいたかもしれない。この戦争での死者は確認されずまたレイの父親と発覚したトゥーロンの行方もまるで解らない。

「マナ……そんなに気を落とすな。ギアの話では命に別条はないそうだしな」

「ハイ……」

「マナ、ちよつといいか？」

プルトンとの戦闘後数日が経過していた。レイは心臓に大きな穴があき本来ならば死んでいてもおかしくない状況だったらしい。だが、覇王という特別な存在にはそれ相応に特別なことが起こるようで彼は命をつなぎとめている。ただし、つなぎとめているとは言う物の意識は回復せず皆が心配しているのは言うまでも無い。加えた近況を告げると今回の戦闘で多くの地域に被害が呼び特にプルトンの攻撃で大きなダメージを受けた南の大陸と東の北朝はもはや執政は不可能になり住民はこのギルドに移り住む他なくなっているのだ。

「お前に一つ謝らねばならない。俺のせいでやつに風穴を開けさせてしまった。不甲斐ない俺を許してくれ」

「気にしないでください。貴方のせいではないんですし。それよりもこの生活には慣れましたか？」

「お前は優しいな。生活には慣れたが俺もダメージが大きくこのぎまだ。しばらくは厄介になるさ」

「ここにとどまらないんですか？」

「俺にはすることがある。レイはここを守る。俺は攻めなくてはならないんだ。お前らを助ける上でな。一応七人衆は皆置いていくつもりだ。その点に関しては問題なからう」

ギアが病室で椅子に座りレイを見つめている。マナに状況を説明したのち彼の元に脚を進めているファンもレイを気にかけているようだ。覇王が倒れたことで大きな不安がよぎってはいるだがここで屈する訳にもいかない。これからどうするか……ということを考えているのだ。

「ギア、自分の身も案じる私が処置したときには既に体は回復し意識を取り戻してもいいころなんだからな」

「解ってる。だが、愛弟子を守ってやれなかった……俺にも落ち度がある。なんだろうな。これまでこんな感情は湧かなかったのに」

そして、その日の夕方。マナが面会をしている時に彼は意識を取り戻した。奇跡的ともいえる生還に町中が湧き感動の渦は大陸中に広がって行く。覇王の力は絶大だった。

「レイ君、いつになったら目を覚ましてくれるの？　もう、私は待てないよ」

「……………マ……………ナ」

「へ？」

「マ……ナ……」

「レイ君！」

それから数日後にレイが動けるようになってからギアとファンの結婚式が執り行われた。正装が似合わない者も数名いたが滞りなく式は幕を閉じたのだった。

「レイ君……ホントによかった」

「ああ、ありがとう」

t o b e c o n t e n e w

戦の終末は……

数年間の経過は早いようだ。彼らの中では飛ぶように過ぎて行くのだろう。特に以前は少年や少女の面影を残した彼らだがこの数年間で皆、その中でもレイやマナは多くを学び大きく成長している。ゼシとタージェの息子と娘であるアルファとミシイも5歳と4歳になり生意気さと幼心が合わさったかわいらしい時期を迎えている。レイやマナ、その時に幼さを残していたメンバーも21歳と22歳になり少し大人に近づいた。冥王プルトンとの戦いの後は彼らに大きな変化を与えギルドにも大きな変化を与えられた。街の大型化やギルド本部の更なる増築に義勇軍の結成。そして、御伽噺の再来……。

「フィット！ お前の分団はどうだ？」

「紅蓮か問題ない。それよりも問題はルナの魔導師部隊だ。訓練をしてないのか？」

「してますし問題ありませんよ！ だったら風崖さんなんて顔も見せないじゃないですか！」

「何をもめてるんだ？」

「レイか。軍の整備の話だ。お前は何をしにきたんだ？」

「俺は師匠と手合わせの約束があつてな。意見に過ぎないが軍備はシド大軍団長に頼んでおけ。それよりは問題視すべきは紅蓮の事務がたまっていることとフィットがアルと飲みに行った付けがまわってきていることの方が問題だが？」

「そ、そうか参考になった」

「……そんなになのか？」

「月！^{ゆえ} あ、間違えた……ルナ！ ルナ？」

「はい！ お母様。今、行きます」

割合、厳しい言葉をぶつけられた二人はそそくさと逃げていきルナも母親と発覚した宙慧に呼ばれ魔導師訓練所に走って行く。レイは身長が伸び顔立ちも静観になった関係から街の女性からの人気を集めつつある。大きな城に成長したギルドはもはや“国”の域に達していた。軍備、内政、奉公の三大執政機能が整い各地から逃れて来た賢い若者や知識人を中心とした議会や街を区画整理し代表を決めそれに合わせた会合なども開かれていて機能は一国一城、既に既書の“国”というキーワードが重なるがこの城の責任者のシド・タージェはこの組織はあくまでもギルドであると位置付けを表明。その下に付き尽力する二人の弟子も執政に携わっている。特にギアは議会の中枢を取り仕切る重役になっていた。レイはというと……。

「レイ……腕を上げたな」

「いえいえ、まだ師匠にはかないませんよ。まだまだ若いんですから。そんな老けたことを言わないでくださいよ」

「よく言うぜ。身長も追い付かれたか……。これで俺のリーチは無くなったな。おっと……そろそろうちの嫁さんが来る頃かな」

「ギア！ 気分転換もそこそこにしておけよ！ 執務は……」

「上官の仕事だろ？ 解ってる。それより、お前も身重なんだ無理はするな」

「ああ、わかっている。レイお前もやるべきことがあるだろう？」

ギアとファンも子を授かり城の一角に構える屋敷で静かな暮らしをしている。ギアは日々鍛錬し武器と体の手入れ念入りにしているが今は数多く起こる人間同士の小競り合いには出ることは無い。ギルド本部にある部屋……軍議室の中で作戦を考えることに徹している。前線に立つのはレイでこれまでは負けなしという戦績を持つ。加えて彼は彼を慕う者を集め独自に騎士団を編成し大陸随一、無類の強さを誇っている。ちなみに副団長はアレンとライムズ。

「リーンちゃん。あの、レイはどこへ……」

「マナあ？　また見失ったんか。そんなことやと先にどんどん行かれてしまうで？」

「……。忙しいのは解るけど。私のことも見てほしいのは……やまやまで」

「お、マナさんとリーン。何してるんだ？　レイさん？　レイさんならその武道場でギアさんと手合わせしてたぞ？」

「そか、よかった……って動くの早！　初々しいなあ。マナも」

彼の赤い髪は目立つ。すぐにレイを見つけたマナは声をかけようとするが先客がそこには居た。修羅の妹の閻剛だ。彼女は修羅が一人で他国に旅立った後もこのギルドに残り修羅の命令で七人衆のまとめ役をしている。それが何故レイのところに居るのが気になったのだろうが勇気が出ず結局はその場を離れてしまった。閻剛の職務はシェイド、今は本名を明かしバステル・クレイア・スウォードと名乗っている彼の率いる第一暗躍機動部隊“アサシン”に次ぐ第二部隊、くノ一部隊“閻蝶”を指揮している。そんな彼女だから戦闘や暗躍に素人なマナが居たことなど造作もなくわかっていた。それでもあえて口にせずレイに訓戒を投げ渡す彼女。

「……。レイさん。マナさんが探してましたよ。もっと大切にしておけないと……」

「ん？　そうか……。そうだな最近仕事ばかりでろくに話してないからな。そろそろ相手をしないと……」

「早く行かないと手遅れかも知れませんか？」

「どういうことだよ」

「よくあるじゃないですか。そういうこと。本なんかではよく目にしますけど？」

レイが腰の鞘に剣を収め軽装の鎧を揺らしながら歩いて行った。

たまたまその近くで日向ぼっこしていたらしい黒い龍、ダークネスが体を小型化させて彼の肩に赤い爪を立てないように乗ってくる。彼女は戦闘向きの龍で戦がない間はクリードと二人でいることが多いが彼も脱皮や角の生え換わりなどで忙しい時があるらしく今、彼女は暇を持て余しているところだったようだ。

「ふむ、お主も若いのお。霸王よ、月の女神はそのような弱い女子ではないぞ。だが、女子を大切にせねばならぬというのは確かじゃない」

「俺も解ってはいる。だが、必要としてくれているのはマナだけではないんだ」

「そんなことは他に押し付けければよからう。お主は女神と結ばれれば大いなる幸せを得るが……それにしくじれば」

「世界がないか……。俺も彼女を愛している。それ以上の何かさもある。でも、この世界は人から成り立つんだ。彼女一人に全てを捧げれる訳ではない」

「解っておる。……おお、忘れるところであった。お主のために外に出る機会を設けておいた。女神を連れてゆけ。こんな機会でもなければ白龍は龍洞から出ぬのでな」

話の最後に愚痴をこぼしたダークネスは翼を開いて軽く羽ばたいてから飛び上がりギルドの隣の森に消えていく。そこには新たに龍洞と呼ばれる祠が創られ二頭はそこで暮らしているようだ。ダークネスはその入り口付近で見えなくなった。レイがマナと住んでいる屋敷に入り自室に入るとドアが閉まり鍵が閉まる音がした後にマナが歩みよって行く。彼女もレイと同様にかなり成長し女性らしい体系になりつつある。だが、幼そうな顔つきに大きな目は変わらず変わったとすれば身長と耳にピアスが付き大人びた点くらいだ。靴なども変わりはすれどやはりおとなしめでどことなく彼女は幼さやおとなしさがある。

「闇剛ちゃんと何を話してたの？ 武道場で……」

「マナのことだよ」

「わ、私？」

目を見開いた彼女の金色の髪が揺れる。髪型は変えずに未だにショートカットの彼女の髪は癖が少ない。すると再びマナが問いかけてきた。今度はストレートにことの真意をつかみにくる。笑っているつもりなのだろうが笑っていない。明らかに怒っている。確かに一週間仕事で城詰めだた彼はその期間はマナとは話せていない。

「どんなこと？」

「大切にしろと言われたよ。仕事とマナとどっちが大切なのかってね」

「……」

「信じられない？」

すぐに彼女の表情に変化がでてうつむき歩きだした。靴は魔導師や弓師が履く革製の物に装飾がしてある物だ。コツコツ言わせながらレイの背後にまわる。

「ち、違うの。レイはずるいもの」

「そうか？ 俺は……」

「だって……そんなこといわれたら信じちゃうから。レイはずるいよ。ホントに、私のこと何でも知ってるから」

「何でもか……わからないことの方が多いよ。マナは俺より明るいから追っかけるだけで精一杯だしな」

マナの首には金剛石。つまりはダイヤモンドの指輪が光っている。光を乱反射して綺麗だ。彼女は顔を赤くしてレイの背中に触れた。

そこにはプルトンに刺し貫かれたであろう傷がある。彼はいつも軽装の鎧を身につけており肌はあまり見せない。

「なら、レイから教えてよ。あなたのこと。私は今のこの気持ちが本意だから」

「わかった。これでどう？」

「ん……」

振りかえり細い肩を抱いた。数年間でここまで変わるかと言うくらい彼はキザになったようだ。そして、良い意味では周りの気配察知能力が向上したのだろう。背中に回していた手をほどこき襖に耳有り障子に目有りのごとく戸に耳を当てていた数人が急に開いた戸の方向に倒れた。

「え……レイったら何してるの？ 急に何も……」

「そんなことわかるかいな。気づかれたんとちゃう？」

「何よ狼娘。その耳は飾りなの？ 少しははたらせてみなさいよ」

「痛いです。アルさん……腳踏んでます」

「ゴメン。ルナ……」

「ヴィヴィア……耳触るな。気持ち悪……い？」

まるで雪崩のように……。

「うわ！」

「ぐえ……」

「キャッ！」

「痛あい……」

「お前ら勝手に入って何をしてるんだ？」

『お邪魔してまあす……』

ドジッ子のルナが途中で転んだが他は華麗に逃げて行った。未だに幼さが残り少しどころかなり茶目っ気の強い乙女軍団の子供っぽい行動には手を焼く。だが執務や軍備の仕事は一応できていたようだから今回は見逃したようだ。明朝に二人は以前に行ったことのある海岸沿いのゼシの小屋に向かった。あれだけの大震災を受けてもそこは綺麗に残されていて感動に値するものとなっている。さらに川の流れが変わりその近くに小川を作っていたり森の途中の道には陥没し木漏れ日の綺麗なドーム状の場所ができていて美しさは増していた。そして、森を探検していると……。

「クリード……あれは、龍の卵なのか？」

「ふむふむ、これは……よくぞ生き延びたものだ。まだ生きておる。連れ帰れば生まれよう」

「誰が温めるのだ？」

「我らが交代でに決まっておろう。と言うわけだ……。霸王は水入らずを楽しんでくだされ」

魔法で体の大きさが自由に変わる二頭は見つけた数個の龍の卵を各々で口に入れて祠へ帰って行った。啞然とする二人は軽く目をしばたかせたがにこやかに笑い合い、一度小屋に向かって行った。

「これで……マナとレイも安心かな。シド、あなたにしてはやるじゃない」

「発案は闇剛とギアだ。俺は状況を作り上げたに過ぎないさ」

「謙虚なのはいいけど。書類溜まってるわよ？ 始末書と任務の依頼書。後は施設の維持費の関係書類かな」

ゼシの手厳しい言葉の後は勿論のこと職務が始まった。レイ達以外にも旅に出た人間がいる。二人はゼシの小屋で過ごしているがこの人は密かに城を抜け出しこの大陸ユートピアの外にでて行った修

羅を追っている。大きな鎌はホルダーに入り方には鞆と共に弦楽器が覗いていた。ハープだろう。その横には黒い塗りの横笛もある。

「ふふ、女の姿も悪くないか。身が軽い」

「修羅様。女の姿とはどういうことですか？　少し不用心ですぞ」

「ぶっ！！　風崖！　何故、お前が……」

「ギア將軍に許しをいただきまして同行させていただきます」

「あの悪鬼め……余計なことを」

風崖が加わり二人は大きな船に乗り込んで隣の大陸に向かった。隣の大陸は先進的な軍事国家でこちらの大陸の東側に度々、巡視船を送り込んで来ているらしい。彼女はそれを停止させ戦を退けるためにその大陸に向かい直接言葉で戦うと言っていた。皆が止めるのも無駄だったようで男の姿に変身することなく武器の薙払い大槍を担いで城門を出て行ったらしい。

「くそう！　風崖のやつ！」

「紅蓮よ。仕方ないだろう。ギア將軍の判断だ」

「二人より三人のがいいに決まってるだろう！　護衛は足りているのか？　心配だ。まさか女子だとは思わなかった」

「紅蓮の姉さん。叔父上も言っているが今回はあなたのように目立つ風貌で目立つ技を使う方は不適かと思いますがね。他にも志願者は居たのですが……二人が一番動きやすいそうです。それにあの風崖なら問題ないでしょう」

「そ、そうか？　お前が言うなら間違いはないか」

「そうそう。そう言うことならば風崖は適任であろうな。この俺が呼ばれなんだは不覚じゃが……ギア將軍の采配であれば仕方なからう」

「あなたが一番目立ちますよ雷軌さん。藪の中では隠れるのに便利でも街中で迷彩服の大將がいる軍などそうはないでしょうよ」

「そうなのか？ 迷彩服ほど軍功に役立つものなからう」

レイの護衛には親衛隊副隊長のアレンと数名の手練れが付く。それに上乘せされるように今や中央大陸の全てと南の大陸では大森林区のビーストと連盟を結び領有、西は西大陸全土に住むギガントというビーストの亜種と組み領土に組み込み、北朝とは敵対中だが南朝は阿蘇の力で協定を結び北はノースビーストや軍事国家化に反対の連合からのリンクにより一部を除き領地と認可した。それらの全てにシェイドの“アサシン”が網を張っている。

「こんなに綺麗な場所があるのに……何で戦争は続くんだろ」

「対意の勢力があれば必ず起こる……。それをなくしたいのがギア師匠。俺は仲間を失わないように闘う」

「いつか言ってたよね？ 人は何故、何で争うのか……って」

「全部とは言えないがわかった気がするんだ。プルトンと刃を交えたり斬りつけた瞬間にやつからは負のイメージが流れ込んで来た」

「どういうこと？」

「アイツも俺も闘わなくちゃいけない運命ってことさ。対意の者は万象の理から会いまみえ刃を交える。伝承のとおりだね」

マナの金の目がレイの横顔を捉えているがレイは波を眺めている。そのすぐ後に立ち上がりマナに手を差し出した。細く色白な手が重なり 立ち上がる。そのまま小屋に帰って行った。

「レイはホントにずるいよ」

「……」

最近は大酒飲みと有名になったアルは月を見ながら酒を引っ掛けていた。お気に入りは見張り台でいつもそこで大きな日本酒の入ったツボから器に移している姿を目にする。そこにフィトが現れた。

一つに結われた長い髪が風に揺られそれなりの雰囲気が出ている。身長も伸びギアと比較すると現在の彼は大きめに見え肩もしっかりしてきた。軍団の指揮官の中では昔のように特攻隊長として拳を振るう。そんな彼の心の頼どころは姉さん女房のアルである。彼らも年代では一番早く結婚し新居も城内に構えていた。

「どうしたの？ 久しぶりに相手をしてくれるの？ フイト」

「いや、明日も仕事だ。深くは飲めないがもらおう」

「懐かしい。こうして並ぶことは最近はなくなったからね」

「ああ、狙撃手総指揮監督と特攻隊長じゃ立場が違うからね」

「お前は隠し事が下手ね。すぐに解るわよ」

「レイがな。酒のつけを払えと」

「う……。それホント？」

ルミは戦に出るには出るがそれはほとんどの場合でフイトの前衛。騎馬鎧隊を率いる彼女はやはり小柄で幼い顔立ちだ。シェイドと結婚しよくファンと奥様談議にふけていた。彼女はどちらかというと妹のヴィヴィアのことを気にしていた。周りは次々に結婚、婚約するが彼女はまだ独り身だったのだ。姉としてはほっておけないが最近はずいぶん派手な服装を好むようになってきたヴィヴィアはさらに近寄りがたい。

「ねえ、ヴィヴィア。そろそろ相手見つけなくていいの？」

「いいの。チャンスはいつでもあるから。あたしはそれにかける」

「心配だなあ……」

「姉の話は聞いておけよ？ 少なからずためになる」

「義兄さんまで……わかってるから」

二人やほかのメンバーは知らない交際相手が居るのだ。種族を超

えることは少なからずリスクを伴うがそれを無視して二人は付き合い始めた。お相手はアレンだ。今はレイの警護任務で野宿をしている。ヴィヴィアは過去に軽業士として働いていた時期がありその関係から動きは身軽で暗躍もシェイドや闇剛ほどではないが可能だ。

「誰だ！　クン……この香水はヴィヴィア。近くに居るんだろう？」

「さすがは狼。鼻は効くのね」

「ヴィヴィア。どうした？」

「退屈になったから手伝いに来たのよ。悪い？」

「危ないだろ？　この前だって敵の刺客は来るしレイさんは前に斬りに行くし……」

「ねえ、あたしのことは守ってくれないの？」

「……言わなくてもわかだろ」

「わかんないなあ。言ってくれないとお」

「あんまりふざけると……こうだ」

アレンが念糸を引きヴィヴィアを釣り上げた。さすがにこうも数の多い糸に絡め捕られては抜け出せないらしく声を荒げておろすように命令してくる。

「もう！！　冗談通じないんだから！　早く下ろしてよ！！」

「ダメ。俺はレイさんみたいに優しくないからな。反省するまで吊したままだよ」

「ひ、ひねくれ者！」　「少なくともお前には言われたくなかったが……」

「なんでよ」

「ヴィヴィア。お前が一番わかってるはずだぞ」

ギルドの城郭の最奥にある一番高い建物である鐘楼の天辺にはリン、ライムズ、氷鎧の三人がいる。氷鎧も元はビーストの森狼で

ありリーンと同族だったらしい。三人は同様に月を眺めていた。その静寂を破ったのはリーンで唐突に重い質問をまずはライムズに投げかける。

「なあ、ライムズ……」

「んん？」

「戦争が無くなる日なんてあるんやろうか」

「解んね」

「おっちゃんはどない思うとるんや？」

「重いだろうがそんな日はないだろうな。人が居る限り。生き物が存在し意思がある限りな」

今、この大陸はかなり不安定な状態にある。特に東、北、南にそれぞれが国という組織の一部に持つており内乱と言えそうだがそれは大きな軍事的波乱を起こしている。東の北朝と北の元軍幹部が組んで領地を広げようとしているようだが今は小休止状態だ。大きな戦闘は怒る気配はない。しかし、前線の監視をしているシェイドからの報告ではいつ大きな戦争とかしてもおかしくないという。

「しかし、ギア。ここまでアイツを育ててなおまだ不安なのか？」

「ああ、アイツの力はあるなもんじゃない。まだ心のどこかに迷いがあるんだろう。いくら覇王となれる“器”だとしてもその中に入る物が本物でなければ……アイツは覇王にはなれない」

「それを後押しするのがお前の役目と言いたいのか？」

「そんなに奢る気はない。ただ、アイツには生きていてほしいんだ。仮にこの物語をすべて変えてしまう結果になっても」

「ふふ、父上は凄いことを言っているぞ。お前もこんな風になるのかな？」

「少なくとも俺たちの子の運命もやつが握る。俺もできる限り戦いたいんだ。未来を拓くためにな」

プルトンが捨て台詞を残しこの世界を離れた後彼の力で復活したと思われる遺跡を彼らが調査した結果開けるかどうかは別としてもこの世界以外の異界は七つ。一番大本になるのがこの世界を含めた四つの世界である天界、宙界、地界、魔界。次にギアが新たに発見した扉には……冥界、龍界、月、幻界と記され新たなものと認可されるが開くには相当のリスクがかかる上に開き方すら解らない。

「……とこういうことだ。敵はこの状況の打開を狙い北と東の二面作戦に出て来た。今はシェイドの隠密部隊に張らせているからそこまで大きな動きは無いがいつ来るかは解らない。そこで今回の人割を発表する。まずはアルとフィト二人には南の最南端に行きこちらに引き入れるか中立を保つように交渉してきてほしい」

「お、俺が交渉ですか？」

「お前は護衛だ。確かアルはクーデターの鎮圧に協力していたよな？ その軍部が今は政府の重役を占めている。とりあえず言ってきてくれ」

「解りました」

「次にだ。紅蓮と氷鎧は東の軍の口利きを勧誘しろ」

「意は解した」

「御意」

「次に、本隊と第一分隊は攻撃してくる敵の主力飲みにも集中的に攻撃を行い敵も味方も被害は最小に抑えろ。修羅が海を渡ったとはいえ向こうの国のことも気になるからな。本隊の指揮は大軍団長とゼシさん、第一分隊は俺と岩鋼、雷軌に付け。さらに魔導師部隊と義勇兵は本拠の防備だ。今回の作戦会議は以上で解散にする」

「解った」

「ふう、故郷に行くのか」

「さすがに……元の味方と相對するのは」

「気が引ける。俺もその感は同じじゃ」

新たな波紋はプルトンのようなものではなく同じ土を踏んで生きるもの同士が起こすことによって広がりを見せるようだ。これにも古の物語が深くかかわっているとギアは言う。その他の大将やメンバーも気を引き締め戦の中に身を投じるのであった。そのころのレイはそんなことが起こるとは知らず小さく寝息を立てるマナと共にひと時の幸せを感じていたのだった。もうすぐ、これまでの物とは違う多くの人が一瞬で消える戦闘がおこるとは知らずに……。

……TO BE CONTENT NEW……

対なる護りたい者達

レイとマナが休息をとっている間に巨大な戦争が二人の住む大陸であるユートピアの中でまき起こっていた。北の軍はノースビーストの怒濤の攻撃を受け島の側面にある群島地帯にゲリラ防衛線を張ったかたちで立てこもった。東の軍は元その大将である雷軌と岩鋼の指揮する元々その地域の兵に攻められたうえ、さらに大将に言葉が告がれ二人の軍になびく者があとを断たなかった。敵の大將は兵力を吸収され見るみる後退し最奥に残る最後の城で籠城を決め込んでいる。南は過去にクーデター鎮圧に大きくかわり正体は解らないが英雄視していた少女が幾年かの時を経て現れたことでこちらに寝返ることを決定し送ろうとしていた軍と幾人かの將軍をこちらによこしてきたのだった。もちろん將軍とは言うが元ビーストの戦鬪部族のでの下級の指揮官ばかりであり階級は高くないが……。

「ふぬ……なかなか良い軍師じゃな。かのギア殿は」

「叔父上が認めただけのことはあります。だが、彼も手を焼いているのは我々に従わない北朝の忠臣とその家臣でしょう。……その命さえも助けようとするとは……」

「奇才奇策の天才は何やら思惑があるようだな」

「雷軌殿！ 岩鋼殿！ 新手じゃ！」

「闇姫殿がなぜ……」

「既にアサシン殿……もとい、シェイド殿も北に向かわれた。間蝶部隊の微細な指揮を我らに任せるとギア將軍が申されている」

敵の新手は北朝にもこちらにも味方をする事をせずに双方と対を向くようにV字の陣形を組んだ。弓兵中心のその部隊の武具はバラバラで統一感は全くない。現れた場所は北朝軍の海の孤城のすぐわきにある船の墓場からだ。その中で現れた大將と思われる男はガッ

シリとはしていないものの身長は高くアルに似た碧の髪を長めにしている。武器も弓だった。何か彼女に関連があることは確かだろう。

「あれは……大鷹の弓」

「雷軌殿。それは本当ですか？」

「ああ、革命家の中でも穏健な男と知られ自ら出ることとはなかなか無い男じゃ。俺も見るのは二度目になる。だが、以前とは違い何かを得たようだな。顔立ちが違う」

「そうか、このタイミングで来るか。闇剛はいるか？」

「ギア將軍……闇剛はここに」

「すまないがギルド本城を経由してアルを迎えに走ってくれないか？」

「御意のままに」

闇剛が居なくなり戦闘は更に難しくなっていた。緊迫感は強まるのだが三軍は皆、一様に動かず相手をみている。三軍……というが北朝軍は城に籠もり橋を上げたため出ては来ない。問題は小勢ながらも歴戦の猛者が集まる革命軍の弓兵中隊が数隊。彼らも未だに完全に状勢と策が噛み合わず様子をみているようだ。それはこちらも同じである。所変わり北の群島地帯に視点を移そう。敵がしくゲリラ戦の効果はいまいちで敵の本部も浮き足立ちこちらが善戦しているようだ。こちらに出て来て居るのは……ルミ、ヴィヴィア、ゼシ、タージエ、宙慧だ。策士のように頭が働く者が多く攻撃の要はルミ、タージエ。次に伏兵やトラップなどの補助にヴィヴィア、最後に本陣で構えるゼシと宙慧。こちらの配置は絶妙でバランスも完璧だが敵は指揮系統が弱いだけで実際の戦闘能力は兵器の上でこちらより数段高めだ。ノースビーストの部隊は夜襲や挟み撃ちなどで後退させることや数を減らしはしたが決め手がなくなったらしく本隊に泣きついて来たのだ。

「いくらルミちゃんでも戦車大隊はキツくないかしらせちゃん。シドさんはともかく……」

「それは問題ないから安心して見ていて。あのルミの力は舐めない方がいいわ。家の人と腕力なら引けを取らないから」

「凄いわね。それより伝令にしては位の高い人が来たわよ。ねえ、シェイドさん？」

「は、シド大軍団長からの言伝と近況、軍功、およびこちらの動きをお伝えするため……」

「長ったらしいわよ。レイみたいに端的に話さない」

「申し訳ない。性格ですからこれはご勘弁を。では、単刀直入に……」

東は動かぬままに味方になるようにとの勧誘を続けていた紅蓮と氷鎧がギアの本隊と合流し睨み合いは未だに続いているという。北のシドとルミの攻撃隊は敵の大隊を崩し次々に小さな無人島を解放していくがこちらも地理を上手く活用され時間がかかってきた。部隊のダメージはあまりなく敵は有り余る軍力を使いこなせずに徐々に最奥の島へと追い詰められていくらしい。そして、細々した内容としては休養中だったマナとレイがギルド本城に帰還し新たな敵と向かい合っていた。

「全く……なんで無駄に攻撃隊を送り込んで来るんやろうか。ホンマ……無駄やっちゃうのに、命が大切やないんか？」

「リーン。今回はお前に指揮を任せたい。ライムズも連れて西大陸の荒野手前にある敵の本拠地を叩け。作戦はライムズに任せて暴れて来い。後は騎士団を半数同行させろ」

「まだ、本調子やないんやろ？ そんなヤツをほっとけるかいな。あれから能力の切れが悪いことくらい知っとる」

「リーンちゃん。私が居るから大丈夫」

「マナ……はあ、わかった。制圧したはずの所からなして軍が沸く

のか知らへんが……これ以上は好き勝手はさせへんから。安心しとき」

「うん。レイのことは任せて」

「怪我はするなよ？ ライムズ全力でフォローしろ。アレンは馬を走らせ……なくても大丈夫か。シド大軍団長に状況の報告と間諜に出会ったら周りのそれらにも伝えるように言っておけ」

「了解しました」

「アイアイサー」

一度、制圧したはずの場所から次々に沸く敵兵に悩まされていた。そして、中央大陸に向けて走る少女が一人。1日かからずに数十キロを走る彼女は更に奥に走る。南の大陸にいるアルを迎えに行くのだ。速さは走ってはいるが人間離れしているのは言うまでもなく解るだろう。彼女も一応は闇姫と呼ばれるだけあり実力は高く能力も備わっていたのだ。背中には黒い小さな翼があり気にしながら走っている。武器の三日月型に湾曲した二本の逆手持ちの短刀は腰につけていて少々重そうだがなお走る。南の大森林に差し掛かれれば木の上に登り枝の上を駆ける。

「全く……交渉は即決で同盟締結は早いがなんで半日も飲んでるんだよ」

「悪かったわね。でも、あたしは楽しかったわよ。あなたが乱れてくれて」

「俺は死ぬかと思ったんだが……軽い言われようだな」

「フィトはお酒に弱過ぎな……の……って、闇剛ちゃん！」

「ふうふう……やっと見つけ……ました。お……二人……とも……は、早く。ギア將軍の……所へ！ ふうふう……とくにアルさん！」

「ちよっと！ 闇剛ちゃん！ 闇剛ちゃん！」

「大丈夫だ。息はあるし外傷もない。この子は疲れてるだけだ。ゆっくり、ゆっくりとでいいから行ってくれ。この子は俺が近くの宿

でみるから」

「わかったわ。ギアさんは東よね？」

「ああ、頼んだ」

アルは大森林前の道でフィト、闇剛と別れ走り出した。森育ちの彼女、アルにとってはこんな森は造作も無い。それどころか故郷の森で迷う訳も無く走って行く。フィトは言ったとおり近くの間部族の厚意に甘え闇剛を休める。いくら彼女でも休憩なしに大陸を縦断することは体力を使うのだ。説明が遅れたがこの島を大陸と言うがそこまで大きくはない。一つの大陸の大きさは38万平方キロメートルほどでそれを五つ接続しているから大きく見えるのだ。海外の国家から比べればかなり小さく島全体から見ても隣の大陸と比較すれば五分の一だ。大陸に観点が移ったところで視点をさらに広げ海に出た二人に視点を移そう。

「『風にのる流浪の旅と、戦い歩く生業に心は疲れ上を向く晴れ渡る空は美しい

大きな空に目を向けて心の叫びを問いかける無情の世界に終末は来ずなお荒れ乱れ

鬼と天使の心を宿し我はこの世で生きていく皆、皆、願わん平和のために』」

船上では特徴的な弦楽器を弾きながら吟遊詩人らしく風崖が唄言葉をメロディーに乗せ男性にしては明るい声質のテノールを響かせる。その横では甲板の手すり前で黒い塗りの横笛を吹く修羅の姿も見られる。白銀の髪は優美に揺れ笛を吹けばなお映えた。風崖が曲を終わらせるとそれに合わせて修羅も笛から口を離しその数秒後に周りからは拍手がわき、船の乗組員も聞き惚れているようだった。

「あまり目立つ行動はなさらないでください。俺はまだしもあなたに目が付いては……」

「問題はない。こちらの船は向こうに行くだけで人は乗せないのだ。こちらに俺が向かっているなどという情報は流れていまい」

「しかし……」

「気を楽に持て。恐れるべきは敵の巡視船だ。攻撃してくることを想定し少々の策は考えてあるが……」

『な、何だ！？ 鉄の船だ！』

風崖が大鎌を構えようとした瞬間に修羅が止め二人は船のてっぺんに移動し金属製の船から現れた武装している兵隊が乗客を脅し両手を上げさせているのを見ている。敵兵はこの船を制圧したように思っているようだがそうもいかない。なぜなら……。

「風崖。これから敵の船を制圧する」

「そんなことだろうとは思いましたよ。修羅様。どうやって乗客を救出するつもりですか？」

「それは俺に任せろ。お前は音消しの魔術で皆の音感を無くし敵兵を昏倒させる。俺は甲板の敵を殴り飛ばして海に落とす。それでよからう」

「御意」

簡単でストレートな作戦ではあるが実際はこれが一番一般の乗客に被害が出にくい策だ。運のいい事に霧が出始め敵兵が緊迫してきているのも解るがこちらとしては好都合だ。まずは風崖の動き……。

「修羅様も時々強引にことを進められる。右舷に二人組、船首に一人、操舵士が二人に船長一人。見張り台に一人……か。船尾にも一人いるな」

鮮やかな手つきで一人を沈めた。風崖が音消し……簡単には風の力で音波を遮断し音を伝えさせないことができる魔法だが……。それを使用し船の二階にある見張り台の男を殴り飛ばし海に落とす。右舷の二人も同じ末路を歩んだようだ。船首にいる男は後頭部に軽い打撃を加え縛り付け人質にするようにした。甲板にいる残りは船尾に一人。後は内部だ。

「はっ……」

敵が次々に海へ落ちる……。

「腕が鳴る。女子の姿でも俺の力が使えることは証明できた。何人連続でいけるかな？」

こちらは囲んでいる見張りをさらに鮮やかに……そして流れるように一瞬で片づけた。一人目が殴られ飛ぶと後ろを向いていた一人に衝突し海に落下。残り三人は二人をウリアットで殴り飛ばしラストは華麗なるアッパーで昏倒させた。そして、こちらに移り内部を探っている兵士にも同様の末路を歩んでもらう。始まりは風崖が早かったが終わりは修羅の方が圧倒的に早かった。

「貴様！　ぐああ！」

「なっ！　うおっ！」

「操舵士確保……と。甲板へご案内」

船長も同様に昏倒させて縛り上げた。魔法を解除するといきなり船に揺れが走り修羅が周りを見回した。この海域には昔から魚人が住んでいるとは聞くがまさか襲ってくるとは思ってもよらなかった。そこで大声をだし乗組員や乗客に巡視船へ移ることを指示し風崖も

駆けつけ状況を把握した。しかし、船の舵を壊され船底に穴をあけられたのか沈むスピードが思ったよりも速い。

「くそ！」

「キヤー！」

「今行く！ 修羅様も非難を！」

「待て！ くっ……沈むのが速すぎる」

船が傾き滑り落ちる少女を胸に抱えたが戻れないと察したらしい風崖はその子を優しく放り投げ修羅が受け止める。船は元の船員が危険と判断し舵を切り目的の大陸へと進む。最後に風崖が一言残し霧と海に消えた。

「修羅様、幾日、幾月とは……いや、今生ともわかりません。しかし、俺に運があるならば。またどこかでお会いしましょう！」

「ふ、風崖！」

風崖と別れてしまったが修羅は目的を達するため前を向くことに決めたようだ。その頃の本城ではデルとルナが忙しそうに。正しくはデルが忙しく手を動かしていた。新しい機材の設計に図面とにらめっこしているのだ。デルはギアに魔法科学と錬成魔法の定理や基盤、技術の提供を受け今や大陸一と言っても過言ではない科学者に成長していた。どちらかというと発明家かもしれない。

「詰まらないなあ。デルはそんな紙っぺらとにらめっこしてて楽しいの？」

「うん？ 楽しいよ。どこにどの技術を使えば革新的な新しい技術を生み出せるのかとわくわくするよ」

「……解ってないわねえ、空気読みなさいよ。そうだ、師匠とお茶の約束があった。デルも来る？」

「僕はいいよ。ギアさんが帰ってくるまでにこいつを書き上げたいんだ」

少し残念そうに下を向くといきなり彼の頬を強く引っ張って彼の仕事部屋からドスドス足音を立てて出て行った。物理や化学では天才的な彼だがこちらの方面にはめっぽう疎いらしく頭上にクエスチヨンマークを連発させては考えている。そのうち図面に目が移りそちらに手を付け始めた。

「と……いう訳なんです！ 腹が立っちゃって……って師匠！？ マナさんまで！」

「アハハハハ！ ！ すまない……フッフ。お前も遂に年頃になったか。アハハハ……」

「そうですね。今のルナちゃんはとても可愛いよ？ いつか私にも言ったよね？」

「そ、そうですか？」

「ま、今頃はマナの未来の旦那様と話しているだろうよ。あの二人は仲が良いしな。年下のデルからすればいい相談相手だろう」

「でも……レイで相談相手が務まりますか？ あの人に鈍さは太鼓判つきですよ？」

「誰のだ？」

「私です」

「プッ……。ハハハハハ！」

「マナさんは相変わらずですね……」

「ふえ？？ 何か変なこと言いましたか？」

ファンの予想通りにデルは剣の稽古をレイに付けてもらっていた。レイは既にギアが認めるほどの剣の腕を持っていてこの大陸内で一、二を争う大剣豪になりつつある。レイはどちらかというと片刃の剣が好きらしく使う剣も全て片刃の乱れ刃だ。デルは護身くらいには

と始めた剣術に激しくはまり研究に行き詰まると素振りなどをして
いる。

「レイさんとマナさんはどうしてお付き合いをはじめたんですか？」
「俺はマナのことを愛してるし彼女も同じ気持ちだったからだろう
な」

「よくわかりますね。僕はこれとおりに鈍いので……言葉で直接伝え
てくれないとわかりませんが……」

「そのうち解るぞ。ルナが明るく接していった最初の人間はお前だ
からな。その内だ、その内に変化が出る」

「そうですか？」

この二人も17歳になった。このギルドでは若年者ながら実力を
かわれていてシドや他の上官からの信頼も厚い二人。レイと別れ研
究室に戻って行くデルと数時間もお茶会の席で会話をしていたルナ
が鉢合わせした。ルナは研究室の外でデルと会うことが少ないのか
問いかけてくる。

「あれ？ デルじゃない。何してるのよ。こんな所で」

「レイさんに剣術を教わってたのさ。体を動かすのも気分転換にな
るし。楽しくて」

「ふーん……今度、見に行っている？」

「え……良いけど退屈だよ？ まだまだ基礎の段階から試合とかは
難しいから素振りとレイさんの木刀を受けるだけだし」

「いいのよ。じゃ、楽しみにしてるから」

レイが道場から出て来るとマナとファンはまだ話している。ファ
ンがレイの存在に気付いたらしく空いている元々ルナがいた席を進
めた。現在この城には名だたる名将は数少ない。それでもレイがい
れば何とか守れてしまうのである。

「レイじゃないか。座っていけ」

「ファンさんにマナ。お茶ですか？」

「今は井戸端会議だ。ルナも素直ではないなデルはお前以上の鈍さときた。あの二人は見ていて面白いぞ」

「確かに少し鈍い感もありますが心外ですね。ファンさんだって素直ではないと師匠から聞いてますよ」

「な、何！？ 初耳だぞ！！」

「まあまあ、ファンさん。そういうことは直接ギアさんにね？ ね？」

「ギアめ……帰って来たら問い詰めてやる」

すぐに話題を切り替えレイとマナの結婚式の話しになった。二人は婚約をしてはいるが今のところは式の予定を決めていなかったのだ。レイが忙しいこともあるが今は戦争中で皆が揃うことが少ないことも大きく関係しているだろう。

「で、お前たちの式はいつなのだ？」

「ふえ！？ い、いきなり何を……」

わかりやすいマナは顔を真っ赤にしている。レイはいつものようにすらすら答えた。これも師匠であるギアに似たのだろう。

「今は戦ですから近々は無理でしょうね。それよりは早くこの大陸が安全になってくれることを願います」

「そうだな……」

「そうだよ。それからだよね」

所変わり西の平原。敵の兵の出所はだいたい掴んだが数が多く手が出せずにいた。リーンはたまに起きる小さな戦闘で敵を数十人倒

すが一向に減らない。出所と理由は簡単。山賊が元西の国の兵をか
くまっていたのだ。だが、最近になりこちらの警戒が厳しくなった
関係で事態を一転させるために大集結し攻撃隊を送り込んでこの期
に乗じて攻めようとのことらしい。攻撃隊自体はことごとく討伐さ
れてはいるが本隊は数の多さが比ではない。本城の兵を集めても足
りない量だ。現在、小勢しか連れていない彼女達では威嚇にもな
らない。

「苦肉の策やがやるっきゃないか……」

「リーンは何か心当たりがあるのか？」

「ああ、昔な今とは違いうちのおとんが生きとる時にたまに赤銅の
肌に蛍火の髪をした巨人が来とったんや」

「そ、それは何なんだ？」

「わからん。だが、この最奥に居るのは確かやうちもおとんとその
人の会話を聞いただけやし。でも、かけるしかない」

「わかった、だったら俺も……」

「それはならん！！　いかに……指揮官が居らんとうちらかて奴
らと何ら変わらへんのや。それに……家族と呼べる人をもう、もう
！　危険な目に合わせとうない」

「レイさんから大方の過去は聞いている。だけどよ。同じ重さを背負
うのもいいんじゃないか？　いずれ夫婦になるんだ。荷は一人で持
たせずに二人で二分の一だ」

「ライムズ……。せやがな、来ることは許さへん。がら空きにして
はならんさかいな」

「了解。今はリーンが指揮官だ。命令には従うよ」

リーンは山の最奥にあるソルト・バレーに走る。彼女は本気で走
れば馬より速い。西の大陸は手前に大荒野と数々の街、村を置くが
ソルト・マウンテン山脈を超えた辺りからは更に環境が厳しく人は
居ないはずなのだ。リーンはそこを目指す。ライムズは睨みをきか

せ敵の動きを見ているのだ。

その頃の閻剛とフィトはというと戦闘部族の宿で寝た後に情報通の女将に勧められ食糧を鞆に詰めて閻剛を背負って走る。フィトはあまり長距離を速く走れないためゆっくりだ。それにアルのように森歩きにも慣れていないためさらに時間をとる。

「お……姉様、だめ……行っちゃ……イヤ」

「……」

「お姉様……行かないで」

「はあ……。修羅はおそらく大丈夫だが……この子に頼どころがなければこちらが潰れてしまう……」

「ん……、んん??」

「よお、起きたか。暴れるな。俺だフィト・ソニックだ」

「フィトさん？」

「ああ、アルは走って行ったよ。君は無理をしすぎだ。女の子が……いくら忍びの生業でも脚をいたわりな。二・三日は立てないはずだからな」

「ひ、必死になるとつい……」

「修羅なら大丈夫だよ」

「私、何か言っていました？」

「ああ、不安さは解るぞ。俺も一人だったからな。ただ一人の家族か。俺はアルがただ一人の頼どころさ。君にはもう、兄弟がたくさんいる。修羅だけじゃなく、俺やアルも兄弟さ」

「……」

閻剛は落ち着くとまた眠り出した。アレンはシドに内容を伝えるとレイの指示であると告げヴィヴィアの補助に走って行く。こちらも以前のような攻防はなく敵は最後に残る大きな島の周りに戦車大隊、大型戦艦、空母、機動兵などを集結させ睨み合いにもつれ込ん

だのだ。敵との火力の差はかなりあるが向こうも簡単には砲撃できないのだ。前線のさらに最前線には大陸をねじ曲げたというシドが立ちほだかりその右横には戦車大隊の戦車を愛馬のペガサスと共に二百も叩き割ったルミが、左には海面を氷結させて軍艦や攻撃船の動きを完全に止めてしまったゼシ。さらに何もしていない宙慧とトラップを仕掛け終えたヴィヴィアとアレンが後ろにつきルミの後ろには夫のシェイドがいる。完全に動かない状況に苛立ち始めている双方だが無理には動かせない。自棄になった方の負けだ。

「うゝぁー！！ 焦れたい！」

「ヴィヴィア、大人しくしろ。私はそんな粗野に育てた覚えはないぞ」

「師匠……」

「しかし、動かん」

「ですね」

「仕方ないですね。東も膠着状態ですし」

シドがヴィヴィアとアレンに振り返り本拠に戻ることを告げた。

「これ以上は本拠地を開けるわけにもいかない。ヴィヴィアとアレンは一度帰還しレイの指示で動け」

「はい」

「了解しました」

東はアルの到着と入れ替わりに雷軌が動き修羅と風崖の追跡をギアに頼まれ彼が単身で大陸に進路をとることとなった。革命軍も北朝軍も動かずに何も進まない。こうして一つの護りたいものから一つが失われて行く。ギアやシドはそれに苛立ちを覚えながら早急なことの解決を望んでいた。大きな動乱は止まることを知らずプルトンの起こした爆発の波紋はこのユートピアを飛び出し海外の他国にまで及ぼうとしていたのだった。

征く者……ユクモノ・上

ギア、シドはそれぞれ陣を張ってそこに止まり動かない敵を睨みつける。一人奥地に分け入るリーンも岩塩が照りつける光を乱反射させる峡谷を抜けるのに苦勞していた。

「くそう……眩しくて目が開けられへん。それにこの暑さや……体力が奪われてまう」

修羅も隣の大陸であるサンドウィンドウに足を下ろし砂嵐が吹き荒れる中で一人走っていく。砂の荒野には獲物を付け狙う獰猛な獣がひしめいており修羅を襲うのだった。

「こんな時に風崖が居れば……」

雷軌は未だに海の真ん中あたりで航海をしている頃ですぐに駆けつけることはできない。数が多すぎて流石の修羅でもキツイようだ。その時に救いの手を差し伸べたのは白い立派な法衣を着た痩せ型の男だった。彼は修羅を見るや背中の日本刀を抜き構えると瞬時に修羅が見ていた反対側に移動し鞘に刀をおさめていた。修羅は自分に見えない動きをする男に視線を移し呆然としている。

「奇刃……疾風雅」

野獣が奇声を発し次々に倒れていく。修羅は今は黒いフード付きのマントに身を包んでいるうえに意外と身長はあるため男に見えないこともない。法衣の男は男と認識しているらしい。声をかけてくるが厳しい口調だ。

「どなたか存ぜぬが……何故このような荒野に？ わたくしが駆けつけねば命……を落とすところでしたぞ」

「ふむ、その節は助かった。心より礼をつくそう。ありがとう、そちらの名前は？」

「わたくしの名は聖刃。官名は天の群雲です」

「俺は修羅。軍名は戦鬼魔神」

「修羅……殿か。どのような用向きでこの荒野を抜けようと思われた？ 腕の細い女性が一人で」

「首都まで向かう。そこでこの国を統べる者に直接友好を求めたいのだ」

「かなりの重官殿のようだが……何故戦わなんだ？」

「戦場以外では無益な殺生はせん。このとおり武器もあるからな。力を解放すれば野獣は近寄るのみで命が無からう」

聖刃と名乗る男は次第に興味を持ち始めたような目つきになり背中の大槍を始め武具、銀色の髪、瞳華奢な体躯、容姿などを確認すると握手を求めてきた。彼の身長はだいたい180センチくらいだろう。修羅は170程、少し小さいが女性ならば大柄に見えないこともない。

「わたくしが首都までお送りしましょう。」

「あなたが……助かる。これからお願いするぞ」

何に突っかったか知らないがいきなり修羅に倒れ込み起き上がった修羅に平手打ちを食らった。いくら武具の上からでも女性の胸に手を突くのは感心できない。リーンは果てしない道を一人進んでいくソルト・バレーは大きな岩塩の山で水分はかけられない。ビーストのリーンでなければ今頃は死んでいたに違いない。その彼女もだんだんと疲労と脱水に悩まされている。

「うう、流石に厳しいで……水が欲しい。それに石に反射して暑い……」

彼女はまだ10歳にも満たない過去の自分自身に問いかけていた。彼女が探して居るのは紅の巨人と呼ばれる種族だ。その名は“赤剛”とも“ジャイアント”とも言われもはや伝説級の種族であり存在すら危ういはずだ。だが、彼女は父親とのつながりのある者を求めてひたすら歩く。父から受け継いだのは槍、たったそれだけ……もっと記憶に留めておきたかった幼い頃の自分を再び思い出す。実はリーンは幼い頃にも他族の攻撃を受け祖父に引き取られていたのだ。だから家族の記憶はない。

「たしか……『宵の頃、西の大陸奥に沈みし日を目指し歩め。向かい合う龍の岩に登り我らを呼べ。さすれば我らは答えよう。我らが作りし貫きを持して現れる者。即ち孤狼の王とみなす』」

彼女も記憶に薄い言葉を追っているだけあり暗中模索の言葉が似合う曖昧な探索だ。足取りは重くついにその日の探索は打ち切り近くにあった洞窟の中腹辺りで横になって眠りにつく。その頃の修羅は更に奥地へ分け入っていた。夜が更けても彼女の足取りは軽くむしろ昼間よりも数段軽い。聖刃の案内で砂漠地帯を縦断していくさなかに彼女は星を見上げ過去を思い出しているようだ。彼女もまた、重い過去がある。

「父上……この修羅を加護してくださいさらずに眠りについてくだされば、俺はどのような人生を歩んだでしょうか」

「先を急ぎますよ。修羅」

「すまない。懐古をしていた」

彼女は未だに腕の皮膚ですらも誰にも見せたことはない。たとえ、

妹の闇剛でも……それには何かしら理由があることはわかる。だが、彼女は明かしたからずこれまで一人で生きて来たのだ。

「聖刃！ 屈め！」

「はい！？」

盗賊などの生易しいものではない。どの大陸にもいる人であり人でない生き物。それがカース……悪魔のような風貌のそれらは人を狩りその肉を食らうという。真意はさて置きこの大陸では聖刃の話が正しければ火薬の力が強く銃などの殺傷能力もずば抜けている。修羅は力を解放し撃ってきた銃弾を全て弾き返した。

『あの女……ただ者じゃない……』

『……ああ、美しく……強い。仲間集めろ』

『殺せ……殺せ……』

「ふん……くだらん。聖刃よ。少々伏せておれ。すぐに形はつく」

確かにすぐに決着は付いたが双方の被害は大きい。敵の狙撃隊の中に大型の弾を撃つ兵器を持つものと剣を扱う上で手練れと呼べる敵が居たことが修羅の体に傷を負わせたのが理由だろう。敵は傷を負わせたにも関わらず全員首をはねられ死体と化した。

「来い……」

戦闘の経過を見ていこう。最初に仕掛けたのは敵の狙撃隊。一斉に掃射をかけたが当たった弾数はたったの三発。右肩に龍撃砲と呼ばれる竜の鱗でも突き破るといふ大型の大砲をもらい怯んだ瞬間に右腕と右足に銃弾を食らった。だが振り払った大槍で狙撃隊の半数は即死。残りの半分は二振り目で吹き飛ばされたり叩き斬られたりなどしてほぼ全員が死亡。剣兵は運良くできた隙に乗じて裏から斬

りつけ右腕を肩からごっそり落とし背中中に切り傷を与えてからヒットアンドウェイの戦法で一度飛び退く。それが命取りになり修羅の瞬間移動さながらの動きに反応できずに一人を残して全員が亡き者に成り変わった。最後の一人は一騎打ちで修羅に完敗し首、腰、膝に斬り込みが入って血を流さずに息絶えた。

「しゅ、修羅……大丈夫……なのか？」

「また死ぬことができなかった」

「な、何を……死ぬことができない？」

「聖刃……今、寄ればお前の命もないぞ？ 所詮は生きる屍よ。俺は他人の魂を食らい生き続ける」

殺したカースから白い糸を引く球体が修羅のもとに集まる。切り落とされた腕からも無数の白い魂が糸を引き彼女に絡まっていく。

「俺の肌を見ないでくれ。醜い死の紋章を受け継いだ女などの肌は誰も見たくないとは思うがな」

地面に武具ごと落ちた腕は白い煙をだしながら砂に帰り元通りに腕が修復された。背中の傷も全て修復されたが修羅はその場に倒れてしまい聖刃は彼女を背負って歩いていく。翌日の朝早くから行動を起こしたのはリーン。岩塩の森のような地形をひたすらに歩くのだ。それでも希望は見えずに絶望は彼女の体を蝕む。既に足は鉛の重りをつけたように重く暑さで肌は乾ききり汗も出ない。その途中に獣の足跡を見つけそれをたどり歩いていった。

「狼の群がいる……」

彼女は一縷の希望に思えそれをたどり歩くが日が照り最後には槍を握りしめたまま細い道いっぱい体を広げた状態で地面に倒れてし

まった。

『おとん！ はよう、うちにも槍術を教えてえな！』

『リーン。まだまだや、早すぎる。10になったら教えたるさかいまだ待っとりや』

『う……。うん！ わかった。約束や！』

懐かしい思い出が蘇るが目は霞んで何もみえなくなる。死期を悟ったように小さく呟き意識を失った。

「おとん……。今、そっちに逝くで……。うち、約束守れへんかった。長生きできへんかった……」

その頃のライムズは他の種族に助けられていた。ビーストの知り合いが次々に援軍として駆けつけてきてくれたのだ。種類は様々……日本鹿、アイデックス、山羊、蛇、兎、犬、ライオン、キリンなど様々。彼らはアルとの友好があるのに加えリーンとも面識がありライムズが放った調査隊のうちで出会った者が森中に呼びかけたのだ。それでも数の上では十分の一ほど話にならない。再び修羅に移る。

「……………ここはどこだ？」

「起きましたか」

「また、手をかけたようだな」

「その体全体にある入れ墨のような物が死の紋章ですか？」

「見たのか？」

「ええ、いくら怪我を一瞬で治癒しても魂の傷は癒せませんからね。あなたは……その典型的ですよ。誰も頼らず生きるなど不可能です」
「ふん……人の心内などしれたものか。醜く生きる俺はいつも嫌われ一人だったからな。それに、俺が一人で重荷を背負いさえすれば

他の魂が重荷を背負うことはない」

「あなたは勘違いをしている。ならば、わたくしと夫婦の関係を結びますか？」

「面白いことをいうな。何故、いきなりそちらにとぶ？」

一瞬、顔を赤くし目を泳がせたがすぐに白い瞳で聖刃を睨みつける。軽はずみな発言の大嫌いな修羅はすぐに怒るが聖刃がいたって真剣なことに驚いたようだ。すぐに視線を彼の目に合わせる。

「わたくしの言う“夫婦”とは助け合い心を通わせることのできる存在というものです。あなたが拒絶するならどこまでもついていきましよう。わたくしの本職を先に伝えておきますか……わたくしはこのサンドウィンドウの大宗教であるブツダ教の本殿につかえ、神の御心をお伝えする役柄“大神官”です。ユートピアのギルド、ホーリ・プリセクトの魔王さん」

「知っていたのか……」

「その誰に対しても威風堂々とし礼節を怠らない白銀の髪の将の噂はかねがね聞いておりましたとも。よもや女性とは思いませんでした……」

「ふん、くえんヤツめ。しかし、礼はしたい。何か言え」

「わたくしをあなたのギルドに属させていただくこととあなたが欲しい」

「前者は快く受けよう。だが、後者はならん」

「はは、そうおっしゃると思ってきましたよ。あなたも頑固な方だ。ですが、わたくしも負けはしませんよ」

聖刃が床の板に突っかかりもろに修羅の胸に手をついた……。胸倉を掴まれ冷や汗が一筋流れた後彼の左の頬には彼女の拳の跡が綺麗に残されていたという。リーンは死んではいなかった。冷たい洞窟で目を覚まし起きようとした瞬間に額が獅子鼻に触れ力なく柔ら

かな干し草の上に倒れた。槍が無いことに気づき手探りで探していると優しい声で話しかけられる。そちらに目をやると大きな銀狼が一頭。その奥には更に大きな片目が抉られた銀狼がいた。

『お姉ちゃんやつと起きはったでおう』

『おお、わかっておる。して……その少女よ。名は？』

「リーン・ハルバートや」

『ハルバート……その槍……。お前はコウルの娘か？』

「おとんを知っとるんか？」

『知っておる、知っておるとも。ワシとヤツは相棒を超えた仲じゃった。しかし、ワシが村を離れておった隙に攻め落とされ皆殺しにあつたと聞いた』

「うちは……おとんに言われて必死に逃げたんや。だからこの通り生きとる」

『お姉ちゃんはどこに行きたいんや？　これからもここに居るんか？』

『桜牙。少し静かにしいや。聞きたいことはあとでゆっくり聞き。リーン……おそらくは、お主は最西の民、赤剛を探して来たのだらう』

「そや、ちとまずいことになっとてな」

『ならば、奴らに会わせよう。しかし、条件がある』

「条件？」

『何……簡単じゃ。この子を桜牙を他の若い牙と共にそなたに付き添わせこの谷から連れてゆくことじゃ』

「あんたは？」

『ワシはここで朽ちるのみじゃ。体は魂を失った時に死ぬ。ワシはコウルという魂を失った時、既に死んでおる。娘や牙達を頼むぞ』

一際大きな狼が一声吠えたと周りの岩だなや奥から次々に同じ毛色の銀狼が集まり首長らしき彼の最後の言葉を聞きそこからリーン

を導くようにその場をあとにする。桜牙も別れを告げリーンを見つめていた。

『忘れるところであつた。コウルよりお前に託すはずだが今はワシが父代わりだ。受け取れ。銀狼の牙をあしらった首飾りだ』

「ありがとうな。名前は？」

『我が名は風牙』

「ありがとう。風牙はん」

『うぬ。早く行け。胸騒ぎがする』

桜牙が腰を落とすとリーンがまたがり彼女を先頭にその先の山に向かう。彼らの軽快な駆け足の音が心地よい中その岩山は見えてきた。確かに双龍の岩は存在したのだ。

『これで良かったのか？ コウル』

「ああ、ええんや。これでな……あの子ならやれる。俺の娘や必ずやれる」

『我らも引退じゃな』

「そうや、次代に引き継いだんや」

修羅の体調が回復ししだい発つことにした聖刃は相変わらずよく転ぶ。そして、修羅に殴られる。彼女と聖刃は現在の足取りとして大砂漠地帯を抜けオアシスの村であるチナにいた。そこは彼の友人が多く身を隠すのには持って来いらしい。なぜなら、彼は軍の圧力に負けた国家体制に反対し神から選ばれたはずなのだが『仕事で面倒になった』と官を辞し現在は過激ではあるが革命的思想を持つ友人を頼りそこに席を置いているのだ。彼にも修羅をかくまうことで良い点がいくつもある。

「ほう、お前は革命家だったのか」

「そうではありません。確かに革命的思想はありますがわたくしは信教の十分な加護を民が受けられる国であることを願う……さしずめ懇願者といったあたりでしょうか」

「俺からすれば変わらぬがな。う……、腰回り……の計測器で絞めすぎだ……少し緩くたのむぞ……」

「は、かしこまりました」

鎧を作り直している修羅はまだ本調子ではない。それでもその土地の多くの文献を読み知識を吸収していく。側には必ず聖刃が付き添い身を案じていた。修羅は肩甲骨辺りまである髪を束ねることはしない。だが、今はその地域の女性が好んで着る服を着ているため一つに縛り女性らしくすごしていた。そんな彼女は良い意味で嫌でも周りの目を強く引く。聖刃は誠実な人柄に加え少しドジなことを除けば完璧な人間だった。が……修羅は鬱陶しいらしい。

「聖刃……何故、お前は自ら国を治めようとは思わないのだ？」

「わたくしは神につかえる身ゆえ。そのように人を差別してはならないと思っていますのです」

「面白いな。俺はそうは思わんが……まとめられる人間が居なければ人間など私欲の塊だ。統制し妥協を覚え、上に立つ俺達が誠実ならば国は右肩上がりに良政が成り立つのだ。それが定理で今は上が暴政を行う……それが悪化の理由だ」

「そう思われるなら……それについて問いましょう。あなたは何故一人で背負いたがるのですか？」

両肩を掴まれ真剣な眼差しで見つめられてしまい思わず赤面し右斜め下に視線を送る。いつになく弱い調子で彼女が答えた。声も細く少女のような面影がでている。

「夫と子を残せば必ずその子には重荷がつきまとう。死の紋章は免

れられない。ならば私が長生きさえしていれば……」

「ならば、あなたは身勝手だ。一人の男の愛を無駄にするのだから……。本当にあなたはわかっていない。あなたが迷惑をかけたくなと感じることこそこちらは心配し心が揺らぐ要因……あなたはそれでもひとりでいますか？」

修羅の表情が凍ることなどそうそうない。それを初めてみたのは聖刃だった。いつもの堂々たる雰囲気と威厳は萎縮し弱い心の波さえ感じられる。聖刃が床に押し倒しても反抗しないのはそのせいだろう。

「どうしたんですか？　いつもならわたくしの顔に拳が飛ぶ行為をしているというのに」

「あ、あまり……調子に乗るなよ。私の何がわかると言うのだ。武家に生まれた一人娘などは結婚以外に有用性などなからう。たまたまだ、私が腕っ節でその辺の男に引けを取らないことから今の型にはまったのはな」

「わたくしも同じとは言わないが……あなたと違いがないわけではない。一度信じてくださるのもよいではないですか」

「信じていいのか？」 「ええ」

「ホントにだな？」

「はい」

いきなり目力が戻り下にいた修羅が馬乗りになり聖刃の胸倉をつかんで恐ろしい笑いを浮かべた。その後顔を引き寄せる。笑うと右側の八重歯が目立った。それが妙にはっきりと言葉を伝え聖刃の喉に手を当てて何かを言っている。

「俺は嘘つきは嫌いだ……。嘘をついたら……。さっきの言葉が嘘なら……。その首が胴から離れても文句はないな？　まあ、今更撤回で

きる事柄ではないからな。既に後戻りはできんぞ」

「あ……はい」

上から退くと立ち上がりその後には立ち上がった聖刃の顎に一発……強烈なアッパーが入った。また、見事に決まったものだ……。

「ぐあー!!　な……何故」

この後告がれた言葉は更に恐ろしい凄みを効かせていた。それは魔王に相応しい……この世の中においても……恐ろしい笑いだっただろう。

「それは……押し倒してくれた礼だ。ひ……じ……り……ば……。二度とあのようなまねはすまいぞ?」

本当に恐ろしい限りだ。一発で聖刃の脳を揺さぶりその優美な後ろ姿を見せつけながら書庫を後にした。真に恐ろしい限りだ……。重ね重ね……。

『ほら、リーン姉。呼びや』

「わかってるがな。せやけどうちはこのいうがらやないし……だぁ!　もおなでもええわ!」

リーンの特徴的な澄んだアルトの後に銀狼族の戦士である「牙」と新しい首長になった桜牙の遠吠えに合わせて一斉に吠えた。

「我が名はリーン・ハルバート!!　最西の民赤剛に助けを求めんとこの地に赴いた。我の意を伝えるため首長殿との面会を求めたい!!」

すると地面を揺るがし巨大な脚がリーンの目の前に現れた。その男は頭に髪などないがすぐにわかる程の赤銅の肌をしていた。体長はおよそ4メートル、腕は太く巨人という名が相応しい。

「孤狼の王の証を……」

「あ、証？」

『それですよ姉さん。銀狼の打ち切り槍』「こ、これなんか？」

「確かに見極めた。孤狼の女王よ。我らはあなたについて行く。まずは首長に会って頂きたい」

「わかったで」

大男について行くと途中で案内役が若い男に代わり彼について行くと首長が三人椅子に座っていた。

「ワシは知恵の大審。ギルジ」

「俺は闘いの大審。バルラ」

「最後の私が心の大審。サラです」

「代表し知恵の大審のワシがあなた様への忠義の印に供物を……」

「皆はんには悪いでっしゃろうが儀式は遠慮して欲しいんや」

「ほう、急ぎの用と見えますが……」

「うちの夫となる男が大軍に相対し危ない状態なんやはどう行きたい」

「わかりました」

「サラ殿……」

「いいのか？ 儀の短縮は神への無礼……」

「問題ないでしょう。今はこの方の思い人を助けることを優先せねばなりません。神などに頼らず、目の前のこの勇敢な女王に付き従うが良策かと」

「知恵の大審は意に解する」

「闘いの大審も認ずる」

どこからともなく巨人が現れ次々に武具を揃え銀狼達の群れに加わって地鳴りをお越しながら走る。太陽の光を受けリーンの髪が金に輝いたように感じ雄叫びと共にソルト・バレーの大地を抜けて行く。行きに比べその速さは各段に違い勢いづいた軍はおよそ200。数の上では劣るが強さは比ではない。その更に後ろからは女、子供、老人もついて来る。……修羅とリーンは勢いをつけ己の征く道を切り開いた。その頃、新たな動きを受けて海外に渡った者が4人。

「ふう……まさか船に乗るなんてな」

「あら、船は苦手なのかしら？」

「茶化すなヴィヴィア。落とすぞ」

「お二人ともそこまでにしてくださいよ。ルナ？ 大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ……おえええ」

「重症ね。船酔いは慣れで何とかなるものでもないし……」

それ以外の海外組の動きでは雷軌も大陸、サウスウィンドウに足を進め海に落ちた風崖もなんとか生きていた。

「修羅様は無事であろうか……殺気！」

雷軌は軍事交戦区域に入ってしまったらしくあわただしく動く。

「ゲホッ……お、俺は……生きてるのか？」

「お兄さんは誰？ 一応は助けたけど……その頭……オウガ？」

「お前は？」

「あたし？ あたしはオーシャ。この近くに住んでんの。お兄さんかっこいいし家に招待するわ」 風崖は謎の少女オーシャに出会い一応命は取り留めた様子だった。これからどうなるのかは誰にも予想できない。これからも経過を見ていこう……。変動は更に続いて

行くのだから。

征く者……ユクモノ・下へ

征く者……ユクモノ・下

ユートピア内の戦争はやはり膠着化が激しく特に東と北は動かない。それ以外の大きく進展したリーンと修羅以外にも海外で動き出した者たちがいる。今回はその二組の動向を見ていこう。まずはレイの指示を受けて海嶺の地殻変動から溶岩が噴出し島を量産する群島地帯である火山群島に向かうアレン、ヴィヴィア、ルナ、デルの四人に視点を移していこう。

「船がこんなにキツイとは……」

「デルは大丈夫なのね」

「僕は元々は海の上で生まれているので丘のドワーフよりも数段海には強いですよ」

「そうね。にしてもだらしないわね。アレン！ もっとしっかりしてよ！」

「そんなこと言われても……。山育ち山暮らしの俺にウツ……そんな無茶を」

「全く、まだ女の子のルナなら解るけれどなんでこうも弱いのかしら」

「みなさん！ 着きます振動があるので特に二人は船外に頭を出さないでくださいよ！」

火山群島の周辺は修羅や風崖、雷軌が超えた広いが穏やかな海とは違い小さな島が点々と存在し海流が複雑で船が大きく揺れる。その分酔いやすいようだ。それでもアレンは目的地の陸に脚が着くや急に元氣を取り戻し興味津々と言った感じで周りを見回す。そこは旧文明が存在したらしい大きな遺跡島で港まで整備されている。しかし、時間の力と自然の力は強くその石で作られている建物ですら木々に覆われ蔭が張り昔の面影は欠片も無い。

「凄い……こんな大きな石の建物なんてギルドくらいしかないと思
っていたけど……こんな孤島こんな文化があるなんて」

「ホントに凄いな」

「うう、気持ち悪い……」

「大丈夫？」

「これが大丈夫に見える？」

「ここからは二手に分かれましょう。デルはルナを守ってあげなさい。私はアレンに守ってもらうから」

「調子いいぜ。全く……」

雷軌は森の中に居る。うっそうとした森の中にゲリラのように隠れている。そこに居るのは戦車や機動兵などがわんさか現れていたのだ。彼は地面に伏せ背中に背負っていた武器の雷撃砲を構えていた。彼は世にも珍しい將軍級の兵なのに迷彩柄で最前線の機動隊を指揮する将兵でその関係から前線での情報収集がともうまい。そこに大きな砲火が聞こえそこに藪の中でほふく前進しながら進んでいく。

「姉様。この数では防ぎきれません」

「月光ちゃん！ そんなこと言わないで！」

「ヤタの鏡よ……全てを水の力において消し去れ」

どちらかという目つきのキツイ少女が胸の前で構えた鏡の方向に砲弾が吸い込まれ逆に敵の方向に放出された。その後そこから吸い込まれた砲弾が放出される。

「姉様……防ぎきれません。本当に……」

「私もいくわ！ ヤサカニの勾玉よ！ 私に力を！ 龍陣炎舞！」

周りの木々まで焼かれるほどの業火が周りを包み周辺をぐるぐる回り戦車を片づけることには成功したが数人機動兵が生き延びている。散弾銃での掃射に対しては二人も対応できない様子で両手を上げている。

「これまでです。おとなしくしましょう」

「そんなぁ……」

二人が座り込んだ瞬間に近くの藪から一直線に雷光が起こり敵の半数が感電死した。そこに雷軌が踊りこみ次々に格闘で殴り倒す。向こうもおとなしくしないのは解りきっているため雷軌もその策を練って出て来たのだ。先の戦闘で月光と呼ばれた少女の首にナイフを突き付ける最後の一人は普通に雷軌が指から発した雷光に打たれ倒れた。

「ご無事ですか？ お二人とも」

「え、ええ」

「怪我は……い……」

「月光さんでいいかな？ 少し腕を見せてくれ」

自分の服の一部を裂き月光の腕に巻いた。おそらく銃弾がかすめたのだろうが傷はそこまでひどくない。明るめの性格の姉が問いかけてくる。それもそうだ。名前も知らない男に助けられたのだ。名前ぐらい聞いてくるだろう。

「あ、あの。お名前は？」

「は、申し訳ない。俺の名は雷軌。大陸ユートピアより探し人をしております。先日、ここの周辺での戦闘を目にし貴方がたが襲われていることに気付いたしだい」

「これはご丁寧に。私たちはこの大陸サンドウィンドウの巫女をし

ております。私が姉の日光」

「手当のお礼はします。私が妹の月光。して、人探しをするということは思い入れのある方なのでしょう？　その方のお名前は？」

「修羅様だ」

「しゅ、修羅？　あの大名のですか？」

「そうなります。我が主であり恩師になる。本来なら付き添いの一人が同行しているはずなのだが」

「それは不安ですね」

傷を受けた腕をキリリとした顔に少し赤さを浮かべてみている月光に姉の日光が問いかける。

「月光ちゃん……どうしようか？」

「私は、礼がしたいです」

「うん、そういうと思った。しばらくは同行させていただきますね。雷軌様」

「様はいらないが……」

「よろしく願います。雷軌様」
「……」

雷軌と二人の巫女らしい日光と月光が加わり一度首都に向かうようだ。雷軌は銃を担ぎ歩くのがゆっくりな二人に合わせて歩くようだ。こちらにも探索を始めたようで特に動ける二人組のヴィヴィアとアレンは遺跡群の中で歩いている。たいするルナとデルは船酔いで気分が悪いらしいルナを案じて近い遺跡の内部で休んでいる。

「うう……ごめんね」

「何が？」

「デルも行きたいでしょ？」

「ルナが気分悪くて襲われたらもっと後悔するよ。だったら近くの

石板とかを見ながらなんかの方が安心もできるし充実できる」

「大分楽になったから動かない？」

「ダメだよ。まだ顔が青いし。あんまり無理はしちゃダメだよ」

ヴィヴィアとアレンは奥に入り込んでいた。そこで既に殺気と何か意図的に気配を消そうとしている生物の気配を感じ取っていた。それも野獣などの内の肉食獣などではなく明らかに知識のついた物だ。足跡を消している。

「気付いてるわよね？」

「ああ、何かが付けて来てる」

「それだけじゃないわ。足跡を消してる。私が付けた足跡も消えてる」

「迷わせる気か？」

「たぶんね。もう一つ……この遺跡、誰かが探った跡があるわ。なのに誰一人いない。ホコリやチリが舞い上がってるのはそいつらのせいね」

「俺は探ったというよりは“掃除”したように思うがな。確証はないが。そこに落ちてる黒いものは人の肉が焼けた物だ。これだけ惨い殺し方になると……相当怨みがあるだろうな」

二人は一度そのピラミッド状の遺跡の外に出ると入口に罫を張り一度下まで降りた。デルもレイとの修行の成果が現れ始め殺気に気づいている。デルは剣を持っではいるがまだまだ扱える域ではない。そこで投げ具などの兵器を白衣の中に多く隠し持っていた

「ルナ……」

「ちょっ……ん、い、いきなり」

「少し伏せてくれ。誰か外に居る」

「へ？」

外に居る物の姿をデルが小型の端末で移しアレンとヴィヴィアに渡しておいた物に送った。その写真に写っているのは信じがたいものだった。どう見てもカイザーエンジェルだ。翼の色は染めているのか明らかに違うが何かを探しているように見える。武器も銃器を持っていることからこちらの侵入に感づいたことは言うまでもない。デルの頭であればそれくらいは解りきっている。

「ん……」

「ご、ごめん。すぐに退くからちよつと我慢して」

「いいから。もう少しこうしてて」

月光と日光の姉妹とそれに同行する形になった雷軌はボディガードも務める形になっている。雷軌は身長的には割と大柄で180を抜けた辺りだ。それに加え筋肉質で頭もよく洞察力や目利きに関しては七人衆の中では明らかに実力が飛び抜けていた。七人衆とは修羅直属の大將の七人をそう呼びメンバーは妹の閨閤から風崖、宙慧、紅蓮、氷鎧、岩鉾、最後に雷軌だ。その二人がこちらに来てしまい守りは大丈夫なのかとも思われるが問題ない。元の東の国の警護でも実質的にそれを行っていたのは紅蓮と氷鎧のみで彼らは散らばっていたからだ。

「ですが、修羅様は不安ではないのでしょうか……」

「何故、そう思われる？」

「女子なら皆が思いますよ。誰かと一緒にいたいなどは……」

「あの方はお強い。それに、我々が関わってはならない領域の彼女に我々がわざわざ触れに行く必要などないでしょ」

「私なら……側にいて欲しいものですが」

「それともう一つ、あの方に釣り合うのは俺達のような脆弱な者ではなくもつと……打たれ強い……肉体的に強固なお人でなければ……」

…死ぬだろう」

「雷軌様はその方を愛されていますか？」

「月光ちゃん？　もしかして……」

「……君主としてはだな。俺には相応の方が居るはずさ。俺に付き添うてくれる人が居ればだが」

「良かったじゃない。月光ちゃん」

「姉様？　……今、思ったことを口にだそうとしたら……」

「がっほうひゃん？　ほっへひっはらないへ（月光ちゃん？　ほっぺ引っ張らないで）」

デルはその周辺が危険と考えあまり本調子ではないルナを背負って走り始めた。遺跡の各所にトラップを張りながら周りを気にしながら……音を立てずにいつになく更に真剣に走っていた。背中のルナも徐々に回復しているがまだ闘えるほどの快度ではない。それにルナの魔法はかなり破壊力が高く使うなら大規模に衝突してからのほうが得策だ。……そう判断した矢先にそこから離れた場所で砂煙が巻き起こりどう考えても戦闘が起こっていたしかも武器の破壊力から考え攻撃はアレンの物だ。

「ルナちゃん……ちょっと口当たりは悪いけど……」

ルナは彼の予想どおりに口から透明な液体を吹き出した。相当な刺激薬でこの世の物とは思えない物凄い異臭と渋味があると解説をデルが入れるがルナは弱々しい声で不平をつく。

「……それ、先に言ってよ。もの凄く苦いんだよ？」

「僕は風邪をひく度に母さんに飲まされたよ」

「うえ……、ドワーフの秘薬か何か？」

「いや、万能薬っていう薬さ。あらゆる症状の緩和をし体調を向上させてくれる薬。普通に出回ってるよ」

「そ、そうなんだ」

デルがそれを口に含みルナに口移しで飲ませた。これが一番効率が良いと顔を赤くするデルとは対照的に思考のついていけないルナはデルに手を差し伸べられて気づき二人は走って遺跡の内部に入っていく。一方のヴィヴィアとアレンは……アレンの武器である念糸の先にレイのアドバイスでつけた剣のような形の重りをつけ振り抜きやすくなったそれを使う。用途は違うが簡易のクローとしても使える。

「ご、ごめん……油断したわ」

「今更、グジグジ言うな！ お前らしくないな！ そんな弱い女に惚れた覚えは無いぞ！！」

「……なっ何よ！！ 私だって女の子なんだから！」

片手で足に銃弾を受けたヴィヴィアを抱えて反対の手に装備した五指念糸のロックを解除せず振り回す。それは切れ味鋭く遺跡の建物を切り裂いた。大きな崩落はこのせいである。そのまま彼はデルの足跡を見つけデルが入って行った一番大きな遺跡に入って行った。

「どうやら……体力と体調は回復したらしいね」

「……」

「ご、ごめん。ここにはロートなんてないし……」

「初めては……普通に欲しかったわよ！！」

遺跡の内部にもかなりの数のトラップがありデルの手腕で何とか切り抜けた。後続のアレンとヴィヴィアもヴィヴィアの手癖と経験でなんとか切り抜け再び4人が集まった。雷軌と月光、日光もひたすら歩く。どうやら彼女らが探しているのは聖刃らしい。雷軌が空に浮かぶ式に気づき銃を構え撃ち落とした。見覚えがあると思い撃

ち落とせば案の定……それは修羅が魔法で作った式だった。その足に付いている文を読み始めている。

「修羅様からの頼りじゃ……。ふむむむ……。なんと……。これはこれは……」

「雷軌様……お一人で納得されてはいけません」

「そうですよ！ 私たちにも読ませるもしくは読み上げてくださいます！」

「わかった……。『この文が届いていると言うことは七人衆の誰かが封を開けたことに違いないだろう。俺はこの大陸で無事に生き延び聖刃という男に助けられ世話になっている。成り行きだが……その男とギルドに帰った後に婚姻を結ぶこととなった。その知らせはしておく。現在、俺はチナにいる。この後は首都へ足を運ぶつもりだ。」

修羅』」

「大神官様が婚姻を……。あの方の心を射止めるとは相当な美貌の持ち主」

「姉様……。無駄に興奮されるな。その内赤額も帰って来ますとも……」

雷軌の能力は放電や蓄電が主であり防御や移動には向かない。雷軌や二人のいるエリアと首都はかなり距離がある上にチナは島のちょうど反対側だ行こうと望んで簡単に行けるような距離でもない。まずは街を探してそこで休息をとらなくてはならないのが実状である。あまり月光の傷の状態が良くないのだ。雷軌が気にしているのは出血の量と傷に悪い菌が入り化膿しないかを案じているのだ。彼はデルやアルのように薬草の調査などわからない。種類はわかって使う相手がデリケートなため彼が使うようには使えない。その方法は……直接擦り込む。

「もう少しで青龍の頂につきます。そこで月光ちゃんの傷を洗いましょう。あと体も洗いたいですし」

「ええ。それには賛成します」

雷軌は周りを見回し水の音に気づいた。緩やかな沢がある。彼女達が言うのはそこだろう。一方のヴィヴィア達。四人が合流し把握した状況で動きに支障がでそうなのは怪我人が一人居ることのみだ。デルの薬を綿に染み込ませて傷口につけると痛みには耐えかねてヴィヴィアが声を漏らす。

「うう……あああ……いたっ！」

「静かにしろ。敵が来るぞ」

「アレンさん。少しはいたわってあげてくださいよ。いくら自分が不甲斐なくてもそれでヴィヴィアさんに当たっても仕方ないんですから」

「ああ……すまない。気がたっていてな。やはり、俺は指揮官には向かないか」

「何よ。さっきは人のこと弱いとか言ってたくせに」

「確かに言ったな。だが、俺が弱くないなんて一言も言ってないぞ」

「アレンさん！ ヴィヴィアさん！ いい加減にしてください。一応はレイさんからメモはもらってますから立て直しましょう」

かなり大胆な作戦というより陣張りだ。もともと攻撃的な魔法が得意なルナを前衛に出しデルを補助に回すのが大まかな概要として言える。その他の二人は探索の手伝いとトラップの設置などをするのが得策らしい。

「まずは情報を手に入れましょう。僕が入れた情報では断片的すぎて何とも言えなくて」

「どういう情報だ？」

「はい、大まかに言えばこの島は昔はかなり高い文明を持ちそれで何かのテクノロジーを使っていたことです。そのわからないところは石板が破壊されていたりなくなっていました」

「ねえ、デル。この部屋……これまでとは違う？」

「そうね。石の質感が違う」

「これは……文字？」

「あつた！　これだ！」

辺りを這いずり回り草を剥ぎ取って床や壁の文字をメモ紙に移し形状や近くにある小さな壁画から読み取り次々に解読していった。

「最後なんですよ。テクノロジーの鍵はこの部屋に星が光るときに何が起こるか……」

「星……」

「二人とも目はちゃんと付いてるの？」

「何だよ急に」

上を見た二人は絶句した。そこには海から離れ空を飛ぶ島の絵があつたのだ。その中心には杖を持つ少女の姿が映っている。謎は深まるばかり……。青龍の頂についた三人は水浴びを始めた。三人とは言うが二人が水浴びをしている間の見張りが雷軌だ。彼は岩にもたれ雷撃砲の手入れをしながら体を休めていた。思えばこれまで彼等は休憩することなく歩き続けていたのだからわからなくもない。特に雷軌は慣れない船に乗り大陸に足を下ろせばいきなりゲリラ戦。果ては年下の双子を警護。気が抜けないのだ。

「雷軌様も一緒にどうですか？」

「遠慮しよう」

「あ、照れてる」

「からかいすぎですよ。姉様」

「見てほしいんじゃないのお？ 月光ちゃん！」

「……」

「いったあい！！！！」

「申し訳あません……。破廉恥な姉で……」

「いや、月光もこちら側に来るな。服を着ろ」

雷軌は今年で25歳になる。意外と年は過ぎており結婚適齢が22歳程のこの世界ではすでに行き過ぎている。別にできない訳ではないが彼は一途なる忠臣でする気もなくこのまま未婚で過ごしてもいいと思っているらしい。月光は彼に思いを寄せたようだが彼はどうなのだろうか。それもそのはず……彼女は今年16歳になる少女でまだ成人の義すら終えていない。歳差は9歳。この差がネックになるのだろう。

「雷軌様は何故一人身なのですか？」

「月光……そんなことはどうでもいい。………そんな目で見るな。お前の目は細いから目力が強い。強いて言えばだ、結婚したくないなどとは思ってはおらん。だが、このような職についておるとな……妻を残して先に逝くこともまれではない。それが嫌なのだ。最後は決別するとしても。その横でお互いにみとりながら眠る。それがよいのだ」

「私は……貴方がよければ……」

「月光……お前はまだ若い。早まることは無いのだ。俺のように先のないものなどを選ぶことも無い」

「いえ、貴方はご自分のことに気づいておられない。私は貴方のお優しいところに惚れ貴方の元に行きたいと思いました。姉様もそれに関して認めてくださいました。義兄上も認めてくださるでしょう」

雷軌と比べるとかなり小柄な月光が彼にもたれる。その頃のデル

とルナは遺跡内で奮闘している。デルの器用さで簡単な弓を作りそれをヴィヴィアが使って隊列の前後を固めるためだ。空を飛んでくるそれらはかなり強いがこちらも全力で立ち向かう。特にルナはデルに推され魔法の属性の中で一番強力かつ危険なその力を解放した。

「我が体に宿る星の聖よ……。我に付き従い力を貸せ。星帝獣！
イグニフェタス！」

『ほう、これまた若い者が呼び覚ましおったか……。わしを呼び出したのだ。覚悟はできておろう？』

「ええ、皆を守るために存分に力を放ってもらって構わないわ。私も星帝杖で攻撃をする」

『よかろう、主と認めるにふさわしい小娘じゃ。懐かしいのお。ルナとやらわしに乘れ！』

「凄いわね！ まさかあの子にあんな力があるなんて！ デル！
見てる？」

「解ってますよ！ でも……星帝獣……ってまさか」

「デル！ 剣は振るわなければ意味がないぞ！」

アレンは敵に容赦することなく殺しにかかる。彼の武器には三種の特性があるのだ。一つ彼の強靱な筋力を伝える念糸の堅さ。二つ、先についた重しの破壊力。三つ、ビーストにして初めての亜種である微量の魔力で念糸を無限に伸ばす。これで遺跡に大きく切り込みを入れたり敵を糸で巻き取ってからめ捕ったりして近づかせないのだ。ヴィヴィアは類まれなる状態適応能力で弓を使いこなし遺跡に敵を近付かせない。デルはレイに教わったその全てを引き出し近距離で確実に仕留めていく。気味が悪いのはカイザーエンジェル数の多さである。そして、彼らの多くにはない過激な思想がこのカイザーエンジェルには存在する。

「ね、ねえ。今気づいたんだけどさ」

「何だよ！」

「ここって入口二つなかった？」

「キヤー！」

「ルナ！」

「クソ！ 魔力の防止壁か！ アレンさん！ 敵は中でルナの力を利用する気です！ 阻止、もしくは途中で止めなくては！」

「解ってる！俺とヴィヴィアで時間稼ぎと防衛はしてやる！走れ！ルナを助けてこい！レイさんに四人でいつて仲間失ったなんて顔向けできないぞ！」

「ハイ！」

敵は数人のカイザーエンジェルで編成された部隊で魔力を遮断する特別な石を使いルナをそこに閉じ込めたのだ。デルが靴に仕込んだジェットで飛んでいく。内部にはカイザーエンジェルの近距離攻撃部隊が網を張っていたが……。

「いたぞ！」

「どけえええええええええええええええ！」

「ぐあああ！」

こういう時に彼らは向こう見ずではあるががむしやらに突っ込み怪我をしてもなお攻撃する。このデルにもその気は強い。何せレイの教えでギアが彼に教えたことを教わっているからだ。

『己を守り力を尽くさねば。愛しい人や仲間は守れない。まずは強くなるんだ。俺はそうやって師匠にいわれて強くなった。何、お前もなれるさ。守りたいものがあるならな』

「守りたい……もの」

彼は猛進していく。二か所で別々の進展をとげ革新には至らずとも前進はした。若い力と老練ともいえないが彼らの中では力を蓄えた者の力は徐々に協調なし空に響く。彼らはそんな世の中に生きている。征く者の運命は一つには決まらない。なぜなら、彼らには為さねばならぬことがありそれは容易いことではないのだから。

……TO BE CONTENTW……

闇姫恋路

海外での状態から今度は大陸内の闘いに目を向けよう。アルはギアと合流し岩鉾は雷軌から預かった大隊を加えた軍で相も変わらず睨み合いを続ける。三軍が動かぬままに戦闘は行われぬ。そして、東でついに動きが出た。革命軍がこちらになびいたのだった。理由はいたって簡単にアルの弓一つが決め手だ。弓を構え雷を凝縮して敵……特に革命軍の大將に向ける。その矢は恐ろしいスピードで敵の放った同じ雷をまとった矢を打ち負かし敵の弓に雷を流した。

「何をする気だ？ アル、攻撃的に触れれば向こうはいきり立つぞ？」

「解ってるんでしょ？ ギアさん。あそこにいる大將。ボア・アークリー・ルースは私の弟だと」

「確証がないだろ？」

「またまた、貴方ほどの人がろくに調査もしないはずないでしょ？ これでもひとりの男の妻をしているのでね。それくらいはわかりますよ」

その夫はそのすぐ近くにいたしかもほとんど目と鼻の先に居る。そのエリアに出るまでは実は小さな丘陵をいくつか超えるだけで赴ける。そこに向かった理由は闇剛の体調が回復したからだ。森の中で彼女の案内を受けながら弓を構える妻のもとに歩く。その時、戦場の方向から眩い光が一瞬だけ光り、三軍が陣張りをする中間辺りで小さな爆発を生み出して消えた。闇剛が走り出そうとするのを彼は笑いながら止めている。戦闘経験はやはりフィットの方が多くそう言ったことに関しては感がいい。

「あ、あれは！！ フィットさん！」

「待った、待った。大丈夫だよ。家のかみさんが一発だけ撃ち込んだんだろうよ。そこまで心配することは無いさ」

その頃、革命軍の陣では大騒ぎになっていた。大将の碧髪の少年が眩きギアの軍につくことを決めたからだ。彼の手には二つに折れた弓がありそれは綺麗に真つ二つに焼き切られている。そして、彼の足もとにはアルの放つ特別製の矢が突き刺さり廢船に引火してチロチロと弱い火が周りを舐め始めた。

「あ、あれって……碧独の美女じゃないか？　長い碧色の髪……間違いない」

「あの雷撃を弓に纏わせられるやつなんてあいつしかないぞ。大将……大丈夫ですかい？」

「ああ、手加減されてるからな……。それにしたって姉さんも手厳しいことするねえ。ひでえじゃねえか。実の弟に矢を射ろうなんてよ」

「ね、姉さん？　大将！　もしかして！」

「そうだぞ？　言う必要がなかったから言わなかったが……これで、後には退けないな。全軍は武器をまとめ向こうに行くぞ。攻撃の意思を見せるなよ？　向こうには軍神ギアがいる。下手すりゃ皆殺しだぜ？」

フィトと闇剛も合流し近くにいた者のほとんど皆がその場に揃った。アルの目の前に彼女と同じくらいの身長で細身の男がいる。特徴的な碧髪に瞳も深い碧だ。男性としては少々頼りないが頭はきれそうに感じられる。気さくに笑いかける彼のもとにフィトが現れ話しかけた。どうやら親しみが持てるような関係らしい。

「話は聞いているよ。アークリー」

「義兄さんになるのかな？　こんな粗野な姉だがこれから……イ

デデデデ！ 死ぬ！ 死ぬ！ その電圧はキツいから！ 止めてくれ姉貴！」

「そ、その声は！ アークリー！」

「あれ？ なんでこんな所に闇剛が居るんだよ……聞いてないぜ。くそ……バカ姉貴のせいで」

「ほう、まさか弟をこの手にかけることになろうとはねえ。アークリー？」

「じよ、冗談だって！！」

闇剛の顔がほころびかけたがすぐにいつもの物悲しい瞳に戻った。それに気づいたアルがギアに進言しギルドの守りをアークリーに任せ闇剛をギルドに連れて帰らせた。フィトもそれには気づいておりそれに加えた彼女の体調のことも付け添えたおかげでギアも折れようだ。ギアはそのエリアにいる味方をかき集め攻撃に先んじて軍議を始める。そんな中の帰還のためか少々動揺も隠せない兵士たち。ましてや本拠に向かうのは元々敵であった革命軍の雑兵だ。信用が置けないこともうなづけない訳ではない。

「あんた……革命軍だったんだ」

「ああ、俺はあの二朝政の歪んだ国を正すために立ち上がった内の一人だ」

「私を騙していたの？ あの頃のあの言葉は嘘だったの？ そうよね、バカみたいでしょ。忍びの女が恋をしてその男は敵で……面白かったかしら？ 手の上の私は」

「今は何を言っても信じねーだろうから否定も肯定もしねーよ。まあ、一つ言えるのは俺は駆け引きは嫌いだ」

レイとアークリーも知り合いだ。懐かしむように握手をした二人を先頭に城へ入る革命軍の兵士たち。皆警戒をしていたが逆に兵士が居ないことに気づいた。よからぬことを企もうとする者もいたよ

うだがアークリーに止められ思いとどまる。今のレイであれば目を瞑っていても人を倒すことなど容易い。そして、彼らもレイのただならぬ覇気に関してはどうなづけるようで武器を収め全員がおとなしく整列した。

「レイ兄も懐かしいなあ。その人が兄さんの嫁さんかい？　へえ、けっこう可愛いじゃねーか」

「あんまりちよっかいだすと噛まれるぞ？　マナは華奢に見えてこの大戦力の一人だからな」

「お褒めの言葉と受け取っておね。レイ君……。闇剛ちゃんもお帰り。顔色悪いけど大丈夫？」

「はい、ご心配をおかけしました。もう大丈夫です」

「アークリーは部屋割りが決まるまでは闇剛と同室にいけ。何やらつながりがあるようだしな。他の皆さんは一度広間で寝泊まりしてもらおうがその内決めるつもりでいるから安心してくれ」

アークリーは闇剛に案内され内部に入っていく。他の皆は新しい城を見て回りたいらしく武器を置いてそこら中に散らばっていった。展望台や弓兵が多いことから櫓、食料、周りの土地の様子などを確かめ彼らは皆思い思いのところできつろぎ始めている。

「へー、なかなかいい暮らししてんじゃねーか」

「……」

「何だよ」

「答えてよ。私を騙したの？」

「確かに最初はそういう目的で近づいたよ。だけどな、同じ目のお前を見てたら……。いつしかほっとけなくなっちまってよー。そお、そのお先真っ暗って目だよ」

「そんな目はしてない」

「バカ言え。知ってんだぞ？　俺との夜は必ず俺の胸の前で泣いて

たろ。狸寝入りで卑怯くさいが……お前が苦しい過去持ってんのは見てりゃ解るんだよ」

闇剛の拳がアークリーの頬を狙ったが受け止められた。涙が頬を伝い腰の短刀を無造作にソファへ投げつけて一言怒鳴りつけ部屋を出ていってしまう。アークリーはこういうことが苦手らしく頭をかきむしり低くうなっていた。そこにレイが図ったように現れソファに腰掛けた。もちろん闇剛のもとにはマナが付き添い話を聞いている。彼らはシドから命ぜられ城の防備をする関係からそこから出られない。それが仕方なく退屈なのだ。

「人をバカにするのも大概にしなさいよ!! あんたなんかこれまで抱え込んできた私の苦しさなんてわかるわけないんだから!!」

「……………うゝああああ! 女つてのは……解んねーなあ」

「早速、喧嘩したな?」

「レイ兄。どうしたんだよ」

「俺はこの城に居るだけで暇なんだよ。闇剛とはどういう関係なんだ?」

城の裏手にある花畑に闇剛が丸まって座っていた。そこにマナが近づき一瞬、彼女は腰に手を当てたが短刀はホルダーごとソファに投げつけたことを思い出し顔をうずめたままマナに問いかける。灰色の瞳は憂いを帯びると黒っぽく見え髪は灰色に近いくすんだ色をしていた。長い髪は結うことをしないがまとまりがあり綺麗だ。

「何かご用ですか? マナさん」

「闇剛ちゃんをいじめに来たの。ずっとお城にいるのもつまらなくて」

「……アークリーのことですか?」

「貴方も人だから怒るのもわかるけど……理解しなきゃダメよ?」

特にアークリー君みたいな粗野でストレートな性格の男の子はね」

「無理です。柔らかいところを針でつつかれた感覚になってしまつて。バカですよ………。私が……任務で怪我をしたときに助けてくれたのがアイツでした。バカで粗雑で解りやすいほど感情は面に出るのに……不器用なのに隠そうとする。……最初は何でもなかったです。でも、いつからかあのバカがいないとやっていけないなくなつて。夜を共にして、愛し合つて……なのにアイツは革命軍だった。しかも大将で私は北朝の隠密機関の一人……今は違つてもその頃にはアイツは解っていたはずなのに……正体も知られていて……バカみたいじゃないですか。愛したと思つた男に弄ばれるなんて」

「それは、うーん……。考えすぎだと思うよ。彼、さすがはアルちゃん弟君だなあと思つたもの。大切なことも不器用だから話さないのよ……彼」

「……」

「解決には時間が必要なのはわかるわよ。だからよく考えてね」

「はい……」

レイの方も状況は同じ感覚だった。男女と立場、主観の違いで少々異なる点もあるがアークリーも順を追つて説明しレイがそれを聞いている形だ。レイは一通り聞くと部屋を出て行き自分の屋敷に歩いていく。マナと途中で出会い肩を並べて歩いていった。

「嫁さん……だって」

「どうかした？」

「私、嬉しいの。16歳の私が見たら羨むだろうなあ」

「どうして？」

「だって……毎日、思いを伝えられた貴方と一緒にいられるから……愛する人と一緒に居られるほどうれしいことはないから」

「そうだな。俺もそれは同じ。18歳の成人の義の時に剣を受けてくれたことも嬉しかった。あの頃は忙しくてろくに一緒にいたこと

はなかったし」

「そろそろ……本当に……お嫁さんになりたいな」

「あと少しさ。きっとみんな、無事に帰ってくるから」

闇剛は部屋にまっすぐ帰らず二人をつけていた。何を考えたのか知らないが後ろからずっと見ていたのだ。レイにはすぐに気づかれていたが……彼女の心持もあまり穏やかではないためそれにすら気付かない。

「……まだ、疑ってるのか？」

「ええ、貴方が証拠を見せなければ私は信じないから。近寄れば……」

「どっちがバカで不器用だよ……。この堅物陰鬱女め。言っただろ？ その目なんだよ」

「堅物陰鬱……私は堅物でも陰鬱でもない！ 離せ！ 寄るな！」

このバカで粗野で不器……ん！」

「……」

肩を抱き胸に押し付けて彼女が怒鳴ろうとするのを抑えた。体は華奢だがしっかりした力はあるようだ。アルのように少し小麦の入ったような肌ではなく色白の彼は腕も細い。だが、やはり彼も混血種の血を受け継ぎ体は強い。

「……信じないなら。無理やり信じさせるまでさ」

「な、何を！ うっ！」

「悪いな。体の自由は奪わせてもらったぜ。いくら闇姫でも人間なものには変わりないからな」

「は、はな……せ。……この、破廉恥……野郎」

闇剛を寝室に送ったアークリーはソファで横になった。昔を思い

出すように上へ視線を移し考えている。閻剛は首筋に電撃をくらいたが言うことを聞かない。彼はその間に時間をかけてレイに言われたことについて考えているのだ。何故、閻剛を動けなくする必要があったのかは解らないがそこには触れないことにしよう。

「あの人もひでーよな。茶化すだけ茶化しといてあとは俺が全部まとめるのか。アドバイスとかないのかよ。解決には時間が必要か……確かにそうだけどよー」

閻剛は夕日を受けながら寝てしまった。アークリーもそのまま考え込んでいて話にならない。ここで西に目を向けよう。ライムズ以下ビースト部隊は多すぎる敵の対処に追われていた。倒しても倒しても湧き上がるように十重二十重に攻めてくる敵に圧されないはずはないこちらの手勢は敵の二十分の一ほどだ。それでもライムズの指揮は完璧で否のつけどころは見当たらないが味方の被害が開始した。だからと言って後退できない彼らは襲い来る敵の猛威を猛威ではねのけ今まで戦線を保ってきた。しかし、それもこれまでと言わんばかりに敵の大隊が何隊か連携して彼らをグルリと囲み退路を塞いだ。ライムズも他のみ皆も体力の限界で戦えるほどの余裕はない。既に絶体絶命で本来なら降伏を宣言する状態だがリーンの来るまではと皆踏みとどまっている。

「ライムズ殿。最後の賭けに出よう」

「ダメだ！ アレは使えば肉体を強くするがこんな時に使うべきじゃない！」

「されど……一人でも多く生きるならそれしかない。リーン殿があらわれ……な、なんだ！」

更に西の荒野エリアから地なりと砂ぼこりが巻き上がり銀に輝く隊列が見え始めた。その後続には赤銅の巨人が続いていて力の限り

猛進する。敵の大隊はそちらに首を向けたり感のいい者は戦おうと武器をふるうが無意味に敵の猛攻を受けて跳ね飛ばされていく。全長四メートルの巨体に全長二メートルの白銀の巨大な狼が走ってきたのだ。普通の人間なら足がすぐむ光景だろう。

「バルラ殿は赤剛部隊を前面に槍陣で展開した後には無理やり横開きしてくれんか？」

「うぬ！ 行こう！」

「サラ殿はもう半分を率いて反対側に入り込んで同様に道を開いてください」

「相解った」

バルラの隊が展開し道を開くとサラの隊がその奥に攻撃を仕掛ける。敵は赤剛の巨体と力に圧倒され見事に一直線に道が開いた。反対側にはバルラの息子であるビクトールが赤剛の若年衆を集めてリーンたちが“牙”の力でビースト部隊を救出したあとの殿を務めた。

「ビクトール！ 頼むで！」

「解ってる！ リーン殿も急いで！」

銀狼が集まり中心にいるアレンたちは銀狼の背に乗って駆け出す者や怪我人の救護をする者、赤剛の女、子供衆を守る者も現れた。アレンは最初にリーンの横に並んで駆け出した。銀狼たちはとても軽快に走り敵が攻撃してくるのであればその鋭い牙で鎧ごと噛み砕く。彼らほど仲間にして心強い味方はいないだろう。

「リーン……ありがとう」

「何を言うとなんの！ 戦はこれからや！」

「そうだな……。銀狼！ 名前は？」

『俺か？ 俺は光狼だ』

「光狼はリーンから……」

『私は桜牙や』

「……桜牙について行け!!」

『お、桜牙様に……か』

『早ようしい! ライムズ殿が遅れてしまう!』

『御意!』

その後ろから様々な毛色の種族や人種が狼に跨りついてくる。先頭はリーンとライムズだ。ライムズの念糸は特殊な加工がされエネルギーの伝道が速く大きい。その武器を扱える彼もまたとても強い。

「石弓隊前へ!!」

赤剛は鎧をつけている訳ではなく当たれば人並みに怪我をするためライムズは光狼に命じて隊列から飛び抜けて彼らの前に念糸を張って腕を振った。妙に耳障りな金属が細かく振動する音が響き石矢が次々に落とされていく。念糸が全てを落とすとリーンが踊り出し頭上で槍を振り回してその隊を桜牙と二人で殲滅した。ライムズも光狼が走り抜けて行く途中で空に身を躍らせて念糸で敵を絡め捕り再び光狼に跨る。光狼は気は弱いかなり逞しい銀狼で彼がライムズで足りない力を補い絡め捕った敵を無造作に念糸で引きちぎる。

「撤退!! 撤退!!」

『どうする?』

「赤剛部隊は四隊に別れて主力をビクトール、バルラ親子が率いて回り込んで行くんや!」

「おう」

「いいだろう!」

「銀狼とそれらの皆はバラバラになったらあかんで! 五人一組を作ってや! そこから確実に攻め立てつつ囲んでくで!」

「オオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

敵は慌てふためきバラバラに逃げるが銀狼の持久力と速度に押され完全に敗色に染まる。彼らは更に追い討ちをかけられるように左右に分かれて回り込んでいたビクトール、バルラ親子が円陣を作つて完全に包囲することで退路を失つたようだ。赤剛は無抵抗の敵には手をあげずになおも武器を振るう者のみに鋼の拳をぶつけた。：それから四時間過ぎ皆で話し合ったすえ敵は数を十分の一に落としていたためか戦意がないと考えて武器を取り上げて解放した。加えて赤剛や今回の戦いで戦線に参加したビーストの戦闘部族で意欲的な者の起用と銀狼たちの住处などを決めて一度ギルドに帰って行く。

「ほんまに死ぬかと思うたわ」

「無事で良かった。突然だけど……レイさんには悪いが俺は自分の騎士団を開こうと思うんだ」

「何でや？ 銀狼は皆一人のままでも十分、闘えるっちゃうのに」

「馬より速く、攻撃的で理解者として……かな？ 俺はこの光狼に惚れ込んだんだよ。コイツとならどこまでも行ける。勿論、リーンも団長として来てもらうがな」

『ああ、その考えええなあ。私、気に入りましたで。姉さん！ 狼雅騎士団！ どうですか？』

「狼雅騎士団……。うん！ 悪うないやろ！ 結成や！」

赤剛達も一度レイを見たいと本城に現れた。三大審の挨拶をうけレイが三人に後日全員が揃う時に連絡すると伝え彼らなりに目を付けた岩山や森に姿を消して行つた。

「リーン、ライムズお帰り。わかってる。二人で頑張れよ。俺は本隊を率いるからな。お前等はビースト部隊を指揮しろ」

「わかったでえ。うゝゝん!! ほなうちは寝させてもらうで」

「ライムズ。お前はとうするんだ？」

「銀狼達の住処を探します」

「この城の後ろにある建物なんかいいだろう。広いが誰も使わないからな」

「ありがとうございます」

そこにいつになく軽い服装の闇剛が現れた。レイに挨拶しくらい面持ちでまた花畑に行ったのだ。すかさずマナが追いかけて行く。レイはライムズと別れて彼の行動に出た。明らかにアークリーをからかいに行くのだ。

「頭はキレるがどんだけ不器用なんだか……と、言うより怖いのか？ 関係が一気に砕けるのが……アークリー」

「レイ兄。わかってんならなんで何も言わねーんだよ」

「俺は誰も助けるなんて言っていない。それにお前にはいい訓練になる。あらゆる可能性を探って……結局、怖くて手を出さない。一端の大将になりたいからその弱さを捨てろ。アルにも笑われるぜ？」

「……あんたはどうやってあの人とあんな関係になったんだよ」

「マナか？ 自然にだ。お前等はお前が動かなければ始まらないだろう。仕官を目指して革命軍か……しかも隠れてばかりときたからな」

「動かなければ……ってそれだけかよ！」

「ああ、お前はお前の生き方がある。自分に勝ちたいなら……弱さを捨てろ。無謀なことはしてはいけないがな。どうだ、本音を言ってみたら」

彼はそこから立ち上がり居なくなつた。レイも自室に戻り書き物をしている。マナが現れ後ろから手を回した。短い髪がレイの頬に触れる。

「どうした？」

「リーンちゃんとライムズ君。無事で良かった」

「だな、あとはあのバカがどうするかだが」

「彼も真っ向勝負をしないから……闇剛ちゃんはそれを待ってるのに」

「それに関しては大丈夫だよ。手は打った」

闇剛は何を見るとなしに花畑のそばにある水路の水面に目を落とす。誰も見てないと思って上着の服をはだけさせ薄着になり羽が抜け落ちて小さくなった翼を開いた。そして、人の気配に気付き後ろを振り向けばアークリーの姿がある。彼は彼女の背中のことについてはしっていたためさして驚かずに話しかけていく。

「まだ、気にしてたのか？」

「何か用？」

「お前、俺のこと知らないだろ？ お前は俺のことを聞こうとせず
に自分のことを教えてたからな」

「今更なによ。聞いても私にいいことはないでしょ？」

「頑固だよなあ。お前」

「悪いわね。どうせ堅物陰鬱で頑固よ。……ちよつと！ 止めてよ
！」

「バカだな。お前に気がなかったら手当てした夜には帝の首は上が
ってたよ。たとえお前の兄さんがいてもな」

「……」

「それに……背中矢傷は俺の放った矢だ。本当はすぐに殺して情
報を奪う気だった……。そしたらよー可愛い子がうずくまってるか
ら……」

「止めてよ！ 今更、そんな……本当のことなんか」

「急に思っただ……馬鹿げてる。なんで……こんな可愛い子に矢

を射らなくちゃならないんだよってな。俺もバカだったんだなんでも言葉で命を無駄にしないようにできないのかって考えた。だから、だから！ お前と居たんだ」

「バカばかり……私だって」

「言うな……また、やり直そう」

「本当にバカ。やり直なんてしないでいいわよ。私はもう、離れない……あんたが本当に私を愛してくれていたのか知りたかっただけだから」

「ホント……馬鹿ばっかだな」

ギルドの一番高い鐘楼に登って見ているレイとマナは笑いながら見ていた。背中に黒い翼がある理由は解らなかったがおそらくこの先に明らかになるだろう。現在城にいるのは新しいメンバーを含めて7人だ。それらが皆集まるのはどれほどかかるかまだわからない。ただ、東のギアには大きな変化が出ていた。アークリーと闇剛もそちらに走り援軍に行くと言っていたが……もう全軍が動き出し援軍は必要ないところまで状況は進んでいた。

……TO BE CONTENT NEW……

人魚の秘め事

風崖は謎の少女オーシャに出会い命拾いしたようだ。彼は体の構造上泳ぎが苦手であり水は得意ではなかった。海に落ちて意識を失ってしまい起きたのは二日後の昼間で修羅たちのいる大陸のサンドウインドウの海岸に横たわっていたらしい。彼が気付けば鎌や楽器は全て彼女が助けようとして重い荷物から先に彼女の小屋に運んでしまい彼も行く他ない状態だ。

「すまない。手間をかけた」

「いいよ。あたしも一人で暇だったし……お兄さんの名前は？」

「名は風崖、軍名は風切り白虎」

「軍人さんなんだ。オウガ族が人前に出てるなんて珍しいね。訳あり？」

「確かにそうだな。そちらの名前は？」

「ごめん、ごめん。あたしはオーシャよ。一応はこの近くの海で魚を取って売ってるの」

「そうか、一つ聞いてもいいか？」

「勿体ぶらなくていいよ。あたしは風崖が気に入ったし」

「そうか、なら遠慮なく……白銀の長髪で鎧を付けた人を見なかったか？」

「噂なら聞くけど……。どこかまでの推測や情報は無いなあ。大陸にそんな人が来たって噂はよく小耳に挟むから多分有名になってるはずよ」

「ありがとう。俺はその人を追わなくてはならない」

「ちよっと！ まだ動いちゃダメよ！ 海水にかなり揉まれてたし岩礁で体を打ちつけてるんだから！」

しきりに止める彼女の小屋の中で少しの間過ごしている。確かに

彼はすぐには立てずオーシャの肩を借りなければ歩けなかったからだ。髪の毛で隠しているオウガ族特有の角を隠しついでに服を乾かしながら食事をする。海の幸が中心でたまに野菜が入る程度だった。

「丁寧にたべるんだね。作法なんて気にしないでいいのに……どうせあたしと二人なんだから」

「癖でな。作法がわかるのか……聞きづらいんだが没落貴族かな何か？」

「う、うん。そんな感じ……」

「体も動いて来た……。何か手伝えることはないか？」

「え、別にいいよ。そんなにすることもないし」

「俺の主は礼節をつくすことに関してうるさくてな。そのこともある」

「なら……、あたしも連れて行ってくれない？ この大陸に不慣れみたいだし。案内もするからさ」

「別に構わないが……危険だぞ？」

「決まりね」

オーシャの突然の申し出に困り顔の風崖だったが街に出て情報を集めつつ修羅の行方を探す。この周辺では知れた顔らしく周りの人に気軽に話しかけては笑うオーシャは背中に三つ叉の鉾を担ぎ小さな袋を腰につけている。

「おじさん！ 白銀の長髪で鎧を着た人を知らない？」

「ああ……最近内陸に美しい女の武家さんが来たとは聞いたよ。なんでもな、大神官の聖刃様と結婚なさるらしいよ」

「ありがとう！ 凄いのねその修羅様って」

森の内……すなわち陸の内側では雷軌の力で乗り物を入手し前より軽快に走る。彼の放つ雷をその機械にためてエネルギーに変えて

いる……という原理らしい。前後二つの車輪で軽快な走りが可能だ
がうるさいのが玉に瑕だろう。

「速い！ 速い！ 月光ちゃん！ とっても速いよ！」

「姉様！ 静かにしてください！ 少々はしゃぎ過ぎです！」

「バイクと言うらしいな。燃料がないと言うがこれなら速く行ける
だろう」

「やった！」

「聖刃様……ご無事で」

「大丈夫だ。修羅様がいれば安心出来る。あの方は強い」

その時、一陣の風が吹き大きな真っ白い虎が走り抜けた。美しい
その虎が雷軌の姿に気付きすぐに引き返しその近くに降り立った。
毛並みが整い真っ白な氣に巨大な体躯と二本の牙……まるで御伽草
子の中の四神獣である白虎だ。

「雷軌殿か……！」

「風崖！ 久しいな」

風崖は背中少女に降りるように告げたあと徐々に体を戻した。
小さくなり背中に大きな飾り鎌を担いだ少年の背中に少女が隠れる
ように立ったのに気付き雷軌が氣を利かせたらしく自己紹介を始め
る。雷軌の動きに合わせてまだ幼さが残る二人がバイクから雷軌に手
を借りて降りていき彼女らも自己紹介を始めた。

「驚かせてしまったようだな。俺は風崖殿の軍友の雷軌、軍名は雷
轟」

「私は日光」

「妹の月光です」

「すまないな。こちらでも事情があって」

「な、なんで聖の三大星がここに？ あんたたちは国の執政のために中央にいるはずじゃ……」

「そのピアス……あなた……もしかして人魚？」

「……」

この大陸にも慢性的な問題があるらしい。彼女達の辿ってここに至ったかを語ってくれた。風崖もオウガ族の受けた仕打ちをあわせているようで怒りが強く現れる。

「この大陸にも腐った形が有るみたいだな。あんたらはこの大陸の上層部か？」

「元ですね。今は追われております」

「私達も軍の重さに負けてすぐに首都から逃げ出し今に至るしだい……」

「そうか……なら、あなた達に罪はない。俺が能力を解放して助けに行かなければ危なかった」

彼らに起こったことはあまり人道的とは言えない。言うまでもなく彼女は人魚だ。この大陸では人魚は迫害を受けており海から拉致され売り飛ばされる。その美しい容姿から若い人魚は観賞用に……年を取ればこの大陸のいわれから肉は不老長寿。血は美しさを保ち髪は布に織り込み高級な素材として……上げればきりが無いが彼女らはあまり良い扱いは受けない……いや、最悪だ。

「あたしの友達に捕まった人は居ないけどあまりいい噂はきかない。だから、あたしみたいにあえて陸にいる人魚は危険を伴うけど夢もあるの」

「ここからは伝承でしかないが……」

「太古の昔、私の祖先は陸にいたの。だけど、民族の争いから私達の一族は陸を離れて海に帰り……魚と共に今のようには海底に降りた

の」

「陸には俺たちオウガが残ったんだ。二族の多くは争いを憎み心から愛するものと引き裂かれ叶わぬ愛の形を再び立ち上げたい者もいた」

「だけど……叶った恋もあった。私もそうなりたかった」

「陸に上がってオウガと結ばれれば永久の愛を手に入れられる……」
「ここからは事実、奴隷にされれば私達に未来はないの。風崖とはぐれちゃってからは死ぬかと思った。さっき話した私の目標を達成するために長い間陸にいたから人攫いの奴らに私は目をつけられてたし」

街ではぐれた二人は互いに探し合ううちにオーシャはよからぬ奴らに出くわし捕まってしまったのだ。人狩りとは言うが刈るのはヒューマン、ログヒューマ、エーテリオン以外の近人種。人に近いが肉体の一部に違うところがあれば肉や奴隷として売られる。中でも一番高値を飾るのはガイザー、オウガ、マーメイドだ。彼らは希少で見ることにすら珍しい。ユートピアではギアが執政を執り行い闇市は殆どつぶされた。その関係からこちらで多くなり危ないことには変わりない……むしろこの大陸では悲惨な事実が増えている。さらに追い討ちをかけたのが現在の政状だ。この国は軍部の権威が高く軍備には金を出すのが治安などには金を出し渋る。それどころかそちらに足を踏み入れる下級の軍人も多いと聞く。オーシャに傷が多いのもそのせいだ。

「風崖殿……貴方の痛みも解るが……まさか……無益に人の命を奪ったのでは？」

「ああ、闇市の会場をつぶしてしまった……俺も感情に走ったことに関してはいくいている」

「やはりか……血の匂いがする」

「やめてよ……風崖を悪く言うのは！ それにその血はヒューマン

じゃないわだから！ 人魚の血なのよ……もう、手遅れも多くて」
「そうか、なら致し方ないか。しかし、怒りで人を幾人も殺めたのには感心しないな」

キツイ苦言を呈された風崖の足取りはこうだ。酒場でいかがわしい男たちを脅しオーシャが捕まった情報を手に入れ捕まった場所からは彼の……オウガの力を解放し匂いを頼りに街をかけた。しかし、長居はせず力任せに邪魔する者は殺し、手錠などをされている人魚やオウガ、カイザー達を解放しオーシャを背中に乗せて高く飛び上がり森に入って逃げたのだ。

「さすがに能力を解放してもあれだけ数を相手にするのは無理だったからな。軍が海側から来るのを見て森に入ったから……」

「軍が海から？ それはありません。姉様……ですよ？」

「ええ、海側は人魚の攻撃を度々受ける関係から防戦は有りますが基地はありません。それに……防戦はそんなに強固ではないですから」

「おそらく……」

「白銀の長髪の鎧武者……その修羅様でしょうね。おそらくは義兄様も一緒でしょう」

「聖刃大神官は一緒だろうなくら修羅様でもこの大陸ではそこまで早く軍を作れはしない。ならば後で俺が走る。雷軌殿はオーシャを頼みます」

「いやよ。風崖は泳げないもの。また、海に落ちたら誰が助けるのよ」

「……」

「だそうだ。風崖殿も気をつけていくがよい」

「わかりました。雷軌殿も二人を守りながらでけっこうだが情報収集を頼みたい」

「無論……そのつもりだ」

二組は別々に動いていった。風崖はオウガの中でもギアと同等の希少さを誇る幻獣種の白虎だ。彼は猫化の能力のためか水は苦手らしく海に落ちた後は記憶がないらしい。その話を背中から投げかけるオーシヤが顔を風崖に近づける。彼が即席だが簡易の命綱を作りオーシヤは落ちても宙釣りになるだけで済む。だからと言って身を乗り出していい訳ではない。

「人魚姫って童話をしってる？」

「ああ、最後には泡になる話だろう」

「うん。あれは……少し違うけど泡になっちゃうのはホントなんだ」
「……？」

「人魚はね……一定の年齢までに一度海から上がりまた戻るの。戻らないと……体が保てないのよ。あたしのこの体だって相当危なかったんだから……。まあ、ギリギリあの日の夜にこの海域で波に揉まれてる風崖を見つけて潜ってるからあたしは一回海に入ってる。だから、肉体的には今はそんなに関係ないけど」

「で、何が言いたいんだ。人魚姫様は……」

「バレてたの？ 風崖……って頭いいかも」

「なら、なんでお前は俺に人魚姫の童話の話をした？ 俺がこういう発言をすることを見越してお前もはなしてるんだろう？ しかも、作法が解る人魚だからな。相当官位は上の方だろうな」

「うゝ……。あたしは風崖が王子様ならいいよ？ ちようどあなたもオウガだしさ。あたし……ホントは家に帰ってなくちゃいけないんだけどさ。実は……お姉ちゃんと喧嘩して家でしちゃったの」

「……………」

「あたしじゃ、嫌？」

「別にそうじゃない。俺はいつ死ぬかわからない。そして、戦いを好まず各地を流浪するようなヤツだぞ？」

「いいよ、私は楽しければさ」

その頃、修羅と聖刃が人攫いが集まりオークションを執り行う市場の残骸に現れていた。風崖が見た軍隊とはこの革命軍らしい。聖刃が亡骸を抱き上げ悲しそうな顔をする。人魚の亡骸と上半身と下半身が別れた大量の人間の死体……。修羅が槍を地面に突き立て怒りを露わにした。我慢していたらしい怒りを落着いてはいるが気迫で解るほどの声で出したのだ。聖刃以外の幹部や護衛は縮みあがった。

「このゲス共は何なのだ？ まさか……人狩りではあるまいな？」
「そのまさかですよ。ですが、この軍人の人狩りは別の相手に命を断たれたらしいですね。こんな力の強い者はこの大陸にはカースの上位種程度の者しかいません。しかし、彼らは大きくこんな街に出てくることは難しい」

「これは……おそらくは俺の家臣の仕業だ。こんなことができるのはヤツしかいない。刃物ではこんなに綺麗に人を断ち切れるはずがないからな」

「風崖殿……ですか」

「ああ、アイツはオウガでこういうことに関しては敏感だからな。感情の高ぶりが抑えられなんだようだ。やつらしくないと言えばそうだが……」

「修羅。どうやら、敵のようです。最近は敵の動きが激しい……義妹たちが心配だ。我々も動きましょう。全軍に戦闘命令を！」

修羅の巨大な薙払い槍が猛威を振るい街自体には被害は少ない。そして、修羅や聖刃たちの動きはかなり大きくなり始めた。それに合わせるように敵も動きが激しくなり雷軌や風崖も力を発揮し始めている。彼らも統率力や呼びかけの力などはとても高い。

「今こそ立ち上がるべきではないのか！！ 暴軍の圧制に屈するな
ら自らの手で未来を切り開こうとは思わないのか！！」

海辺地区の村や町には風崖がとびその地域にある軍基地や駐屯地をつぶし反乱をかり立てた。雷軌も同様に山中を動き戦う意志のある人間を集めつつ走る。その波紋は大陸中に広がりついに大戦争の勃発を予期した者もいる。ここで所変わり大陸、ユートピアのギアたちに焦点を合わせよう。ついに全面的に攻撃を開始したギア軍は一本しかない道を閉ざした海上の城を落とそうとしている。籠城には耐久戦がいいがそうも言っていられない事態に発展しつつあるのが今の彼の状態……だんだんと志気さが下がり戦闘に意欲がなくなつて来ているのだ。

「いつまで待てばいいんだ」

「確かなな志気も下がりがつつある。アル……一当てやるか？」

「別に構いませんよ」

「アルが矢を敵の前門に当てた瞬間にフィトは単身で敵の大將の誘拐を頼む」

「誘拐……ですか。わかりました」

「岩鉋は手はず通りに頼む」

「御意」

アルの矢に雷が凝縮されアークリーの時とは比にならない威力になっている。巨大なエネルギーが圧縮されるたびに小さい波動を起こす彼女に向けて敵も弾を撃ち込んでくるがフィトが全てをはじき落とす。近距離での高速移動なら彼はお手の物。彼女の合図があるまで拳を繰り出し続ける。

「どうした？ この数年でなまったのか。碧独の美女はだてになったのかよ。アル！」

「バカ言わないでよ！ あたしだって……いつまでも力を強くなつて無理なんだから！」

「なら、そいつで引退しろ。腹の子供のこともある。いつもお前は無理をするんだ。こう言うときくらい俺に頼ってくれよ」

フィトはアルが矢を放った直後に走り出し敵の城郭の焼け落ちた橋へ走った。矢はみごとに敵の天守閣の一段下の階層へ突き刺さり爆発しそのパニックに乗じて高らかに飛び上がり物見櫓を軽々と抜けたフィト。敵兵はいきなりの大將の侵入に驚き下級の将兵がフィトを取り囲む。外では彼に続き二人の大將が壁を乗り越えて中に侵入した。指揮をアルに任せ久々に大鎌を担ぎ上げ空中で一回転するギアと高さは足りないものの木造の前門を背負っていた大槌で薙ぎ倒して入り込んだ岩鉾。残り二人はビーストの亜種である氷鎧が形態を変化させ紅蓮を背に乗せて城の裏側の防壁にタックルし彼女の中にいれ恐るべきジャンプ力で彼も中に侵入する。他の将兵はアルの指揮で自棄くそになり銃を乱射する将兵を遠距離から確実にしとめていくのが役目だ。

「ギアさん？　ここに来たからには暴れるんですか？」

「どうだろうな。岩鉾はどうする？」

「フィト殿の背中を守ります」

「だろうな。フィト！　嫁さんが身重で働けない分暴れてこい！

俺と岩鋼でここを抑える。後方は二人に任せて内部の機関を破壊しろ！」

「了解！」

風崖とオーシャは敵の中隊に囲まれていた。機動兵が幾隊か茂みに潜んで居たのだ。オーシャは水辺では強いようではある……しかし、森の真っ只中では彼女は戦力外でしかない。風崖がいきなりオーシャを空高く投げあげ背中細い装飾の派手な刃が各所に突き出した鎌を振り上げた。彼もギアと同じのオウガで体を変化させることができる。今回は完全な白虎ではなく半人半虎のようなビースト

に近い形態に変化した。

「風の四聖獣の力を今ここに解き放ち我に従いし風の力を呼ぶ……
鎌鼬！」

オーシャの視点から見ると近くの半径百メートル程が丸坊主になった。風崖は高く飛び上がり空中でオーシャを抱きかかえ風の魔法で力を吸収し綺麗に地面に着地した。音もない着地は華麗という言葉がふさわしいだろう。

「怪我はないな？」

「一瞬……死ぬかと思ったわよ」

「言ったろ？　いつ死ぬかわからないと」

「それ……あたしも？」

「俺と添い遂げたいならいついかなる時も死を覚悟しなくては……」

「何だかんだ言って乗り気じゃない」

「確かに。俺の記憶ではこんなことは初めてだ」

聖刃と修羅も動き出した。大軍が彼ら革命軍と対峙するなか修羅が特徴的な槍を構えて一人きりで歩いていく。聖刃は気が気でないが彼女の声が聞こえたところでその心配も消えたようだ。彼女も本気を出したから……戦の運気はこちらに傾き止まることを知らない。

「これより……我ら人民解放戦線とホーリ・プリセクト騎士団の連合軍は大陸の軍事勢力に宣戦布告をする！」

敵の第一陣の戦車大隊が大槍から放たれた波動状の斬撃で壊滅し修羅のなおの攻撃に対処仕切れずに退いていく。その頃風崖たちは森の中で休んでいた。人魚のオーシャは海水でなくてもいいと言い彼女は湖に飛び込んだ。風崖は水が嫌いであり水に触れない顔を

洗い布に浸すと鎧を取って体を拭き始めた。体に傷は一つもなくギアとは違いかなり華奢だ。これで武将が務まる方が不思議……という程度だろう。

「ガリガリ……」

「猫科の動物はみんな細身さ。太らなければな」

「私……魚なんだけど」

「俺は菜食主義だ」

「そうなんだ。水が嫌いなのはそのせい？」

「ああ、俺は水が大嫌いだな。修羅様にでも命令されねば絶対に水攻めの大將などしない」

「でも、水も気持ちいのに。魚とりなら任せてよ」

「共食いか？」

「一応、魚と人のハーフでもビーストの魚人種とは違うのよ」

「そうか」

戦場とは思えない和やかな空気が流れる今は身を隠すために海につながる鍾乳洞にいる。ここは軍の人間や狩人すら入ってこない聖域らしく隠れるにはもってこいなのだ。それに風の通りは最近の地震でできた大穴のお陰で悪くない。風崖が鎧を取りそこに座っているのだ。オーシャは水に入ると体に変化する。人魚の尾ひれが生えるというよりは人魚は元々陸上生活できるようになったマーマン、つまりは魚人がたのビーストと人のハーフでどちらかという人と人に近い魔法の力で水中に入ると脚がひれになっているというほうが正しいのだ。……と彼女は説明している。

「もちろん昔の住んでた環境から水に一定期間入らないと細胞が形態を保ってられずに溶けていくけどね」

「不便なのか便利なのか解らないな」

「オウガだってそうでしょ？ 寿命は幾百年あるのに力を使うと細

胞の酷使で縮まるなんて」

「俺はそうは思わないな。普通の人間のように生きるための力だと俺は思う」

「ふーん、風崖はなんでいつも大事そうに豎琴をもってるの？」

「母上の形見だ」

「あ……ごめん」

「問題ない。オウガの女性は子供の出産と共に衰弱が早まるからな。寿命で亡くなってしまったんだ。彼女も戦士だったから……彼女の願いで俺は争いを拒み吟遊詩人として生きて来た」

「ねえ、あんたのギルドって訳ありがたくさんいるの？」

「訳ありかどうかはお前が見ないことには解らないが種族で見ればほとんどいる。それに特別な力の人々も多い」

オーシャが目を光らせて岩に座って風崖に問いかける。彼は豎琴を取り出し軽く爪弾きながら語った。そのうちに日が暮れていることに気づき二人はそこで夜を明かすことにした。

『戦の波にのまれ生きる。』

我の力は小さくとも人は守れる

いざ、行かん戦場へ

命かけた戦いを見せ

散る花のように命散らせぬように

剣を交え心の恐怖知る

対峙し向かう敵も同じであると

守るための戦ならば

失わぬように行く

全てをかけて守り抜くため』

オーシャが寝たと思っていတာらしいがそうではなかったようだ。

彼は豎琴でメロディーを作りながら歌う。肘についてオーシャはそれを聞いていた。

「起こしたか？」

「ううん。違う。綺麗な声だなと思ってさ」

「修羅様も同じことを申された。そして、あの方はおっしゃった。

『お前は戦を憎むが戦はこういう物か知っているか？』とな」

「で？ 答えは？」

「教えてはくれなかった。ただ、守りたい者ができればお前にもそれが見えると申され俺はそれにも気付けなかった」

「今は？」

「解らない」

「わ、わかんないの！？」

「ああ、俺は幼いころから一人で過ごし知る感情は少ない。恋などと言う物はどうすればよいか……解らない」

「なら、あたしが教えたげる」

そういうと隣に座りそろそろ寝るように声をかけるオーシャ。その頃、そこでは大きな作戦が練られていた。その作戦名は首都奪還作戦。修羅の統率力と聖刃の人脈で子とは運ぶ。そして、この国の秘宝がよみがえり彼らに力を与えるらしい。作戦途中に出会い革命軍に参加している雷軌と月光、日光も何かしら関係してくるようだ。

TO BE CONTINUE

三種の神器……助け合う聖魔

大陸サウスウィンドウ中央の首都圏に進軍した。二つの分団に分けられ全軍が衝突した一団は風崖、雷軌を連立大将にした革命軍本体と志願者のトラップ部隊。敵の大型な機械攻撃隊は風崖と雷軌の緻密な作戦に翻弄され身動きが撮れない。加えてオーシャは敵の攻撃隊の背後から彼女の尽力で集めた人魚の魔法攻撃部隊で敵をひっかき回している。さらに新たな味方が現れ現在作戦を遂行していた。その名も赤額。この大陸の元住民族の一つであるホークマンの頭領の息子でツバメの容姿をしたかなりやり手の戦士だ。

「赤額……大丈夫なのか？ 俺も能力で滑空ならできるが……」

「馬鹿やろう！ テメエを運べと日光に依頼されてんだ。その依頼の品がゲチグチ言うんじゃねえってんだ！！ べらぼうめい！！」

「解った。その意志の固さには感服するが……高度はさがっているぞ」

「大丈夫だってんだい。ツバメの力をなめんなよ！」

「ああ、聖刃の話では大聖堂の軍を殲滅しなくてはいけないからな」

「あん？ なら、俺っちも加勢しようじゃねえかい。修羅の姉ちゃん。あそこはべらぼうに警備が固えんだ。あんたひとりであんなに暴れるなってんだ！」

「今すぐ離せ俺が奴らにやられることはない。賢明な判断がしたいなら族長を靡かせ他の空の戦士を集めろ。それがお前の役目だ」

戦場で見せる凄みの効いた声で一瞬固まりその隙に修羅ひ空に身を投げ恐るべき能力を解放し空気を両足でけり大聖堂前の敵軍にぶつかった。敵の軍は奴隷にしたオウガなどを盾にしようとしたが覇気の恐ろしさとおぞましさに当てられ幾人も倒れていく。赤額は言われた通りに一族の元に帰還し父親と話をする。その頃聖の三大聖

と呼ばれた三人は霧の立ちこめる九頭山に入り謎の祠で何かをしていた。

「兄様本当に解印をなさるんですか？」

「ええ、この中の二頭は修羅に付き従うために生まれたようなもの……それに形だけの大聖堂など壊しても関係ないでしょう……」

「解った……。月光ちゃんいくわよ」

「はい。準備はできました」

巨大な扉の前に三人がそれぞれの武器を掲げ聖刃が代表して言葉を告ぐ……。すると扉が開き邪悪な靄と共に地響きをおこしながら二頭の頭が九つの龍が這い出して来た。

「何用か……。我らは貴様等には従わぬぞよ」

「この場から去らねば貴様等をことごとく食い殺してくれる」

「今日、この場に参ったのはそなたらを神と崇めんため……。魔王がこの地に舞い降りなさっている」

「気づいておる。じゃが……。何故我らの君は居らぬのじゃ」

「今、大聖堂をお攻めになられているのです。九頭牛頭」

「我らが義兄……。この聖刃が魔王である修羅様と婚姻なされるの。理解してくださいさったかしら。九頭馬頭」

「ふむ、よかろう……。参ろうではないか」

「牛頭の采配なら従おう」

「ありがたきことにつき……」

「聖王や。貴様が婚儀をとるとはな……。貴様にも礼をくれてやる近う寄れ」

聖刃の腰にさがっている日本刀が輝きおさまると二頭が祠を出て行き二人と聖刃を乗せて飛んでいく。この二頭はプライドが高く馬鹿にされるのを嫌うが一度従うと決めた相手には何が何でも従う心

強い味方だ。そして、雄の牛頭と雌の馬頭は夫婦であり古の時代に封印されていたらしい。それを今、解き放ち戦おうというのだ。

「ふん、口ほどにもなかったな皆の衆よ!!」

「魔王様万歳!! 聖刃大神官様万歳!!」

修羅は力を借りることなく敵の軍を殲滅し大聖堂を選挙した。そこで捕まっていた聖職者達を解放し軍への参加ではなく命を救わせるために医者勤めを命じ彼女は数人のオウガを連れてさらに奥に走る。その頃のユートピアでは東の軍隊が全滅、捕縛され帝が捕まえられた。かわいそうなことに年齢はデルより年下の13歳、フィトとアルが処刑や追放は避けるべきと判断し発言するが紅蓮の激しい反感がまさに火を噴いた。

「こんなに若いのに皇帝なんて……五年前のあたしと同じじゃない」
「なあ、ギアさん。処刑や追放はやめさせられないのか?」

「……」

「なるものか!! 前の帝は何故殺されたか解っておろう……なぜ、公家衆があの方を……」

その時、珍しく氷鎧が口を開きギアに提案した。その提案で紅蓮は満足しなかったが帝である芳納はまだ13歳で女の子だ。その点から考慮したらしい。

「ギア殿……俺が責任を持って世話をします」

「氷鎧! お前!」

「芳納はまだ13歳……そして、前帝の姪……忘れ形見といえるでしょう。言い方は悪いが俺が監視も勤めます」

「よし。……なら紅蓮、お前もそろそろ身を固めろ」

「はあ!? 何を今……」

「お前が氷鎧の嫁になれ……監視が一人では不安だしな」

「異議なき者……紅蓮以外は挙手」

「お……おい、岩鉾。お前まで何を……」

「知ってますよ……姉さん。つんけんして実は……」

「ダアアアア!!!!!!」

こうして北の紛争以外は片付き半分の部隊が城に帰還していく。
残りのギア、岩鉾隊はタージェ率いる攻撃軍に参加するのだ。それ
以外は先程告げたように帰還していく。

「ほお……今代の魔王は……激烈な方だな」

「ええ、まさか皆殺しにして奴隷を解放するところまでこなすとは
……」

「兄様急ぎましょう!」

「早くいきませんとあの方には追いつけなくなります。それに本隊
が心配です」

「大丈夫だ……雷軌と風崖なら敵を押し返したぞ? 俺も今し方近

隣の基地をつぶし終えたところだ……聖刃」

「き、綺麗……あんな人初めて」

「美しさに威風堂々たる挙動……そして、豪快さ……あなたが」

「いかにも俺が魔王修羅だ。ところで後ろの巨龍は何だ?」

「申し遅れた……我は牛頭」

「我は馬頭……あなた様に付き従う魔龍にございます」

「なら、ついてまいれ……敵を殲滅する」「御意のままに」

だが、今回は余裕をみた修羅に災難が降りかかった。敵はわざと
後退し敵の大將である修羅か聖刃を狙ったのだ。修羅と二頭の九頭
龍が空を飛び敵の砲撃を受け馬頭が撃墜されたのだ。修羅も重傷と
まではいかないが回復速度が追いつかない程の巨大砲台の乱射を仕
掛けられ落ちる馬頭と共に落ちていく。そこに近くで待機していた

牛頭が現れ今度は牛頭が標的にされた。巨大な砲台は龍の鱗を突き破れないにしろ何らかのダメージを与えているのだ。牛頭も激しい痛みに苛まれながらも背中の聖刃を守っている。

「牛頭……ここまでいいです。ここからはわたくしが相手をします。まだ修羅は落ちていませんか？」

「何をするきだ？」

「助けます」

「翼のない貴方ではむ……り……」

聖刃が本来の彼の姿を見せたのはその時だった。背中から光の羽が開き天の群雲の剣は光形が変化していく。

「我は大天使ミカエルの意志を継ぎし者。その愛する人を護らんとするために剣を解放し再び翼を得ることを許したまえ……」

聖刃が飛び立ち一瞬で修羅を抱きかかえ地面に落ちるのをさけたようだ。馬頭は外傷は少なく力を振り絞り敵の主砲代の下にある攻撃用側面砲をいくつか撃破した。そこに異変に気づいた風崖と雷軌が駆けつけ魔法を使い移動してきた日光と月光の姿もある牛頭は馬頭を守るように着地し睨みを効かせているためたかうことはできないだろう。これから彼らには長い長い戦闘がまっている。オーシヤは陸の部隊に攻撃を受けないように海に逃げ込み無事だった。

「す、すまない……聖刃……」

「喋らないでください。傷が開きますよ」

「これくらいの傷なら問題ない……行くぞ敵は十重二十重に来る」

「皆様……来ます」

「月光ちゃん……そんな不吉なことを。まあこの状況ならおかしくないか。ハハハ」

「風崖殿……久々に君主のために暴れて見るか？」

「勿論……生きて帰らねば悲しむ者も居ますので」

「月光は後方……いや、中央からの広域守備を頼む」

「はい。旦那様」

「……」

「雷軌……のろけるな」

「皆さん生きましょう!」

「おう、俺っちも混ぜな。あの馬鹿親父とは縁を切ってきた。残りは近くに行軍してきてる連中んとこに行かせたんでな気兼ねなく行けるぜ」

「よし、みんな。行くぞ!!」

先ずは修羅が能力を解放し敵を殴り飛ばしながら猛進する。その近くには必ず聖刃が剣を構えて走り回るのが見える。かなりの敵兵がそれでやられていきついに修羅が大槍をつかみさらに撃破の勢いを増していく。破壊力抜群のその武器で次々に敵を撃破し敵を寄せ付けないのだ。敵は生き残った砲台や戦車大隊を駆使し攻撃してくるが月光と雷軌に阻まれて攻撃は稀に彼女に届く程度……。

「修羅様には弾を当てません!! 勿論、我が妻にもな!!」

「夫の主人は私の主人……修羅様御守りします!」

雷軌の雷撃砲は用途に応じて形態を変更できる今は威力を集中させる収束砲型だ。月光は水の龍を作り出し敵の撃つ弾を一度吸収し敵の方向へ放出していた。この二人のおかげでかなり激しい砲撃の役半数は敵の被害に荷担しているだろう。雷撃砲での広域守備により弾道が定まらず敵はイライラしているのだ。

「ハアアア!! 白虎連迅!!」

風崖は風の魔法を駆使し恐るべき速度と力で人攫いたちのように

次々に体を半分に引き裂いていく。もはや回避不可能と踏んだ敵は逆に仕掛けてくるがあまり効果を上げない。そこに海水が大量に流れ込み波を起こして敵を飲み込んでいく。風崖は空中にとびあがり回避したが敵の砲台は火薬が塗れてしまい大半が使用不可能になった。異の元凶はオーシャだ。

「お待たせ!!」

その波の後に背中に日光を乗せた赤額が上空に現れ射撃や砲撃を交わしつつ背中中の日光が勾玉の力を使い重火器ではできない芸当をしている。火の玉を作り出し空から降らせて居るのだ。しかも相当な数を……たまに赤額が急降下し爪に漬けているクローを使って敵兵の命を確実に奪っていく。初日でかなり弱って来ては居るが敵軍も他の大型基地から援軍を要請し駆けつけてきているためなかなかけりがつかないのだ。夜は双方が攻撃を停止させているため問題ないが昼はここでたくさんの人間が死ぬのだ。気味が悪くて寝ることもできない。それに修羅や風崖、赤額が刃物を研ぐ音が響き敵兵の中にも気味悪がる連中がいるのだ。ある意味で効果をあげている。

「馬頭は大丈夫なのか？ 聖刃」

「命に別状はないですが強力な魔力封じ合金の玉をもらっているの
で回復には時間がかかるでしょう」

「そうか……どうりで俺の防御魔法が効かないわけだ。うっ……」

「あなたも……体に相当なダメージがでているはずです。無理に
ついてはこの力をもって鎮めます」

少し離れたところでは月光と雷軌がいる。わりに小柄な彼女は雷軌に抱かれて寝てしまったらしい。まだ16歳の彼女らにこの死線は厳しいだろう。しかし、切り抜けなければ生き残れない戦いだ。全力で抜けていかなくはならない……。

「このような幼い者が……戦場に出ぬようにならぬ世がくると望ましいのだが……。今は無理だな」

鎌を研ぐ風崖はふと月を見ていた。鎌を鞘に収めて立ち上がり背伸びをしながらオーシャに話しかけた。

「起きてるか？」

「何？」

「左手……切られてるだろ」

「……気づいてたの？」

「ああ、本当は寝ている間に手当てしようと思ったんだがなかなか寝てくれないからな今手当てしておく」

「こんなの平気だよ」

「化膿はさせてはいけない。汝、我が風の力とこの者司りし水の力を借りて血の代償をせんと快せよ……」

「風崖って何でもできるんだね」

「オウガとカイザーに与えられた特権にして命の産物さ」

「知ってる……八界一里の区別の以前に創られたあたし達の祖先の話」

「ああ、終わらせよう……こんな馬鹿げた争いは」
「うん」

その近くで爆睡するのが赤額と日光だ。赤額はもの凄いいびきをたてながら寝ている。日光はそれにも関わらずやすやと気持ちよさそうに丸まっていた。先程の二人は呆れ果てていたが彼らも眠りについたようだ。

「敵も策を固めて来ましたね」

「当たり前だ。俺が敵軍ならこれより良い陣を考えるがな。だが、

敵も二つの点においてはよう考えたのう」

「あ、姉上様？」

「修羅でいい。何だ？」

「こちらの策は？」

「知りたいか？ それはそれはおぞましいぞ？」

日光が少しおどおどしたが修羅は彼女らしく笑っていた。そして、敵軍の落ち度とこちらの利点を説明しだした。まずは日光と月光の合わせ技から始まり修羅や聖刃の単独攻撃の方まで全て加えて行くのだ。

「まずは三人一班に分けて左右に攻撃をしかけてもらおう。隊長はそれぞれ雷軌と風崖だ」

「……」

「御意」

「うぬ。まず雷軌の分隊には日光と赤額が入り中距離からの広範囲射撃と魔法攻撃を頼む。赤額は状況に応じ回避をしろ」

「はい、修羅姉様」

「おうよ。将軍殿」

「次に残りの二人は協力して防御と攻撃を頼む。片方の攻撃時は片側は防御をせよ。先より決めてもよいがな」

「はい、修羅さん」

「御意のままに……御姉様」

「……修羅でよいと言うとるに。聖刃は俺が本気を出す。手助けを頼みたい」

「！！ もとよりそのつもりですよ。我が妻よ」

「……まだ、違うであろう。馬鹿者」

二面性の強い修羅をよそに二分割された隊が次々に動き出す。その頃、街や森林に潜んでいたこちらに味方する一般市民も動き出し

た。義務である軍の給仕を利用し要塞の付近だが敵の作る円陣の外郭にいる革命軍に情報を逐一報告していたのだ。さらに修羅が解放したオウガの元奴隷達が軍に加わり力を増している。

「ねえ、月光ちゃん……どっちがいい？」

「旦那様は私を守ります」

「それじゃあ、あたしは攻撃だね。風崖！」

「二人ともしっかり……耳は持たないでくれ。捕まっっている！」

「行くわよ！ ウォーターガン！」

「古の二頭を持つ水龍よ……右舷は我が夫を守り、左舷は敵を討て。聖獣召還！」

風崖が背中に乗せ彼自身も上の二人に気遣いながら攻防を続ける。オーシヤは指を銃の引き金を引くように構え人差し指の先から直径50センチ程の円柱を放つ。痛いなどというレベルではなくそれはいとも簡単に骨を砕いて行くのだ。もちろん月光も手を抜かない。二つの頭を持つ水でできた龍は砲撃では崩れず次々に敵の前衛隊を食い破る。その内の片方の首は水の壁を作り敵の球を雷軌や日光に届かせない。

「雷軌様！ 私達も負けてられませんね！」

「無論だ！ 我が雷光の力を見よ！ 収束雷轟閃！」

「我が火の力よ。古の炎龍を解き放ち我が敵を討て！ 聖獣召還！」

「魔法はできねえがなあ！ 俺っちにもできることはあんだよ！」

べらぼうめい！ 三鍵爪乱舞！」

いつもは冷静沈着で静かな雷軌ですら怒声を発し敵の突撃隊を一個隊ごと吹き飛ばす。彼もこういう一面があるのだ。日光は妹の月光の使う能力と対的な能力を使い彼女の性格と職に合わないかなり残忍な殺し方で敵の大隊を次々に焼いていった。赤額は武器を使わ

ず鳥の鍵爪にかなり重装備な金属製の飛び出た爪の刃が光るブーツを使った蹴り技で確実に敵の指揮官級のメンバーを倒していく。

「死にたいやつは俺の前に出よ！ 瞬きをする間もなく消してくれ
る！」

「我が妻には刃を通させはしない。さあ、道を開けなさい！」

修羅と聖刃は敵の元帥級の男たちを狙い強固な防壁、建物の壁、敵兵、あらゆるものを無視し破壊してそこに向かう。外でも数で圧す敵軍はだんだんと追い詰められていた。外郭の革命軍に脇腹を突かれたのだ。ただでさえかなりの被害が出ているところにさらに訓練を受けていないとは言え志気が高く数は同等の敵に追い討ちをかけられたのだからたまったものではない。しかも、近くに隠れていた人魚の魔導師部隊が時期を見て加勢し始めたのも敵軍からすれば痛い。打撃は追い討ちをかけ続け、最終指揮統括をしていた丸々太った元帥らしき男が要塞の熱い石壁を貫いて敵陣の中心に落下してきたのだ。

「下種が……命を何だと思っておるのだ。そのような者に上に立つ資格はない」

「一字一句……相違有りません」

味方の陣から大歓声があがり敵軍の抵抗は殆ど止まった。血気盛んな者が暴れたりもするがそれも全て修羅に睨まれ泡を吹いて倒れたらしい。それから数日後のこと。聖刃を筆頭に今回革命軍に参加した中でギルドに参加したい者が旅支度を進める。軍部はその後発足された政党政権に抑えられ解散し各地にあった人攫いのアジトやオークション会場は修羅と聖刃が直筆した法書にのっとり住民からの摘発で殆どつぶされた。

「姉様……義兄様がお呼びです」

「そうか、その姉様はなんとかならないのか？」

「はい。これからもよろしくお願いします」

修羅も戦場から離れれば穏やかな笑顔を見せることくらいある。
月光の頭を軽く撫でてから聖刃と話す。

「どうした？」

「いえ、あのような人数を連れていても良いのかと……」

「問題無い、霸王宮の付近は土地も肥え住処となる場所も多い。それより……本当に……こ、婚儀の……ことは……」

「ええ、私を信じてください。あなたに寂しい思いはさせません」

「……………修羅様。ご報告します」

「風崖……………何だ？」

「大陸ユートピア北西に突如として巨大な浮遊島が出現しました」

「わかった……急ぎオーシャと赤額を呼んでくれ。聖刃は妹二人を集めた後、今回ギルドに向かうことになった皆を集めておいてくれ」

「わかりました」

ユートピア本土でも大騒ぎになっていた。北の軍を攻めるタージエと他の皆が一度海側にある攻防戦の前戦地から引きこちらも思案しているさなかだったのだ。北の軍はゼシの使った能力を科学の力で解凍し軍艦をだんだんと近寄る島に向けて配置し終えたところである。相手の実力が未知数な上に目的は攻撃と決まった訳ではない。

「シェイド……………どう思う？」

「今はわかりませんが異質な空気から推測すれば……」

「どう考えても攻撃が目的じゃないのお？」

「そうとも決めきれんがこちら迂闊には動けん……本城のメンバーを考えれば尚更だな。シド……………決断はどうする？」

「すみません……話の腰を折りますが。あの中にどうもルナが居るようです」

「何！？　どういう……」

「私にも解りませんがひとりの魔力であの城を浮かべることができるのはルナしかいませんし……」

話が纏まらぬままに北の軍艦隊が砲撃を開始した。巨大な島に砲撃するがまるで意味をなさない。修羅率いる帰国組も粗方のメンバーが決まり修羅の敷いたプランを用いて早急に帰国を目指す。

「まずは、赤額とオーシャの二人にギルドの本城まで書状を届けてもらいたい。赤額の方が届けばいいが……念押しにオーシャを送る」

「まあ、あんたの言うことなら確かだな。危険なんだろう？」

「そうだな。頼んだぞ二人とも」

「うん。わかった」

残りの幹部クラスとだいたいのメンバーを落ち着いてからの航海するようにさせ緊急組は修羅、聖刃、風崖、雷軌、日光、月光だ。この六人は中型の戦艦を使い本土に帰還するらしい。旅支度をさらに急ぎ戦艦に荷物を積み込んでメンバーが乗り込み修羅が恐ろしいことを口走った……。本城でもレイやマナはいち早く異変に気づき将軍級の戦闘員を集めた。メンバーはレイとマナを始めアル、フィト、紅蓮、氷鎧、リーン、ライムズ、ビクトール、桜牙など。加えてファンなどの戦えないが知識の深いメンバーも集まっている。

「あれは何なんや？」

「異質な空気を感じ取れたな」

『あれは嫌な空気や……身の毛もよだつ』

「私の感だが……あれは古代兵器の一部ではないかと思う。レイ、お前はどうか？」

「同じ意見です。しかし、エネルギーの供給源……そして、この魔力の波長は……」

「ルナちゃん……大丈夫かな」

「そうなる迂闊にては出せん。霸王殿はどうなさる」

「覇気の動き出したから修羅がこちらに動いています。それに……俺たちも古の力で護らなくてはあの力には対抗出来ないでしょう」

「ついに、お前が本当に霸王となる時がくるのか？」

ファンが意味深なことをいうと周りの視線が全てレイに注がれた。レイが解散の合図をしマナと自室に帰る。マナも分厚いガードパッドが入った魔導師のコートを纏いレイも久しぶりに鎧を着けて全ての剣を装備した。

「怖い？」

「う、うん。ちょっとね」

「大丈夫。離れないから」

「あ、ありがとう。キャッ………」

「また、危険な目にあわせてしまうけど……」

「みんなを守るには仕方ないよ。でも、背負い込んじゃダメだよ？ 私もあなたを助きたいから……」

大きな要素が重なり次々に戦を呼ぶ。戦は戦を呼び無限の繰り返しは今もまた繰り返されようとしていたWAR&WARは果てしなく続いて行くのだ。彼らはどこまで行くのだろう。

……TO BE CONTINUED……

空中戦

突如として空中にその巨大な本体を露わにした空中の要塞城。何
がそこについて、何をしたいのか目的は明確にわかりはしないがター
ジエやギアの心の内はあまりよい方向に動かなかった。それは目の
前の惨劇が物語っており、果敢にその何と解らぬ物体に挑んだ北の
反乱軍は完膚なきまでに叩きのめされた。その結果、主要な空母や
大型戦艦は全て大破し海底深くに沈没してしまいそれを目の当たり
にしたギアや他のメンバーも危機感を強めていく。

「ギア……」

「あれは内陸に上げてはいけませんね。それにレイからアレンと三
人を北西の火山群島に派遣したと報告もありましたし」

「なら、ルナが危ないな」

「私は空から行きます」

「宙慧！ 一人では……………。ギア頼む！」

「御意」

その他にもそのエリアではルミとゼシ、シェイドが動いていた。
大きな鉞を担いだルミが海岸線の島を睨みつけている。準備が整う
のを待ちシェイドは周りの部下に退避命令を各部隊に告げるように
命令し本城に帰らせていく。ここに分隊を置いておくとどんな被害
が出るか解らないからだ。本隊の護衛と殿も兼ねており深刻だとい
うことは解る。

「ルミ！ 行けるぞ！」

「はい！ いくよお！」

「絶対に無理はしないでくれ！ 氷柱！」

ゼシが力を込め海面から細い突起を突き出していく。その突起は言うまでもなくルミの足場だ。ルミは人間離れした跳躍などの身体能力がずば抜けていたのだ。物理的な法則を無視した彼女の跳躍力でどんどん空高くに上がって行く。途中で空中の城が張るバリアのような光の壁に阻まれ砕こうと鉞を打ちつけるがビクともしない。その内に北の反乱軍が所有する小型の戦艦の流れ弾が次々に彼女の足場を奪っていき遂にその足場も倒れてしまった。

「全く……後先考えないやつだ」

「ありがとう。チュッ！」

「……」

「照れてるう」

「……」

空中で抱きかかえられてその抱きかかえた相手にいじられているのはシェイド……。まっすぐに冗談の効かないシェイドは真に受けるので反応は面白いが動きからはそんな和やかな空気は見とれない。空中にある崩れた氷塊の破片を足場に陸に着地する。この二人は並みの将兵とは格が違うのだ。身体能力、洞察力はコマンド級でこの二人の力は相当ギルドに貢献しているのである。

「粘るな小僧」

「ルナを解放しろ！」

「ふん、翼のない人など道具として使えばそれでいいのだ。貴様等のように低能で戦闘もろくにできん雑魚と我ら天の采配により大いなる既知と肉体を得た者は違うのだ」

「……お前等に何があったか知らないが、僕には解る。ここであなたは死ぬんだ」

「ほお、この期に及んでよくそんな口がきけたな。確かに銃や魔法は当たっておらんが……多勢に無勢だとは思わんのか」

空中要塞の内部ではルナ以外の三人がそれぞれのスタイルで敵を倒していた。しかし、敵の言うこともまた正しく完全に制圧するなど到底不可能なのが事実で三人は疲労に苛まれている。デルは一人遺跡の内部で剣を構えて対峙しアレンは派手に遺跡を破壊しながら外部で激戦をしている。ヴィヴィアは怪我の関係からあまり万全ではないが森を上手く活用し敵をトラップにはめて次々に倒していく。

「レイさんに習っておいた剣術が役にたつとはな！　ハアアア！！」

破壊力は抜群である。遺跡が砕け島が揺れているのに下にいるタージェと上の二人は気づいていた。ただ、バリアが厚くギアですら破れないようす……。彼らがその結界を破ることができなければ攻撃の観点ではここに破ることのできる者はいない。

「ギアさん！　無理です！」

「そのようだな！　どうやれば……」

「星魔法の結界は覇王か魔王のような特別な力のある人間にしか破れないのです」

「修羅かレイ待ちだな……急いでくれ、二人とも」

その修羅は恐るべき方法で海を越えようとしていた。あまりに大きなリスクを伴うため聖刃が反対するのも頷ける。しかし、日光、月光の姉妹ですらその堂々たる言葉に飲まれ最終的にはその方法で海を越えることになった。オーシャと赤額は二人の最高速度で各々ギルドの城に到着し城外警備のリーンとライムズがその受け答えをしている。

「ギルド。ホーリ・プリセクトの方ですかい？　俺は赤額。魔王修羅様の使いで書状を届けに参上した」

「有翼人……。書状？ 確かに修羅の草書や。うちには読めへんけど城に急ぎや！」

「合点承知の助！」

オーシャはライムズのパートナーの光狼と共に城に走る。途中でリーン赤額とも合流し二人揃って前門内部に通されレイに謁見しているようだ。オーシャは以前の経験から少し警戒心が強く出て体が強張っていたがマナを見てすぐにそのこわばりも治まった。

「手前は大陸、サンドウィンドウにて魔王様より命を受け書状を侍り参りました」

「ふふふ、そっちの女の子も楽にして。レイもその方が楽みたいだし」

「赤額……だったかな？ 君も楽にしてくれ。大方の内容は理解した。この手紙から読むと君もそのオーシャもこのギルドに入隊するらしいからゆっくり休むといい。修羅が到着したら北西の空中城に向かうように伝えてくれ。俺は……やることができた」

「レイ……まさか」

「ファンさん。その……まさかを受けるために行きます。古代文明には古代の力で対するのが一番効果的です」

「そうか……。お前も遂に」

「はい、『覇王』の本当の意味を理解しました。マナ……行こう」「う、うん」

オーシャと赤額は何のことかさっぱり分からず顔を見合わせているその最中にリーンが謁見の間に飛び込みそこにいた皆が窓に詰め寄った。そして、レイがマナを抱き上げ窓から飛び降り前門を飛び越えた。

「レイ！ そ、空から！ 空から！」

「リーン！ 何が何だか……」

「とにかく！ 窓の外から見い！」

それは修羅の行った背筋の凍るような方法の結果だった。空中に浮いている小型の攻撃艦がこちらに向かって飛んできている。本来なら空を守っているクリードとダークネスは空中城の方向に向かって攻撃にいつてしまいその軌道を変えることは誰にもできない。

「修羅！ そんな無謀な方法で……」

「今は一秒でも時間が惜しいんだ！ 急がねばいつあの城がどんな攻撃をしてくるかしれん！ 俺の力を使えばこの距離は何とか超えることができる。急がねば……」

「義兄上……ここは姉様の方法で行きましょう」

「月光ちゃん。私もそれがいいと思う。義兄上はよく言っていましたよ。自らを粉にせねば誰も守れず救えない……と。今がその時です」

「俺も賛成です」

「雷軌どのに同じ。方向と最後のクッションは俺に任せてください」

「……仕方ありませんね。気は進みませんが……その策で行きましょう」

修羅が行う作戦は彼女の力を凝縮しそれを任意の時間、場所で爆発させその力で進むというのだ。最初のかじ取りは聖刃が務める。その間、雷軌は内部で二人を守る体勢をとり続けていた。風崖は先の進言どおり形態変化をした状態で船の甲板に立ち風の魔法を使い船が空中に浮いた時の制御を担当するという。

「準備はいいか？ あと数分だぞ」

「舵は大丈夫です」

「修羅様。魔法の安定化は完了、いつでも行けます」

「姉様！　こちら問題ありません！」

「三！　二！　一！　行くぞ！」

爆発は恐ろしく巨大な物となり波の波長が崩れ巨大なうねりを作
って船を押し上げる。爆発し船の推進が始まって数秒間は水面につ
いていた船底はその後空中に浮き聖刃が舵を握る中風崖と息を合わ
せてまっすぐに操作している。内部は雷軌が何とか日光と月光の二
人を無傷で守りきりその後には備えている。

「見えたぞ！　あれが覇王城だ！」

「なんと雄大な……あそこであれば覇王がいるというのはうなずけ
ます」

「ん？　覇王……何をやる気だ？」

レイは修羅の動きに合わせて彼の覇気と呼ばれる魔力に近い何かを
発し城の近くにそのまま落ちようとしている船体を受け止めにかか
ったのだ。いうまでも無く彼の力だけでは足りず完全にショックを
吸収するまでに至らずマナが付き添う。その彼女の魔法を用い結果
的にもギリギリという感覚で船は地面に落ち半壊状態で爆破をせず
にその場に停止した。

「助かった……覇王」

「お帰り。修羅ちゃん」

「覇王妃よ……その呼び方はよしてくれ」

「よく帰ってきてくれた。さっそくで悪いが……」

「解っている。聖刃、すぐにでも行くぞ」

「解っています。ですが、その前に……覇王殿これから妹達ともど
もよろしく願います」

「ああ、聖皇殿だな。こちらこそよろしく頼む。修羅と共に行って
くれるか？」

「ええ、我が妻を守らぬ夫がどこにしようか」

「修羅ちゃん……おめでとう!」

「聖刃……気が早いぞ。まだ、夫婦ではないであろう」

修羅と聖刃が発つのと同時にレイとマナもすぐに中央大陸の中心にある大きな森林に脚を進めて行った。その頃、一人の女性がとても厚い結界を突き破り中に一人きりで突入した。ギアも同じような方法で突入を試みたが全く……傷を付けることすらできない。突き破ったのは……そう、宙慧だ。

「待ってなさい……。月……^{ゆえ}今、母が助けに行きます」

内部で奮闘中のデルはやはり多勢に無勢のようだった。多くのカイザーの命を彼も奪ったが最終的には彼と戦った老練の魔術師によって吹き飛ばされてしまう。遺跡の壁を破壊しつつ外に身を横たえることになったのだ。残りの二人は以前として森と遺跡の密集するエリアで大きく体を張っている。

「ぐふっ! ……こ、こんなところで」

「デル? デルではないですか……。大丈夫ですか?」

「は、はい。剣で直撃は避けました。宙慧さんこそどうやって」

「それは……ゴフツ! もう時間がありません。早く娘の……月の元へ」

「宙慧さん!」

「急がなくては……こんな体なんかのせいで」

「無理です! そんな状態で戦ったりしたらそれこそ死んでしまいます!」

「もう、いいのです。最後に娘の未来につなぐことができるなら」

デルの肩を借りて遺跡の内部に脚を踏み入れる。そして、内部で

もルナが抵抗しようともがくが全く意味を為さない。

「うう……。こんな結界くらい！」

「無駄だ。その結界はこの古代文明の残した生きている空中要塞のものだ。貴様はいずれ魔力を食いつくされ死ぬだろう。だが、地面に這いつくばることしか脳のないやつらを皆殺しにする程度なら……問題なからう」

「そ、そんなことさせないんだから！　今にデルが助けてくれる！」
「ふん、あの小僧なら今ので死んだだろう。あのような吹き飛ばされ方をしたのだからな」

修羅と聖刃が下に到着しそちらの人張りも何とか始まった。上に登るのは修羅一人で残りはみな、先ほどから始まった太いレーザーへの対処だった。

「ほう、修羅。お前も結婚するのか」

「い、今はそんな……」

「修羅ちゃんおめでとう！」

「めでたいな……」

「そんなことより人張りを急がねば！」

「そうだな。俺があらかた決めておいた。修羅はギアと共に内部に入ってくれ。俺とゼシであれの進撃を抑える残りは砲弾をはじき返してくれ」

『了解！』

城ではかなり不安が募っていた。大方の人員が抜け不安な上にファンが産気づいてしまい城内はてんやわんやなのだ。唯一産婆さんのように働ける六弥という阿蘇の奥方の従者が付き添いずっと付き添っていた。

「ほら！ 頑張ってください！ 吸って！ 吐いて！ 吸って！
吐いて……そう、頑張って！ もう少しですよ！」

再び空中城に戻り遺跡内部でのことに目を向けよう。島が動き出しそれを強力な二人の魔法で何とか抑えている。シドが岩と土で作った巨人で島の最下部を抑え先に進めないようにしぜシが同じく最下部を海面で凍結させ動かさないように固定しているのだ。それでもじりじりとその空中城は先に進んでいく。それ以外の聖刃、ルミ、シェイドはいきなり始まった砲撃の対処をしている。ルミははじき返し聖刃は能力で背中に翼を出して空中で弾道を変えたり切り落とす。シェイドは魔法に近い忍術と呼ばれる技で弾の速度を一定時間一定範囲をスローモーションのようにし彼も切り落としている。

「全く！ これは厳しいですね！」

「うん！ でも、守るには仕方ないよね！」

「いうまでも無い！」

「無駄口叩くな！ こっちも難しいんだぞ！」

「修羅……持久戦に持ち込まれればこちらが負けるのは解りきっている急いでくれ！」

空中で修羅が薙ぎ払い槍を一振りし内部に侵入したギアと修羅。外にはたぐさんのカイザーが飛んでおり彼らに向かって迎撃を始めている。ギアは銃弾を受けても全く動じずに突っ込み修羅は一度高く飛び上がってから島の中央に着地した。そこからはまさに鬼神と魔王の恐ろしいまでの進撃を見せ遂にギアはアレンと修羅はヴィアと合流し各々が加勢を始める。

「大丈夫か！ アレン！」

「ギアさん！ 俺は問題ないです！ それよりヴィヴィアとデルが心配だ！」

「ヴィヴィアは修羅が向かったようだ。宙慧は？」

「おそらくデルといっしょでしょう。デルは遺跡の内部でルナを助けようと奮闘してます！」

ヴィヴィアは絶体絶命の状態を修羅に救われ何とかその状態を乗り切った。怪我の事といつの間にかにやら集まった近距離戦闘に特化したカイザー達に囲まれ身動きが取れなかったのだ。そんな最中に修羅の薙ぎ払い槍が猛威をふるい敵は一瞬で多くの味方を失ったことになる。最終的に生き残りは数人で彼女らはすぐにその場から未だに遺跡を崩しながら戦う二人の元に向かっていた。

「助かったわ……ありがとう」

「礼には及ばん。それより行くぞ」

「ええ」

内部では老練のカイザーのみが生き残り宙慧の容赦なくすさまじい攻撃を何とかしのいでいる形だった。しかし、その宙慧も先にいつていたように身体が限界を超えており既に呼吸すらままならずいきなり崩れ落ちて立てない様子だ。それを見るとデルがレイからもらったこれまでのこの老練のカイザーとの戦闘で刃こぼれの激しい剣を顔の前に立て彼自身の力を解放した。

「ここまで……追い詰めて……なのに……いうことを聞きなさい！」

「はあはあ……そうか。貴様、魔痕が出ている。魔術師の業病の一つのそれが出ればもはや生きていく道は……」

「そ、そんなこと知っている。最後に娘を守れば……それでいい」「宙慧さん。ここからは僕がやります」

「小僧、一度負けた者に何が……」

修羅とヴィヴィアが到着しそこに固まっていたカイザーの主力は

ことごとく壊滅。投降してくるものも少なくなかった。そして、島はほとんど彼らに制圧され中央にある遺跡以外は皆が普通に動けるようになっていた。そこに……。

「伏せろ！」

「きゃっ！」

「うおっ！」

大きな斬撃が彼らの頭上を抜け周りの木々が真つ二つにされていく。恐ろしいのはそれからだった。中からはルナと宙慧を担いだデルが飛び出し後ろからの攻撃を完全に剣ではじき返している。そして修羅とギアに二人を預け刃こぼれした剣を構え老練のカイザーと対峙した。

「……そろそろ決着を付けようよ」

「解っておる。しかし、貴様が空王の素質を持っていたとは」

「僕も……母さんが教えてくれるまでは知らなかった。でも、この力はむやみに使っていない訳じゃない。僕が、大切な人を守る時だけに使うのさ」

「ふん、どの道もう遅い。この要塞は止まることはない」

「やってみなくちゃわかんないさ！」

リーンやライムズ。赤剛の面々。二頭の龍は城のまわりから空城中の方向に向かっていく。それほどにまで大きな騒動になっている。大きな……そして、下手をすればこの大陸の外側からなくなってしまう程の事態に発展していたのだ。空中に浮いているその城の攻撃はそれを占拠し操ろうとしていた者たちが持っていた意識とは全く別物だということ事が判明したのだ。デルが持つ機械などの知識が働きその城のエネルギー炉とエンジンの働きをするであろう部分に入り込みそれに分析をかけたのだ。

「ぐ、ぐぬ……」

「貴方は……道を間違えたんだ。オールドロス、我が名はオーブ・ギア・オーガ。貴方の軀は丁重に葬ろうファンと共に供養する」

「ファン……娘は……元気なのか？」

「我が妻として健在だ。もうすぐ、貴方の孫も生まれるはずだ」

「そ、そうか……なら、悔いはない。オーガ殿、娘を……た、たのん……だぞ」

その会話は誰も聞くことなく二人だけの秘密となってしまった。デルが解析しその城の秘密に近づいたのだ。恐ろしいのはその内容だ……デルがいきなり全員に退避するように叫びすぐに遺跡の外部に出る。直後に全員が飛び降り下のメンバーも激しさを増す弾幕止めることが難しくなってきたようだ。シドやギアがデルの考えを理解したのか号令を出しすぐに全員が後ろの弾幕を気にしながら退避する。

「デル、ルミ、アレン、ヴィヴィア、修羅……おい、ギアと宙慧はどうした」

「遅くなりました。シドさん」

「ギア！ その背負ってる二人は……」

「歪んだ世の中の象徴と……これから天に召されようと……」

細い声の宙慧がいきなり吐血し片腕からずり落ちその場で横になってしまった。すかさずルナが駆け寄るがもうすでに息は絶え絶えで生還できる望みは薄い。それを悟っているギアと他の面々は下を向き目をそむけ口を紡ぐ。聞こえるのはルナの大きな鳴き声だけだった。

「お母様！ お母様！」

「ルナ……泣かないで……。今更、貴方に母親面なんてできないのは解ってる。だけど最後にいわせて。愛してた……もう、命は尽きるけれど貴方を守れたの……それだけで満足。デル君。貴方にはお礼を言いきれないわ。これからも……月ゆえをよろしくね。これは貴方に預けるから………」

「そ、そんな。お母様！　まだ逝かないで！」

既に力はなく垂れ顔は安らかな笑みをたたえ宙慧は40歳の生涯を閉じた。その腕は魔法の使いすぎから来る程度の酷い火傷のような痣ができていたという。だが状況が状況だけにすぐに本城に帰って行く。ギアと修羅、その後に加わった聖刃が様子を見つつその島の動向は安定を迎え動かない。動きを見せる前に今回戦闘に参加したメンバーには皆休養が与えられている。そうして、一時の膠着が再び続き皆心を顔に移したように不安さが強く浮いていた。

「ギア……あのあざは何なんだ？」

「あれは……人間が魔法を無理に使うとできる呪いのようなものです。俺やファンにもありますが彼女ほど酷くはありません」

「最後にするつもりで結界を突き破ったんだろうな」

「そうでしょうね……」

「デル、お前はルナのそばにいてやれ」

「はい、そういえばゼシさんがギアさんと呼んでましたよ」

「ん？　ありがとう」

悲しい出来事の他にも嬉しい出来事もあったのだ。そう、ファンは出産を無事に終えていてギアの帰りを待っていたのだ。部屋の前には六弥とリーン、ヴィヴィア、アル、闇剛が集まっていた。ギアがそこに行くと皆が頭を下げ複雑な表情でギアに話しかける。

「おめでとうございます」

「なんか……複雑ですね」

「ああ、そやな」

「皆……どうしたんだ？」

「ファンさんと赤ちゃんを見に来たんです。どうせギアさんのことだから名前は決まってるんでしょ？」

「ギア將軍は……そんなことにまで」

「悪いか？」

「名前はどしはるんですか？ 気になりますわ」

「ああ、男ならブライ。女ならクライス」

「名前よりもお子さんとファンさんがお待ちです。さ、さ、中に入ってくださいよ。一日も空けるなんて全く……なかで天使さんがお待ちだから。少し体調が悪くなってしまっただ変でしたよ」

ファンはまだベッドから起き上がれないが白い布に包まれた子供を愛しそうに抱いている。そこにいつになく顔をほころばせるギアが入るとさらに嬉しそうにファンがそちらを見た。後ろについているメンバーは皆珍しそうにファンとギアの子供を覗き込んでいる。

「背中には……ギアさんの翼？」

「角……ないわね。あ……あった。おでこに小さいのが」

「目の色と髪の色はファンさん……不思議ね」

「不思議や……オウガとカイザーのハーフってこんな子なんやな。

耳も長いし」

「ふふ、で？ ギア名前は決めてるんだろう？」

「性別は？」

「女の子だ」

「クライスだな」

「クライス……か。いいじゃないか」

「レイは？」

「ああ、私もマナに抱いてもらいたかったんだが……アイツらも覚

悟を決めたらしい」

「そうか」

「なあ！ さっきから二人で何をこそこそと話とるんや？」

「これからの話だ。あの空中城はこれから何らかの動きを見せるだろうしな」

「ええ、その場にいた私は解る」

「私も、アークリーと出ます」

「今はいい。それより……ルナは？」

「ふさぎこんでるわ。マナがいればよかったんだけど。あの二人はどこにいったんですか？」

「俺の口から言えるのは……この世の『始まりの地』としか言えないよ」

「始まりの……地？」

「ああ、これから始まる場所だ。ギアと私はそれを見守ることにしているんだ」

一時の休息をする皆と外で変化を見せる空中要塞。それとは別にまた一つ大きな変化が彼らを待ち受けているのだ。レイとマナは再び彼らの先代が行ったようにそれを行うためにそこに向かっていた。余裕はない中でもそれはおごそかに伝えられていく。彼らの時代が来るのだろう。紡がれる世の中は今や紐により込まれた。そして、これからその紐が綱になり大きな塊になり……輪廻になるそれを紡ぐ始まりは既に遠い昔だ。これからの未来はどう進んでいくのだろうか。

古を今に

その頃のマナとレイは二人が出会った場所に向かっていた。聖霊森林区に足を踏み入れ各々が重武装で歩いているのだがこれまでに体験した危険なエリアにさしかかっても何も現れない。大きな森林区に入り、ぬかるみを避けながら更に奥へ、奥へ歩く。プルトンとの大戦の影響からか道がかなり大きな変化をしていて解りにくい。ひとときわ高い遺跡の塔を目印にしているらしく迷うことはなさそうだ。

「懐かしいね」

「ああ、マナが俺と出会った場所に近づいてる」

「うん。でも……おかしい。何も居ないなんて」

「それはそうだな。危険性が少ないならいいが……不気味さがある」

その時、空からの襲撃にみまわれた。ライオンの胴と後ろ足、尻尾にワシの頭と前足、翼を持つ幻獣グリフォンだ。他にも類は友を呼ぶのか違う種類の物まで現れる。猿の頭に他の動物が合わさった鶴、こちらも合成獣のマンティコアなどが含まれる幻獣種。鬼にしては大型なオーク、中核のオーガ、小型のゴブリンなどの鬼類。果ては野生の小型の竜でドレイク。以前にも歓迎してくれた水性の魔物。それらがどこから現れたのか知らないが大量に現れ次々に攻撃をしてくる。マナは魔法の特性上攻撃はできないためレイが一人で攻撃をしマナは長いロッドを持って防御をする。

「レイ君！ この数じゃ防ぎきれないよ！」

「頑張ってくれ！ だが、らちがあかないのもそうだな。なら！」

数分が経過した頃にクリードとは比にならないが巨大な竜などの

モンスターが現れ始めついにレイが霸王の力を解放しことの対処に当たった。赤い髪は金に染まり瞳も相応に変化をしていく中で一言叫び周りを静めたのだ。

「我が名はフエンク・レイ・スウォード！ この地に覇の力を満たすために来た。世界に安泰を求むる者は道を空けよ！」

するとモンスター達に早々と変化が現れた。周りを取り囲んでいた雑魚というそれらに失礼かも知れないがあまり強くない者は逃げ出し中核の知能が働く者は怯えその場で頭をたれ、大型の知能のかなり高い者は皆、列を作り道を空け通り過ぎるとそれらは森に帰って行った。

「レイ君。今のは何だったんだろ」

「解らない。だけど、試していたのかも知れない」

「試す？ 何を？」

「俺が本当に霸王でマナがその妻。修羅風に言うに霸王妃であるかってことを試そうとしてたんじゃないかな？ 俺達は魔獣や幻獣の言葉が解らないけど向こうは力の差を強く感じ取ったらしいし」

「そうかもね。みんな、急に素直になったもんね。でも、なんで隠れて……」

「まだ距離があるな……もう少し歩くけど足は大丈夫か？」

「あのね。レイ君が思ってるより今の私の体は強いよ？」

更に奥へ歩き続けながら会話をしていた。空中要塞の攻撃が止んだのか大地や空が静まり返ってかなり不気味になっている。途中からマナがレイの手を離そうとせず更に歩く時間がかかっているがレイも文句は言えない。この聖霊森林区は他の区域よりも魔力の影響を強く受けるためか気象条件や時間の流れが不安定でそこだけが雨や嵐、雷、晴れになったり昼と夜が逆になってしまったりするのだ。

不安定とは言うが今は外も金星と呼ばれる明るい星が見え始め急に暗くなるかならないかの差だったのだが……。不安定と言えばルナは母親である宙慧を失い心の上でかなり不安定になっていた。同室のデルですら話しかけるのが辛い程なのだ。頬には涙の跡が光り目は真っ赤に腫れている。いつもは短くても髪飾りをつけるが帰って来てからは全くする気配がない。宙慧の葬儀は修羅に兼ねてより彼女自身が伝えていたらしく七人衆とルナ、加え修羅の独断でデルを末席に座らせ、しめやかに行われ……。ひっそりと埋葬されるということだ。

「デル……」

「なに？」

「デルのお母さんってまだ、生きてるの？」

「僕が5歳の時に死んじゃったよ。父さんはドワーフの首長。母さんは……ヒューマンだった。だから、僕と母さんはその場に居られなくて父さんが逃がしてくれたんだ。その後、僕を船の上で出産して……過労死」

「お母さんって……優しかった？」

「あんまり記憶にないよ。5歳の僕は近くの母さんの実家にいたし」「デルは寂しくないの？」

「寂しいよりは苦しかった。僕を養うために体が弱いのに無理をして……最後には笑顔で死んで……身勝手だよ。子供は一人生き延びるんだからさ。親なしでね」

「私……。自分のせいでお母さんが死んだのと同じだから。正直辛い。デルは……どうして止めてくれなかったの？ お母さんが来てくれた時は嬉しかったけど……まさか、まさか死んじゃうなんて」「宙慧さんは僕が何を言おうと進むのを止めなかったよ。だから、あの人に僕は負けたのさ。殺したのは僕かも知れないし……その重さは確かに僕にもある。だけど、宙慧さんは僕に自分を責めるなんて言っただ」

少しの沈黙の後にルナがデルに向き直りいきなり抱きついて泣き出した。デルはどうしてよいか解らずそのまま抱いている。親の死は恩を受ければ受けただけ悲しいものとなるのだ。彼女は長い年月を一人で待っただけでありその愛の重さや安らぎは近日に凝縮されていて人よりもさらに重いだろう。宙慧の残した簪が机の上で光りデルは宙慧の言った言葉を心の中で繰り返し最後に一言小さく呟いた。

「ルナを頼みます……か」

「デル？」

「今は泣けるだけ泣きなよ。レイさんみたいに気の利いたこと言えれば良いんだけど……僕はあんまり器用じゃないから。宙慧さんの分まで生きよう。僕が支えるから」

「あ、ありがとう……貴方にしては十分よその言葉だけで」

その頃のマナとレイの二人は森林区内で遺跡に到達し何故か形状が変わっている遺跡に違和感を覚えつつ中に足を踏み入れる。レイは以前にもギアと遺跡調査のために中に入っているがその時とは装飾や建物の景観が大きく異なっていたのだ。機械兵は攻撃をして来ずデザインが変わり明らかに何かが干渉し変化させていた。

「改印の間はどこだろ」

「ご丁寧に床に地図が書いて有るが……無いな」

「じゃあ……どこなのかな」

「一番奥に行こう」

「覇王の間？」

「ああ、そこが一番可能性がありそうだしな」

「うん」

明らかに違うのは地下に通じる階段や上に通じる階段が数多く確

認されたことだ。彼が16歳のときにその遺跡に入った時は一階しかなく迷路のような作りの建物だった。だが今は御伽話に出てくるお城のようなものになり作りも以前のように物々しくなくなって全体が明るくなっている。

「ここ、みたいだな」

「うん。手をかざせば開くの？」

「俺の時はそうだった。だけど今はどうか解らない」

「そうだよ。これだけ変わってるとなんとも言えないよね」

そうは言うが二人とも手をかざし魔力を注入していき一定時間の経過後にいきなり他の空間に転送された。そして、マナもレイも各々隔離されていたのだ。

「マナ！ マナ！ どこだ！」

「よお……」

「誰だ！」

「そんなに警戒すんなよ。実の父親に刃を向けるのか？」

「その声はトゥーロン？」

「ああ、トゥーロン・マクシミリアだ」

「それと実の父親？ だど？」

「マナの嬢ちゃんから聞いてないのか？ まあ、タイミングもタイミングだったしな」

「なんでお前がここに？ マナはどうした！」

「お前のお袋のところにいる。俺はお前を試すために来たんだが……もう、継承の儀をしている男を試す必要も無いわけだ」

トゥーロンは以前に見せた威厳のある言葉使いではなく少し軽さのある話し方をしている。彼は金の瞳にその色の髪だ。レイに似通った点がいくつかあるがトゥーロン自体はそれをよく思わないらし

く苦笑いしている。その後も奥に歩いて行った。

「お前には申し訳ないと思っている。だがな、どうしようも無かったんだ。プルトンの力は強大で俺にはそれに対峙するだけの力も器も無かった。だから、明覇に頼んでお前を隠してもらったんだ」

「それが母さんの名前なのか？」

「ああ、本名はオールドネス・ギル・プルトン」

「何だと？」

「すぐに気付くよな。そう、プルトンはお前の伯父でお前の母さんは冥王一族の末裔というわけさ」

「そんな……」

「お前の母親の明覇はプルトンの姉で……俺を憎んでいる。本来、霸王一族と冥王一族は陰悪なんだ。だが、俺と明覇は愛をはぐくみお前をこの世界で産み落とした。お前は最高血種のサラブレッドなのさ」

「嫌な言い方だな」

「悪い。だが、お前には解ってほしい。この世界を守りたいなら……意地でも生き延びろお前の妻にしたい女とな」

「質問してもいいか？」

その頃のマナも気づけば他の空間に飛ばされレイは居ない。半べそ状態のマナに追い打ちをかけたのは割合低い女性の声だった。その女性は大柄ともいえないが大きな赤い瞳にまっすぐ膝下まで伸ばした赤い髪をしている。何より特徴的なのは大きな『揚羽蝶』の翼だった。暗くはないがあまり明るいとは言い難い青白い松明の火が光る石造りの廊下の先にその女性は居る。

「立ちなさい。マナ・ムーンライト」

「ど、どうして私の本名を……」

「何でも知っている。今、レイとお前がどうしてここにいるのかも

ギルドの前に浮いている物体が何なのかも。お前たちの……運命がどう進んでいくかもな」

「あ、あの」

「ん？ これは失礼。私としたことが……我が名は明覇。この世界から超越した存在だ」

「明覇さんはどうしてここに？」

「お前を試しに来た。我が息子フエンク・レイ・スウォードの妻たる力量、知力、技量がお前に備わっているかだ。だが、そんなものはもういらん」

「なら……どうしてここへ？」

「ふむ、強いて言うなら息子にわびたかったのだ。私とトゥーロンがあの子をスウォード家に託し無責任にも見守ることしかできなかった事を……」

「この先に何があるんですか？」

「簡単には誓いの間と呼ばれる儀式を執り行う部屋があるのだが……ここは飾りのようなものでな。あまり深い意味は持たんのだ」

トゥーロンとレイは既にその部屋を折り返しマナと明覇の所に向かっていった。レイの手に手渡されたのは防具に、部位を限定して言えば手の甲に付けるエンブレムだった。真ん中には透明な石が埋め込まれていて装飾は細やかな物だ。

「お前もいずれは選び進むことになる。その時に強く生きれるだけの心が備わってなくちゃいかん。その点お前は俺よりも強くて安心したよ。マナの嬢ちゃんもかかわってんだろうが……お前はこの先も苦難に襲われる。だがな、つき離しちゃんならない。どんな敵でも助けを必要とするものがいれば助けるんだ」

「……なあ、あんたは母さんと居て幸せなのか？」

「ああ、一緒に居れるならな」

マナと明覇の間でも前にレイとトゥーロンがした会話が復唱されるようにもう一度明覇から説明されている。マナは驚いて目を丸くしているのだろう。その反応を見て明覇はカラカラと笑っていた。時折、背中の羽を動かす彼女はマナの少し先を歩き後ろのマナに逐一目を止めている。彼女の腰には大ぶりの剣がさがっていたが抜く気配は見られないことからマナは安全だと判断したようだ。

「それじゃ……レイ君は霸王と冥王の血を受け継いでいるんですか？」

「ああ。だが、私から言わせてもらえば血などはその時の区別や生まれつきの評価にすぎん。お前はレイ自身のみを見れている。それがお前を私が入っている理由だ。私もトゥーロンといわれればよいのだが定めはなかなか変えられん」

「……………」

「そろそろだ。儀式を始めよう」

「明覇。久しぶりだな」

「ああ、お前こそ元気そうで何よりだ。レイの出産以来だからな」

「ああ、レイ。少し離れよう」

「何故？」

「俺がお前に託したように明覇もマナの嬢ちゃんに託すのさ」

明覇の手の甲と額が淡く光り紋章が浮き出た。同時にマナの足もとから光が湧きあがり紋章を結合させていく。すぐに彼女の額には明覇と同じような紋章が移り手の甲にも写っている。そこから相手を変え明覇がレイの手に触れるといきなり紋章を移しトゥーロンの方を見ている。

「マナ・ムーンライトとフェンク・レイ・スウォードの婚姻を先の霸王なる我とその妃は認めここに新たな覇国の礎を築かん！ 時と地と世界の理のもと改印を開かん！」

「さあ、レイ、血判を……マナはいい」

「……………これでいいのか？」

「ああ、俺達の使命これで終わりさ。また、会う事はないだろう」

「父さん、母さん……ありがとう」

最後にレイの一言を聞き二人は別の空間に吸い込まれていった。

そのすぐ後にいきなり地面が揺れ巨大な魔力の波動が起こり外で何かが起きている。二人は一度エントランスに戻り状況を把握するため外に出た。ギアとシドの二人が本気でかかって何とか抑えるその力はどこから生まれているのか解らない。しかし、空中要塞は何かの形の変化を伴い大地を吸収してその形を変貌させていくのだ。

「おい、ギア。あれ、何に見える？」

「人にも鬼にも見えますね」

「大丈夫ですか？ お二人とも。わたくしと修羅も加勢いたします」

「助かる。だが、あれは？」

「ふむ、俺の予想は……悪鬼と同じだ」

「古代兵器か」

「ああ」

マナとレイも確認し外に出ようとしたが不意に明覇の声が頭の中に響いた。

『覇……を……この地に……広めるの……だ』

「広める？ どういうことだ？」

「聞こえた？」

「マナもか。とりあえず中へ」

「うん！」

地面を吸収し巨大な岩と土の塊になり人間のような形を作り出し

ていく。腕や脚がしっかりし遂に全貌が明らかになりつつある。ギルドでは指揮官や大將級のメンバーだけが前線に並びその異質な物体と向きあっていた。作戦などはいらない。それを力押しで倒すことのみしかないので。いくらバリアがなくともそれに相当する機動と知能を得たそれにはそうすることしかできないというシドの判断もあるらしい。

「皆、死なない程度にアイツに攻撃を与える。アイツは生物ではないから……どうせ死にはしない。レイとマナが何かしでかしてくれるのを待つんだ！ それしかない」

「そうね、あの子たちに賭けるしかないわね」

「うちらはアイツを抑えるんやな？」

「リーン。俺達、狼牙騎士団は住民の避難を優先させるぞ」

「ならば、我々、アサシンも協力しよう」

「闇蝶もかむわ。アークリーはここで義姉さんの事守ってて」

「俺もお前と行くに決まってるんだろ？ 姉さんにはフィト義兄さんがいるしな」

「そうそう、闇剛はもつとそいつに甘えな」

「そうよ。私も甘えたいし」

「ぶっちゃけ本調子じゃないのよねえ」

「文句言わないの。ヴィヴィアだってここの戦士の一人なんだし。お姉ちゃんも頑張るから」

各々の発言をしていく中で遅れて後続が数名現れて隊列に加わっていく。デルとルナ。他にも数名の実力者たちが現れて来たのだ。

「水が欲しいわね」

「俺が海まで送るぞ？」

「ルナは無理しなくてもいいのに」

「ここの一大事にそんなこと言ってらんないの。お母さんにも顔が

立たないしさ」

「お前は……城に居てくれた方がいいのだが」

「夫を守るのも妻の役目です」

「赤額はどうするの？」

「お前に合わせるのみでい」

そして、遂に動いた。巨大な腕が伸び最初に攻撃を受けたのはシド。しかし、彼は何とも恐ろしい腕力でそれをはねのけ修羅が鬼神のごとく振り上げていた薙ぎ払い槍で叩き斬る。次はギアが久々に魔法を解禁し黒い閃光を掌から放って攻撃するが皮膚や肉ではないため打ち抜いても全く効果を見せない。ルミが急前進し彼女の鉞で脚を切るが腕も脚も新たに土を吸収し再生してしまう。

「切りがない！ レイはまだなのか！」

「ぼやかないでよ！ ファイト！」

アルとファイトの夫婦攻撃も効果を上げず全く意味のない前線維持が続く。唯一意味があるとすれば足止めできることだがいきなりその古代兵器は腕を伸ばしギルドの本城を狙った。

「しまった！ ギア！」

「間に合わない！」

「大丈夫だ！ 私も居るんだぞ！」

ファンがかろうじて結界魔法を発動し敵の攻撃をしのいだが子供を出産したばかりの彼女には辛いことだ。すぐに六弥がそばにより杖を取り上げて他の策を練らせている。そこに立ちあがったのはこれまで全くと言っていいほど表に立たずに隠れていた阿蘇だ。いきなりよくわからない言葉を告げると娘と発覚した芳納を横に置きいきなり地面から木を生えさせ天然の防壁にしていく。

「ここは我々に任せられよ！」

「父上だけには無理はさせません！」

後続から紅蓮とリーンライムズ、氷鎧が駆け付け何とか戦力は五分五分に保っているがそんな簡単にいくはずもなく次々にダメージを負っていく前線の面々。最前線のシド、ルミ、ギア、修羅、聖刃はもちろん大きくスタミナを削られ集中力も限界に達している。普通の人と戦うのではなく古代のデータも無い兵器と戦っているのだ。そうなるのは解りきっていたことなのである。

「くそう……これは思っていたよりキツい……」

「破壊騎士からそんな愚痴が漏れるとはな。ルミ」

「修羅。口がすぎますよ！ 我々も特徴や力は飛びぬけていても一応は人です！」

「それに！ やつは知識を付けてるんだ！ これ以上知識を付けられる前に小休止でもいいからこちらに休憩が欲しいところ！」

ゼシがその願いをかなえてくれた。いきなり魔法の出力をかなり上げそれを実行し敵の全体を凍結させた。それには氷鎧も加勢し何とかという状態が否めないがインターバルがついただけかもしれないだろう。

「レイ君……ホントにやるの？」

「やるしかないだろ？ これしか今の俺達にはわかんないんだしな」

「う、うん。でも……」

「怖いかな？」

「うん、少し……ね」

レイが魔力を注入するといきなり城の内部にその金色の魔力が集まり地下に一直線に飛んでいく。そして、大陸に覇を広めよの意味

がつかめた。敵は氷を砕き口と思われるところにエネルギーを集約させ放った瞬間にそれを受けて消し飛んだ。それはレイがマナの結界を一部分だけその城の機能を使い転送したのだ。それが見事に重なり敵の心臓部にあたったというのである。

「い、今のは」

「それより……地面が揺れてないですか？」

「ええ、それは感じているけれど」

「み、みなさん！ 海！ 海が遠ざかってます！」

ルナが気づき一同が西の海岸を凝視している最中、シドですら立っていられないような揺れが大地を襲い大陸に異変が起きたのだ。聖霊森林区を四区画に東西南北のラインで分け遺跡を中心にどんどん島が盛り上がり行けるのだ。大きく変化し続け治まったところにはその中央大陸自体が変貌し今までの形は見る影もない。どうして各大陸に誰も住めないような荒野があるのかがやっとうなずける結果になりあまりもの事に動じないシドや驚く事の少ないギアが咄然としていた。

「こ、こんなことが……」

「恐ろしい遺産だな。島の形が変わるなんて」

「師匠！ シドさあん！」

「レイ？ 今の声はレイだよな？」

「マナもいる！ 二人とも聖霊森林区に居たんだ」

「何があったんですか？」

「見てみる！ これはお前の仕業だろ？」

「変化に関しては大丈夫だが。お前」

「はい、これより覇王として生きていくことになりました」

「皆さんにも変化が大きいようで」

「ああ、いろいろあったもんでね」

ギルドの本城に帰り一度レイとマナに情報を伝えるために全員が会議室に集まった。他にも他地域に居たため銀狼と赤剛の存在や新たな仲間の加入を知らないメンバーも居たからだ。

「修羅の夫となることになりました。聖刃です。以後、お見知りおきを」

「その妹の月光と日光だ」

「よろしく願います。姉の日光です」

「妹の月光です。雷軌様と婚姻を結んでおります」

「私はオーシャ。一応、人魚よ」

「我々、赤剛の代表としてこのビクトールが挨拶させていただきます」

「ここからは悲しい知らせもある。宙慧が死んだ」

「……どうして」

「母は私を助けてくれたんです。そのまま天に召されました」

「嬉しい話題もあるぞ」

「マナ、おいで」

「わ、私ですか？」

「ああ、一度は抱いてもらはないとな」

「わぁ、可愛い！」

「つい先日生まれたばかりだ。名はクライス。性は私とギアの半分ずつ与えることにした」

その後も会議室では話題は絶えず嬉しいことも悲しいことも伝えあいその後皆は居室に帰って行く。今回の騒動もまだそうと決まった訳ではないが終末を迎えレイとマナの行く末が見え始めてきている。これからは彼らは手を取り合って進んでいくのだろう。

· · · · ·
T
O

B
E

C
O
N
T
E
N
E
D
· · · · ·

新たな道に……

街が徐々に復興を始めた。大きな城下町のようになったギルド、ホーリ・プリセクトの周辺の市街地は活気にあふれた執政の中心地ということもあり人の流れがとても大きい。そして、その街ではギルドのメンバーがヒーローのような扱いを受けていて周りからちやほやされはするが誰一人それで奢ろうなどと言う者は居なかった。それは……幸せを作れるのが彼らの喜びであり誇りでもあったからだ。城下町にはたくさんさんのメンバーがいる。一人の動向を見てみよう。

『姉さんも大変やな。うちらも同じやけど毎日街の見回りの仕事があるんやから』

「そうやなあ。でも、気分ようないか？　うち等のお陰で守られてるんやで」

『そうですね。なら、もうひと頑張りしましょう』

リーンの後ろに数名の狼牙騎士団を率いて街の内部を通り抜ける。治安維持のために狼牙騎士団が一役買っているのだ。その他にも……。

「リーン殿！」

「闇剛！　そっちはどうやった？」

「異常はありません。忍び屋敷のみなも変わりなく治安は『優』を維持しています」

「やっぱり、平和がええなあ。これまでずっと戦い詰めやったし」

「はい、WARS&WARSの連鎖は今の小休止でしょうが私たちよりもここや他の地域の民衆が安心して暮らせるようにしなくてはならないですから」

「そやな」

「リーン！今日は第二班に交代だ！」

「おおきに！　すぐいくでなあ！　と、いうことやうちも幸せに浸ってくるわ」

「ごゆっくり」

闇剛の横に屋根の上からくノ一が現れ周りの現状を伝えたのち交代を進言し忍び屋敷と呼ばれる一般には隠れた交番のような場所に帰って行った。闇剛は軍の間諜部隊を率いるシェイドとは対照的に市街地の治安維持を主に行う組みに別れたのだ。

「私も休みか……」

「よう、闇剛。暇か？」

「そういうアークリーは姉上の補佐をしなくていいのか？」

「姉さんはフィット兄さんに止められて家に居るし今は昼休みだ。別に問題ないだろう？」

「……で、何をしに来たんだ？」

「つれないな。デートくらいしてもいいだろ？　俺達もう公認なんだし」

「あ、ああ。解った。服を着替えたいんだが……」

城内ではレイの横にマナが付き歩いている。レイの仕事は物事の決定だ。書類や立案はこの街の選挙で選ばれた議員や阿蘇を含む元老院。それに加え修羅が指揮を執る防衛軍、シドの率いる特別攻撃騎士軍団などが席を置く会議で欠点を抑え長所をいかす。そういう執政体勢を取っている。

「レイ様。最外殻の濠の建設に関してなのですが……」

「ゆっくりでいい。住民の士気のままに行え。急いでいる工事でもないしな。他には？」

「は、二日後の婚姻の儀に關しましてマナ様をゼシ様がお呼びです」
「うん。じゃあ……私はいくね」
「ああ、行つてらっしゃい」

同時に婚姻を上げることになった聖刃と修羅。修羅は色合いを考えれば黒を好む。白色は嫌いその類の色いろのドレスをかたくなに拒んでいる。そこにマナが入ってきたため先にマナのドレスを作るゼシ。彼女は家事教室を開いておりその生徒さん方である若い主婦達が見学や実習に来ているのだ。

「嫌と言つたら嫌だ！ わ、私は断じて着ないぞ！ そんな真っ白な衣服など着れんぞ！」

「もう！ そんなダダをこねないでよ！ うちの子じゃないんだし！」

「嫌だ！」

「もう……」

「失礼します」

「あ、マナ！ いいところに來たわね。あの21歳になつてもダダこねる子供みたいな子に手を焼いてたのよ」

「え、あ、修羅ちゃん？」

「そんな目で見えるな！ 俺は白色のドレスなんて着ないぞ！」

「マナは真っ白でいいな？」

「はい」

「あ、あのどうせなら金のラインと紋章を入れてはどうですか？」

「あ、それ採用。修羅のドレスは間に合うか微妙だけど真っ黒に將軍家の家紋を入れてちょうだい。これでいい？」

修羅がやっと納得したようにうなずき髪を翻し外に出て行つた。マナはドレスのサイズを計測しすぐにレイとマナの家に歸る。最近の近況を伝えよう。オーシャの姉のゼピュロが城に訪れガンとして

海に帰らないと告げるオーシャの気持ちに折れ海から上がりこの城に住み着いた。

「まさか俺も結婚することになるうとはな」

「ふふふ、あたしだってそうよ。お父さんから国を受け継いで陸で結婚するとは」

「確かにそうだな。いつでも困ったことがあったら教えてくれよ？」
「うん、解ってるわよ」

ギアとファンの娘が生まれてその子はやはり両親に似て知能の発達が早く一歳に満たないが声を発し単語を述べる。白い髪に大きな青い瞳で黒い龍の翼に三本の角、耳の横の羽毛が親によく似て愛らしい。シドの娘であるミシイが世話を焼き母親のファンも付き添ってよく遊ばせていた。そういえば母の後を継いだルナは軍名を修羅から貰い新生七人衆に任命されている。ちなみにデルはレイの盾になり剣であるアレンと共に青騎士の称号を得た。アレンは赤騎士に任命されその数日後には恋人であったヴィヴィアと結婚し既に新居もギルドの構内に構えた。

「クライスはいいなあ。青い綺麗に澄んだ目……白くてフワフワな髪なんか最高です」

「子供の内だけだよ。私のように長くすれば必然的に重くなるさ。ミシイも十分美しいではないか。きつとお母様のように美しくなるだろう」

「えへへ……」

「ミシイ！！　母さんが呼んでたぞ！　マナさんと修羅さんのドレスをつくるってよ！」

「わかったあ！　じゃあ、失礼します。バイバイ、クライス」
「バイ……バイ」

ギアも途中に前線軍官からは外れたがシドからの要請を受けて新たに四天王を組み。当主、覇王を兼ねた大元帥のレイ。前線総司令部総帥をシド。先程述べた四天王にギア、風涯、雷軌、岩鋼と着任した。他にも政務官や騎士団、警察組織、隠密秘密警察、法聖官など各部類に分けた役職ができほとんどが彼らに任されている。

「レイさん！」

「どうした？ デル」

「寄り道しちゃダメじゃないですか。マナさんが探してましたよ」

「悪い……少し気になる物を見てな」

「何ですかそれ？」

「ん、まあ、なんだ。男ならわからんだろうよ。マナにやるのさ」

「あ、いたいた！ レイさん！ マナさんをひとりにしちゃダメですよ」

「アレン……。マナも居るか。とりあえずお前ら二人は職務に戻れ執政と軍備の通達にはお前らを起用してるんだ滞らせたらただじゃすまないぞ？」

「心得てます」

「俺は今し方、法聖官の聖刃さんに書類を届けてきたところですよ。それより家の嫁を見ませんでしたか？」

「ヴィヴィアちゃんなら多分、風涯さんとこのオーシャちゃんと一緒に歩いてたよ。西側の回廊の入り口辺りで見たからその辺りかな？」

「ありがとうございます。では、これで」

「僕も休憩にします」

「ああ、行ってこい」

レイが握る物に興味を示したらしいマナは反対側に回り込もうとしたが先手をレイにうたれ石畳の道で躓いて逆に支えられた始末だ。目の前にその青い箱が来て目を寄せるマナをレイが立たせ箱を持つ

た手と反対の手を差し出している。マナはニコツと笑うと手を取り歩き出した。

「それなに？」

「これか？ いい物」

「教えてくれないの？ 意地悪」

「教えてもいいがホントは明日見せるつもりだったんだ。ほら……」

「何だろ……わぁ！ 指輪！ あれ？ でも私、もうレイから指輪をもらってるはずだよ」

「最初にあげたやつとそいつは意味が全く違うんだ普通の指輪より太めで厚みがあるからつけるのは少しキツイと思って……」

金でできた指輪の片方を手に取り軽く捻ると輪切りになって二つに割れた。宝石の形は一般のカットダイヤモンドではなく少し特殊な形状に削り出されている。それに目が行っているらしく気づかないが割れた切り口の内側にかなり小さな文字が掘ってあることに気づきそれを読もうとすると……。

「我、覇王。金色の輪にかけて誓う。この輪を共に受ける者を我が生涯の妻と認め永久に寄り添い離さず……共に生きることをここに宣言する」

「……は、恥ずかしいよ。いきなり真剣に見つめるんだから」

「真剣だからさ」

「え……あ、うん」

「手、出して……」

「こう？」

レイが指輪をマナに付け跪いて手の甲にキスをする。周りには人はいないためみる者などいないのだろうがマナは赤面しうつむいてしまった。大きな金の瞳もいつにもまして大きく見開き凝視されているのに気付くとさらに顔を赤くしてうつむいてしまうのだ。そこ

にルミとシェイドが通る。レイも兄と認識しているため最近のシェイドはそれに準じた態度を取るように心掛けているようだ。ルミは最近身籠ったことが解りこれまでのように無茶はしなくなったという。出産予定はまだまだだが彼らも一時とは言え幸せなのだ。

「レイ……花嫁殿をあまり困らせてはいけない」

「兄さん。どうしたんですか？ 二人お揃いで」

「えへへ、この子のためなの。私小さいから赤ちゃん産めるか不安だったけどお医者様は大丈夫だって言ってくれたし。不思議だよね。レイ君は私の弟になるのよ」

「不思議でもなんでもなからう。俺の弟はお前の弟だ。そして、マナ殿も俺の妹となるのだ」

「そうだねえ。マナちゃんが私の妹かあ。家族って大きいね」「そうですね。マナ、行こうか」

「うん。ではまた明日」

「ああ、今宵はゆるとすこせ。レイも執務は少し控える事を覚えたらどうだ？ 仲間や家族への配慮も必要になるであろう」

「解ったよ。兄さん」

シェイドとルミと別れ家に帰って行く二人。そこに新たな官職を受けた少女三人がキヤイキヤイいいながら歩いてくる。言うまでもなく日光、月光、芳納だ。年齢の近い彼女らは仲もよい。日光、月光姉妹は聖刃の補佐を務める巫女になり芳納は役職的には法政官に近いマナの秘書をしていたのだ。その秘書の変化にマナが気づいた。彼女が見慣れないペンダントをつけていたからである。

「芳納ちゃん？」

「あ、マナ様。どうかされましたか？」

「そのペンダント……」

「さっき、そこで芳納ちゃんに白馬の王子様が現れたんです！」

「姉上……黒い馬に乗っておられたでしょう？」

「そんなこといいじゃない！」

「クルーエル……」

「マナ……今、何て言った？」

その男はマナの実の弟であるクルーエル・ムーンライトだったのだ。そして、周りがある気配が一点だけ抜けたエリアにレイが険しい視線を向ける。クルーエルと言えば一時期はブルトンの配下につき彼らと戦った中でもかなり腕のたつ男で年少ながらもその異質な力は並みの戦士では瞬殺されかねい力だという。

「そんなに警戒しないでくれよ。義兄^{にい}さん」

「クルーエル……今更、何？」

「わかってるから俺は戦意を全く見せずに現れたんだよ。俺だってただ一人の姉の婚儀を祝いたい訳だ。それもダメかい？」

「マナ、それくらいにしておけ。お前たちの過去に何があったのかはわからないが……そんなときではない」

「さっすが義兄さん」

「調子には乗るな。下手に動くなら俺は全力でお前の首を落としていくからな」

「……」

少し険悪な空気を流してしまったのがあまり気分のよくないらしいマナは小走りにレイの手を引きながら彼らの屋敷に向かった。残された三人の内の二人はマナの方に目をやったが……芳納は、俯き物悲しそうな表情をしているクルーエルを見ていた。

「あ、あの。私の家に来ませんか？」

「いや、君が疑われるだろう。証を立てなければ俺は認められない。俺はそれだけのことをしてきたんだ」

「あ、じゃあ……」

芳納が一度考えるように下を向いた時には既にクルーエルは姿を消していた。そして、別の場所では……。

「な、何なんだあの兵隊は……正規の軍のものでは無いな。うん、エンブレムが違う」

「私のこと……など、ほおって……おけ。お前が……死ぬぞ!」

「ば、馬鹿! デカい声を出すな!」

『居たぞ!』

「畜生!! 動くなよ……、まあ、動けねーだろうが……」

「な、何を……」

その男は強力な魔力をその周辺に散布し……地面から水分を抽出して敵にぶつけていく。本人も銃で撃たれたり剣で斬られても全くダメージを受けず戦い続けている。そこに通りかかったのが……。

「デ、デル!!」

「僕が行く! ルナは後衛を頼むよ!」

「うん!!」

デルとルナの二人だ。剣とロッドを構えデルは斬り込みルナは先程から魔法で攻撃し続けていた男を防衛する。防衛とは名ばかりで敵の内、彼に近づき過ぎた者に強力な白い光球をぶつけているのが……。

「た、助かった……。ありがとう」

「さ、次が来るわよ」

「あ、ああ……」

その場を片付けルナとデルはぐったりし意識の無い女性をギルドに連れ帰ることにした。ここからはデルが開発した『車』で移動してもまだ時間がかかる。二人はレイとマナの結婚式のために何かを取ってきていたのだ。何かは後からのサプライズらしく同乗する男にも教えようとしなない。

「マナ……今更昔のわだかまりを蒸し返すこともないだろう」

「私は今でも覚えてるわ。あの子と対峙した時の嫌な感覚を……人じゃない……」

「混乱するかもしれないがリーンやライムズの報告だと何やらアイツ等はプルトンと離別したらしい」

「え？」

「これ以上は混乱するだけだ……花嫁さん、心を落ち着けて……」

その言葉を聞いた瞬間にマナの顔がほころび次は赤くなってレイを見返した。次の日は彼らの結婚式だ。人によっては第二の人生のスタートと考える人も居るだろう。恐らく彼らもそのくちだ。その頃……彼らには知らされなかったがギアが驚く程の事件が起きた。波乱は止まないようではなかなか収まらない。

「う、嘘だろ……」

「どうしたギア！……ルミ。クライスを頼む」

「え、いいけど……」

「イオ……何故こんな所に」

「イオ・イニシス。まさかな……」

「何を早とちりしているのか知らないけど嬢ちゃんは生きてるぜ」

「……君は？」

「俺か？俺はギウンター・ウイティールド……しがない賞金稼ぎさ。たまたま嬢ちゃんが瀕死で横たわってるのを見つけて介抱していたら……変な兵隊に囲まれるは攻撃されるは……大変でよお。そ

の次は正規軍の大將の一人とその彼女が現れるし……」

「ギュンター……その名前は聞き覚えがあるぞ。確か、ん？　だが、女性のはず」

「ああ、じゃあ、あんたが母さんのライバルだった大天使さんか」

「母さん？　それではお前が！　ウィル！　久しぶりではないか！」

前振りが長くなったが彼らには接点があるらしい。ギアがイオの顔についた血で固まった髪を払おうとしている最中に話していたのだ。彼は先に名乗ったように名前はギュンター・ウィティールドといいファンと双対をなす程の実力者だった者の息子らしい。その大きな声でイオが起きてしまいさらに面倒になったが……。

「こ、ここは！？　ギア！　離せ！！　私を捕まえてどうする気だ！」

「落ち着けての……姉ちゃん、落ち着きなよ。運んだのは俺だ。その武家さんとファン姉さんは悪かねえよ」

「……そう言えば……余分なことを」

「だから落ち着けてえ。お前さんを助けようとした訳じゃねえしさ」

ギュンターの言葉で幾分か落ち着いたイオを驚かせたのは……二人の娘だ。クライスはオウガの恐ろしいまでの成長の速さで既に2歳半程の体格になり知能は……既に10歳程度の知能を示し体機能は安定しないまでも体が安定しつつある。1日での成長が早すぎるためか親の二人がかなり困っている程だ。

「父様！　母様！　飛べます！　私、飛べますよ！」

「と、父様……母様？　まさか」

「ああ、俺とファンの娘だ」

「あれ、お姉さんは誰ですか？」

「……」

「イオ！」

「心配するな。私だって既に成人した。もう、あの頃のような無知な子供ではない。」

「お姉さん？」

「私は……イオだ。お前の父様と母様は幸せそうか？」

「はい！ お姉さんは？」

「私か？」

「はい！」

「今は幸せだぞ。兄のようだった友がこのように幸せそうであるならな。大天使よ。私はもう干渉はせん。安心しろ」

そういうとベッドから立とうとする。しかし、ギョんターが抑えてまたベッドに寝かせた。そして、彼が面倒を見ると言って三人を部屋から出るようにいい時間が過ぎていく。

「泣くほど悔しいなら……何で今、言わなかったんだ？」

「私は……ギアが幸せならそれでいい。義姉様が……幸せならばそれで……いいのだ」

「そうか」

レイとマナに視点を返そう。二人は公務が無いことの方が稀で時間が相手しまい暇になったようで引つ張り出したチェスなどのボードゲームをしている。レイはこれもギアから習ったのか相手の出方を読むのが上手い。にこやかに微笑みかけるとマナは赤面して手を狂わせるのだ。その内に手を読まれてしまうらしい。わかってはいるがなかなか対応できずレイに連敗中だった。

「フフ……」

「うう……それ、反則」

「何のこと？」

「レイは私に微笑みかけて手を読んでるでしょ」

「どうかな？　いつか言ってたけどマナは難しい。全部は見えないんだよ。だから、見たくなる」

「……はっ！！　また、やられる所だった。レイの魔力ね」

「誰にでも効く訳じゃないけどな」

琥珀色の液体の真ん中に大きな丸い氷を浮かべてひっかけているレイ。マナの次の手を読んだらしく次の手を手厳しくさした。すると唸るように息をもらすマナがにこやかに笑い……次にレイがコマをさすと、うなだれた。

「また……負けた」

「だからさ。ボードゲームは俺には勝てないよ」

「んんと……私が勝てる物かぁ。なんだろう」

「寝る？」

「ば、バカ！」

「え……いや、夜も更けてきたし」

「あ、ゴメン。てっきり一緒に添い寝するかって……ふああああ！
！」

「いや、……婚前の夜は神聖な夜だからな。そういうことはやめよう。どうしてもなら別だけでも……」

「もう、意地悪！」

「ははは、それじゃ。寝るか」

「うん。お休み」

二人の寝室で別々のベッドに入る。その屋敷の周りに視点を広げよう。彼らの屋敷の周りには矢倉や見張り台などが充実していて防衛にはとても向いているのだ。今、矢倉にはアレンが詰めている。実は彼のお気に入りの場所でもあり風通しがよく眺めも悪くない。今日はもう一人詰めている人がいたようだが……。

「で、何？」

「ほら、飲めよ。ヒューマンのお前だと寒いだろ」

「ありがと……。……用件は？」

「あ、ああ……。お、俺とだなあ……。あゝああ！！ いざとなると言えねえ！」

「クスッ……。ハハハハ！！」

「な、何だよ」

「アレン……。結婚しよ」

「お、おい……。」

「あたしだって……。ふう、酒の勢いがないとダメなんだから堅いあんたなんてもっと無理よ」

「……。た、確かに」

西にある高い塔の奥にある割に大きな和風な屋敷……。では。

「レイさんも結婚か……。」

「どうしたのよ。図面とにらめっこは楽しいんじゃないの？」

「今は……。少し違うかな」

「な、何が？」

「わかんない」

「……」

「……」

「黙らないでよ」

「そっちこそ」

城の中腹にある修羅の屋敷付近では……。

「ついに、明日か」

「どうかされましたか？」

「どうもせん。早く寝る。私は血圧が低いのでな!! 早く寝ねば明日の式に遅刻してしまうかもしれんのだ!!」

「『口調が女性口調の時は……本音でしようがタイミングがタイミングですから……まったく素直でない』」

その近くの屋敷の集まりには七人衆が集まっている。ルナ以外ではあるが……いつでも主の召集に答えるためだとか。

「旦那様……」

「どうした？」

「いえ……」

年の差が大きな二人も……。

「修羅様も御身を固められる。この紅蓮……しかと目に焼き付けましょう」

「姉様……兄様のお部屋へどうぞ」

「ほ、芳納……まだ子は授かろう時では……や、止めい」
「幸せなツンデレ嫁やら……」

「陸の宴は初めてです」

「そうか、なら楽しもう」

「はぁ、まさか妹に先を越されていたなんて……」

新たな幸せを得た者……

「月が美しい」

「風涯……そろそろ、ね？」

「わかってはいる」

「だが、今宵はいいだろう。こんなに月が美しいのだ」

……何とも幸せな男も……。

……皆、幸せに浸っている。また、大きな波乱が押し寄せたまでにはまだ期間があった。しかし、それは刻一刻と迫りつつあったのだ。レイがプルトンを退けてから約半年が経過した。大きな波は新たな新地でその巨大な全貌を明らかにするのだった。

まだ……形すら見えてはいないが……時は止まらず訪れるのだ。

……TO BE CONTINUE……

……結び誓う……

マナと修羅は控え室で話していた。マナはわりあいシンプルな衣装を好み飾りは嫌う。修羅は飾りは関係なく色が黒くなければ嫌らしくゼシは相当苦労したに違いない。それに……二人には花嫁とはいえブーケだけではなく官位の象徴として各々に持ち物や装飾が渡されていた。

「ホントにこんな杖を持っていなくちゃいけないんですか？」

「ああ、せっかくデルとルナに遠出をしてもらい取ってきてもらった素材から作ったんだから……。持ってもらわないと困るわ……。それに……あなたは今日から女王様になるのよ」

「そうだ。俺も久々に腰に刀を添えたのだ。俺だけでは釣り合わないからう。……。それに、我が国……。いや、我らが国の王妃になるの必要だろう。権威の象徴がな」

レイと聖刃の控え室では……。少し行き過ぎの感も否めないがシドとギアが抑えにかかっていた。

「兜と盾は要らないでしょう……」

「そうですね。……。わたくしも杖ならまだしも何故天の群雲以外の刀を腰にささねばならないのですか？ ……説明を要します」

「レイ、ゼシの話ではマナと修羅もブーたれたらしいが……。形に拘るのがこういう式典なんだ。客の正装なんてもっと吃驚だよ。リーンにドレスを着せると似合わないこと……」

「それはそれで……」

「グジグジ言うな！ そんなに飾りが要らないなら全裸で……」

「シドさん。それは失言ですよ」

「師匠！」

「ギア殿……貴方まで何を……」

「俺だつて嫌だよだが……愛弟子と弟分の門出だ。しっかり送り出したいんだよ」

ギアに丸め込まれ諦めた二人。……滞りなく式典は始まり聖刃の義妹である日光と月光が薄く化粧をしそれぞれの役目を始める。先ずは新郎の入場からだつた……。レイと聖刃の横にそれぞれギアとシドが付く。一段高い所で止まってギアは兜と盾を預かりシドは月光から渡された天の群雲の剣を手渡し代わりに帯刀を引き取り横の列に抜けた。次は……。

『王たる証を表したまえ……』

剣を聖刃とレイが打ち鳴らし互いに二歩下がってから鞘に納めた。そこに花嫁が現れる。ファンの内側にマナが、そのマナの隣には緊張を隠せない修羅が……。その外側にはポーカーフェイスながら必死に笑いをこらえるゼシがいた。送り届けた二人は各々の亭主の横に並び新たに男女二組が入場してくるのを合図に彼らの武器を高々と掲げ双子の巫女の宣言と同時に納める。

『功と衛……相對しし君主と妃の証に指輪を与え永久に続く泰平の証とせん。』

我が君主たる霸王、霸王妃』

レイに指輪が渡されて跪きそれを指に通すとその手の甲にキスをした。先に霸王の証を述べた日光の次に一礼し月光が同じようにはつきりとした声で証を述べる。

『聖なる礎と魔の礎は互いに力を合わせ霸王、霸王妃の剣と盾となる証をここに表す』

我が力の源たる聖王、魔王よ』

聖刃が指輪を通すと身構えていたゼシがすぐに態度を変えた。恥ずかしさから修羅が暴れることも予想できたからだ。しかし、修羅は露骨に顔を赤らめて目を瞑り横を向きはしたが聖刃がキスをしても暴れることはなかった。最後に双子が呼び寄せ4人の騎士団長が現れる。

『我らが力を代弁する者達よ。我らが主に忠誠を誓いここに新たな礎を築かん!』

現れたのは狼雅騎士団の騎士団長……リーンと後ろに控えていた桜牙。次にこの度ゼピュロの居住から設立された人魚達の水中戦を目的とした騎士団の“麗鱗”。同時に現れたのは鎧に身を包んだデルとアレンだった。胸にある覇王の紋章にはデルは赤い宝石が……アレンには青い宝石がつき各々の騎士団の象徴を表している。

『証を……』

式典が覇王宮前の広場で行われる中寂しげに遠巻きからそれを見物し外に出て行く男がいた。そして、その男を追う少女が一人……。

「待つて……」

「またお前か。どうした要件があるなら早めに言えよ」

「また、行っちゃうの？」

「俺は姉さんが許してくれるまではあの人の近くには寄らないことにしたんだ。あの日以来……俺にも追っ手がついたからな。あの人の幸せを壊したくないんだ」

「なら、一人で行くの？」

「お前は聞きたがりか？ 当たり前だろ。誰も俺のことがわかる奴

なんて居やしない。たった一人の淋し……」

「私にはわかる！ 連れてってよ。役に立つし」

「そんな華奢で細い体の見るからにお嬢さんなんかは足手纏いだ。

さあ、わかつたら会場に戻りな」

「嫌、わからないからついて行く」

「……勝手にしろ」

クルーエルは黒い馬に跨る。……だが、芳納に見つめられ後ろに乗せると城とは反対の方向へ馬を駆り遂には城門を出て行った。外は砂っぽい荒野の続く道だ。それでも……芳納は文句すら言わずにただクルーエルを抱いたまま馬に揺られていた。その後、彼らは砂煙を背に居なくなったという……。

「おじさん！」

「だから……俺はまだお兄さんだったの」

「え？ おじさんじゃないの？」

「ああ、俺はまだ20ぐらいだからな」

「二人は『夫婦』じゃないの？」

「……はあ？ いいや、確かに姉ちゃんは美人で好みだがそんなじゃねえよ。あんまり下手なことしたら殺されるくらいの仲だしな」

「『喧嘩するほど仲が良い』」

「あゝ……、おい……姉ちゃん……！」

「あ、ん？ 何だ？」

「この嬢ちゃんの話し相手してやってくれよ」

ギアとファンの屋敷の一室に居候中のギョウター・ウィティルドことウィルは無垢な幼女の言葉攻めに悲鳴を上げていた。普段仕事で家を空けることの多いらしいギアとファンの代わりに話し相手ができて嬉しいらしくひっきりなしに話しかけてくるのだ。二歳半とは思えない発達の速さに感嘆するも完膚なきまでに話題切れを起

こさせられたウィルは……。

「ん……。お前の体は……ギアの翼。耳の横に義姉様の羽毛。額に……これまた可愛い角……白い美髪に大きな白い瞳」

「お姉さんは何族なの？」

「私か？ 私は……一応オウガだ」

「父様と同じ？」

「ああ、私はドラゴンとゴーゴンのオウガだ」

「おいおい……」

「どうした、ぶよぶよ」

「ぶ、ぶよぶよ!？」

「ぶよぶよ!! ぶよぶよ!!」

「嬢ちゃんに悪意なしで言われんのが一番腹立つな……」

「う……」

「おい!! どうした!？」

「だ、大事無い……。誰も呼ぶな。死にはせん……」

こちらもちちらで和んでいたが……いきなりの吐血でぶよぶよが驚き……もとい、ウィルが驚きクライスは初めて見る沢山の血に興味心身で覗き込み……ウィルは収集がついていないようだ。オウガの習性には謎が多いがその一族によって特徴が違うらしい。ギアのオウガの特徴はドラゴンと鬼でドラゴンは秘宝や美女の類に目が無いというおとぎ話が多い。鬼は対照的に人に関わらず『食』に関する事例が多い。恐らくそれはこちらに関しての事例だろう。まだ負傷Ⅱ血には結びつかない彼女は血が口から自然に出る物であると認識したのだ。理解すればそれが異常な事であることも解るはずだが……血に興味がそそる……あまり教育にはいい傾向ではないだろう。

「……宴になると、皆ハイになりすぎるな」

「主役の修羅などお構いなしに楽しんで構わないと言ったそばから……確かに凄い飲みっぷりだ」

「一番驚いたのは……」

「ああ、マナだ。私よりも……とはな。あの二人には今後、多量な酒を飲ましてはならんな」

「師匠、ファンさん。クライスが呼んでましたよ」

「ああ、わかった。私が行こう」

ギアとレイ。さらにデルとアレン、風涯、聖刃、シドが加わり緩い酒の席のようになった。彼らは皆、デル以外は酒に強くザルであり自分が飲む酒の量も制限できている。先ずはギアからの切り出しで昔懐かしい話をしている。

「お前も嫁をもらう年か……弟子が結婚すると、息子に嫁が来たみたいな感覚だな」

「師匠？ 何歳ですか？」

「悪い悪い……だが、懐かしいな初めての出会いやらまだ子供の面影があった頃も」

「ですね。周りを見れば皆、大人になりましたよ」

「確かにな」

「シドさん」

聖刃とシドが加わり次はアレンとデル。最後に新妻連合の集まりにいるオーシャの近くから離れ居場所を求めてふらりと風崖が現れ輪に加わった。そして、クライスの様子を見に言ったファンを除いては宴を大いに楽しんでいる。いや、騒ぎすぎだ。その位の規模でドンチャカやっているから困る。それを見越していたシェイドとルミはそうそうに抜け出し自宅にいたが……新たに建国された国家の隅々まで彼ら、レイとマナの婚儀とその宴に湧き上がっていた。場所とは違っても老若男女古今東西の種族が入り乱れ肩を組んで酒を飲

み楽しむ……いい傾向だが、流石に限度を見なくてはならないだろう。

「クライス！ どうした？」

「お姉さんが……血、いっぱい……」

「ウィル！ 貴様！」

「待て！！ 待ってくれ義姉様！ 彼は何も悪くない。ただの変身期の重なりだ。クライスが初めて見る血に興味を持ってしまったのが原因……ゴホッ。大事無い……」

「そうか……二人とも……少し外してくれないか？」

ウィルは状況を読んでクライスの手を引こうとしたが……クライスが何故かいきなり泣き出し……。

「いや！！ 私も！！！」

「クライス。母さんが困って……てっおい！？」

「クライス！」

「いゝゝやあゝゝ！！！！！」

無意識にクライス本人と二人……ウィルとイオが場所もわからない場所に転送されていた……何故クライスが二人を転送したのかはキョトンととしている彼女にすらわからない。恐らくは突発的に発動してしまった転送魔法を制御できずに結果的に彼らを転送させたのだろう。そして、引きそうになり馬を急に止めたのが……クルーエルと芳納だった。彼らも城から抜けだしていたのだ。そして、一度状況からイオとクルーエルの好で彼の小屋に行くことになっていた。馬には怪我人のイオと足の細い芳納、その間にまだ歩くのがおぼつかないクライスと座りギョウターが馬を制御してクルーエルは周りを警戒している。この五年間の間に彼にどのような変化があったのかは知らないが……彼にもイオにも変化があったことは解った。

「すまないな兄ちゃん」

「いや、礼を言うならイオとお嬢……そう言えば名前は？」

「あ、芳納^{ほうな}」

「芳納に言え。お前とそのガキだけなら無視したかも知れないしな」

「俺は無視してくれても構わないが……」

「そのガキ……大天使と軍神ギアの娘だろ？」

「な、なんで解るんだ？」

「イオが大事そうに抱いていたし……それならと思ったんだ。そう
だ、これもなんかの円だろう。俺はクルーエル。さあ、ギウンター
さんよ馬を頼む。俺が護衛をしてやるからな」

口は悪いが……まんざらでもないようだ。芳納もほっとしたらしくイオに寄りかかってクライスとともに寝てしまっていた時には完全に夢の中だった。その間に半狂乱になって娘を探すのがファンだ。夫であるギアに言伝た瞬間に瞬く間にその知らせは周りの人間にしろわたり酒を飲んで酔っ払っている人間以外の人間が動き出した。いくら祝いの席でも護衛を怠ることはできないと自主的に切り上げていた閻剛とアークリー、酒に弱く飲めないまでも紅蓮と修羅の相手をしていた氷鎧などが動いたのだ。ギアは酔いがさめるほどの事態だったらしくレイには告げずに席をはずしシドと状況から察した岩鋼に後を任せ一度屋敷に帰る。

「どうしたんだ？ 何があった……」

「す、すまない……私としたことが取り乱してしまった」

「いえ、子を探すのに落ち着いている者などそうは居ますまい。我々もお供しよう。ギア殿。俺と数名を外に出しては？」

「ああ、そう言えば……この血は？」

「そ、そうだ。イオが吐血していたのだ」

「それは女性のオウガが子を宿す準備が出来た証拠だろう。変身期は10歳くらいで迎えて終わる。だろう、だが、そんな不安定な時に能力を使わせれば死ぬかもしれん。氷鎧、ライムズ、アークリーは外を頼む。闇剛はファンと共に広域搜索だ。俺は心当たりを探してみる」

「了解」

いくら鈍くても気付くらしい。酒で完全に酔いつぶれている女性陣の内、動けるものがファンが武装して外に向うのを目撃してたのだ。それを境に次々と動き出す。とはいうが……修羅と日光月光姉妹、マナ、ゼシ、ヴィヴィアは動けない。レイや知らされては居ない……もしくは知っては居るが祝いの席で民衆にそのことが知れないように隠しているメンバーが各々の屋敷に運んで寝かせた。その上で……シドがレイに告げ搜索隊を動かすことになったのだ。

「な、なんでそれをもっと早く」

「大事になるだろう。だから俺もギアに言われて時を待っていたのだ。搜索隊なのだが……」

「わたしも……」

「いや、アルとリムさんは出て行くべきではないでしょう。」

「で、でも」

「身重の二人は今回は勘弁してくれ。今回はギルドからの命令で待機だ」

「はい」

「フィット！」

「ん？」

「お前の部隊で手頃な奴を動かしてくれ」

「おう」

「兄さん」

「待っていた」

「お願いします」

「御意」

「風崖」

「は、何なりと」

「広域捜査を早急に頼む。できれば鍊強な者たちをそれとなく当たってくれ。きな臭い動きも多く確認されているからな」

「はっ」

次々に命令が飛び身構えていたデルとアレンには命令がこず少しげんなりしたらしいがレイが大剣をかつぎ現れた時にすぐに各々の動きに移る。なぜレイが彼らを側近に選んだかはすぐに解った。彼らには各々に違う特性がありそれがとても有用性の高い能力え有るからだ。

「俺は出る。後は任せた、師匠の所に向わないと」

「……聞いたかデル」

「あ、ああ……俺達が本部の仕切り……やりましょう！」

「おう！」

文官型のデルは腕っ節は弱く剣の腕もアレンほど上手くはない。しかし、冷静な情報分析能力とこういう時こそ役立つ彼の作戦立案の効率性が火を吹くのだ。それに加えアレンの恐るべき行動手腕が重なる。デルの立案に極地を決め最上限度の割り振りを送り部隊編成をしていく。戦やこういう作戦立案に関してはかなりやり手な二人が動いたのだ。だから発見は簡単と思われた……しかし。

「ファンさんと師匠。間諜部隊に高速搜索部隊ですら発見はできず……そこに居たという痕跡はあるが遺体や本人たちの身柄のない小屋の残骸……」

「面倒な事になった」

「クライス……」

「そ、そう言えば芳納様もおりませんぞ」

「恐らく一緒に居ると踏んだ方が自然ですね。それに誘拐の線はゼロでは無い……クルーエルの存在が気になる」

「そうでした……。皆席をはずしてくれ。捜索隊が動けないエリアへは俺とライムズ、風崖の三人で動く。もと暗しの可能性もあり得るからな兄さんと閻剛で付近の搜索を……あとは、少しファンさんに事情の説明を願いますか」

レイの顔にも影があり二日酔いの嫁衆は戦力にならないためマナを近くに連れて北には来たが形だけだろう。レイが聞こうとしているのはなぜファンとギアがイオとギュンターを無断でかくまっていたかだ。いや、別に今更レイは罪に関する咎めをするなど毛頭無く理由によつては彼らに管理を任せるつもりという。だが、今回の事件では……。

「すまない……。今回の原因は私に有るのだ」

「いや、お前だけではないだろう。俺もイオを無断でかくまったんだからな」

「そのことは過ぎたことです。まずはイオとファンさん、師匠の関係。そして、ギュンター・ウィティールドに関する情報をください」

「ああ、イオは……イオ・イニシスは私の義妹だ」

「……」

「私の父であるオールドネスがどこからともなくボロボロで衰弱しきった彼女を拾って来たんだ。その頃はギアが事件を起して一時的に私の家に居たところでギアにも彼女との接点が少ないがある。そのすぐ後にギアは置き手紙と金を残して私たちの元を飛び出したからな。少ない理由はそれだ。だから、敵であっても私の妹のような彼女を殺すようなまねはできなかったしギアも私の意志を汲んで黙っていたんだ」

「イオの事は解りました。それで……ギウンター・ウィティルードのことに關しては？」

「ウィルは私がギアを探して旅に出た先でたまたま知り合った魔道士の息子だったという話だ。奴の母親は私と双対をなすほどの実力者だったらしい。……が、亡くなったと本人から聞いた……」

「兩人ともあやしくは無い……。という事はクライスの暴走？」

「ああ、カイザーにはよくあることなのだ。まだ魔法を制御できないのだが……何かのはずみで暴発してしまう……クライスはオウガの血を受け継いだ事によってさらに魔力が膨大で大きな力、そして発達能力や成長がみられる……今回はそれが原因だろう」

「では、芳納の方は？」

それに関しては見張りの兵隊が見ていたらしい。今日は任務を早く切り上げて良いという伝令が回っていたため家族のもとに帰宅中だったそうだ。芳納は黒い馬に乗った男と会話をし自ら馬に乗ったという……衛兵はその一部始終を見たいらしい。芳納は少し前にクルーエルと接触がありそれがもとであることは明白だった……クルーエルの話題に触れた瞬間にマナが立ち上がりロッドを手に取りうとしたが先にレイに手を掴まれ再び椅子に座って衛兵の話を聞いた。

「芳納様は黒い馬に乗った旅人のような風貌の男の後ろに御身自らまたがれました。わたくしの見る限りではまったく抵抗なくむしろ嬉しそうでしたが……」

「……」

「マナ……それで？」

「は、はい。正門を出て荒野の方向に駆けて行くところまでは確認できましたが……わたくしも家族のもとに帰りたいと思いますぐにその場を後にしてしまった次第で」

「ありがとう。今回の事でまたお礼をしよう。休んでくれ」

「は！　ありがとうございます。ですが、我々も動かなくてよろし

いのでしょうか」

「いや、君には少し休んでもらおう。こんな時に皆に不安をあおれば国中はパニックに陥る。口外はしないでくれ」

「は！ 御意のままに！」

「うん、帰って家族と楽しんでくれ」

すぐにマナが再びロッドを掴もうとしたが……レイが今度はロッドを取り上げいつになく厳しい口調でマナに言葉を告いだ。一瞬、しゅんとなったマナだったがすぐにレイに食ってかかる。そこにギアとファンが入り自分たちも連れて行ってくれと頼まれたため彼ら全員で動く。まずは小屋の残骸を発見した風崖の案内でそこまで向った。ギアとファンは空高くから周りを見回しつつそこに到達したときに着地し検証する。マナは生活の跡から不信感を覚えたらしくレイに言葉を告いだ。

「あの子は……本当にプルトンと縁を切った見たい……」

「マナ……なんで解るんだ？」

「ファンさんやギアさんは知らないでしょうね。クルーエルの本名はクルーエル・ムーンライト。私はマナ・ムーンライト。異母ではありますがれっきとした兄弟です」

「な、何だと……すまん。つい」

「で？ 何がおかしいんだ？」

「あの子はひっそりと一人暮らしをしていたみたい。しかも、ここ一年くらいだわ。解る。こんなに質素な生活をしているのはプルトンに追われているから」

「なるほど……隠れていたのか。なら、イオの体の傷やウィルの戦闘をしたという言葉も頷ける」

「プルトンは何をたくらんでいるんだ？」

「さあ、しかし、この攻撃は……」

小屋は大きく二つに切り分けられ馬の蹄のあとが近くの小川から消えており彼らはスg方を隠すために近郊のどこかに隠れていると見える。レイの判断で三手にわかれて動くことになった。ギアの見ただで攻撃の指揮をとっているのはスケアであることが解ってきたのだ。それに足跡から考えるとどのようにもその人数を集めたのか知らないがかなりの人数で一人では危険になる。そこで二人一組になったというわけであった。空に二人で飛び立ったのはギア、ファン。風崖とライムズは最近意気投合したらしくかなり良好だ。しかも風崖であればライムズのパートナーである銀狼の光狼とも会話が出来る。その関係でも都合がいい。マナとレイは近隣を搜索し始めた。明らかに川沿いにうごいていることは確かだ。それに……手負いの戦士一人に子供……芳納はあまり戦力にはならない……そう遠くには行けないはずだ……。

……TO BE CONTINUE……

蟠りと柵

彼らはまだかろうじて無事だった。イオは完全に失神しているがウィルとクルーエルの努力とクライスのミラクルがありなんとか絶体絶命を切り抜けたのだ。数時間後、夜襲に備えようとしたイオだが自分の体に起きている事が理解できていなく能力を解放しようともがいたようである。だが、それもむなしく疲れ果てた末に眠ってしまいクルーエルとウィルは傷だらけだが意識を高くもち交代で仮眠をとりつつ見張りを続けていた。そして、彼らがレイの率いる捜索隊にも見つからない理由は悲しくも芳納だったのだ。実は芳納は攻撃的な魔法が苦手である。それでも防御や介抱に役立つ魔法には長けており今は藪の中にカモフラージュして作った簡易の小屋の中に居た。

「くそう……あいつ等俺を本気で殺しにかかってんな」

「アイツらって？」

「知らない方がいい。俺は昔にバカやってな。家を追い出され……馬鹿のする事には際限はないのさ。ある悪の象徴みたいなやつに手を貸しちまって足を洗えばこのざまだ」

「お互いやってることは変わらないな」

「あん？」

「俺もな。母親に縁を切られたんだ。母親の名前の重圧に耐え切れず非行にはしり……挙句の果てに普通の一般人を何人も殺した」

「確かにかわんねえな」

「ああ」

その横では芳納に抱かれるようにクライスがすやすやと寝息を立てている。彼らは先ほどスクエアに襲撃され絶体絶命の所を彼女の起したミラクルに救われたのだ。確かに魔法の制御はできていないが

状況を彼女の生物的習性などの観点から理解したのだ。両親は二人とも名高い実力者……、その血族は伊達では無いのだろう。起きている二人もそう話していた。イオは夢でうなされているのか今でも苦しみ続けている。クルーエルの知識から彼女について解っていることと言えば彼女はまだ19歳であることくらいだ。その年齢の割にはオウガ族である関係から成長段階は早い。そして、ファンにも負けず劣らず美しい。

「よく寝るなあ……三人とも」

「ああ、しかし、当代の最強の魔術師と軍師兼剣士の娘か……まさか運まで味方につけるとはな」

「ああ、ちがいない。あの魔法……どうやったんだろうな。光線みたいだった」

「解らん。無意識……か。だが、呪詛を述べずに魔法を扱うには相当な訓練が必要だ。それを……はは、考えても無駄か。最強の血筋なんだろう」

「そうだな。だが……、そそられるねえ」

「場をわきまえろ。それから、イオに手を出したら本人に殺されるぞ。イオはな寝てても人を殺せるくらいの腕力有るし……」

「俺は打撃じゃしないぞ」

「ははは、ちげえねえな」

搜索隊は各々に戦闘をしていた。敵はかなり数が多いらしい。しかも、それは明らかに近代の規制された力などでは無く何か禁じられた物を使っていた。ファンはそんなことが出来る者を一人知っていると言うがギアにも口を開かない。それほどの術を使っているのだ。肉弾戦であるため数でおされれば流石の彼らでも退避せざるをえない。一番最初に引いたのは風崖とライムズ&光狼の組だった。実は彼らはスケアの布陣していた本陣にぶつかってしまったのだ。それにいち早く気づいたのは……憤怒したギアだった。その男を確

認する度に彼は我を忘れてその男の命を奪いにただその手に携えた武器を振り回し無造作に命を奪っていく。その凄まじさを目にしたのは近くにいたファン、風崖、光狼、ライムズとクルーエル、ウィルだ。彼の形相を見れば誰でも対峙したいとは思わない。

「兄さん……まだ、あんたとの決着をつけていなかったな。大人しく命を捨ててくれないか？」

「決着など着くものか。貴様と俺はまた出会う。しかし……いいだろう。前に“氷土妃”やられた借りを返させてもらおう！」

クルーエルの機転で最悪の事態は避けることに成功した。しかし、ギアとスケアの攻防でその周辺のいろいろな物が薙払われ彼らが隠れる場所すら見当たらない。そして、面倒だったのは……動けないはずのイオが槍について歩いていく。ウィルもクルーエルも気づけず行く末を見守る他……ない。

「ギ……ア」

「イオ……！」

「ふっ……馬鹿め」

ありがちな人質事件に発展した。イオを人質にスケアは無防備なギアに攻撃をしかけようとしたのだ。結果的には……今度は……彼女の意志でその状態の打開を図りイオもギアも助かった。そこにオニキスが現れたのが少々面倒な点ではあったが……。それにはファンと一時的な覚醒状態にあるクライス、あまり機嫌のよくないマナが收拾をつけてくれた加えて奮闘したのはウィルとクルーエルだ。オニキス・カーン……。イオの話によれば禁呪を専門に扱う魔導士で死体や生きた人間の意志に係なく『意志のない無限兵士』に変えるという残忍ささえあるらしい。他にも『命』という概念を曲げ、思いやりの欠片も無いような行動をし魔法においては実験で生きた

生物を利用するという。クルーエルも年齢を重ねるごとにそのやり方に端を発し協力を拒絶……。イオも途中から忠誠を見せないまま失踪していたのだ。今、スケアとオニキスが現れている簡単な理由は彼らの『後始末』のために現れているということであろう。

「ギア！ 私のことなどいい。この男を殺せ！ 早く！」

「それはできない。……他の策を考えよう」

「選択の余地などあるわけなからう。あの時……相打ちになった瞬間に俺もお前も瀕死の重傷を負った。しかし、皮肉にも……」

ギアが放つ黒く細い光線と似た物がどこからともなく放たれスケアの背中側からイオの首の横を抜けてスケアを貫いた。年端も行かない幼女の攻撃とは誰も思わない強力な破壊力を見せる一撃に一瞬周りが膠着した。……が、すぐに状況は動く。クルーエルとウィルが動く前に芳納が防御系の魔法を発動しイオを樹木の壁で包んだのだ。その芳納の周りには敵兵が集まりかなり危険な状態だったが……。クルーエルの能力を発動し残忍では有るが彼なりに守ろうとしたのだろう相手を再起不能にした。

「やっぱり足手纏いだな！ 芳納！」

「クルーエル……ありがとう！」

「早く立て直せ！ ウィルが向かったがあの壁も長くは保たない」
「うん！」

上空ではマナとファンがオニキスと対峙している。レイはギアが周りの兵を片っ端に倒している間に手負いではあるがスケアと戦闘をしていた。しかし、スケアは敗色が強まると部下とオニキスを残して一人退却してしまい残された人形のような無限兵士は意志無くして戦い続ける。そんな中驚くべき事態に発展した。オニキスは実は先の大戦でも剣や武器はおろか魔法すら当たらずダメージすら受

けなかったはずだ。それがダメージを受けたのである。

「ぐふっ……な、何だと？ 浮遊霊体のわしには攻撃は……ガキ？ 貴様あ！」

「ちっ！ 大丈夫なのか？ 魔法に対しては生身同然だろう？」

「ぐっ……大丈夫だ。俺にはこれくらいいたいたことない。母さんに鍛えられたからな」

ウィルとクルーエルが間一髪のタイミングで滑り込み防御をしてなんとか危機は切り抜ける。オニキスは兵士のほとんどがやられたことに気づき直後、彼女も退却した。負傷者三人で済み何もないとはいかないが……蟠りや柵を抜け出した者もいるだろう。本城に帰りマナは酒が癖になったのか少しの間飲み続けていた。修羅は……その後の猛烈な二日酔いで懲りたらしく少ししか飲まないようだ。

「どうした霸王妃よ」

「うん……？ どうも……しないよ」

「嬉しい時以外の酒は自棄酒でしかないからな。俺にもそれくらいは解る」

「ねえ、閻剛ちゃんと喧嘩したことある？」

「幼少時代は多かったな……おお、一度だけあるぞ」

「どんな喧嘩？」

「男のことだよ」

「は？」

「アークリー……。あの男のことは元々知っていたからな。だからあのような落ち着いた結果になり正直ホッとした。一カ月間ぐらいか？ 何度大きな口喧嘩なり城を破壊したか……」

「ねえ……今更さ、十年越しの仲直りってできるかな？」

「それは霸王妃しだいだな。俺はそのクルーエルとかいうやつのこととは知らんから何とも言えん」

「ありがとう」

修羅は酒の席を後にし次はアルが現れた。お腹の子供のためと酒は控えているが修羅に言われマナの話し相手をし始めたのだ。確かに……温厚なマナがここまで荒れるのは珍しい。レイが話題に触れようとすると「クルーエルの味方をするんでしょう？」と言われてしまい相手にされず……ファンは娘とイオに付ききりだしゼシはクルーエルのことを未だに疑っているから話す気はないらしい。ただ、好意的にクルーエルの近くに向う者もいる。その物がクルーエルを高い塔の回廊に居るのを見つけた。クルーエルは空を眺めているらしい。

「ここに居たの」

「芳納か……何か用か？ 用なら手短に……」

「用事も何もないよ。ただ、一緒にいたいだけ。私も……今は父上や母上、姉上、義兄上がいるけど……祭り上げられたときは誰も信用できなかった。信頼していた侍女ですら敵に見えた」

「そうか……で？」

「だから……私も一人だった。何人も私の毒味役の女官が死んだ。

私は誰かに狙われていた……でも、今は違う」

「そうか……俺は、姉様しか……逃げ道を知らなかった。あの人はある日突然いなくなり……俺は荒れた。そして、『月』から下天し昇天する権利を奪われた……だから俺はここでは……あの人に認められない限り……一人でしかいられないんだ」

そこに……ギアが現れた手には二本の剣を握っており片方をクルーエルに投げ渡した。難しい表情をした後に付いてくるように伝える。クルーエルも彼を敵視している気配はないため素直について行く。

「蟠りや柵はため込むな。お前のためにならん。お前が吐き出せないなら誰かに頼れ……俺は、イオに関しての責任がある。あまりお節介はできんがな」

彼らは道場で剣を振るう。太刀筋が安定したギアの剣を見ているクルーエル……は未だに上の空だ。その脇にはいつの間にか芳納とクライスを抱いたファンがいた。ファンとギアは夫婦になりだいたい五年が経つ。そのためお互いのことをよく知っている。ギアは気を紛らわすために鍛錬がてらに剣を振るうのだ疲れた時も少し情勢が悪い時もファンと喧嘩した時もすぐにここへくるらしい。その間に話し相手として既に道場にいたレイとクルーエルが選ばれたのだ。

「なあ、何で俺を呼んだんだ？」

「お前は……一族を追放なんかされてないよな。確かに無断で月を降りたのは間違いだが……姉さんが心配だったんだろ？」

「ああ、だが、プルトンと組んだのにはかなり後悔が残る。月にいればまだまだ俺や姉さんは10やそこらだ。プルトンにさらわれたって聞いて焦ったから……ついこちらに来ちゃったが」

「それで？ 何故戦場に居たんだ？」

レイに問われすぐに弁明をし始めた。この時の彼の表情を読心術さながらにレイは読み取っている。レイは彼の……クルーエルの真意が知りたかったのだ。

「言い訳にしかないが俺やイオは魔術で洗脳されていたに近い。イオはギア、あんたに関しての情報と身柄をやるって言われて唆されたんだ」

「……たしかに、それならあの時のあの台詞も理解できる。お前も目の光が違うからな。城で会った時はキツイ言葉を向けてしまった

が……」

「仕方ないさ。それに関しては俺もわかっていたよ。元々敵だったんだ。形だけだったとしても立場もあるし、警戒しないわけはないからだろうとは思ってたよ」

「なら良かった」

三人にファンが言葉を告ぎその場をまとめた。ファンの腕の中で抱かれたまま寝ているクライスは戦場に出ていた時の姿ではなく幼児のような姿に戻っている。彼女は全く新しい新種の血を持って生まれため誰にも能力はわからない。把握しようにも父と母も希少種で彼らの経験しかデータがないのだ。そして、今はかなり不安定な時期である。ギアが言うにはオウガ族の子供は10歳までに数度の変身……つまりは変体を繰り返し……蛇で言えば脱皮だが……彼らの場合は体表の変容のみではなく容姿、外面、能力、体機能の向上が主な物らしい。クライスも非定期にこれから起こるとは言い切れないが起こる確率は高いだろう。何しろ彼女は二歳半にして父親が15の時に習得した技を使っている。突発的にしても彼女にはかなり速い成長がみられるのだ。……加えオウガ族は元々かなり成長が早くカイザーの神経の発達の高さも加算されると……いや、早さは個々の個体値にも違いがあるから一概には言えまい。とにかくクライスは今かなり不安定だ。それをクルーエルも解ってあえて深く触れないでいる。

「そろそろ気は晴れただろう？ ……お前にもイオが世話になった。礼を言おう。クルーエル」

「気にするな。それを言うならあんたんとこの嬢ちゃんには二回も助けてもらったからな……」

「いや、この子は解っていない。自らが何をしたのかな。カイザーとオウガの血を受けて新たな種族として生まれてきたこの子は……力が不安定すぎる」

「事実は事実だ。で、あんたはイオの何が聞きたいんだ」

「いや、聞きたいことはない。ただ、あの子は……罪の意識どころか記憶すら曖昧だった……。さっきのことは本当なのか？」

「俺の知る限りでは仲間になったっ直後のイオは血色もよく優しい顔立ちだった……。いつからから……冷たい顔立ちになっちまったがよ」

その頃……イオは目覚めていた。部屋にはウィルが様子見で残っているだけで誰もいない。彼も複雑な顔をしている。母親のことを思い出していたのだ。クルーエルを見ていて思い返したらしい。自分がどこで道を踏み外したのかを……。彼は……。

「ぶよぶよ、お前が辛気くさい顔をする必要などないだろう。義姉様は私を許してくださった。お前は……私を二度も助けてくれた」

「ぶよぶよはどうやら定着したみたいだな。俺が悩んでんのはそこじゃない。昔、昔のこと……俺はな。母さんを殺したんだ」

「……」

「クルーエルだったなアイツも姉さんとの間に大きな蟠りがあるらしいが……俺は消えないさ。あの幸せ夫婦と娘のクライスが羨ましいぜ……。ホントによ」

「確かに……暖かい家庭だったな……私も羨んだよ」

「だろうな。だが、アンタはまだ良いだろう洗い流せる罪ならな。

洗い流せない俺は罪の意識を持ってこれまで生きた。父を事故で亡くし独りで俺を育ててくれた母と意見が合わず……最後には殺しあって……俺は……」

「お前は……振り返ることしかできんのか？ 私には……本当の家族の記憶などない。むしろ無い方が今まで幸せだった。お前にも道はあるだろう。前を向けばいいではないか。今なら私もいる。お前が望むのなら助けてやる。一緒に居てやる。ウィル……前を向け」
「最初っから覚えてんなら使えよ。俺の名前を……」

クルーエルは芳納と彼女の家についた。ずっと待機を命じられていた紅蓮は家にいたようすだ。外にいた氷鎧も一陣を退いてからは本部の手伝いをするくらいだったようでずっと屋敷にいる様子。芳納が帰宅したと奥に声をかけると沢山現れた侍女達を押しつけるように紅蓮が飛び付き涙を貯めて抱きついてきた……。氷鎧はクルーエルの頭に手を置き奥へ来るように伝えゆっくり奥に二人で居なくなる。残された二人はクルーエルと氷鎧を探し中で……。

「と……言うことだ。文句はあるまい」

「おいおい。いきなり敵だったヤツを召し抱えるなんて無理じゃないのか？」

「問題ない……。お前はマナ様の弟君だ。政略結婚に見せれば粗方の素性も隠せよう。その話し合いは既に霸王妃様直々に俺にあった事実。そして、マナ霸王妃様はこう申された。『我が弟、クルーエル・ムーンライトはわたくし霸王妃が推挙する娘と婚約を結び我が忠臣として霸王宮に迎え入れる。元老院の阿蘇が娘、芳納と我が弟、クルーエル・ムーンライトの婚約を早々に行いこの終末とせよ』とのことだ」

「マ、マナ様……」

「……なあ、すぐに姉さんとは会えないのか？」

「解った。取り次ごう」

動けるようになったイオは松葉杖でウィルの補助を受けながら道場に現れた。そこでは木刀と果敢に格闘するクライス、厳密には木刀にかみついているのだが……それとギアにせがみ剣の稽古を受けているシドとゼシの息子のアルファ、そして、ファンに魔法を指南してもらっているミシイがいる。それにシドとゼシの本人も居た。シドは既にギアから話を聞いて居たため問題なかったがゼシは少し拒絶反応を見せる。

「ゼシさん。彼女に罪はありませんよ」

「ギア……」

「確かに……私も刃を交えた記憶はある。だが、それは本意ではない」

「お姉さん！」

「ん……」

「相手をしてあげなさい」

「すまない。どうしたクライス」

「お姉さんは何で戦うの？」

「私か……私は……槍で戦う」

「じゃあ……教えて！」

無言でファンを見返す。ファンは無言で頷きにこやかに笑いかけた後にウィルに向かって木製の槍を投げ渡した。意味を解すると『お前が変わりをして体を動かせ』ということだ。ギアが笑うと彼が笑うのが珍しいらしくシドやゼシの顔も自然に綻ぶ。ギアが敵意を見せない相手にはゼシも攻撃的に接することはない。それどころかにこやかに眺める程だ。その頃のマナとレイは……。

「マナ？」

「ごめんなさい。少し家族のことになって荒れてただけなの。私……、クルーエルももう一度信じてみようと思うの」

「そうか……。それで解決されるならそれに越したことはないよ」

そのラブラブオーラを外側から冷や汗と変な笑いで西洋風の甲冑をつけた状態をして見ていたのはクルーエルだ。まあ……直ぐに気づいたらしいマナがレイに席を外すように頼み頷いたレイは奥に消える。奥には芳納、紅蓮、氷鎚がいた。そこにレイが混ざっただけだが……。

「レイ様。マナ様のご様子は？」

「問題ないよ。ただし、酒癖がつかないように制限しなくちゃな。それから氷鎧。ありがとう」

「いえ、霸王妃様のご意志を的確に伝えたまで。我が義妹も喜んだ様子ですし」

「されどよろしいのか。我らが一武将の家に王族の血を入れるなど……いえ、光栄なのですが……恐れ多いと言いますか……」

「それしか今はできなかったからな。大きく表沙汰にせず、貴族の男児としてクルーエルを保護し権威を落とさないような上手い話を考えれば」

「彼を好いていた我らが義妹が……たまたま居たと」

「ま、これもそちらが言うようにマナの采配だ。俺は手続きをしたにすぎない」

窓辺で話す二人にこの会話は聞こえない。だが、この二人にも大きな蟠りがあった……。

「まだ、許さないんだから」

「……そうか」

「でもね。レイにも言われちゃった。いつまでもグジグジしてるのはいつもの私じゃないって……」

「姉さん……いや、霸王妃様は霸王様と……」

「幸せよ。それに、あんたが無事で良かった。また、姉さんと呼びなさい。あんたは私のただ一人の弟なんだから……でも、芳納を悲しませたら私は容赦なくあなたに罰を与えますからね」

「あ、ああ……変わったな。姉さん」

「ええ！！　これから大変よ。あなたは霸王の義弟にもなるんだから」

「確かに……頼むよ。姉さん！！」

二人の蟠りが解決したのだろうか？ いや、まだこれからだろう。新しい生活に向けて大きな変化を要する。話は変わるがめでたいことは続くものでアルとフィトの間に長女が生まれたと言うことだ。しかも双子らしい。マナや同年代の彼女を知る女性陣の高官が集まる……。男性陣は……下町の飲み屋でフィトを囲んで飲み始めていた。子の生まれたペアはこれで3組目だという。

「へえ、めでたいわね。次はアルの子供かあ。私はいつになるやら」「変なぼやきは入れないでよ。オーシャ」

「にしてもそっくりねえ。二人とも女の子？」

「うん。フィトもギアさんに負けじと名前を考えていてくれたみたい」

「羨ましい限りですね」

「ルナはまだそんな年じゃないでしょ」

「で、アル。名前はどんなんや？」

「右側のフィトに似た白髪の方がリユーレ。左側の碧色の方がライネス」

「二人とも書きにくそうな綴りね」

「仕方ないわよ。フィトったらそれで寝不足になったんだから」

『アハハハハハハハハハ！！！！』

そして、その二・三日後に早産で少し緊張感が高まったが……無事に元気な男の子を出産したルミ。柄にもなく一番心配したらしいヴィヴィアは大泣きして出産後の面会時に姉に抱きついたという。シェイドは周りの男性に振り回されることなくゆつくりと彼のペースで名前を決め聖刃のアドバイスらしく漢字の名前にしたという。母のルミの特徴と父のシェイドの特徴を織り込んだそのままの名前らしい。

「名は影斧^{えいふ}という」

「兄さんはまたストレートに決めたね」

「ああ、己の名となる物に二重も三十も意味を要さんからな。俺の主義はこういう事である」

「へえ、影は兄さんで、斧は姉さんか。ま、二人のトレードマークみたいなものだしね」

「そうね、レイ君ももう子供は作る気なの？」

「ルミ……まだ、気が早いぞ」

「ええ……どうした？ マナ」

「ゴニヨゴニヨ……」

「実はアルの出産の日に解ったんだけど……子を宿した？」

「恥ずかしいんだから大きな声で言わないでよ！」

「めでたいではないか！ マナ……それは胸を張って良いことだぞ」

「そうだよお。おめでと！ マナちゃん、レイ君」

式典の騒ぎからまた一段落着いたようにうれしい事実が解った……。その日から数日間の間はお祭り騒ぎが続き新たな役職も生まれクルーエルやイオも馴染んだ。これからまた和やかな毎日が続くのだろうか……しかし、気になるのはあれほどの部隊を軽々とこの土地に侵入させるだけの力を瞑王、プルトンが付けているのだ。気は抜けないだろう。

……TO BE CONTINUE……

覇国建立

堅苦しい式典が続きうんざりした様子のマナとレイ。それは高官になったメンバーの皆が感じていたことだ。新たに新部隊を任されたイオ、クルーエル、ウィルもそれに見合った官位を得たらしい。そのうちの男性に比べ職務の少ない女性陣が男性陣より先に城から現れた。ギルド創設にかかわる時期に居たメンバーはほとんど婚儀を済ませそれぞれに家庭を築いているメンバーもいるようだ。最初に現れたのは官位を得たばかりで職の少ないイオ、次に夫であるアレンの秘書勤めをしているヴィヴィア。さらに最年少ながら魔術師部隊総司令官にまでなったルナ、その次は水中騎士団『麗鱗』の騎士団長のゼピュロと副団長のオーシャ、最後に今回の昇進で騎兵部隊の総大将にリン&桜牙。最後に出産後に体調の回復と共に軍に復帰したアルと続く。その後続にも次々と新任や役職を持つ者たちが続々と出て来た。

「ふうむ……胸がキツイ」

「羨ましい限りね。その胸……」

「うん……」

「ルナはこれからでしょ？」

「うう……」

「前衛槍兵部隊総隊長……イオ・イニシス師団長かあ。あんなに綺麗な瞳してたんだね」

「ああ、うちには解る。アイツの目えは昔槍を交えた時のアイツとはちゃう。今のイオならうちのライバルにしたってええと思うとる」

「ふん……。にしてもこれだけの高官がそろうのも珍しいかもね」

「アルやないか。そやな、皆忙しいし……マナなんかレイに看病され取るらしいしな」

「王様と王妃様ってのは案外辛いと思うぞ」

そこに男性高官が加わる。部隊や高官達の所属する官職の仕事がひと段落し外に集団で出て来たのだ。最初に話しかけたのは最初のメンバーから考えて馴染み深いフィトが現れたようで女性陣の視線はそちらに向かう。次に役職の近い風崖……彼らは突撃部隊の大御所だ。そして、住民に大人気のギルド創設にかかわった立役者のシドとギア。デルと同年代らしく既に仲良くなったクルーエル、その後ろからは特殊技能を持つ者たちを統べるように任命されたウィル。隠密機動部隊のシェイド、青騎士のアレン、狼牙騎士団副団長のライムズ&光狼と彼らも疲れた表情だ。

「疲れたなあ……」

「うん、クルーエルはなんで最初の任命式なのにそんなに落ち着いて」

「いや、八割寝てたから」

「……」

「そんなことでは覇王の弟は務まらんぞ」

「風崖、お前は少し緊張しすぎだ」

「ギアさん」

「まあ、そっくりじゃないか。もしかしたらお前たちは血縁……」

「そうですよ。こいつは俺の従弟のはずです」

「俺、知りませんでしたよ」

そんなこんなで外部はまだ空気が軽い。内部では半日以上に及んだ会議や儀式などのせいで一人が疲れきって寝込んでしまったのだ。披露困憊の顔で看病しているのは覇王、フェンク・レイ・スウォード。看病を受けているのは覇王妃、マナ・ムーンライトだ。

「ごめんね……レイも疲れてるのに」

「……いや、気にするな。お前はこれから数日仕事を休め」

「え？」

「これからは俺も仕事が楽になる。これまで以上にな。だから、お前は安心していてくれていいんだ。建国以来、体がそんなに強くないのに無理をするからな」

「うん」

「腹の子供のこともあるんだ。マナは静養してくれ」

中央大陸は巨大な一つの都市として発展し始めた。過去の『大地の巨人』との戦闘以来変形した大陸はレイ以外のメンバーが収めるエリアも生まれ始めた。レイは中央森林区を整備し王宮にしてそこで制度や城塞などの整備などの最終決定をしている。東には聖刃と修羅の夫婦が詰めて大陸サウスウィンドウとの交流を密にしカースのならず者の中で考えの柔軟な者たちを仕官させ義勇軍を結成。権限はレイの持つ最高権限に委託された形状で動く。サウスウィンドウには日光と月光が詰めている。加え雷軌と赤額もそこに居る。

「なかなかこの土地も大変なのだな」

「はい、この土地も食料に関しては少々……」

「ならば呼び寄せよう」

「は？」

「赤額殿」

「ん？ どうしたんでい。俺によいかい？」

「ああ、貴殿の航空部隊に支援要請書を早急に本国へ送ってほしい」
「おう。行ってくるあ。ちよいと待ってな」

北の大陸にはゼシとシドが詰めその後はレイの推薦からルナとデルが補助管理官として詰めている。デルは科学者、発明家として名高く北の地でさらに知識を付けつつ発明にいそしんでいるという。ルナは軍の本隊意外にも北の軍備を進め新たに発覚した海外からの攻撃に先陣を切って対峙し夫の発明した離陸滑走路付きの巨大な戦

艦から攻撃を続け本土への侵攻を食い止めている。そして、軍の本隊にはゼシ率いる女性ばかりの高機動攻撃部隊が構えさらにその後方にはシドの連れて来た忠臣ばかりが集う部隊が未だ待機している状態らしい。

「皆！ 踏ん張って！ 右舷に岩の魔導師部隊を派遣し小型の攻撃艦を撃破しなさい！ 本隊は私と星魔導師、攻撃に特化した魔導師を抜擢した部隊で風穴を開けます！ 行きますよ！」

『おおおおお！！！！』

『ルナ！ 僕の部隊も動けるよ！』

「遅いじゃない！ 待ちくたびれたわよ！」

「ごめんごめん。準備に手間取っちゃって……皆！ 準備はいいかい？ 背中のエアジェットで魔法部隊を防衛する。僕に気を回さず皆ここに守りを固めて！」

『ルナ！ デル！ 私の隊も動ける！』

『大本営からだ。こちらの遠距離砲を動かす。ゼシは左舷の後方から敵の基地をつぶす作戦に出よう』

『了解！』

「突撃！」

西にはギアとファンが入った。シドの信頼した彼ならば西の大地をまた緑の豊かな大地にできると信じた采配だろう。ここは戦闘などではなくリーンの勧めにより赤剛と人の入り混じる街すらあり戦闘は見受けられない。それに頭首がギアとファンということもありオウガやカイザーの住民が多く移住し発展している。その既知の高さから次々に砂漠の緑化を始め安定した土地として大きく発展した。

「お父様！ 緑化が進み西の山岳基地周辺が林になりました」

「全く……お前は何歳なんだか」

「はい？」

「まだ三歳に満たないはずの少女とは思えんな」

「仕方なからう。クライスは私とお前の既知に加えオウガとカイザ
ーの成長幅がかけ合わさっているんだ。恐ろしい成長もうなづけよ
う」

「お母様……」

「お前は気にすることはない。私の自慢の娘だ」

「その割に男勝りだな」

「お父様！」

「それは否定できん……。私がいかんのか？」

「お淑やかな生活は私の相には合いません。イオ叔母さまに伝授し
ていただいている槍術も」

「そこなのだ……」

南にはレイの推薦でアルとフィトに加え狼牙騎士団の一部が派遣
されそこで緩やかな復興を遂げている。ビースト主体の国ではあつ
たが最近の地殻変動で地下に空洞が発見されそこにヒューマンやエ
ーテリオンなどが住まいデルの発案でドワーフ族までもが出入りし
金属の鉱石採掘も進めている。時代がすすみ戦闘部族も数が減り『
元住民族』としての文化が守られ彼らはその文化を伝えるという市
街地との意思疎通も生まれた。

「にしても……二人ともそっくりだな……」

「ええ、二人ともあなたにな」

「そんなに値に持つな……選択するのは子供たちの自由なんだし」

「そう、ね。でも、私がお酒を我慢しなくちゃいけないのはなんで
？」

「娘だからな。この子たちまで酒豪になったら困るだろ」

「た、確かに……そうそう、フィトに新しい嬉しい事があるの」

「ん？」

「また……子供ができたの」

「……ホントか？」

「うん。お医者様は私みたいに体が強くないと無理だったって」

「俺も相当頑張ったからな」

「ええ……次は男の子かしら」

今は中央には謁見と今後の軍備方針を考えるために聖刃とレイの会見が開かれることから海外の同盟国や最近この国に移住を求めて来た住民などの首長が集まりつつある。

「お互いに……妻の体調がすぐれないようで」

「聖王殿も苦勞しているようだな」

「いえいえ、愛しい妻への愛情を毎日そそいで居りますよ。覇王殿は？」

「最近の子が生まれる事も関係しているみたいであまりマナの体調も良くないんだ」

「しかし……こんな時にわたくしの感が間違いでなければ」

「プルトンか？」

「ええ、わたくしが成敗した者たちの中に明らかに異様な者が含まれておりました。イオ殿の見解も視野に入れますと」

「そうか、東の国に紅蓮と氷鎧か芳納、クルーエルのとどちらかを派遣させよう」

「では、我が妻の意思に沿いまして氷鎧夫婦をこちらに」

「解った。今日中に派遣させる」

本城の警備にはイオが一役買っている。おとといもどこからともなく入って来たらしい敵を落としたばかりという。

「しかし、イオ嬢もよく働くな」

「クルーエル。お前もな」

「しかし、オウガの成長はそんなに速いかね」

「ああ、私にもよく解らんが兄上の話では私はもう子を宿してもおかしくないという」

「ん？」

「働けるうちは働いておきたいのだ」

「そうか、ギア殿がいつていたな。オウガの女性は子供を産み落とせばもう戦士としては働けないと」

「そうだ。私は……戦闘しかできん。特技は肉を切り裂き魂を解放すること……それ以外には」

「いやな特技だな」

「仕方なからう。私には幼いころの家族といった記憶すらないのだから」

「そうか。俺は芳納を幸せにしないと姉さんに殺されちまうよ」

「……お互い大変だな」

「あんたは家事を覚えれば済むだろう？」

「家事か……」

芳納は……暇だった。マナが静養しているため事務などの仕事が無かったのだ。ウィルは一応本軍の部隊長ではある。だが、戦闘がなければ彼らは動く事はなくシドやゼシに頼まれたように剣や魔術などを彼から習っている。その関係から彼は巷では『教官』として名高い。

「ほう……腕を上げてるな」

「へっへえ！」

「先生え！ 私は？」

アルファとミシイもそこに居る。彼らはどんどん成長し体格や知識的には既に10歳近いそれでも年齢は7歳程だ。クライスとも仲が良く彼らの交流は手紙を介して行われている。たまに家族で帰ってくる時などは仲良く遊んでいるが……。

「クルーエルじゃないか」

「おう、俺はこの後執務があるんでな。姉さんが寝込んでる分は俺と兄さんで割り勘さ」

「すこし……使い方が違わないか？ まあ、いいさ。今日はこれまで。二人には宿題だ。ほれ、この紙に書いてある事をやってこい。ただし！ アルファは真剣を使うなよ。ミシィは外でやれよ……その魔法は意外と舐めたもんじゃないからな」

「はい！」

「解りました」

イオはその様子を遠巻きに見ている。何を考えているのかは知れたものではないが槍を地面に突き刺し3人のやり取りを見ているのだ。新しい鎧に身を包んだ勇壮な女性騎士の複雑な面持ちをかなり近距離でしゃがみこんでみている……ウィル。いうまでも無く強力な蹴りが飛び一瞬だけウィルの頭が消し飛んだ。

「どうした？ 浮かない顔して」

「な！ いつの間に！」

「だぁーかぁーらぁー……俺は打撃なんて効かねえんだよ」

「……そうだったな……。お前は……子供が欲しいのか？」

「いや、アイツらは頼まれてんだよ。まあ、確かに可愛いところもあるが……やっぱり子供ってのはウザッてーところもあんだよ」

「で？ ほしいのか？ いらんのか？」

「俺はその前になんでおめえがそんなこと聞いてくるのかが気になるが」

「どうもしない」

「そしてなんで俺なんだ？」

「ん？ いっただろう。私でよければ一緒に居ると」

「あ？ それってまさか……」

「そのつもりでいたが……命を救ってくれた男ならこの身を預けても問題ないと思っていたが」

ウィルが一瞬困惑したらしく体の形状が保てずに一瞬だけ解けた……。数秒後に元に戻り体を再構築して応えようとしたが……芳納とクルーエルが走ってくる。

「お！ いたいた！ こんなところに居たのか。二人を兄さんが呼んでる」

「あ？ なんで……こんなときに」

「どうしたというのだ？」

「ん……いや、大したことじゃないらしいんだが特にウィルの方に用があるんだとよ。イオはそれまで姉さんの看病……って家事できなかったよな」

「しかもわざわざなんで侍女を使わずに？」

「それは兄さんに聞いてくれ」

イオは……オウガの身体能力をフルに使って屋根の上を軽快に走って行く。その後をウィルが魔法を使って付いて行く。レイはイオの入って来た場所に驚いていたがすぐに話に入った。役柄は逆になってしまっただがイオがレイの話を聞きウィルが一時的にマナの世話をする。

「どうされた？ 覇王殿」

「なんてことはないさ。お前らに休暇だよ」

「……まだ、そこまで休養を取る程働いては居りませんが」

「違う違う。お前はそこを勘違いしてるんだ。疲れたから休憩するんじゃない。能率をよくするために休憩をするんだ。だから、過度な休憩は無駄だし辛い仕事もあまり能率がよくないんだ。そら、行っってこい」

「は、はい……」

ウィルもマナにいわれていた。既にマナは九割型回復していたようにで血色もよく顔も元通り明るくなっている。そこにレイとイオが入ってきてレイが追い出すようにイオとウィルをその部屋から出した。

「先ほどの続きだが……子は……」

「イオ……場所を考えろ」

扉の前だったため中の二人には全て聞こえていたがそれも仕方ないだろう。クスクス笑うマナとあきれ顔のレイ。ここからは和やかに話す。彼らも今日から数日休養を取るらしい。

「ねえ、レイ」

「何？」

「このお腹の子は……どんな子だと思う？」

「そうか……クライスみたいに新種族は生まれないだろう。だが、俺は女の子だと思うぞ」

「え？」

「兄さんは男の子だったし」

「そう……私は男の子がいいな」

「なんで？」

「女の子はいつか自分の元から離れていっちゃうじゃない」

「……婿養子を取ればいいだろう？」

「そ……そうだね」

その部屋の窓から二人が中庭を歩いて行くのがよく見えた。何とも変な二人組だが見ているだけなら面白い。鎧を着た女性の騎士と魔導師の風貌だが大柄なウィル。部類を言えば『変人』に近い趣味

をしている二人……まあ、そこは気にせずに彼らの動向を追ってみよう。イオは見た目だけは美人だ。緩く天然パーマがかかった長髪に光沢の強さがあり手入れは行き届いている。そして、スタイルも良好で表立って怪我や傷跡は見当たらない。

「ここまで離れれば……」

「だから、こういう真昼間から話すことじゃないだろう」

「そ、そうなのか？」

「私には一刻を争う事態なのだが？」

「おいおい……、子供産まないと死んじゃうみたいになよ」

「近い物はあるな」

「……は？」

こういう感じに会話のところで食い違ふところが確認できるのだ。イオは……けて頭が悪かったりおかしかったりはしない。ストレートすぎるのだ。ごちゃごちゃした事の嫌いな彼女は物ごとの真意を一気に手中に収めようとしてくる。それだけならまだいいが姉……つまりはファンのように素直でなく少し突っ張るところがあるためそこもウィルからすれば面倒臭いらしい。彼は賞金首になる前は魔法学校などで教師のアルバイトや軍学校の日雇い臨時講師をしていたらしく教師のような考え方が強いようだ。

「それは……どちらかと言うと逆だろう？」

「何故だ？」

「何故ってなあ……それは『子供を産まないと死んでしまう』ではなく『子供を産むと衰弱が早まる』じゃないのか？」

「そうだ。だから近い物があると言っているだろう？」

「むしろ逆だろ？」

「そ、そうか……」

「で、なんでそんなにこだわるんだ？」

「こだわってなどいない。私はお前に聞いているのだ。お前は子供が欲しいのかと」

「いやいや……」

彼の心の中の言葉を代弁してやろうと思う。何故、今、急に、ここで？　そして、いきなり？　恐ろしい程困惑と呆れで物ごとが口から出ない様子だ。それも、解る。だが、イオは一步？　引こうとせずに彼に詰め寄る。今彼らが居るのは聖霊森林区のはずれにある林の中だ。

「私には時間がないんだ。オウガの女性が子を残すと衰弱が早まるのは先ほど述べた通りである。それに私は戦士だ。戦士は戦士と……そして、解りあえる男としか交われないのだよ。私は……子を残せば戦士として生きてはいけない。普通の人間と大差なくなってしまうのだ」

「それを先にいえよ。それから、俺に聞いているんじゃないかってお前は自問自答してんじゃないのか？　子供が本当に残したいのか」

「そ、それは……」

「いい、言わなくていい。俺はな。教師をしてこれまで生きて来た。いろんな立場の人に講義をして俺自身も学んだ。本当にそうしたいなら自分から動けばいい」

その頃、クルーエルと芳納もそれぞれの仕事をしてはいたが同じ部屋に居た。芳納は……お淑やかな大和撫子と和風お嬢様と言った感覚の人物だ。紅蓮とは全く逆の性格をしその点では際立つ。

「旦那様……」

「ん？」

「今晚の食事は何にいたしましたでしょうか？　今宵から姉上と兄上はいらっしゃらないですし」

「普通に話してくれ。俺が慣れるまではそっちの方が落ち着くしな」
「はい。クルーエルは……」

「言い直さなくていいよ。俺は姉さんに言われなくても一度決めた事は意地でもそうするつもりだしな。何でもいいよ。芳納の手作りならな」

再びイオ……。

「だからと言って男を押し倒す女がどこに居るんだ？」

「ここに居るだろ。私はまだるっこいのが嫌いなさ」

「だぁーかぁーらぁー！　そういうことは男から切り出すべきなんだよ！」

「……」

「女……悲鳴も上げないか」

「私は戦士と言ったばかりだろう。お前の頭にはおがくずが詰まっているのか？」

「俺はお前だけにはそれを言われたくない。ここまで来たら後には引けないだろう。お前の準備はいいのか？」

「ギアの話では私はお前に発情したらしい」

「は？」

「オウガ族の女性は成長と共に徐々に子供を宿す準備をするのではなく年頃になり発情するといきなり体機能に変化が出るらしい。以前、お前の前で吐血したであろう。それで準備が整ったんだ」

「ここでそれを今からしようとしている男にいうか？」

イオの頭上にはクエスチョンマークが何個も現れたようにキョトンとしているが……。気にはしない。彼らは少しの間ほおっておこう。好きなようにさせておけば問題ない。このバカ二人は……。そういうば述べるのが遅くなったが北の地でデルとルナは婚姻を上げ若年カップルも遂に夫婦になっていた。

「はあ……胸」

「どうした。ルナ」

「ゼシさん」

気にする人は少なくとも無いはずの悩みだ。無いもの強請りでしかないが女今日がそろえばイオなど逆に邪魔だと考えているに違い無い。ゼシにルナの悩みを打ち明けるとカラカラ笑い始めている。ゼシはそんなことは気にしないタイプの女性で自らの道を突き進む人だ。いちいち気にしていたらきりがないとルナに言い聞かせる。北の大地のゼシの故郷は元々は北の軍隊の拠点の一つでもあったが『大地の巨人』事件の後は荒廃し続けていたらしい。そこを改修工事に城に作り変えて拠点にしていたのだ。

「ははははは！ そんなことか！ そういえばお前は今年で19のはずだよな？」

「はい」

「まだまだではないか。これからだよ。人間は……まあ、種族にもよるが混血種のお前も長生きするだろう。考えるな受け入れるんだ。それが人生のだいご味でもある。楽しまねばそんである？」

「師団長……」

「どうかしたの？」

「敵が動きました」

「え？ そろそろとは思ってたけど……総員戦闘準備！ 魔導師部隊は先日伝えた通りに動いて頂戴。デルの空中機動部隊と今回はゼシさんにも前線に出て貰わなくちゃこまりますし」

「お、お前も司令官になれるではないか」

「いえ、ですが。急ぎましょう」

「ああ」

レイとただ二人で荒野の真ん中の布陣をしている。城門を閉じて各々武器を構えて敵の部隊と対峙する。敵の先方隊はどう見てもスケア。後方に居るのがオニキス。その途中に……この世の生物とは思えない生物を従えている。

「兄さん。どう行くつもりだい？」

「俺は正面から行く。お前は後方を頼むオニキスを抑えるんだ」「了解」

「他のメンバーの準備が整うまでだ。そのうち芳納や他のメンバーが異変に気付くはずだ。それが奴らの運のつきさ」

レイとクルーエルがどんな経緯でそこに居たのかは解らないにしろ再びプルトンとの戦闘が開始されたことに偽りは無い。しかも、今度は恐ろしい程の軍をそろえてきている。だが、レイやクルーエルも本気の形相だ。レイは元々持っていた剣に加え遺跡でマナが見つけた剣を持ち四本の剣を装備し……クルーエルは付けている武器に仕込んでいるらしい武器で戦う。これが……再び……戦いの始まりとなるのだ。

……TO BE CONTINUE……

聖戦……『神よ我を見捨てたか!!』

対峙する彼ら……レイとクルーエルの戦闘の最中にマナが産気づいてしまった。普通の期間ではありえない程恐ろしい早産で六弥も複雑な表情をしている。そんなタイミングでの破水では流産の可能性が高い。いや、確実に流産だろう。しかし、……生まれてきた子供はちゃんと五体満足にそろい普通体重程の女の子の赤ん坊だった。その父親と以外数名が外部で戦闘をし遂に……將軍級のメンバーが揃い城から離れて戦争を始める。赤剛は重武装になり敵軍に後込みせずに武器を振るい銀狼達の援護を受けて敵の無限兵士を刈り始めていた。レイが目指すのはプルトンのみだ。ただ、彼はいつものように高らかな蔑み上から見るような態度は見せず、その赤い髪を翻しもつていた杖を魔剣に変化させてレイと斬り合う。大きな無骨な剣とレイの片刃の切れ味鋭い剣が触れるたびに普通の戦闘では起きないような大きな金属音を放ちながら体をぶつけ合う。彼らは……何かに取りつかれたように切り付けあっていた。

「……くっ！ 行くぞ小童^{こわっぱ}！」

「ヤアアア！ 覚悟！」

その戦闘の外郭ではギアの本当の実力を見ることになった。鋭い視線の兄弟が睨み合い補助をするようにクルーエルと風崖がつきじりじりとスクエアを押し返す。ギアは鎌を振り回し龍の力を全開にして大きな攻撃をぶつけて押し返し続けていた。それに乗じて急所を狙い『暗黒刺撃』と呼ばれる魔法を体の中で増幅して爪や機能を異常なまでに増強するクルーエルの力を打ち込み、彼が切りつけられそうになると変身した風崖が風の魔法壁で遮断し逃げる時間を作り続ける。その傍らではファンとルナがオニキスを押し返していた。序盤は魔法での戦闘でルナとファンは息もぴったりの様子で透けて

しまい攻撃の当たらないオニキスに迫る。

『神よ！！　なぜ私を見捨てたのだ！　私はあなたにこんなにも尽くしたのに！』

私の本当の名はマリン・ウィーティル……一応は聖職者の端くれだった。神に仕え、人を無償の愛を表しつくすのだ。その人生に私は誇りを持っていたし、それで幸せだった。……しかし、私は神に罪を告白し修道会を抜け出しある男と結ばれ……幸せにすごしていたのだ。貧しかったけれど私と彼は幸せだった。神の恩恵を感じられなくても……仕方ないと思っていた。けれど、私達は神を見捨てなかった。世界には神の秩序のもとで動いている。神が御心を表して清き精神を受け入れてくだされば……この世界は太平で居られると……いや、平和になるのだと……。

「ふん、わしは簡単には死なんよ。この世界の全てに復讐するまでは！」

攻撃を全て流されることに苛立ちを覚えたらしいオニキスから邪悪なオーラが湧き出しファンもルナと後ろに退いていく。邪悪力を使っているため魔力の差が高く、その黒いオーラに触れば二人でもただではすまない。ルナがオーラに星魔法を撃ち込むが……形が崩れはすれど効かない……。そのため、二人は味方に被害が出ないように二人で組み合い、誘い出すために彼女に唯一有効な幻術系魔法を使って魔力の集中する魔法泉エリアと呼ばれるエリアに引きずり込んでいく。その中でだんだんと狂ったようにオニキスは訳の解らないことを喚きながら暴れだした。声も変化し少ししわがれの強いこえから……若いころの声なのだろうか……そんな少し芯の弱い声を放っている。

『なぜ、何故なんだ！ 神よ、私はあなたに仇なしたか？ そんなことはない。私は悪魔になどなりはしていない！ 私は！ 私は！』

そのオニキスの体が嫌な音を立てて変形していく……。肩からは角のような金属質な物が現れ目は異様に血走り人とは思えない異形の姿になって行く。爪も伸び体に大きく変化の出る魔法を使ったのだ。オニキスの声はあれからもっとしわがれた感じの声ではなく若々しい少女のような声になり妖美な雰囲気から少女の雰囲気を持ち始める。しかし、髪の毛は体を急激に変化させる禁呪の力に耐えきれず出血して真っ赤に染め上げられていく。彼女の体にはまだそのような個所は少ないが牙や爪などの発達で体にはとても大きなダメージがいつているのはたしだ。

『私は……あなたには何一つとして……怨まれるようなことはしてない！ なのに、何故私はこのような仕打ちを受けなければならぬのか！』

私はそれから……狂ったように不幸に襲われた。飢饉による物取りで夫を殺され娘と息子は病気で死んでいく……。私も、もう食料が無く生きてはいけない。何故、神は私を見捨てたのか？ 私は神に仕え皆の命をたくさん救った。なのに……なのに！ 何故、私の家族は救われないんだ！ 神よ！ あなたが御心を持ち我々人間に對して慈悲があるなら答えて見せよ！ 我らは何故このように仕打ちを受けなければならぬのだ！ 私は……あなたを信じていたのに……。

「……生ける者に死を……。私の苦しみを味わうがいい」

「ならば……、私も本気を出さねばならんか。ルナ、離れろ」

「え？ 師匠？」

「ふむ、私も力の出し惜しみなどできん状態であろうからな」

言葉をつぶやき魔法を使う用あんしぐさをするとなファン杖が白い光に包まれ白銀の刃の剣が現れた。ファンの腕は見るからに細く剣が使えるようには見えないのだが……。これも魔法のようだが……同じような白い光に包まれて白い法衣が鎧に変わり翼を一度音を立てて力強く開き、さらに一瞥する。その姿は天使の戦士長……ミカエルにも見える。まあ、ミカエルは男性らしいため。この場合はヴァルキュリアということにしておこう。その眼差しにオニキスは怯んだように一歩後退して……数秒後に意を決したように爪を繰り出してファンとぶつかり合う。剣と爪がぶつかる音は金属質で騎士の戦闘を思わせる一騎打ちの気迫が周りを包みこんだ。

「貴様は幸せだろう！ 錬強なる夫に無限に等しい才能を持った娘を持ち……自身の体も強く生きられる！ そして、安心が約束された暮らしをしている……。私にはそんなもの有りはしなかった！ 羨ましい、妬んでいる。いや、貴様を怨みはしない！ その不平等と不条理を生んだ神を怨んでいる。消してやる！ 滅ぼしてやる！ 全てを……闇に葬ってやる……。それが……私の失ったものだ！」

叫び続けながら爪を振り回すオニキスにファンが一時圧されている。オニキスが血の涙を流しながら爪をふるいお構いなしに攻撃をしてきたのだ。その一撃が肩をかすめて鎧の肩当てが吹きとんでいる。オニキスの攻撃は魔法という際を超え既に怪物な成っていた。人間としての際は既に超えているが……今は実体もある。そこでファンも暴れ出す。剣を構えて攻撃を開始した。彼女も少なからず剣の心得があったらしい。

「そうか、過去に何かあったのだな……。だが、それは一時の時の流れの事象だ！ 貴様の都合でこの私たちの世界をつぶされてたまるか！ 私には可愛い娘、夫、国にいる皆が居るのだ！ 貴様らの

勝手に全てを失う訳にはいかんだ!」

ファンの剣とオニキスの爪がぶつかり火花が散る。それから魔法も含めた総合的な戦闘に移る。ファンは両手を剣のつかに当て白い魔法の筋と半球形のバリアを張りつつ放ち続ける。それに対抗するようにオニキスも黒い光線を放ちつつ押し返そうと叫び続けた。ファンは今、このように叫ぶような戦闘ではないのだが今回は別らしい。ルナがその師匠を見続けている。人にはやらねばならない事がある……と。身にしみじみ感じていた。二人の魔法の力が集中しすぎて暴発し吹き飛ぶが各々体勢と武器を整えてまた対峙する。

『私は……私は……』

そう、神は私を裏切った。夫と子供たちを私から奪い私の命すらも奪い……なおもこの世界の混沌を制さない。私は強い憤りを感じた。ならば……ならば、私が神の創った世界を壊し、私が創ってやる! 誰もが太平天国を望み争いのない美しい世界を……そのためには……世界を混沌に導き滅ぼさなくてはならないのだ。私は……神を……殺す! この世界を創りかえるんだ!

「貴様は『禁呪』を使用してはならない物だと言っただろう? それは違う、この世界の形状を変えるからこそ……使わねばならんだ。必要のない人間を再利用して使い神の戯れで創った世界など変えなくてはならない。私はそのためにそれを解明し……利用するために魔術師となったのだ」

オニキスの胸元から血にまみれた十字架が現れ血走った眼から再び血の涙が流れる。その体中から……流血し始めていのだ。そう、所詮は人間の体である。そこまで強くはない。加え、オニキスの場合は透明にし肉体は別のところにあった体をここに転送している。

彼女の体はおそらく冷凍保存されていてそれを引き出していると思われた。だから、体には凍傷のあとや腐食の後が何か所も残っている。一度生命を失った体を引きずり起こせばこうなるのも頷ける。オニキスは命の失い、人を怨み……この世を怨み……神を怨み……全てを怨んで……これまで復習することのみを考えて生きて来たのだ。

「そこまでして……貴様はこの世界を変えたいのか？」

「無論だ」

「そうか、ならば、私と同じだな。私の父も同じように破滅していったよ。だが、血は争えない。私にもある……貴様のように間違った道に進んだ者を生かしておく程私は優しくはない。覚悟しろ！二度はないぞ！」

オニキスに向かい指を弾くとファンが力を全開にし一騎討ちはさらに深まる。剣の速度は上がり恐ろしいまでに攻撃の頻度もあがる。ルナは周りに現れた無限兵士を法撃し吹き飛ばしながら途中から現れたデルと共に補助として戦い続ける。戦っているオニキスの足もとは傷でできた血以外の血が滴り時間が無いと悟ったオニキスは……禁呪を次々に本人の体に使い始めた。

「そうだな。貴様と私は似ている。だが、意思は対局だ！ 大天使よ覚悟しろ！ 貴様が天使と言うならば私は悪魔になつても貴様を討ち取る！ うわあああああつあああああああああああああああつあああ……！！！！！！！！！！」

あらかじめ体に付けてあった禁呪を使うために付けてある紋章に自分の血を吸わせるために爪で自分の体を直接傷つけ血を吸わせていく。そこに魔力を集中するだけで彼女の体には変化が大きく現れ苦しそうに叫びながら……その苦肉と戦い続けていた。そして、体

が人間から遠のき硬質かした青白い物に変化して異形の姿になって行く。……そこに、ファンを押しつけるように現れたのが……。

「ここは私に任せろ」

「ゼシさん……」

「俺もいる。ギアのところに行くんだ」

「シドさん、解りました」

ファンが翼を直し法衣に戻った状態で羽ばたきデルとルナを侍らしてギアのところに飛んでいく。オニキスの体は段々と大きくなり意識はもうないらしい。そのためオニキスにはファンがどこにいかすら解らない。シドとゼシの能力を見るとそちらに攻撃をするが銀狼部隊が無限兵士の軍隊を食い破り協力姿勢で現れる赤剛も後半から加わり後方からの支援を始めた。反対側ではギアとスケアが一騎打ちをしている。……誰も近寄らない。そのような空気が流れクルーエルが能力を使い柵を作って誰も侵入させないのもあったが……。

「ここから先は誰にも入らせない。俺の……俺の恩人のしたいようにさせたいんだ。味方は敵の無限兵士を優先的に殺しにかかれ！」

「おう！」

その頃、デルとルナにファンからの提案と告白が待っていた。ファンはメンバーとしては長くギルド時代からの仲間として国や地方では『大天法妃』と呼ばれ、とても有名な魔法教導師として世界に名をとどろかせている。今でもクライスの世話と地域の政策を制定したりしていた。だが、その信頼感とは別問題に実は誰も彼女の過去やこれまでの生活を知らない。少し知っているのはギアだが、その彼もほとんど知らなかったと彼女もつぶやいた。話したのはクライスが生まれてからだと言う。ギアはその話を聞いても全く動じず

に聞いて最期に抱きしめてくれたらしい。クライスのその道に進ま
せないために……。彼女にもそれなりの覚悟があったのだ。

「私は、あの女を救ってやりたいと思うのだ」

「え？」

「ああ、解ってるよ。私の過去からになるが……。私も……この羽
は白く見えて美しいと思うだろう。だがな、……そんなことはない。
この羽と翼は……血で汚れ、それを血で洗ったように血が染みつい
ているのだ。私は聖女や大天使などではない……。私も血に支配さ
れた殺人鬼だ」

彼女はギアの居たオウガの村がつぶされた時は近隣のカイザーが
集まる村に住んでいた。カイザーは彼らオウガを快く受け入れギア
も彼女の父のオールドロスに拾われ直後に拾われていたイオもそこに
加わった。そして、ギアは……。彼は兄のスケアを殺すことしか考
えていないような暗い目をしていたころだ。その頃は他人の心など
考えずに兄を殺しに行くことが最優先の心情であった。無理もない。
実の兄に……。父も母も……。友人も知人も全て殺されたようなもの
からだ。

『俺は、もう、行く。俺には追わなくちゃいけい奴がいるんだ』

『……いかないで……。私のそばに居て……。お願い』

そんな彼女を振り切り彼は旅に出ってしまった。まだ幼く顔の丸さ
が残る年齢のギアとファン……。ギアの本来の年齢は解らないが彼
が居たころの生活で決められた年齢でそのまま生活している。そし
て、……ファンも彼女が15歳程のころに父の反対を押し切り旅に
出てしまったらしい。それからは荒んだ彼女の一人旅の実態だった。
ギアのように多くという訳ではないがたくさんの人間を殺したとい
う。カイザーは人攫いに狙われる。その関連でいたしかたないこ

とも間々あったが……彼女は多くの人間を殺し……一時期は本当に殺人鬼になったこともあったという。

「解るんだよ。オニキスの心が、私はカイザーの中でも希少なカイザー・エンジェルだ。私もあの女の辛さは解る。あの女を救ってやりたい」

そして、その瞬間にデルが剣を鞘に納めて着地し二人がそれに合わせたように着地した。デルもルナに話した断片以外はほとんどが謎の少年だ。ルナにもまだ他のことを話してはいない。数歳年下らしいデルを見上げるルナに謝罪した後、その作戦を始めようと彼もファンの背を押した。彼は別にそのような経歴があるようではないが……ファンは魔法学では偉大な権威だ。その彼女の人柄と正義感を知っている彼にはその心息を曲げられなかったからである。

「ルナには謝らなくちゃならないな。僕は……僕の母はヒューマンじゃない」

「え？」

「人間ではなく……先代の『明覇』だったんだ」

「な……それは本当か？」

「はい、レイさんのお母様が現代の『明覇』だとは聞いています。ですが、僕の母は……空王も兼ねた『明覇』で……すぐに力を引き渡したとはいえ彼女の体への負担は相当でした。早死にはそれが理由です……おそらくは。そして、僕には母から『空王』の素質があるんです」

彼が化け物と化したオニキスの方に剣を構え力を込める。足元に小さな風の輪が数個浮かびあがり彼は目を見開く。オニキスへ一直線に白い線がつながった。緑色に変色した瞳のデルがファンに告げオニキスの記憶の中に入って行く……。それは不思議な旅だった。

空間が異質で少しぼやけるような空間。しかし、彼らはちゃんと前を見据えて歩いて行く。

「さあ、行きましょう。彼女の記憶に……」

デルとファンとルナが降り立ったのは荒廃した村だった。確かにこれは酷い。村のほとんどに人がいるらしいがやせ細り路地には死体も転がっている。その中に……翡翠色の髪の毛を束ねた女性が居た。あの顔はオニクス……だ。まだ若いその少女は必死に人々の介抱をしている。その横には若い男がいて麦の入っている袋を配っている若い男の中にまじっていた。その男は優しくもう、息を引き取った老人の目を閉じ手を組ませて担架に乗せてその仕事をしている男に頼み運ばせている。

『マリン……もう、二日も寝ていないじゃないか。残りは僕がやるからさ。寝てきなよ』

『ダメです……。そんなことをしているとこの街の皆さんが……』

ファンやデル、ルナもその仕事をさりげなく溶け込み続けている。遂にファンがマリンと呼ばれたそのころのオニクスに近づき話しかけるところまで段階を進めた。

『私が変わります』

『あなたは？』

『スフィア・ファン・アイリスです。修道会の援助人員として配備されたギルド・ワーカーをしています』

『ありがとうございます。なら、お願いします』

『あなたも……休んでください』

すかさずデルとルナが圧し、例の男も休憩に向かう。その間にデ

ルとルナがファンの埋め合わせも行いファンがオニキス……いや、マリンと今は呼ぼう。二人がちゃんと結ばれたことを確認して、その日から急にスピードを上げて時間を飛び越し、彼女とその男が修道院から抜け出す瞬間の補助に入る。このころの修道院はかなり凶行をおしていた。そのため戒律を破る聖職者は下手をすれば殺されかねない。そのリスクを伴ったとしても……彼女らは外に出るという選択を選んだのだ。

『僕についてきてください』

『え……』

『君は？』

『デル・トマックです。ギルド・ワーカーですが……僕は今一つの目的のために動いているのであなた方をお送りします。さ、急いで！』

デルが導き数人遭遇した修道護衛士……いや、監視役を切り殺し二人を通過させ出口にいたファンに隠れられる場所までの護衛を任せてデルは門を閉めてから先にいった四人に合流した。

『帰りました』

『お帰り、デル』

『帰ったな。それでは任務の内容をお話します。私は……天使です』

そう、この時代にはファンのようなカイザーは存在していない。だから、翼のある女性とくればみな天使と見るだろう。そのため……ファンは上手くそれを使ったのだ。オニキスの記憶は変わっているのだろうか？ 変わってくれていると嬉しいだろう。

『私は、神からの任を受けてあなた方にお話しがあります。いえ、罪などということはないのでご安心を……。私はあなた方を助ける

ためにここに置かれております。神は……あなた方のように抗う方々を助けます。私は、神を語る人間達を滅ぼすために居ます。貧しい人々を救うのは神ではありません。神とは人々の心です。心が清い者のみを助けます……。私は……あなた方のように清い道を進ませるために仰せつかってこの場におられました』

啞然とする二人をよそにデルとルナは御使いとでも言いたげに胸に手を当てファンの横に立って言葉を告げる。それからまた数年が一瞬で経過し記憶は確実に変わっていた。彼女は本当の意味で行動派の少女だ。ファンを担ぎ……協会の中で彼女の意見に同じような意見を持つ聖職者たちは皆こちらがわにつき皆が……平民のみなさんもちらについている。作戦の考案や指揮の先陣はデルがとり戦闘の最前線での切り崩しもデルが薙ぎ払いを続けていた。大乱は広がり……彼女の望まぬ道も多く通ることとなった。

『こんなに上手くいくのなのですか？』

『僕が居れば大丈夫だよ。それから……皆さんは僕らが死んでも……死なせはしません誰一人！』

私は……マリン……オニキスカ。記憶を変えるのは……天使？

ああ、私は神に助けられている。

『そうです……』

オニキスの感情に訴えかける。憎悪の象徴を消し……禁呪に支配された体を解放していく。

『そう、私は、望まない……惨殺なんて』

「そうだ。マリン、未来のお前も同じように……混沌の最中に居るんだ。お前は清純のまま……生きてくれ」

そのまま、現在に引き戻され……三人はほとんど体力を使いきりぐったりしている。その脚のまま三人、特にファンは杖をつきながら歩きオニキスに光の魔法を使い……。

「我、対価を払い。この者の魂を緊縛の呪いより解放する」

ファンの翼が焦げるようなチリチリという音を上げながら焦げ付きオニキスの姿がマリンの姿になって行く。マリンは薄らと目を開けてファンを見ながら……。

『あなたも……戦場に立たれて……苦しいですか？』

「私は守らねばならない。愛する家族と『友人』をな。そのためなら、私は血をかぶろうと……泥をかぶろうと生き続ける」

『そうですか……。でも、あなたの翼。綺麗だったのに……』

マリンが手を上にあげるが……その手は砂が崩れるようにサラサラと落ちていき……最期に口の動きで判断できる程度の言葉を残し……その……悲しい命を絶った。

「この翼は……生え換わるんだよ……。マリン」

『あり……が……と……う』

その光景を見ていた周りの皆が黙とうをささげオニキスの亡骸……いや、彼女の命を穢し続けた……記憶という灰は……ファンの記憶を頼りに転送魔法を使い。故郷の空より故郷の地にまかれた。そして、その瞬間、ファンは力尽きたように倒れ……シドが本城に背負って運んでいく。それに付き添うように高官たちは本城に帰還していった。

「これで……一つ未来が変わる。我が甥よ！ 来い！」
「言われずとも！」

……次話『聖戦』へ

聖戦……剣を穿つ者

ギアの鎌が弾き飛ばされるのと同時にスケアの剣も粉々になった。そこからはオウガ同士の壮絶な殺し合いが始まっていた。最初にその能力の真髄を見せたのはスケア。クリードやダークネスですら凌駕する大きな翼龍となり未だ変身を終えていない彼に爪で攻撃を開始した。だが……、彼は怒りの形相と変化仕切らないその体でスケアの撃ち込んだ巨大な爪を持ちあげ投げ飛ばす。市街地から場所をはずし海に落としたのは彼にまだ理性が残っているからだろう。その後、彼も大きな変化を遂げる。彼の場合は全く大きな変化を起こさずに……龍と拳をぶつけあい死闘を繰り広げていた。

「あれが……オウガの血統の力」

「我々も……あれほどの力はでない。よもや……キングオウガの王族がまだご存命だったとは……」

大陸サンドウィンドウから移民としてこのユートピアに移り住み……ギアの管理する区域で彼に仕官したオウガ達もそのよう震える言葉を告いで恐れている。その後、強力な力のぶつかり合いで空気が大きく振動し徐々に兵士すら直立できなくなり始めた。その様子を城から見ることしかできないマナが涙を流しながら見続けている。その横には城に残るしかなかった数人が警護についていた特に昔からの女性の友人はほとんど残っていたのだ。アルを始め、リーン、ヴィヴィア、ルミ……他にも戦闘に向いた人物は城内外で警備をしている。ナイフを弄びながら中を気にしているヴィヴィア、城の兵の管理をしているルミ、銀狼の桜牙を撫でながらヴィヴィアと話すリーン。他にもいろいろなメンバーが集まっている。

「……騒がしくなって来たわね」

「ああ、耳がズキズキするで……。ギアさんの戦闘やろう。ファンさんが急患で運び込まれたみたいやし」

「……銀狼長」

「どうしたんや？ イオ」

「私も……」

「ダメよ。身重のあなたを動かさしたら外にいる男の連中全員から罵声を浴びせられちゃうわ」

「ヴィヴィア殿、しかし……」

「察してあげなさい」

「ルミ殿……」

「マナも……動きたいけど動けないの……。涙を流して泣いてるわ。夫は外で死闘を……。これまでは自分も外に出て皆と肩を並べて戦えた……。この大きな狂乱の最中さなかで自分が……。最高権限を持ちながらそれをふるえない王妃が……。どれだけ無力か、あの子は心から泣いているの」

レイとプルトンは片膝をついて剣にもたれるように息をついている。彼らは既に始まりの地に居たのだ。薄暗いその空間の中で二人は剣を振り戦い続ける。それが宿命とでもいうように戦い続けている。剣と剣が触れ合ったところは大きくV時にくぼみ刃毀れしている。お互いに剣について片膝をつき向かいあっている格好の二人。プルトンもレイも息絶え絶えの状態ではあるがまだ戦意はあるようだ。

「ギア、貴様は知らんだろうから俺が貴様ら『オウガ』を売った理由を教えてやろう」

「……」

「お前は……正妻の子だがな。俺は使用人との間に生まれた子供だ。しかも……。俺は純潔のオウガではない！ 貴様には何もかも奪われた。確かに俺は半人半鬼の不完全な体をしたできそこないだ。その

ため、貴様のようにその力は俺には使えない！　そして、父親は俺が成人すると……家から追放するつもりでいたようだ」

ギアは表情を変えずにそのままスケアの巨大化した龍の顔面を殴り付けた。言葉も発しない。怒りの表情すら失い、彼は冷徹で無表情な……色の白い顔を彼に向ける。その時……、彼の口が微妙に動きスケアはそれを見ると背筋を凍らせた。このシチュエーションに体験があるらしく解っているように身構えて次の動作を取ろうとしている。

『剣を穿て……失いし力を……ここに表せ……』

ギアの動きが急に速度を上げ視覚化できない程の物になりそれを避けつつスケアが体を治し地面に降り立った。その瞬間、周りに彼が喚き散らす。敵だと言うのに逃げろだの何だのとクルーエルにも掴みかかりギアの攻撃を一発だけ受け止めた。そのスケアも一瞬で地面に埋もれ次に選ばれた標的はクルーエルだった。剣で受けたのは良かったが一瞬で吹き飛ばされ森の中で砂煙をあげギアを咄然と見ている。そこに次々に味方が現れた。彼を止めるためにシドや風崖、フィト、デルすらも防衛にまわっている。ギアに剣をふるうことは逆に命取りになり切り殺されかねないのだ。そのため武道に自信のあるシド以外は切りつけるなどの行為はしない。普通兵はシドの判断でかなり外郭に防備や救護を目的に待機させられていた。

「皆逃げろ！　ギアが暴走を始めた！　クルーエル！　逃げろ！　クソ……グアっ！」

「な！　ギア！　な、何を……うわっ！！」

シドはそれをあらかじめ知っていた。彼もその時オウガの村の周辺に居たのだ。ギアに記憶が無く村が壊滅した理由。それは……兄の

スケアを殺そうとした父親を勘違いして殺そうとした時……、彼に変化が起きた。彼の力は強すぎる。そのためある一定のラインに到達すると彼は急に暴走を始めるのだ。それをスケアは必死に止めようとしたが……村は壊滅し何とか逃げ切った者もいたが数は少なく、ギアにはその実体の記憶と周辺の記憶がない。彼は……スケアはその後全ての罪を背負いその場からいなくなり……、プルトンに一時的に拾われたのだ。

『そう、俺も奴も……この世界の不浄を洗い流すために神に流されたんだ。俺の力は世の中の穢れを集めこの身に溜めること……。そして、貴様は……数十代に一人か二人生まれる……本当の霸王だ。お前に俺は討ち取られる……。そのためだけに居るのだよ。俺はな……。所詮はできそこないの冥王だ。私、オールドネス・パール・プルトンは……この時のために生きている』

ギアの表情は相変わらず変わらない。光を欠いた穴のように完全な漆黒。彼の心はここにはないようなのだ。時たま、体が抗うように動きがぎこちなくなるがそれ以外に攻撃の手は埋まらない。攻撃を受けても動じないのだ。あらゆる事を感じないかのようにシドのハンマーに打たれても。

「ギア！ 目を覚ますんだ！」

デルの放つ爆風に吹き飛ばされても……。

「風帝招来！ ギアさん！ 起きてください！ あなたを傷つけたくないんです！」

風崖の強力なタックルにフィトのラッシュが加わっても……。

「ギアさん……あんたは……あんたはそんな人じゃないだろう!」
「あなたの力は傷つけるためのものじゃないだろう! 俺は……あなたのそんな姿は見たくない!」

これだけの攻撃が当たってもギアの体は足取りを崩さずに何かを狙う訳でもなく周りに当たり散らすだけの行動を取るギア。そこに……。そこに居ないはずの人物が現れた。

「止まれ……。これが、お前を苦しめるのなら。私が終止符を打つ。……構えろギア……これが……、あの時の終末だ」

すぐにギアに向けて剣を突き出すファン。シドがその動きを止めようとするがファンの魔法に吹き飛ばされて彼女の通過を許してしまう。デルも立ちあがるが剣を弾かれ本人もかなり遠くに吹き飛ばされ、フィトと風崖は圧倒されるままに抜かれ……ファンが剣以外の武器にロッドを変化させる。それは槍。白く綺麗な抽象的でシンメトリの取れていない槍を振りギアの頬のかすめる。そこから剣を抜いたギアとの死闘だった。誰も近づかない。クルーエルも地面に剣をつきながら何とかそこに戻って来た。フィトと風崖も近づこうとしない。シドもゼシに支えられその様子を見ていた。神々しいまでの翼は焼け切れていて……彼女が魔力を解放するたびにさらに焦げついていく。ギアの体は先ほどよりも動きがぎこちなくなり始め意識を取り戻しつつあった。だが、まだ戻らない。地面をめぐり剣と槍をぶつけあいながら睨みあう。ファンの瞳には怒りではなく悲しみの表情を表すところが強い。ギアにも戻りつつはあるしかし、まだ……完全に戻りはしないのだ。

「お前の力はそのような物だったのか? このアテナは見てくびっていたのか? ギアよ」

『ア……テ……ナ?』

「スファイア・ファン・アイリスは……私が父からもらった名ではない。天に仕えていたニンフであった母が私のために用意してくれた名だ。私の本当の名は……アテナだ。ギア！ お前はそんなに弱かったのか？ そんなに心が脆弱だったのか？ 信念はどうした！ 貴様の心意気はどこに行った！」

その瞬間……ギアの右目が血走りファンに向けて剣が振られる。その攻撃の速度について行けずにファンは覚悟したように目をつむる。しかし、剣は彼女に届きはしなかった。鮮血が飛び散るが……誰の声も聞こえずその男は崩れ落ちる……。その血を見た瞬間にギアも意識を失い。クルーエルが近づく。クルーエルは乱暴ともいえないが負傷者を扱うようには扱わずスケアの体を横向きから仰向けになおした。

「おい、お前。罪を自分に当てて悪訳を気取るのは止めろ。そんな男じゃないのはすでに解っている」

「解ったようにいうな。クルーエル。俺は二つの目的……いや、細かく分ければもつとだが……こんなことで俺は死にはしない。安心しろ。俺は……この魂を無垢な弟に捧げるために生きていたんだ。ギアを……精神的に救い、彼の半分の罪を俺がかぶって本人に殺され……幕を閉じるつもりでいる」

彼はわざと悪訳を演じ自らに汚名を着せることで自分を救おうと父を殺し村を壊滅させてしまった弟を救おうとしていたのだ。そう、そのために……ずっと生き続けていたらしい。彼の記憶を頼りに……ギアの過去に触れることになった。彼らは想像をはるかに超えて複雑な兄弟だったようだ。兄弟で兄と弟の場合弟が妾の子というのはよくあり得る。しかし、彼らの場合は兄のスケアが使用人との間に生まれた子供だったのだ。そんな複雑な兄弟の仲も孕んでのこと……。簡単には解決せず拗れに拗れ……今に至る。スケアはそれを

運命と言っていた。

「アイツはな。俺の人生を奪った張本人ではある。だが、俺の救いでもあった。俺の……生きがいでもあったんだ。優しく無垢で可愛い俺の弟、ギアは……俺のために俺を父の魔の手から逃がそうとした。だが、俺達の計画なんて所詮はガキの戯れ……父親は俺を殺そうと刃を向けたが……その時、ギアの哀れな身の上を知ったんだ。確かに、ギアは正妻の子だ。ギアは……ギアは……奇形能力の持ち主だったんだ。オウガとはいえど人間の体だ。能力に耐えきれない体を持って生まれたんだ。それは……解っていても止められない。俺にもそれは苦しかった」

ゼシが下を向き悲しげに口をつぐむ。能力のことで彼女も苦しんだらしいのだ。スケアは息を整え体を動かしながら……首をずらし、胸に刺さったままの剣を引き抜こうとするがシドが止める。おそろく剣は心臓を貫き、今抜けば出血が多すぎて助からなくなるからだろう。それをさせないようにしているのだ。静かに何も言わずに首を振りながらスケアをたしなめようとしている。しかし、スケアはそれに対してあまりいい顔をしない。

「止める。お前の言葉を……ギアに聞かせなければ……俺の気がすまん」

「よしてくれ、あんたのことは最初から見ていた。あんたらはプルトンの事を勘違いしているだろうが……アイツも俺と同じだ。あんたらは何も知らないだけだろう。そうだ、こんなことは今はどうでもいい。ギアにはこのことを伝えなくてくれ。アイツの体のことは俺が死ねば解決できるんだ」

全員が首をかしげる。そこに……アゲハ蝶の翼をはやした女性が降り立ち騎士の風貌をした男を連れ立ちながらスケアの近くに片膝

をついて屈んだ。そう、『明覇』だ。その近くで立ち続けるのはトウロン。彼らはその事実を聞くと……顔をしかめた。レイとプルトンの入った空間には仕掛けがしてあるというのだ。彼らはある陰謀を止めるべく再びこの世に体を置き動いている。二度と会うことはないと思われた矢先のことであるため二人も少し厳しい表情でもあった。特に明覇は深刻そうな顔をしている。

「お前がオーブ・スケア・オウガだな。私が明覇。お前の主であるプルトンはどこへ？」

「よくはしらんが……始まりの虚空に行くだの何だのといっていたよ」

「解った。それから、口を挟むようだがお前がしたいのは遺伝子編能をし貴様にある能力を移すことだろう？ お前の今の体では耐えきれずに死ぬぞ」

「いいんだよ。俺は死にたいんだ」

その時、寝たままのギアが地面を殴り付けた。彼の体にも大きな負荷がかかっていて動くことができないのだ。涙を流すギアの背に手を当てて体を起こしたのはファンだった。槍をロッドに戻し……彼女も涙を流しながら言葉を告げてギアをおきあがらせる。ギアの顔は元々が白いがさらに蒼白になっていた。幾年もの間をあけた兄弟の……本来の会話が為される瞬間は……。本当に痛々しくこれまでの痛烈な過去を物語るようなものだった。

「おい……クソ兄貴」

「ん？」

「あんたは俺よりも何でもできただろう！ ゴホッ！ それでも俺にまだ気を使うのか！ 喧嘩も俺を守り、学問も俺を教え、剣にしてもそうだ。お前は……何で俺に干渉し……何で……お前は俺を助けようとするんだ。兄貴……もう、俺のために生きないでくれ」

「バカを言うな。俺はお前がいたから生きてこれた。可愛い可愛い弟の笑顔が……俺の生きがいだ。なあ、笑ってくれよ。お前の娘に見せるように……笑ってくれよ。俺も、最期にしたい……」

シドが話に意識を傾けている間に彼は……剣の刃を握り貫いていた剣を引き抜いてその血液をギアの足もとに飛ばした……。息がいきなり弱くなりスケアは最期に笑顔を創り目を閉じようとしている。そこに明覇が呪詛を唱え始めた。それに合わせ血のついた剣をギアに握らせ血のついたあと……内容を理解したらしいファンにも同じことをしてから。明覇ではなくトゥーロンが金色のオーラをその剣に流していく。その剣は形が無くなり金色の繭のような塊になり段々と形を為していった。

『我ら霸王の名と冥府の妃の名において新たなる命をこの血のもとに授ける。天武の才女と鬼器の男よ。汝らに託す。我らの名のもとに……兄を召し、新たなる正を……』

スケアの体が繭の形成とともに消え出す。ギアが涙を流しながら手を差し出すが……既にスケアの手足は消えている。笑顔には到底なれないだろう。壮大な勘違いをしていた兄弟のわだかまりは解けることなくその終末を迎えた。普段ポーカーフェイスの風崖やクルーエルも大粒の涙を流しながら泣いている。

「スケア……」

「従弟殿……」

「スケアよ。生きてくれ！ お前は生きるべきだ！」

「は、は、大天使……オニキスは天に迎えられたんだろう？ なら、俺ももう逝くべきだ」

その言葉を述べている最中に金色の繭の中から何かが現れギア

の手の上に落ちる。ギアのその手の中には……白い布に包まれた白い羽根と角、頬に鱗のある男の子の赤ん坊がいたのだ。その赤ん坊は白い刃の短刀を抱いていた。ギアは泣きながらその子を抱きしめファンに抱かれながら大きな声を上げて男泣きをし続けている。自然にその傍へシド、デル、ゼシ……衛兵や近隣住民など他の皆までもが集まり……一緒に泣いている。敵であつたスケア……憎まれ役を買って出た良き兄を彼は再び見返す。……が、彼はそこにはいなかった。次の瞬間にはギアの体にスケアと同じ刺青が浮き……彼にもその力の終末が訪れたのだ。

「この子は……スケアと名付けよう。スフィア・スケア・オーガ……。明覇……いい、居ない？」

「うわ！」

「何だ！ 何が起きている！」

「見たところ中央大陸だけが揺れているぞ！」

地面が大きく揺れギアを抱くように守るファンや他にも地面に手をつきいろいろな人を守ろうとしている兵士が見える。大陸中が揺れるなか……世界が黒く沈んでいく。城に帰還していく兵士たちが目にしたのは強力な呪詛を開きその黒い闇を跳ね返している明覇だった。トゥーロンも彼女に強力するように力を放ち跳ね返している。そこに……黒い翼を生やした人間のような生物が覇王の軍に攻め込んで来た。槍で武装し黒い装束に鎧を着た兵士が攻撃してくる中、それを防いだのは特殊技能部隊を率いたウィルだ。特殊技能部隊を率いて敵との間に水の遮断壁を創りすぐに味方の軍勢が体勢を整えられるようにしているのだ。そこに、有翼人の赤額の背にのった少女が現れ黒い翼に炎をぶつけていく。隣の大陸から日光が応援に駆けつけてくれたのだ。地上には肩に月光を担いだ雷軌が構え攻撃を助ける。軍団は壊滅的な被害を防ぎ、対峙を続けなんだか解らないが明覇とトゥーロンを守るように布陣した。

「右舷先回！ 全体シド攻撃団長に続け！」

「女性機動軍！ 私に続け！」

『イエス！ マム！』

ゼシとシドも先陣を切り攻撃に徹する。その後、ギアや、同じく動けないファンは城内の医務室に搬送された。そこにマナが現れ城中大騒ぎになっている。ファンがマナの顔を撫でる。病室と同じにし話続けていたようだ。ギアはあれから意識が途切れたように深い眠りにについている。ファンはマナの姉のような立場だ。その関係からマナはファンには隠し事をほとんどしない。立場的にはマナの方が数段上なのだが……マナはファンを尊敬してやまず。彼女としては話を聞いてもらえるだけでかなり楽になるらしい。

「ほう、やはりか」

「え？」

「解っているよ。お前が外に出たいのはな」

「はい……レイが心配なんです」

「そうだな。私も柄にもなく……本当の姿を見せてしまった。ギアのためだから……背に腹は代えられん時は私もそう成るのだよ」

「……ギアさんは？」

「安心したんだろう。眠っている」

「そうですか……」

「時が来たら……私が出してやる。物語は違う動きを見せた。もう、賽は投げられている。私も見てみたいのだよ……一人の人間でどのようなにこの世界が変えられるのかがね」

その時、空に大きな亀裂が開き世界……皆が驚愕した。この世界に綴られた創世記の伝説が彼らの目の前で起こっているのだ。

『箱舟は光の輪を描き混沌を鎮めんと現れ……その身に刻まれし名を呼び命を補完する』

「おい、あれ……」

「箱舟……」

「ああ、箱舟だ」

その頃のレイ達は……。

「ほう、これが神の選択か……世界を終わらせ新たな世界を創る……覇王！ 剣を取れ！ お前は世界を守らねばならん！ 屍を越えろ！ 人はいずれ死ぬ……お前は生きねばならんだ！」

「プルトン……何を言ってるんだ？」

「来るぞ、剣を持って！ 黒翼の天使は終焉の使者だ！ こいつらは世界の破滅が目的のクズどもだ。俺の背は預けた。姉様の御子を失うことなど俺がさせない！」

黒い翼の兵士が彼らの居る荒野のような岩がむき出しの平らな土地にひしめき二人を取り囲んでいる。プルトンが……レイを守るように剣を振るいその黒翼の天使を切り殺していく。プルトンにも何かがあるようだ。しかし、彼も維持を張っているのか何なのか何もう真意を語らない。レイもプルトンとの共闘を試みて剣を振るい黒翼の天使を切り殺し続けた。その天使の数はどんどん増えていく。

「くそう！ 数が多い！」

「クルーエル！ 全開でいくぞ！」

「ハイヤアアア！ レイ君を助けるんだ！」

「うむ、我が弟の窮地に何をのんびりできようか……かかってこい！ 貴様らは俺が相手をしよう！」

シドの作り出すゴーレムが数体敵の軍団を蹂躪しながら突き進み

……ゼシが開けたところに陣取り絶対零度を作り出し凍結させていく。こちらの軍との戦力差は五分と五分、押せば押し返され引けば圧される。向こうは疲れ知らずの天使軍団だがこちらは人でありスタミナもあり突破も時間の問題だった。

「……間に合いましたね。修羅……」

「ああ、行くぞ！」

そこに救世主と言わんばかりに聖刃と修羅が現れた。剣をふるう聖刃と大槍を振り回す修羅も殴りこんでの大乱戦になる。次々に味方の凄腕集団が各地から舞い戻り前線は再び維持しどんどん押し切り始める。

「はあはあ、プルトン……」

「何だ？ 小童」

「お前は何で戦う？」

「俺は死ぬために戦う。この世界を維持するには俺は死ななくてはならないんだ」

衝撃の言葉を聞きとりレイも覇王の能力を全開に開き剣をフルに使う。刃毀れはオーラで回復させどんどん敵を切り殺しながら……。

聖戦……前を見よ！へ

聖戦……前を見よ！

戦闘は粗方片付け……無数の死体と手傷を追った騎士の風貌の二人が互いに背を預けていた。年を取っている黒い鎧の男は体に無数の血の跡をうけ赤と銀の装飾の赤い髪をした少年は手を見ながら覇王の紋章をみている。

「俺は……」

「悔やむな。前を向け。俺のようにな……今から見せるのは俺の過去と意識だ」

レイは急に意識が遠のくを感じたが直ぐに気づいた。自分以外は全てモノクロな世界。そこには……一度しか見たことはない母がいた。その横には父、そのさらに遠巻きにプルトンがいる。プルトンは安心したような顔をしていた。レイの母であるギルはその時代の冥王家の跡取りだったらしい。だが……この時、プルトンは姉を逃がし、トゥーロンに託したのだ。

『俺が何故、敵役を買ってでたか？ 簡単だ。お前を、甥を勇者覇王にするためだ。冥王一族や覇王一族とは言うが所詮は人間に尾や鰭がついた程度の人。だから、俺はわざとトゥーロンに警戒心を抱かせお前を守らせた』

真意は残酷だった。冥王一族は滅びずに生き続け覇王の代頭、そのたびに死ななくてはならないのだ。プルトンではなく本来ならば姉のギルが勤めるハズだった。しかし、プルトンはそれを阻止させて自分がそうなるように仕向けて姉を救い……トゥーロンに託した……という外形だ。それでもプルトンには邪念が無いわけではなかった。

『俺は実際プルトンを憎んでいる。姉を守るためとは言え霸王一族に嫁がせたくはなかった。しかし、そうする他に道はなく……姉とトゥーロンは愛し合っていてお前が生まれている。その時には既に俺の策略は始まり……俺はお前に殺されるために今までお前を挑発しながら生きてきた』

プルトンが即位する光景を見ているレイ。プルトンも懐かしそうに……悲哀を含んだ瞳で見ている。赤い髪は一族の特徴らしい。プルトンもその髪を撫でつけていた。そして、プルトンは次の映像に飛ばす。レイが生まれて明覇が……ギルが慈しみながら抱いている映像だ。その中では信じられないことを口にしていた。トゥーロンと明覇は共に居られない運命だったのだ。そして、トゥーロンとプルトンが連れ立ちスウォード家に託す瞬間の映像が……。

「お前は……何故、覇の戒律を守るのだ！」

「殺したいなら殺せ……所詮は出来損ないの霸王だ。殺されても文句は言えん。だが、ここではやめてくれ……レイにレイには……血の上を歩む未来を歩ませたくないのだ」

「チッ……どの道、無駄なことだ。噛み合う歯車は止まらん。俺はお前のためには死なん！ 姉様とこのレイだけだ。この甥の命は俺が救う、俺は貴様を許さん！」

「わかった……腹に据えよう」

レイ達はまた別の記憶に飛んだ。それは剣を握りプルトンを圧倒する母、ギルの姿だった。まだ、うら若い少女の面影が残るギルは口の端に呆れを帯びた表情でプルトンを見下ろしている。プルトンは木製の剣をとりまた構え直す。楽しそうに赤い髪を翻すギルをプルトンも憧れの眼差しで見続けていた。だが、やはりプルトンは勝てなかったようだ。

「ははは、やはり姉様はお強い」

「当然だろう。私はそのために居るのだからな」

プルトンの言葉は痛々しいほど沈み涙も浮いて震えていた。レイの肩に手を付くといきなり回想を停止させ辺りを睨みつけている。レイもそれに気づき警戒を強め柄に手をかけてプルトンの背側に回った。プルトンは一瞬驚いたらしいが頬の強張りを解いて笑顔を作り剣を抜くと前に出る。そこには白い装束の老人が佇みプルトンの剣を受けていた。

「ほう、冥王家が我らを裏切るか」

「俺は冥王ではない。ただのバールだ。貴様こそ見限ったぞ……最
高神、ゼウス……」

猛烈な剣と剣のぶつかり合いが始まった。あの回想の時の彼とは同じ人物に見えないほどの剣の腕をしている。両刃の剣とゼウスと呼ばれた老人の大剣がぶつかり合う。……その時、レイの背中に寒気が走り彼も剣闘の最中に身を投じた。四本の剣が魔法で結合した大剣に黒い六対の翼を持つ血に飢えたナイフを持った男とぶつかり合う。

「ふん、小童が言いよるは！ 姉の一人も救えなんだ小僧が！」

「まだわかっていないみたいだな。お前は誘い出されたんだ。知っている。父上と貴様が通じ……レイを亡き者にしようとしていることくらいはな！」

プルトンの体から黒いオーラが吹き出しゼウスを吹き飛ばした。彼も自らが言うほど紛いではないのだ。大剣を撫でるように切っ先が走りゼウスの右頬を掠めて長い白髪の一部を切り落とした。

「ふん！」

「く……」

六対の翼を持つ黒衣の黒天使はレイの動きが止まったのにあわせて動きを止めた。ダガーを持つ手にはレイの大剣の付けた切り傷を見ている。暗く、光のない瞳を動かさずに気味の悪い笑顔を浮かべた。

「いい」

「……」

「良いぞ！ この感覚！ 一寸先は闇だ……俺は死ぬかも知れない……いや、お前が死ぬかもしれない。……そんなことはいいか……。もっと楽しませてくれよ！」

レイと男は同時に前進し切りつけあう。レイの鎧にも沢山の切り傷がつき頬や生肌の露出している部分には細いクリスダガーの切り傷を沢山受けている。その男はまるで訓練された猛犬のようにレイに詰め寄ってきた。首を狙いクリスダガーを滑らかに指をさばいて狙い続けてくるのだ。それを心配そうに見ているプルトンが……。

「余所見は……命取りだ！」

胸を貫かれ血を流し倒れ込む。しかしまだ、ゼウスと呼ばれた老人の足をつかみ進ませないようにしている。それを蹴り飛ばして老人はレイに剣を向け……レイは忽ちに追い詰められた。大剣は見事に弾き飛ばされ喉元にはクリスダガーが光り、大剣も光を受けている。

「お前さえ生まれなければ……わしは世界を我が物にできたのだ。」

貴様さえ生まれなければ……」

「俺が生まれても……何ら利権には関係ないだろう」

「お前さんのようなまだ、若く経験の薄い小童にはわからんだろう。世界にはな、論理では解決できない不思議な奇跡と呼ばれることが起きるのだ」

「それが？」

「お前が生まれなければ……世界の鍵を開く力はわしの物だった。しかし、鍵はわたしには反応せずであろうことか貴様のような何も知らんガキに心を寄せたのだ！」

世界の鍵……それはこの世界に存在する異界との繋がりを閉ざす扉を開く鍵らしい。だが、ゼウスはそれを受け取るに値しないと思われたようだ。レイの剣がひとりでに揺れている……。その時、外部では地震が再び起こり全滅した黒天使の亡骸を黒いドロドロした液体が飲み込んだ。前進していたゼシやシドを飲み込もうとしたそれをトゥーロンが斬りさき明覇の開く結界の中に近隣の住民を非難させることを指示した。トゥーロンが崩れた空の向こうを睨みつけて悔しそうに叫ぶ。

「俺には……なんで俺には力がないんだあああああああああ
！！！！！」

明覇に協力するように魔導師の部隊が魔力を注入し続ける。ルナを始め魔力が強く体力に余裕のある人員は全て自主的にうごきだした。

「俺が……鍵？」

「そう、鍵だ。貴様は……生まれながらにこの世界を統べる力を持つて生まれたのだ」

「おい、おっさん。コイツ、殺していいか？」

「いや、まだだ。こいつには最高の演出を持って死んでもらうんだ」

レイは意識を集中させながら意識を城に飛ばす。それを受け取ったのはマナだった……青ざめてベッドから起きあがろうとするが……動けない。それを察したのかファンは杖を軽く振ってマナに言葉を一言告いだ。

「今のだろうか？ やりたいようにしろ」

マナが病室から飛び出して追おうとする昔馴染みに……ファンが立ちはだかる。マナの華奢で細い体は見るうちに小さくなり城の最下層に繋がる階段を降りていく。その先の部屋は……霸王の間と呼ばれ、レイとマナが出会った場所だ。巨大な石の壁のような装置に向けてマナが言葉をかける。

「居るんでしょ？ 以前の記憶を覚えてくれた私……」

『いるわ。どうしたの？ マナ』

「教えて……レイはなんで『俺は……帰れないだろう。皆と娘をよろしく』って言ったのかを」

石の壁から現れたマナの16歳の姿をした像が電子化されたような異質な声を放ちながらこれまでの顛末をつたえた。そして、マナに彼女が問いかける。最期に……と呟き彼女がにこりと笑う。

『じゃあ、助きたい？』

「当たり前じゃない！」

『そう、なら、最期に……最期にあなたを助けてあげる。でも、その前に……ありがとう』

像がぼやけ面が荒くなりこやかな笑みを顔に浮かべながら……

彼女は消えた。その瞬間に再び地面が大きく揺れて一瞬だけ空が黄昏たように輝き亀裂が……閉じる。マナは急いで階段を駆け上がりロッドを掴み、法衣に着替えると階段を一気に降りていき衛兵の目をかいくぐると……エントランスに入った。そこにはかなり深刻な表情の面々がおり……一気にマナに視線が集まる。

「ま、マナ？ マナ！？ 何故ここに！」

ゼシの驚愕の叫びの直後に大股な足運びでマナの近くに詰め寄る明覇。その両目には大粒な涙がたまり……かなり張り詰めているように見える。レイの声が聞こえて居たのはマナだけではなかったのだ。いや、マナとは別にメッセージがあったようなのだ。マナの返答を聞くとマナの頬をうち服を掴んだまま崩れ落ちる。

「レイを……助けに行くのか？」

「はい……」

「お前たちの娘はどうなる！！」

「……」

「二親を失った娘の……哀れな姿を考えてみる。お前を……生かせる訳にはいかない」

マナがにこやかに微笑みかけて……明覇の顔を覗き込みいつの間にかファンがマナとレイの娘を抱いて近づいていた。マナがファンから娘を受け取り慈しみながら少し強く抱くと……座り込んでいた明覇に預ける。

「お母様……」

「え……？ 今、なんて……」

「私達は必ず二人で帰ってきます。お母様、だから、それまでこの子をお願いできますか？」

明覇の顔が一気に赤くなり頬を染めてマナに視線を返し言葉を返さずにマナとレイの娘を抱くことで返事をする。その頃の始まりの地内部では……。黒天使の男の首にレイの右手がつき、ゼウスの大剣の刃先はレイの能力で抑えられ……。黒天使の体が光を受けて小さく光りだした。ゼウスが恐れながら後退りしていく。首根っこを掴まれた黒天使は……。手足の先から純白の粉になり地面に落ちると真っ直ぐに……。天へ帰っていった。その時のレイの体には金色のオーラが満ち満ちとしゼウスの放つ白銀のオーラの威力に引けを取っていない。

「貴様……まさか、覚醒したのか？」

「わからない。俺は自らのすべき選択をしただけだ」

再び高速のぶつかり合いが巻き起こる。速さ、力、策。共に互角でまったくといって良いほど先には進まない。二人がぶつかり合う度にオーラが弾け飛び空は星が弾けたように……。次々と新たな生命に満ちていく。空間の外部では……。空は星一つ無い漆黒だった。しかし、二人の撒き散らす細かいオーラの結晶がそらに散り、星になっていく。そのように様々な形で世界が新たな形になっていく。レイが地面に剣を突き立てれば北方の大大陸が二つに地割れし新たな形となり、ゼウスが空を波動で切り裂き空間をねじ曲げると嵐が巻き起こる。

「ほう、さすがはサラブレッドだな。強い……。若木の癖にやりおるな。しかし、これならどうかな？」

ゼウスが指をはじくと地面が隆起し足場が不安定になる。レイに向け土塊で出来た竜が口を開く。しかし、レイにそれはとどかずに言わずとも外の世界に異変が起こる。海底から隆起した土塊が空中

で島になったのだ。そして、細長い竜のような大陸と大陸をつなぐ道ができたりもした。ギアはまだ寝ているため変わりに風崖が彼の立場につき住民の避難や城の防備を固めながら……数人がマナを守るために途中までを同行する。マナの両肩には体を小型化したクリードとダークネスや修羅に付き添う馬頭と聖刃に付き添う牛頭、ギアの代わりに風崖、シドの親戚にあたる岩鋼、その妻のゼピュロなど……。そうそうたる顔触れが彼女を見送る。

「ここまでで大丈夫ですから」

「霸王妃が言うならばそうなのだろうな。我らは王の帰還のためにこの世界を全力で守り抜く」

「安心してください。わたくしや修羅が居ればこちらは問題ありません」

マナがニコリと笑うや地面に魔法陣が現れた。彼女が空間を歪ませてレイとプルトンのいる空間へと飛び込んだのだ。その背中には……黄金色に光る蝶の羽を携えて……神々しいまでの光は空の裂け目に現れた異質な光る塊に吸い込まれて行った。修羅と聖刃以下数名はそこに残り言葉通りに王と王妃の帰還を……目の前の敵と戦いながら待つのだった。

「私の娘に……どうか、どうか力を授け、夫と共に道を歩むことを許したまえ……」

「大丈夫さ。ギル、お前が認めた娘なら……やってくれるさ。俺たちにはできなくてもな」

異質な空間の内部ではどす黒い塊が彼女の行き先を遮ろうとする。どうやら亡者の魂らしい。しかし、その中に二つの光る球体を見つけた。その声は懐かしい響きを響かせマナの目の前で形になった……。宙慧である。懐かしそうに微笑み案内をしてくれるという。そ

ここに、さらに球体が沢山集まってきた。彼女には初対面だが……宇宙慧が顔をしかめる……。オルドネスだ。その宇宙慧には目もくれずマナに握手を求め周りに侍らせたたくさんのカイザーが護衛につく。もちろん宇宙慧もだ。

「マナさん。お供します」

「宇宙慧さん！」

「なら、ワシらも混ぜてもらおうか？」

「オルドネス……」

「敵意か……仕方ないだろう？　ワシも、娘の手前がある。霸王妃殿、ワシの娘、アイリスがお世話になっているそうだな。これから迷惑をかけるだろうが……あの子をよろしく頼む」

それらが加わると全く亡者という亡者が寄り付かなくなった。そして、レイが倒されてからはゼウスと呼ばれた白髪の老人が訳き散らし勝っただの何だのと声を張り上げている。高揚感で周りが見えていないらしい。そこに……、新たな敵が現れるとも知らずに……。金色のオーラを体に湛えた少女がゼウスにタックルした。そのおかげでゼウスに再び火が付き……レイまでもが再び剣を取る。

「神ですか……？」

「貴様……その羽は……明覇だと？　いや、ギルが託したというのか？　そんなバカな……」

「私は……当代の明覇……、マナ・ムーンライトです。貴方を許すわけにはいかない。私の愛する人やこの世界を傷つける者を私は許すことができないのよ。レイを傷つけ皆の命を奪い……可愛そうな……運命を弄び、死ななくてもいい人間までもを弄び……許さない」

マナの魔法が次々にゼウスを襲う。ゼウスの力はマナには及ばなかった。覚醒したマナの力は圧倒的だ。ゼウスがそこで命を絶たれ

てもマナは攻撃をやめない。最後にはレイに止められる始末だ。レイの体の傷を丹念に調べマナが回復する。そして、レイの体が健全になったと思われる辺りで……。

「レイ……」

「う……」

「何で……死に行くような事をしたの？」

「俺はそういう道を」

「あなたに死んで欲しくない人だってたくさんいるのよ！ 私も、エルも！ お母様も！ 皆、あなたには死なれたくないの！ 私だって……あなたが居ない未来なんて歩みたくないもの！」

「……そのとおりだ。ごほっ……。何のために俺が居るのかわからなくなってるな。マナ・ムーンライト……久しぶりだな。いや、今言ってもお前は記憶の違う新しい命だから解らないか？」

その瞬間……、内部が揺れ始めた。ゼウスが管理していたのだから空間が崩壊し始めたのだ。崩れ始める世界に……カイザー・エンジエルの魂たちが彼らを高速で運び始める。マナがレイを担ぎ……プルトンは……。

「言っただろう。俺は死ぬためにここに居るんだ。お前は俺の自慢の甥だよ。姉様によろしく頼む」

「それはできない。お前もいくんだよ」

「無理さ、この空間はな……一人でも残らないといけないという性質がある。俺はここに残るんだ」

「レイさん……もう、彼に背負わせないで上げてくださいな」

「宙慧」

「行け、霸王。貴様にも娘が世話になっている。アイリスをよろしく頼むぞ」

「解った」

プルトンは最後に剣を投げ渡した。レイが柄をつかみ一礼すると……空間を飛んで……入口まで飛んでいく。魂となったカイザー達は入口付近でレイに一礼するとすぐに帰って行く。レイはプルトンの剣を握りしめて歩いていった。そこに、修羅と聖刃……皆が駆け寄り……。レイのまわりに集まって陽光をたたえた森の中を霸王宮の前まで凱旋していく。そのあいだにどんどん仲間が増えて行った。日光と月光、赤額、雷軌、風崖、ファン、ゼシ、シドに支えられたギアと彼自身と……昔のギルド時代からのメンバーから新たに加わった者たちまで全員が彼の帰還を見守る。

「レイ、お帰り」

「よく帰った。さすが俺の息子だな。レイ」

「只今戻りました。皆さん……心配をかけました」

レイの一言と共に明覇が彼に近寄り彼の娘を手渡した。金色の髪に同系統の瞳……。霸王家の特徴を得た娘を受け取り名前を呼んだ。

「エル……。はじめましてだね。お父さんだよ」

「キャッフア……アア……」

「元気だな」

「うん、私たちの娘……。エル、フェンク・エル・ムーンライト姫」

空間に残ったプルトン……彼はどうなったのだろうか。剣を託し彼は最後にレイへ笑顔を見せた彼は槍残したことのないような心の透き通った顔をした。それまでの彼が演じていた悪役から彼に上を向かせた立役者になったのだ。

「プルトン」

「その声は……マナ？」

「これで良かったの？」

「ああ、すまないな。俺の目的のために体まで捨てさせてしまっ
「いいの。もう一人の私は嬉しそうに笑って旦那様に尽くせるい
女になってたし」

「そうか、お前がいいならいいさ」

「ここも、消えちゃうね」

「そうだな、一緒に……冥界へ行こう」

「うん」

彼らにも……気持ちの上での終末が訪れたらしい。再び現代の彼
らに戻ろう。形式的な儀式は皆が嫌う。だが、こればかりは国の全
ての人々が喜び祝いの言葉を述べた。エル……『神の……』という
意味の名を持つ姫が生まれ国としての対策や政策も始まったようだ。
各大陸や都市に昔の子供のころからの仲間たちが管理官などを務め
るようになった。そして、……。

「父上！ 父上！」

「お、どうした？ ルシィ」

「剣の稽古をよろしくお願いできませんか？」

「解っ……」

「あなた？ お仕事残ってるわよ。ルシィももう少し待って上げて
くれない？ お父様も王様としてのお仕事がたくさんあるのよ」

彼は再び子宝に恵まれ息子が生まれた。その息子、ルシィは冥王
家の血筋に近いらしく、レイの赤い髪を受け継いだ。明覇……いや、
今は退いて本名を名乗っているギルやプルトンなども今は城で隠居
生活を営み夫婦となったメンバーは次々に後継ぎ達に恵まれている。
霸王宮殿にはシドとゼシの娘と息子のミシィとアルファが奉公に來
ていた。北の地を納める前にレイの手腕を見ておけとの御父上、シ
ドの通達でレイの秘書をし、マナの秘書には芳納が付き、その手伝

いにミシイが付いている。その他にも子供たちに受け継ごうとしていた。フィトのアルの娘二人は故郷の森を走りまわり、レイの兄であるシェイドと妻のルミの間に生まれてレイの甥も今は訓練兵として軍に所属……他にも次々と未来へつないで行こうとしていた。

……次話へ続く……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8177/>

WARS&WARS

2011年11月15日06時36分発行